

瑠璃色の道筋

響鳴響鬼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦車道最大流派『西住流』に生まれた一人の少年『西住まお』は戦車道専属の整備士として黒森峰女学園に通学していたが、海で亡くなった父との約束を果たすべく、家族の反対を押し切ってまで、『海上自衛官』になる道を進んだ。

それが例えどのような結果になろうとも……

※1 著しくキャラ崩壊や原作崩壊がありますのでご注意ください。

※2 作者は戦術や戦車、艦船につきましましてはガルパンやそれに関する漫画程度しか知識がありませんので、戦闘描写はほぼありません。

※3 この物語はフィクションであり、登場する人物・団体・名称等は架空であり、実

在のものとは関係ありません。

アンケートの結果R―18ルートである《墮落の道筋》を投稿しました。

←航跡―4 《再会》からの別ルート《墮落の道筋》11／23（第六話投稿中）

<https://syosetu.org/novel/239438/>

※作品のイメージが大きく損なわれるので読む際はご注意ください。

目次

起すプロローグ

- Reise—1 『示した夢』 | 1
- Reise—2 『知った夢』 | 28
- Reise—3 『問われる夢』 | 39
- Reise—4 『語る夢』 | 49
- Reise—5 『伝わる夢』 | 61
- Reise—6 『否定する夢』 | 71
- Reise—7 『息子の夢』 | 79
- Reise—8 『それぞれの思い』 | 89
- Reise—9 『まほとまお』 | 110
- Reise—10 『すれちがい』 | 129
- 承す第62回戦車道全国高校生大会編
VOYAGE—1 《あれから…》 | 145
- VOYAGE—2 《祖父・海江田四郎》 | 151
- VOYAGE—3 《たつなみ艦長・深町》 | 161
- VOYAGE—4 《航海の先は》 | 168
- 洋
VOYAGE—4 《航海の先は》 | 168

番外編 《叶わぬ思い》	438
航跡—5 《手紙》	448
航跡—6 《電話越しの再会》	464
航跡—7 《みらい》	475
番外編 《出向命令》	489
航跡—8 《美倉島へ》	498
航跡—9 《海江田家》	511
航跡—10 《家族》	528
航跡—11 《もうひとつの名前》	556
番外編 《信じる思い》	577

起るプロローグ

Reise-1 『示した夢』

黒森峰女学園が誇る第二次大戦で活躍したドイツ戦車が堂々と並べられているガレージ内。隊長車である戦車の下に潜っている人物にさきほどから話かけているまほの姿があった。

「……………まほ!!」

「どわあーびつくりしたあ。なんだまほか…」

熊本県を本拠地とする黒森峰女学園。『戦車道』を嗜む乙女が集う場所とされており、その実力は間違いなく全国最強を誇る実力があり、高等部ではなんと今年で脅威の8連覇と言う成績を成し遂げており、どこまで連勝をするのが世間では騒がられている。無論、それは中等部でも同じことであり、最強の戦車道を掲げる『西住流』の次期後継者である『西住まほ』が戦車道を履修して以来、歴代最強と言われているほどの実力を有し、高等部に入学する前からすでに隊長の席まで確約されているほど。

さて、そんな歴代最強と言われている黒森峰学園中等部の影の立役者を担っているのが、今まほが話しかけている人物『西住まほ』であった。

「お前が人の話を聞いていなかったからだぞ。こっちは先程からずっと声をかけてる」
「悪い悪い、一度整備に集中すると何も聞こえなくなるから。」

本来戦車道は女性の嗜みとされており、男性が戦車に乗るのは精々陸上自衛隊に入隊するしかない。と言つても、男性が戦車道に関われるのが一つだけ存在していた。『戦車道専属整備士』。昔は女性がその役を共に担っていたが、戦車道を行う人が減少した影響もあつて男性でも行うようと、ここ数年文部科学省が黒森峰女学園にて試験的に開始したのが始まりであつた。そのため、黒森峰女学園には新たに男子専用の機械科が設立されており、各学年定員40名で運営している。尤も、黒森峰女学園は名前の通り、男子がいても女学園を名乗っており、その対比も9・5：0・5と女性の方が圧倒的に多い。その上、女子校に男子が入るといふのを黒森峰も渋り、入学試験も普通入試とは比べられないほどに難しく、やるなら有名国立にでもやればマシンなどと言われるほど。更に合格点数に言っていないければ定員を割ついても落とすので、高等部までの学年全てが定員割れを起こしている事態。更に酷なことに、事実上の女社会なので、それに耐えきれなくなつた男子が途中で転校したりしている学年もある。だが、彼らのおかげもあり、切迫していた戦車の整備を行える人材が増えたのも事実。これまでの黒森峰女学園が連覇を継続できたのも、整備ありきと言つても過言ではないのだ。

「もうすぐ、戦車の整備実習が始まる。班長であるお前が来ないと始まらないだろ。」

「それは志波にやらせればいいだろ。毎回毎回俺を呼ぶ理由がわからないんだが。」

「いいから、隊長である私がいと言ってるんだ。大人しく言うことを聞け」

「はあ…はいはいわかりました。行きますよ西住隊長。」

そしてその数少ない若い整備士たちを纏めているのが、『西住まほ』の双子の兄である『西住まお』。彼も高等部でも期待の新星として、またこれからの各学園で新設される戦車道整備士の未来を担っている人物と言われている。尤も、本人にはその気があるのかないのかは今はまだわからない。

「そういえば進路の話は先生からなかったか？これ終わったらあとに来るように言われたんだけど」

「こっちは午前中に終わってる。と言っても進路も何も、そのまま高等部に進学するのだからやっても意味のないことだがな」

「まあ…そうだな。黒森峰はエスカレーター式だし、また入試なんかあったら死ぬほど勉強しないといけないからな。と思つたらどうだ。今やってる定期テストの方が簡単ってどういうことだよ。」

あれだけ難しい入試を通して入学してきたのだ。高等部まで入学試験なんてものがあつたら、本当にやってられるわけがないと顔をげっそりさせる。あんなのをもう一回やれと言われたら、普通の公立校に行つたほうがまだマシだからだ。

「でもおかげで男子でトップなら嬉しいことだと思いがな。私の方も流石に生徒が多いからか10位内に入るのがやつとだ。文武両道を重んじる西住流では恥ずかしいことになる」

「数えるのですら嫌になる人数で10位以内は十分すごいと思うがな。俺の方なんか30人もいないのに」

「もとよりあの程度を乗り越えられないのでは、黒森峰の戦車道を支えるのは不可能だ。今年まではまおが居てくれたから脱落者はいなかったが、来年からどうなるかはわからない」

「まあ、俺達にできるのは信じることだけだな。」

时期的に次の世代のことを考えなければいけないところまで来ている。中等部戦車道の隊長と整備班の班長をしているまほとまおは時折そう言った話をここ最近よくするようになっていた。尤も、隊長に関しては二人の妹であるみほがやるというので概ね合意しており、副隊長には補佐をしていた逸見エリカを起用する方針。整備班も二年生の方に皆を引っ張れる優秀な生徒がいるため、新班長には彼にやってつもりでいるのだった。



「試合では、俺たち整備士は損傷した戦車を直接その場修理を行うことはできない。よって現場では君たち乗車している者が修理を行うことになる。今回も前回同様各戦車に整備士がついて実践をかねてレクチャーを行う。毎回言っているが、このレクチャーがいずれ今後の試合で必ず役に立つ日が来る。じゃあ西住隊長。整備士や戦車の割り当てはお願いします」

場所は変わり、戦車道専用演習場。戦車道を履修している女子生徒たち、そして専属整備士である機械科の男子生徒たちが2学期最後となる演習を行おうとしていた。どうやら最後の演習内容は整備士を交えての応急修理のことのようなのだ。皆の立場もあつてか、お互い名前で呼びあう二人もそれぞれの役職で呼んでいる。

「了解した。それでは各整備士はこれから発表する戦車についてくれ。まず……」

つなぎを着用した1、2、3年の男子生徒たちはまほが読み上げられる戦車へと数名割り当てられていく。割り当てられた男子はそれぞれの戦車に向かうも、初な一年は女子に顔を赤らめ、中二全開の二年は女子に不埒な笑みを浮かべ、それでも抜けきれない三年は頬を赤くしながらも、女子の方に視線を泳がせる。女子の方も、元々お嬢様学校もあり、明らかに軽蔑的な眼差しを向けるものや、恥ずかしさからか顔を赤らめる者もいる。尤もその眼差しは整備班長であるまおに向けられているようだが。

「履帯が損傷及び外れたら、修復するにはかなり時間を要す。砲弾飛び交う中でそんなことが起きれば、危険を伴うのは必須。修復するタイミングも自分たちの目で確かめて行う必要がある」

レクチャーが始めて早30分。戦車を各所定の場所まで移すなり、起こり得る戦車の異常事態を想定しての応急処置の演習が始まり、整備班長であるまおと整備副班長である『志波繁』は担当する戦車にて、応急処置の説明を行っていた。やはり全戦車に整備士をつけるのは難しく、班長であるまおは二人で三台ほどの戦車を対応することになっている。

「やっぱり西住班長の指導いいなあ」

「だよね。かつこいいし、優しいし」

ひそひそと女子生徒からの小声が聞こえる。どうやらまおのレクチャーは人気があるらしく、戦車道を履修している女子生徒では話題にあがるほど。

（くそ、まおばかりかよ。俺だつて）

声が聞こえたのか、副班長である志波は心の中で血涙を流し、悔しがっていた。尤も志波自身も気づいていないが、他の女子生徒からも十分人気があるのだが。

「副隊長！動輪と一緒に転がるぞ！」

「お、重くて」

「何やっつてんのよ副隊長!!」

まおの妹であるみほに履帯の装着を教えているのだが、如何せん転がそうとするなりそのままどこかへと行ってしまふ。見かねたまおと補佐的な役割をしているエリカが追いかけていく間抜けな光景が続くのだった。

それから時間は過ぎていき、本日の戦車道の練習は夕日が沈むと同時に終わりを告げる。

履修を終えた生徒は各それぞれの寮や学園艦にある自宅へと帰っていく。

「では班長! お疲れ様でした!」

「ああ、明日、明後日は休みだからしっかり休んでまた来週から頑張るぞ」

「!!は!!!!」

戦車の整備を終えた整備班も班長であるまお他数人を残してガレージから離れていく。ほぼほぼつなぎ服に油などがついていている者も多く、先にシャワーでも浴びにいった者もいるようだ。

「班長。進路指導の先生に呼ばれてるって言ってなかった?」

「やばっ、もうそんな時間か。繁、あとは任せていいか」

「へいへい。後始末は副班長である俺がしっかり面倒見ておきますから。班長殿は自分

の進路でも再確認してきかないさいよ」

「言ってくれやがって。じゃあ頼むな！」

お硬い黒森峰では珍しくラフな対応をする副班長である繁。これまで堅苦しいイメージが強かった整備班の雰囲気を変えてくれた人物でもあり、まおにとつても頼れる相棒と言った感じの人物。

「あ、お兄ちゃん。今帰るところ？」

ガレージから出ると、ちょうどジャケットから制服に着替え終わったみほの姿があった。すでに周りの生徒は帰ってしまっているのでどうやらまおを待っていたようだ。

「ああ、ちよつと進路指導室に用事があったな。それが終わったら寮に戻るよ。」

「それってすぐに終わりそう？」

「多分な、まあ言うことは一つだけだし。みほも何かあった？」

「うん、明日から2日間お休みだから。実家に戻ろうかなあつて思つて。お姉ちゃんも話したら一緒に戻るって言つてたから。」

「そうだな。大会が終わつてからまだ帰つてなかったし、一緒に帰ろうか。」

「ホントっ！ならお姉ちゃんにも伝えてくるね！あつ！」

「おいおい。」

まおの返答を聞いてすぐにまほに報告しようとするも、あまりに嬉しかったのか慌て

て駆け出そうとしたばかりに足を躓いて倒れそうになる。すぐさまおがみほの腕を掴んで倒れそうになるのを支える。

「全く、相変わらずみほはあわてんぼうだな。」

「あははは、ごめんなさい。」

戦車に乗れば、いつものオドオドしたことを一切見せないみほであるが、どうも普段はそれを微塵も見せないほどおつちよこちよいなところを見せる。シユンとなるみほに気にするなど促して、別れを告げる。

「ほらまほに報告に行くんだろ？ 慌てないようにな」

「うん、お兄ちゃんも！ またね！」

手を振ってお互い別れの挨拶を告げるまおとみほ。そのまま更衣室へ向かい、つなぎから制服に着替え直し、進路指導室へと向かう。今後の進路について話しがあると、担当教諭から言われ黙々と歩いて行く。理由は当事者であるまおにわかっている。

「先生、お待たせしました」

「西住くん。待ってたわ。ここに掛けて」

進路指導室の扉を開けて入室する。すぐそこにはいまかいまかと待っていたかのようになり、担当教諭が待っていた。今年入ったばかりの新人の女性教諭だと話しを聞いていたことを思い出すまお。尤も今回ばかりは少し深刻な表情をしているようだ。

「西住くん、昨日書いてもらった進路のことなんだけど」

「全て書いてる通りです。」

そう言つて形上で書いている進路についての調査書をまおに見せる教諭。それをひと目見るなり、即座に返事し教諭を見つめるまお。それを聞くなり、冷や汗をかきどう対応していいか困っている。

「いや、その、西住くん。妹のまほさんと一緒に君が高等部に入ること黒森峰は期待しているのよ。そのために西住師範、あなたのお母さんにも協力をして頂いて」

「俺のことを高等部、黒森峰が期待してくれるのは大変嬉しいことだと思います。でも、これ以上は黒森峰女学園戦車道の整備士という役割を続けるに支障が出ると思いません。」

「それは、西住くんの進路に集中したということかしら？」

「そうです。防衛学校に入つて、『海上自衛官』になるのが俺の進むべき道。戦車道と関わりながらやるのは不可能なんです」

海上自衛官。その言葉を聞いた進路指導の教諭は改めて、言葉を詰まらせる。別段自衛官になろうとするものが黒森峰女学園から出たことないというわけではない。高等部を卒業した卒業生が陸上自衛隊に入隊した者はいらぬ。無論、黒森峰女学園は陸上自衛隊とのつながりは強い位置関係にいるのも確かであり、多くの女性隊員は黒森峰女学園

の戦車道。というより『西住流』を履修している隊員がいるのが大きな理由でもあった。ただそれは陸上自衛隊という戦車に関わる話しだけのこと。海上自衛隊に行きたいと言った生徒はまお以外にはいなかったのだ。

「西住くん、高等部をいかに自衛官になるっていうことは、つまり特別防衛学校に行くってことでしょうか？」

「もちろん、早くに任官できる場所はそこしかありませんから」

『特別防衛学校』とは防衛省が数十年前に開校した、若い時期から優秀な自衛官を育成するための学校であり、入学資格は中学卒業と比較的若いうちから入学できるのが最大の目玉（本来なら防衛大学校という幹部を育成する学校があるのだが、自衛隊の人手不足を考慮して発足したのがこの始まりともいえる）。しかし、年齢的な問題から『少年兵を育成している』などとマスコミや野党などが騒ぎだてしているのをニュースなどで度々見ている。

「西住くん。もう一度考え直してくれないかしら。これはあなた個人の問題だけではないのよ。あなたのお家『西住流』の名がかかった問題でもあるのだから」

どうやら進路指導の教諭は彼の進学が学園と西住流に大きな問題になるのを恐れているか、まおに進路を考え直すように促す。もとよりこの進路指導の教諭が黒森峰女子園の卒業生であり、何よりまおの母であるしほから『西住流』を履修していただけに、こと

を大きくして学園やしほに睨まれるのを防ぎたい気持ちがあるのはわかっていた。

「……わかりました。もう一度考えさせてもらいます」

「そうしてくれると助かるわ」

言葉を気をつけない先生に眉を潜めるまおだった。

どこまでも、どこまでも。西住家という流派は、男であるまおをも拘束させてしまうものだと言えながら感じてしまうのだった。



『それでまお。学校には言ったのか?』

「ああ、もう学校には報告は終わった。母さんやまほたちにいうだけだ」

久しぶりに実家へと帰っていたまお。もちろん、誘ってくれたみほやまほも一緒になつての帰省だ。しほに挨拶、そして仏壇飾られている父の遺影に手を合わせ終える。どうやら三人が久しぶりに実家へと帰ってきたことで、家政婦である菊代さんが気を利かせてすき焼きをしてくれるとのこと。きつと熊本産のあか牛を使ったすき焼き。不味いわけがない。だが、その前にまおは自室のベッドに座りある人物と電話をしていた。

「言うだけ……なんだがな」

最後の部分がやたら小さく聞こえてくる。小学生からの友達である『小暮航平』はやたら自信のない言葉の原因はわかっていた。

『その言うだけが、お前にとつては難しいんだろう。でも、言わなきゃ始まらないのはお前だつてわかつてるだろ?』

「もちろんわかつてる。だが言うタイミングはあるんだ。まだその時じゃない」

『まあ、余計なお世話かもしれないが。喧嘩別れだけは絶対するなよ。特にまほちゃんやみほちゃんとは』

「ああ。俺だつてそんな事はしたくない皆が笑つて解決できるようにする。航平だつてちゃんと合格できるようにやれよ。ただの高校入試とはわけが違うんだからな」

『わかつてるつて。じゃあ次に会うときは横須賀だな。お互い試験通れるように頑張ろう』

「もちろんだ」

電話を切り、そのままベッドに倒れ込む。目を瞑り、これから中学3年を終える前までに進学のことをしほに言わなくてはいけない。無論、しほやまほ、みほにも自分が高等部ではなく、海上自衛官を育成する特別防衛校に進学しようなどという話は一度もしたことがない。ずっと心の中で秘めていたものを少しずつ、現実にするために資料を集

めたり、入試に受かるように整備の合間を見て勉強していた。それがもう目の前まで迫っている。

「覚悟は………できてる。はずなんだ」

天井から照りつけるライトが自分の目を開けるのを邪魔するように光っている。

それを隠すように右腕を両目に重ねるように置く。別にこのあとといえば全てが済む話。しかし、まおはその後のことを恐れていた。高等部を蹴り、一人国を守る任へと従事する。普通に考えれば、親や兄妹からしたらとても誇らしい仕事につくことに喜ぶもの。しかし、西住家ここは普通とは違う。日本戦車道に強力な影響を持ち、規律や面子を重んじる武門の一族。生まれたその瞬間から西住家のために尽くすのがこの一族の常識なのだ。

とは言いつつ一言に自衛官と言っても、陸上自衛隊ならまだ許される範囲。陸上自衛隊の隊員の中には西住流の門下生だったものが多数所属しているからだ。日本最大流派である西住流は陸上自衛隊にまで影響を及ぼしているからだ。だがまおが入隊しようとしているのは海上自衛隊の自衛官。西住流とは一切関係のない自衛隊なのだ。余談ではあるが、古くある西住流は旧陸軍と深いつながりを持っている。旧海軍とは非常に仲が悪いのが西住流に伝染するように影響し、今現在も続いている状態。行き過ぎかもしれないが、海に憧れようなものなら勘当されるのは目に見えていた。尤も、まお

からすればそんなのは時代遅れもいいところだと常々感じているのだが。

そして何より、西住家にとつて『海』という場所は『父』という家族を奪つてしまつた場所でもある。

「ふう……」

ため息混じりの息を吐き捨て、バツと身体を起こす。そのまま壁に飾つてある思い出の詰まつた写真に目を通していく。幼少の頃から一緒だった妹のまほとみほ。と言つても、今でこそ言うのは少なかつたが、まほからしてみればまおのほうが自分の弟と言つており、ときおりそのことで言い争いすることが多かつた。

「まお……夕食の準備ができてるぞ」

なんの前触れもなく部屋の扉が開き、普段着を着こなしているまほが入ってくる。その様子を見て、眉をしかめながらまほの方に歩いて行くまお。

「部屋に入るくらいノックしろよな。俺が素つ裸だつたらどうするつもりだ」

「別の男ならまだしも別にお前の裸を見たからと言つてもどうとも思わないぞ。兄妹なのに何を気を使う必要がある」

「なにイ。お前さつき俺が風呂に入つてる時も普通に突入してきただろ！しかも裸で！ちよつとは羞恥心とか言うものもつたらどうだ。言動から男勝りだが、お前は女なんだぞ！」

「時間が勿体ないから早めに入っただけで、そこにたまたまお前がいただけの話だろ。いちいち気にするほうが馬鹿げてる。お前だって、私が入ってきたからと言って普通に対処してただろ」

「もう驚くほうがバカバカしくなってきたんだよこっちは」

真顔で言われ、呆れるしかないまお。まほは昔からこうだったの別に今更どうこういうのもおかしくなっているが、お互いいい加減高校生にもなろうとしている年頃。いい加減羞恥心を持つてほしいと思っっていたりする。

「写真……見ていたのか？」

「え、ああ。新しい写真を追加しないといけないと思っつてな」

まおのすぐ後ろに飾っている写真に気づき、歩み寄っていく。幼少期の頃からつい半年前までの写真。一枚一枚、家族の写真、整備班の写真、小学校時の写真が貼られており、とりわけ多かったのが家族の写真だった。特に大きく目立っていたのは、去年行われた戦車道中等部の全国大会優勝時の写真だ。黒森峰の特産品でもノンアルコールビールをまほとまおがお互いに掛け合いをしている様子が映っていた。いつもは鉄面皮なまほもこの時ばかりは笑顔で写真に映っていた。

「中学校に入って始めてみほとまほが一緒になって戦いだつたな」

「違う。まおも入れてだ」

「俺はただ戦車を」

「まおもだ」

「そ、そうか。まあありがと」

かなり強気に言われて、思わず押し黙るまお。時々だがまほは妙なところでまおを外すことを拒むことがあるのが見られていた。兄妹だからそう言ってくれていると思っ
ているまおからしたら嬉しい話しではあるのだが。実際は違う意味なのをまおは理解
していた。

（まほ…俺は）

写真に映る本当に小さかった頃の写真を見るまほとまお。写真には倒れているまお
の上に乗つかるとまほとみほというなんとも不思議な光景が広がっている様だった。



西住まおは好奇心旺盛な男の子だった。

「高いところに行つてくる！」

「カブトムシ見てくる！」

「テレビでやってたやつ見てくる！」

「みほもお兄ちゃんと行く！」

目的なんてあげればきりがあがらない。

とにかく気になることは頭より身体が動くほうが早かったほど。その性格故か、よく保育園や家を飛び出しては母である『西住しほ』に拳骨を浴びせられていた。そんな兄を見てきたからか、ひとつ下である妹のみほも一緒にあって行動するほどになり、しほが頭を悩ませる。だがまおの双子の妹であるまほだけは聞き分けがよく、しほの言うことには素直に従っていたのが救いだった。

「まおーおかあさまを困らせるな！」

「いでっ！ やったなまほ！ 兄ちゃんをなぐったな！」

そんな母を見かねてか、まだ小学校に上る前には、他人から見れば驚くほど落ち着いた性格へととなり、兄であるまおを叱りつけるほどにまでになったのだが。母の真似をするように、まおの頭に拳骨を浴びせるもそれが発端となつてはまおとまほが喧嘩を始めるゴングのようになっていた。

「みほキック!!」

「ぐえッ!!」

尤も、いつもはまおについていくみほが必ずまほの加勢に入つてはライダーキックをお見舞いされていた。それもあつてかいつも勝つていたまほの方だったりする。結局

は火に油を注ぐ缶が一つ増えてしまったことにしほは頭を悩ませる。

「ははは！子供が元気なのはいいことじゃないか」

その様子を夫である西住常夫は元気いっばいであることを喜んでいる始末。温厚であり、常に子どもたちを見守っていることが多く、自然のままにさせておけばいいという考えだった。

「もう、あなたももつと強く言つてくれないと。このままじゃ、戦車に乗せることすら危ういわ」

「まあまあしほさん。西住の名はまだこの子たちには早いよ。今は子供の自由に自由にさせよう」

日本戦車道の名門である『西住』の名を背負うしほ。今はまだ師範代ではあるものの、いずれは家元の名を継ぎ西住流の門下生や、繋がるが非常に強い黒森峰を率いていかななくてはならない。そして更にその先。自分たちの子供である、まほやみほが西住流を受け継がなければならぬ。無論、まおもまた西住家の男に生まれたからには戦車道に関わることに従事していくことになるのはこの家に生まれた者の必然。だが、常夫の言うとおり、今のやんちゃな子供たちを見ていくと西住流なんてものを時々忘れるときすら覚えるのだった。西住流の教えはまだ早いのかもしれない。

月日が経ち、小学生に上がる頃にはまほやみほ、そしてまおも戦車に興味を持ち始めた。好奇心旺盛はまだ抜けないまおも、日頃から戦車に乗っている母、そして母の乗る戦車を整備している父の姿をずっと見ていれば自然とそうなるのは当たり前だったのかもしれない。いつもどこへと行っていたまおも、気づけば父のガレージに行っては整備をずっと見ている日々が続いていた。

「おとうさん、せんしゃ直してるのって楽しいの?」

ふとした疑問を常夫に投げかけるまおも。毎日、戦車道に使用する戦車を直しているのは飽きないものなのかと思っただろう。そんな息子の疑問に手を止めて、まおの方へと振り向く。

「ん。そうだな。楽しい…かな。これを直せばしほさん。お母さんが喜んでくれるし、こうやってまおと一緒にやることだってできる」

「僕が?いつも見てるばかりなのに」

「一緒にこうしてお父さんがへましないのか見てくれるんだろう?」

「うん。わかんないや」

「ちよつとまおには難しかったかな。でも、お父さんの方はそう思ってるよ」

そう答える備え付けているベンチに座っているまおの隣に腰を下ろす。少し油臭いがまおはいつもここに来て嗅いでいるので嫌なことではなかった。ずっと小さい頃か

らその匂いを知っているし、冒険と称してこのガレージにも何度も侵入したことがあった。そのたびに父に見つかっていたりするも、いつも歓迎してくれていた。

「そういえばまお。学校で将来の夢についての作文がきてるんだってな。何書いたんだ？」

「まだなくんにもカイてないよ。将来って、よくわかんないし。今日の晩御飯のほうが気になるな」

「あははは！確かにそうかもな。お父さんもその頃はまだよくわかんなかったよ」

自分の将来ではなく、今夜の晩御飯のことが気になるまおに思わず吹き出してしまう常夫。いろんなことに興味を持つまおからして見れば、将来なんになりたいかなんてたくさんありすぎているのかもしれない。生真面目な性格になりつつあるまほと対象的にみれば、本当に年頃の男の子といった感じがしている。

「ふくん。ならお父さんはいつせんしや直す人になろうと思つたの？」

「お父さんかい？そうだな、お父さんも元々は戦車を直す人になろうとは思ってなかつたんだ。最初の夢は船乗りになりたいって思ってたな」

「船乗りって魚釣つたり、荷物を運んだりしてるやつだね。こうちゃんのお父さんもそれやってるよ！」

「へ〜まおの友達には船乗りをしてるお父さんがいるのか」

こうちゃんと呼ばれる男の子とはまおが通っている小学校のクラスメートであり、よくまおが学校の話しをするときに出てくる名前の一人。やんちゃらしく、よくまおと一緒にになっているんな騒ぎを起こしているのはまた別の話のだが。

「お父さんのお父さんもな。船乗りだったんだ」

「お父さんのお父さんってことは……おじいちゃんのこと？ そういえばお母さんのおじいちゃんとおばあちゃんは会ったことあるけど、お父さんのおじいちゃんとおばあちゃんには会ったことないな」

しほの父母、つまりは西住家一門とは何度も顔をあわせたことは何度もあったが常夫の両親とは一度も会ったことはない。それはまおだけでなく、まほもみほも同じこと。

「そんなことはないぞ。おばあちゃんはちゃんとまおとまほとみほにはちゃんと会ってる。三人とも本当に小さい頃にあったから覚えてないだけさ」

「ふくん。全然覚えてないや。それでおじいちゃんも船乗りさんだったの？」

どうやら話の興味は祖父父母ではなく祖父が船乗りをしていた話が気になるようだ。目もキラキラしているところからよほど気になることなのだろう。

「ああ、でもまおが知ってる船乗りさんとは少し違うかもな。その、みんなを守る船乗りをしていたんだ。とつてもとつても難しく、誇らしい仕事でな」

「海のお巡りさんだったの？」

「うーん、お巡りさんとはちよつと違うのかな。その上をやつてた人つてところか、中々難しいな」

「それつてもしかしておじいちゃんつて自衛隊さんだったの？」

社会科の授業でやつていた内容を思い出すまお。記憶が正しければお巡りさんが海上保安庁という認識でよかつたはず。教科では社会科が大好きなまおは教科書の先読みをやつていたのが功を奏したようだ。常夫もそんなまおに感心しているようであり、えへへと笑っているまお。

「お、よく知つてるなまお。その通りだ。おじいちゃんじゃ海上自衛隊に所属してる人だった」

「自衛隊さんつて悪い人をやつつける人たちだよ。ヒーローつて聞いたよー」

「ヒーローか。お父さんもおじいちゃんのことそんな風に思つてたよ。本当に立派な仕事だと思つてる。でも、お父さんは結局自衛隊に入ることができなかつた。」

「どうして？」

「家ではいつもいないおじいちゃんのことでおばあちゃんはずっと悲しんでたし、何よりお父さんには…勇気がなかつたんだ。だから戦車道つていう道を選んだのかもしれないな」

いきつく先の言葉である『家族に寂しい思いをさせたくない』その言葉を年端もいか

ぬまおに説明するのが難しい。なんとか言葉を絞り出すも、まおの方はちんぷんかんぷんと言った表情をしている

「うーん、よくわからない。でも僕わかったことあるよ!!」

「わからないのにわかったのか? ハハハ、一体どんなことがわかったんだ?」

常夫の言葉に反応するように、ベンチから立ち上がったまおはそのまま仁王立ちするように宣言する。

「お父さんの夢は僕がなってみせる!」

その言葉を聞き、常夫の表情も一瞬固まる。

「……………まお。そっか、まおはお父さんの夢を叶えてくれるのか。なら」

「うわっ!」

そして、すぐに笑みになるなりまおを抱え上げる。突然のことに驚くまお。

「ならまお。もしその夢に行くなら。お父さんと約束することがある」

「約束?」

「そうだ。お父さんの夢を継ぐのはとっても嬉しい。でも、その夢を叶えるならたくさんの苦難な道が待ってる。間違ってる道だつてある。途中で道も変わるかもしれない。でもなまお。『自分の信じた道』だけはそれじゃない」

「自分の道? どこにあるの?」

「それはこれからまおが見つけていくんだ。どうだお父さんと約束できそうか？」

普段は見れない真剣な眼差しを送る常夫に一瞬圧倒されかけるまおだが、すぐに顔を強張らせてハキハキと返事をする。

「うん！わかった！まおとお父さんの約束！」

「よし！ならまたここで待つてるんだ。お父さんは」

「あああ！お兄ちゃんがお父さん独り占めにしてる！」

「ずるいぞー！」

どこからともなく少女二人の声ガレージいっばいに響く。どうやらまほとみほが見当たらないまおを嗅ぎつけてやってきたようだ。それを見たまおはすぐに常夫から降りるなり、挑発するように二人に言う。

「でたなっ！まほみほ！今日は僕がお話きかせてもらってるんだ！べー！」

「言つたな！こうかいするからな！」

「泣・き・虫・ま・ほー！」

「泣き虫じゃない！拳骨だぞまお！」

「やっぱり泣き虫じゃなか！」

とかいいつつまおに言われ涙目になりながら全力で腕を振り回しながら追いかけますまほ。それに連れられるかのように一緒になつてまおを追いかけるみほの姿。

「全くよく騒ぐ子供たちだな」

そんな様子を睦まじく見つめる。最近になりまほとみほは戦車道をしほから教わり厳しく教えこまれている。予定では、高学年に上がってからのはずだったが、西住流の上役たちからの命により早くに教えを始めたのだ。戦車道には一切口を出さないとの約束通り、常夫は西住流には口を出すことはできない。それはこの家に婿入りする時に、西住一門から言い渡されたこと。しほは戦車道では一切手を抜くことはない。それが例え幼い娘たちであろうと。

それでは男として生まれた”まお”は？

常夫が最近になり考え始めてきたことでもあった。男として西住家に生まれたまおはこの先どういったことが待ち受けているのか、戦車道を重んじる西住流。もとより女性と男性の格差が激しい一族だ。自分は次期家元であるしほの夫であり、戦車を整備できることで重宝されている。ならば、まおも整備のことを教えたほうがいいのか。

いや、違う。先程自分と約束させたばかりではないか『自分の信じた道を進む』と。

「みほタツクル！」

「ぐへえ!!」

「どうだまお！参ったか！」

「うう。まほ何もしてないだろ…お腹に乗るな…」

(まおは、まああんな感じではあるけど賢い。まほやみほをしつかり見てる)

普段からまほとみほをバカにしたような対応しているまおだが、実際いつもキツイ戦車道をやっている二人を和ますためのまおなりの対応なのだと言夫は思っていた。前まではまほが一番しつかりしているとばかり思っていたが、本当はまおの方がしつかりしている。

「まお。まほとみほとしつかり見てくれ」

願うかなように、まおを見つめる常夫であった。

Reise—2 『知った夢』

西住家に帰省してから3週間ほどが経過したとある日。

「高等部いかないってマジかよまおー」

「そ、それ。大丈夫なのか!?家の問題とか…」

本当なら4時間目の自習の時間を利用し、まおはクラスメイトに今後の進路の話しをしていた。高等部行きを蹴り、防衛学校に進学するという話しは戦車道整備士をしているクラスメイトからしたら驚きの内容である。

「それは言ってみないことにはわからない……」

「当たり前だろ。お前の家がただの家じゃないのは皆知ってたぞ。なんたって黒森峰女学園はお前の実家の『西住流』のお膝元なんだぞ。それに西住隊長…まおの双子の妹やみほちゃんだって知ってるのか?」

「いやまだ言っていない」

「そう言った大事なことは俺たちじゃなくて家族に言うのが先じゃないのかまお?」

「……まあ普通はな」

「なんだその歯切れのない言い方は」

「いつも言いたいことはつきり言ってるのに、どうしたんだ？」

「ちよつとな……」

どうもセリフの続かないまおの言葉に不思議に思うクラスの一人である高瀬。

「でもいいのかよまお。折角ここまできて、班長までやったのに勿体ねえじゃねえか。お前なら高等部の整備班班長の座も間違いないって言われてんのに」

「深田の言うとおりで。自主退学の多い男子校で、俺達のクラスが唯一入学から一緒にやってきたんだぞ。その最初の脱落者がお前なんて」

「悪いな聡。でももう決めたんだ」

クラスメイトからも反対的な意見を言われるも、そこだけは譲れないと言ったように返答するまお。入学して以来、クラス替えもなく、たった30人のクラスメイトが3年間一緒に学校生活をしてきただけあって強い結束力があつた。そしてまおは1年生からずっと学級委員長をしてきており、このクラスを率先して纏めてきたリーダーでもある。本来なら高等部まで上がれば6年間も一緒にいることになり、もはや腐れ縁ともいえる関係になるだけに、ここでまおがいなくなることに悲しい気持ちでクラスに漂っていた。

「決めたって言うなら、なおさら西住隊長や副隊長に伝えるべきなんじゃないのか？まおならガツンと言えるだろ！」

「バカか河原。コイツの家が普通じゃねえのは知ってるだろ。それにこの野郎は黒森峰からも整備班期待の新星とか言われて、高等部でも今か今と来るの待ってたんだ。ここで蹴るってことがどれだけのリスクがあるのかわかるだろ？」

「井本の言うとおりで。こりゃあ黒森峰や西住流の面子の問題になるからな。今回ばかりは、まおも相当な覚悟してこう言ってるだろうよ」

「だがよ。子供が夢語ってここに行きたいって言うのに文句言う親いるのか？」

「俺がここに入学するのめっちゃ文句いわれたけどな」

「お前の女癖の悪さから考えたら妥当な意見だろうがよ！」

クラスから様々な意見が飛び交っていく。ここにいる皆がまおのお家事情を知っているだけに、高等部を蹴ってまで進学するのは難しいのではという意見も出てくる。更にいえば、まおの母親であるしほを直接見たことがあるだけに、素直にOKを出してくれるとは到底思えなかった。

「でもまお。何で海自なんだ？戦車乗りたいたいなら普通陸自に行くだろ。俺や裕二も高等部卒業したら陸自に行こうと思ってるからな」

「はあ？裕二はともかく、孝雄が戦車乗りになんか？逆に日本が滅びるぞ」

「うっせえな隆二！どういう意味だそれは！」

「おいよせバカオ。お前の将来の夢なんざ聞き飽きてるわ」

「誰がバカ才だ！孝雄だ！ボケエ！」

「お前らしい加減にしろ。隣のクラスは授業やってんだぞ」

言い争いになりかけそうになる孝雄と隆二、そしてトドメの一言を言った男子を沈めるまお。やたらと濃ゆいキャラのいる3年クラスではあるが、ここはクラスの委員長を務めるだけに締めるときはきちんと締めることができるようだ。

「なら何で海自だまお。ずっと戦車見て育ってきたなら陸自に行くかと思うぞ普通は」

「それは班長の昔からの夢が船乗りだからさ。それと班長の爺さんと曾祖父さんは海上自衛隊では生粋のエリートだったらしいんだ。子供の頃それを聞いて憧れたんだとさ」

「へえ、それは初耳だな。西住の名前が強すぎてそんなこと全然知らなかったな。というか何でお前知ってたんだよ繁」

「だって班長から聞いたんだもくん」

「何！まお、お前俺たちと一緒に釜の飯食つといて、何でそのこと話さないんだよ！」
「バカ違う！繁は口が滑って言っただけだ！首締めるな深田！」

とても重要すぎる話を隠していたことに立腹した深田がまおの首にチョークスリーパーをかける。

「そんなエリートの先祖持つてるって、お前の家系ホントどうなってんだよ。双子の妹は戦車道機甲科の隊長でひとつ下の妹はその副隊長。母親は西住流師範代で次期家

所は横須賀か」

クラスの一人がスマートフォンでネットに掲載されている情報を声に出して読んでいく。聞くだけなら簡単だが、実際にやるのはかなり難しいことだとまおは理解している。

「で、どうなんだまお。自衛隊に入るからには幕僚長まで上り詰めるのか？」

「え、あ、いやそこまでは考えてない。幕僚長は流石に……」

ようやく開放されたまおだが、予想外の質問に思わず考え込む。自衛官になりたい気持ちはあつたが、幕僚長という考えは全く持ち合わせていなかっただけに言葉に詰まる。だがそれを許さないといつたように、深田がまおの胸ぐらを掴み無理やり立たせる。クラス一暑苦しい男と言われているだけに、妥協したまおの言葉が許せなかったのだろう。

「何!? お前、栄えある黒森峰戦車道整備士を蹴ってまで自衛隊に入るからには俺たち全員納得できるところまで行けよ!」

「わ、わかった! わかった! 幕僚長まで上がってみせる!」

深田の勢いに負け、宣言するかのように声をあげる。それを聞いた深田は満足したかのように、手を離すとクラスメイトに呼び掛けるように言う。

「よしよく言った! 皆、将来の幕僚長殿を胴上げしようぜ!」

は高等部に進級する準備などがあるため、早めに隊長職などを引き継ぐことになっているからだ。と言つても去年は2年時からまほが隊長をやつていたので引き継ぐ話などは全くなく進み、今年からようやく引き継ぎがあるということ。

「はあ……私なんかよりエリカさんがやつた方がいいよ」

まほから隊長になるように直談判されたみほからしてみれば、あまり受けたくない話しだった。あまり人前に出ることが好きではないし、周りの評価も戦車での試合は目を見張るものではあるが、普段がおどおどしているだけに総合的に見ればまほには遠く及ばない。それに比べれば、同じ学年である逸見エリカの方がまだ適任だと思う、彼女もみほが隊長に格上げになつた際は副隊長に任命されることになっている。最も本人としてはこのまま副隊長のままでもいいと思つていたりする。

「今まではお姉ちゃんとお兄ちゃんがいてくれたからやつてくれたけど……」

みほが黒森峰女学園に入学してから二年間はずつと兄であるまおと姉であるまほがいてくれたのはみほにとつては大きな救いだった。まほも当初は黒森峰戦車道の隊長、そして西住流本家の人間として厳しい接し方をしてきたが、当時整備班の副班長だったまおがそう言つたわだかまりを解決してくれたおかげで、まほも次第にそう言つた言動はなりを潜めていった経緯があつたのだ。来年からは自分が黒森峰女学園の戦車道を引つ張つていかなければいけない。そのことが今のみほにとつて大きなプレッシャー

になっていた。

「あ、お兄ちゃん」

もうすぐ職員室に到着しようとした時、ふと階段から降りてくるまおの姿を発見する。咄嗟に呼んでしまうが、どうやらまおの方は気づいていないようであり、そのまま進路指導室へと入っていく。

「何かあったのかな」

いつになく真剣そのものと言った表情をしていたのが気になり、そのままこつそりとあとをついていき覗き込むように進路指導室の中を見る。対面し合うように座っているようだが、進路指導の先生の顔が覚束ない表情をしている。

『考えは変わりません。進路は調査書通りにすすめてください』

『ちよつと待つて西住くん。進路のことはもつとよく考えて』

『先生。自分はもちろんと進路を考えて、こうして話をしているんです。何回も何回も考え直せと言われても変えるつもりはありません』

『でも西住くん。あなたの家は』

『まだそれを言いますか』

「進路の話し……だよ。でも、お兄ちゃん高等部に行くんじゃない」

聞こえる内容からすれば、恐らくまおの進路についてのことだと推測する。しかし、

進路と言つてもまおは自分と一緒に高等部に進学するはず。まほから高等部に行つて、また三人で黒森峰戦車道を引つ張つていこうと言つていたのを思い出す。まおが言つたわけではないが、聞かなくてとそう思つているはずだと思つていただけに、今教室内で話合つている内容がどうしても気になる。

『ならこの事は、すぐに西住くんの家に報告することになるわよ』

『構いません。それで呼び出されるほうが、都合がいいですから』

(呼び出して、お母さんから? どうしてそんな)

母から呼び出しを受けるといふことは、かなり重要な話なのではと思つたみほ。正直、母から呼び出しをもらうのはあまり良いことではないからだ。大体が戦車道での説教などであり、中学入りたてだったみほもよく呼び出しを食らつては家に帰つていた。思い出してきたらネガティブな気持ちになり始めるが、次にみほが聞いた言葉でその考えが一瞬で吹きとんでしまう。

『全く『海上自衛隊』に行きたいなんて。我が校ではあなたが初めてよ』

『黒森峰女学園に歴史が刻めるなら光栄な話だと思いますけど』

「海上……自衛隊……!」

ただの組織名なのだが、みほにとっては信じられない言葉だった。

(海上自衛隊って。あれだよ。海。の自衛隊……海でつて。なんでお兄ちゃん? それに

自衛隊って。お兄ちゃんはお姉ちゃんと一緒に戦車道やるんじゃないの？それに、海は……)

持っているプリントに思わず力を込めてしまい、くしゃくしゃになってしまう。だが今のみほには十分すぎるほどの衝撃的な事実だけに、そんなことをかまっている余裕がなかったのだ。

(海は……お父さんを……お父さんを奪った場所なのに。なんで？お兄ちゃんだって……そのことわかってるはずなのに)

Reise—3 『問われる夢』

まおが言った進路のことがどうしても頭から離れず、午後からの戦車道の授業は、イマイチ身が入ることができなかつたみほ。普段ならしないはずのミスを連発してしまい、みほが指揮する部隊は瞬く間に白旗が掲げられてしまう。部隊の副官を務めるエリカから厳しく叱責される。普段なら冷や汗を流しながら謝るばかりなのだが、今日に限っては『はい、はい』と機械的に答えばかり。

「しつかりしなさいよね！ 次の隊長はあなたなんだから！」

恐らくこれ以上何を言っても無駄と思つたのだろう。煮え切らない怒りを抑えつつ、そう吐き捨ててみほのもとを去っていくエリカ。その場に残されたみほは後を追うようにトボトボと歩いて行く。

「お姉ちゃん……」

「……」では隊長だと言つたはずだ。何度言えばわかる」

まるで待ち構えたかのように、今回の模擬戦の相手をしてまほが腕を組み立っていた。その表情はあまりよろしくないと言つた感じが、眉に少しばかり皺がよっているようだ。

「す、すみません。隊長……」

普段は気をつけていたはずだが、思わずそう読んでしまいすぐに訂正をする。だが、まほの表情を見て顔を俯かせる。

「何だ今日の模擬戦は。みほの皿号はいつもに比べて遥かに動きが悪い。それに僚車に對しての伝達があまりできてないように見えたぞ。固まっている戦車が沢山いたのがいい例だ。」

「そ、それは……」

「これからの中等部の戦車道を率いるのはお前なんだ。そんな調子を明日からも続けられたら皆の士気に関わることになるぞ」

「う……すみません」

まほに言われていることは全て事実であり、言い返すことができないみほ。今日の模擬戦は今思い返せば散々な結果だと自分でも痛感する。いつもならない凡ミスも多く、副官を努めているエリカを始め、率いらなければならぬ多くのメンバーの足を引く張る形をとってしまった。引き継ぎが始まるという重要な時期にそんなことをしていればまほに怒られるのは当然ともいえる。

「明日も同様の模擬戦を行うから、同じミスをしなないようにするんだぞみほ。それに模擬戦にはお母様が見に来ることになってる」

「お母さんが!？」

「ああ。高等部への視察を兼ねてな。だから今日みたいなミスをしていたら、折角見に来てくださるお母様の期待を裏切ることになる。気持ちを切り替えてしつかりやるんだ」

「は、はい……」

予想外の内容に驚きを隠せないみほ。西住流師範代が来るときは、戦車道履修生はいつになく緊張した雰囲気になる。前に来たときも、ただ座っているだけでその場を凍りつかせるような鋭い視線にタジタジになったのを思い出す。あのまほでさえも、緊張して冷や汗をかくほど。実の母であっても、ここでは西住流師範代という肩書で君臨するのだ。

「それと後始末等の残りはこっちでやっておくから、みほはしつかり休んで明日に備えるんだ」

「わかり…ました」

まほのことを言うべきか迷ったみほ。『お兄ちゃんは高等部じゃなくて、海上自衛官になるために防衛学校に進学するらしい』と。だが、みほとしては、まほに言う前になげまおが海上自衛隊に行こうなどと言ったのが非常に気になった。元々戦車道の整備士のためにこの黒森峰に入学していたため、みほもまおは戦車道整備士としてこれか

らもやっていくものばかりだといふ数時間前まで思っていたからだ。だが、あの進路指導室で聞いていた話しは全く異なるものだった。自衛官に入りたいなんて話し、今の今まで聞いたことはないし、話題に上がるようなことも一度もなかった。小さい頃からもおも父の背中を見てずつと整備士の勉強をしていたのを知っているだけに、どうしても釈然としないことで頭が一杯だった。

「お兄ちゃん……お父さんのこと忘れたわけじゃないよね」

思わず言葉を吐き出してしまふ。

もう5年という時が流れたが、今でもふとあの頃は思い出してしまふ。始めて見る母の悲しみで涙の濡れた顔。泣き顔なんて見せたことがなかった姉の顔。ことが理解することができず、物言わぬ父の姿を見て始めて人の死を理解し、泣き叫ぶ自分。そんな妹二人を慰めるように抱き合つて一緒に泣いていた兄の顔。本当に辛かった。生まれて始めて見る人の遺体が自分の父だなんて。あんな思いをするのはもう二度と御免だった。

大好きだった父『西住常夫』が5年前に起きた海難事故で帰らぬ人となって以来、みほ……みほの家族にとつて『海』は嫌なことを思い出す場所になってしまったからだ。

まあだつて、それが家族にとつて嫌な記憶を思い出すことだつて、まあ自身だつて、父がいなくなつて悲しいはず。なのに、それをわかりながら海上自衛隊に……海に関わる仕

事へと入ろうとする意図がわからなかった。聞きたい。まおの口から、そしてできることなら説得して考え直してもらおうようにしてあげたい。もしまおまで父のように帰らぬ人になってしまったらと。考えるれば考えるほど悪い方向ばかりへと思考が向かってしまう。

「何ボケつと立ってるんだみほ？戻らないのか？」

「お兄ちゃん……」

工具箱を持ち、少し油で顔が汚れている兄の姿。いつものように、普段通りの表情をしている。確か走行不能になった戦車を応急修理していたはずだが、もう終わったようだ。まおの後ろには整備班が操縦しているⅢ号がゆっくりだが走ってくる。停車するなり、操縦ハッチから二年の整備班が顔を出してまおに乗るように促す。

「班長、もうすぐ演習場閉鎖します。乗ってください」

「ああ。ほら、みほも立ってないで一緒に行くぞ」

「あ、うん」

戦車に飛び乗ったまおから手を差し出され、言われるがままに握りしめるなり引つ張り上げる。ゆっくり進む戦車に揺られながら、演習場の出口まで進んでいくⅢ号戦車。「ん？モーターの音が少し鈍いな……引島！ガレージに戻したら、一回エンジン含めてオーバーホールするぞ。二年生かき集めて連れてくるんだ」

「え、でも班長！明日は模擬戦をもう一度すると行っていましたが」

オーバーホールなんてしてしまつたら、かなりの時間を要してしまい明日もう一度行われる模擬戦にはとてもじゃないが間に合わない。

「明らかに不調な音出してるⅢ号を出せるわけないだろ。ドイツ戦車はかなりピーキーな作りだから、すぐに不調でも起きそうな予兆が起きたら見るのが俺たち整備班の仕事だ。負けた原因をこっちに押し付けられたらたまらんからな。それともう少し減速して進んでくれないか？」

「りよ、了解です!!」

黒森峰女学園の使用する戦車は説明するまでもなく、第二次大戦中に使用していたドイツ戦車を使用している。重武装、重装甲誇り、最強と言われる戦車軍ではあるものの、如何せん装甲足回りやエンジン不調などと言つたのが多く、日々メンテナンスを行わなければ戦車を最大限に運用できないのがネックとなっている。だが、これらを最高の状態へと整備し、黒森峰女学園を王座へと居座らせているのもこう言つた戦車道整備班の役目だとまおは自負している。

「で、どうすんだよ整備長。二年かき集めて講習会でも開いて徹夜でもするのか？」

ヒョイツとコマンダーキューポラから顔を出す同学年の隆二。彼もまおと同じくⅢ号の応急修理の方向かかっていった内の一人であった。

「徹夜なんかするわけないだろ。外部装甲外して、一通り説明し終えたら解散させる。模擬戦行ってる時に本格的に直すよ。それより隆二。内部のオイルは入れ替えたか？ オーバーホールしても、この辺は簡易的にしておかないといけないからな」

「おいおい、身体突っ込ませるなよ。いい女の匂いをこれ以上むさい男の匂いで汚したくないんだから」

「お前やつぱり思考はアイツと同じじゃないか。そんな考えでどうすんだ」

「うるせい！ むさい野郎に油臭い作業服着て整備してるんだ！ お前はいいよな、こんな可愛い妹がいてよ」

「ふえ、か、可愛い…」

いきなり話を振られて、面と向かって可愛いと言われて顔を赤くしてしまうみほ。

「みほをあんまり茶化すな」

「あくごめんねお兄ちゃん！ じゃあ僕ちゃんは大人しくオイル差してもやってますよ」

「あ、おい！」

それだけ言つてハッチを閉めてしまう。

「全く、悪いなみほ」

「う、ううん。いきなり言われてちよつぱり驚いたけど……今思ったら整備の人たちとこうした会話なかったと思つて。いつもはお兄ちゃんや副班長の志波さんだったから」

「まあ、整備士と言っても極力女生徒との関わりを持たないようにしてたからな」

別段規定があるというわけではなかったのだが、戦車道履修生と整備班の男子生徒は必要以上の接触はしないという暗黙のルールが存在していた。高等部では中等部以上に厳しく、より志の高い黒森峰学園戦車道を貫くために中等部のころから男子生徒と浮ついた関係を持たないにかつての卒業生たちが作り上げたものだった。

「でもお兄ちゃん変えたよね。この前のレクチャーみたいにな」

「当たり前だろ。折角皆でやるんなら、楽しくやらないとな。今年の大会も盛り上がってただろ？」

「うん。横断幕や応援団作って、なんか運動会みたいで……」

三年にとつては最後の大会だった全国中学戦車道大会にて、まお率いる整備班がこれまでの黒森峰のイメージを覆すかのように、大体的に盛り上げて挑んだ。最早体育祭や運動会のような盛り上げ方に、履修生たちは難色を示すも、最後はみんな笑って優勝を祝うことができたのだ。それこそがまおの部屋に飾っていた写真がその証明だった。伝統や校風を尊重していたまほでさえも笑って優勝を祝ってくれたのだ。

「お兄ちゃんはすごいよ。クラスの人たちもとっても面白い人たちばかりだし。黒森峰にいたなんて忘れちゃうよ」

「ははは、すごいのは俺じゃなくて協力してくれたクラスの奴らさ。それに面白い奴ら

だからまとめるのも大変だ。バカっぽいつて思うだろう？」

「え！そ、そんなことないよ！うん全然ない！」

慌てるように顔を何回も振って否定する。

「あはははは!!そういう反応は思ってるって証拠だぞみほ。慌てて否定するところは変わらないな」

「も、もう詭わらないでよ〜！」

顔を真つ赤にして笑い続ける兄に怒るみほ。

(ほんと…お兄ちゃんは変わってない。変わってないはずなのに…)

そんな笑う兄の姿を見て、みほは思う。

いつもと何も変わらない。まおはいつものように昔と変わらず接してくれている。父がいなくなつてふさぎ込む自分やまほを引つ張りだしてくれたのは他ならぬまおだった。

『父さんがいなくなつて、僕がいるだろ！それにまほやみほだつて！天国で見てくれる父さんに僕たちは大丈夫だつて見せてやればいいんだ！言うだろ三人寄れば文鎮の知恵だつて！』

『それを言うなら文殊だバカまお』

『え、あ、そう？』

『ぶふつ、お兄ちゃんカッコ悪い…』

だから信じられなかった。

「よし、隆二。Ⅲ号の点検ハッチ開いて、準備しといてくれないか？俺必要な道具取ってくるから」

「了解。あ、引島2年連れてこいよ」

「わかりました!!」

「みほも、今日はもう上りだろ？俺はまだやる作業があるから。また明日な？」

家族が大好きだと言っていたまおが。

「ねえお兄ちゃん…」

「ん？」

「お兄ちゃん、海上自衛官になるって本当？」

家族を悲しませる選択をしたのかを。

Reise—4 『語る夢』

「あの志波副班長。さつき西住副隊長が言つてたことは一体…」

まあたちの後輩である2年生の引島は、つい一時間前までここにいたまおのことをⅢ号の整備を行つていた副班長の志波に聞いていた。どうやら先程のやりとりがどうしても気になつたらのだらう。結局、まおの言つたことは副班長や他の3年の整備班が継続して整備を行つており、2年もちようど自分しかいなかったのも幸いした。

「おい、引島。それを言う前に、そのことを誰かに話したのか?」

先に反応したのは、同じく同乗し油を指していた隆二だった。素早くを引島のところまで行くと、肩を抱き寄せて耳打ちするように言う。

「い、いえ。まだ誰にも」

「よし引島。お前は西住班長から直々に中等部戦車道整備班の班長を言い渡されたな」

「は、はい。いやあの、自分にはその荷が重いいますか…」

「はつきりしろお!!この班はお前が引つ張つて行くんだらうが!そんな小動物みてえに縮こまつてどうすんだ!」

「は、はいいい!!」

「……どこの組だよ隆二」

まるでヤクザの脅しとでもとれる行動に、呆れてしまう志波。

「いいか引島。これはな非常に高度な政治的問題と家族の問題が絡んでるんだ。それを西住整備長は西住副隊長を説得するために行ってるんだ。」

「あ、あの……全く話が見えないんですけど……」

「見えなくていいんだよ見えなくて！要はな、アイツは今家族との直接対決に向かったってことだ！俺達は黙って、それを見るんだ。そしてことが終わったら俺達はまおをタコ殴りにする」

「え、西住班長タコ殴りにって。何かやらかしたんですか!?!」

話が飛躍しすぎて、理解が追いつかない引島。話がとんでもない方向に行き始めているのに心配になった志波が話に加わる。

「ちよつと待ってって隆二。お前さんが色々話やこしくしてどうすんだよ。いいか引島、西住班長は少し進路のことで副隊長と話合いに行つたんだ」

「進路ですか……でも、班長は高等部に行くんじや」

「そう思っていたさ。俺たちもな。だから隆二みたいに納得できない3年もいるんだが、まずは家族でもある副隊長と話し合いに行つたんだ。だから、あまりこれを公にし

ないでもらえないか？きつと班長も自分から説明してくれる時が来るはずだ。その時、タコ殴りにすればいいんだからな」

「……わかりました（タコ殴りにはするんだ）」



時刻はすでに7時を過ぎており、日の落ちた街は街灯がチラつき始めていた。黒森峰女学園中等部から学生寮まで少しばかり距離があり、途中には喫茶店やレストランなどが立ち並び、生徒たちのたまり場などになっている。まおも、たまにクラスメイトと一緒に食事をしたりするために利用をしていた。だが、今日はいつも男子との入店ではなく、みほと二人で入店したまお。あの話のみほにされ、事情を知っていた副班長である志波や他の整備士に後押し半ば強引され、二人での話合いの場を設けてくれた。

「みほは、オレンジジュースでいいか？」

「……」

メニューを見ていたまおは、みほに注文の確認を取るも返事はなく相槌を打つのみ。それを確認するなり、店員を呼んで、アイステイーとオレンジジュースを注文する。いつもは陽気な音楽が流れて、若者たちがいろんな話題で盛り上がっている喫茶店ではあ

るが、この二人の空間は妙に淀んでいるようにも見える。

「なあ、みほ」

「お兄ちゃんは……高等部に行くんじゃないの？」

いつまでも黙っているわけにもいかず、まおが口を開くもそれを遮るかのようのみほが口を開き問う。俯きながらも、か細くまるで吐き出すかのような声だ。気が沈んでいるときは、必ずこう言った感じで話すのはみほの癖でもあった。どこでそのことがバレたのかは、すでにガレージで確認済み。まさか進路指導室での会話を聞かれていたとは夢にも思っていなかっただけに、こんな形で教えたくはなかったが正直に話すことにした。

「ああ。高等部には進まない。防衛学校に入って、海上自衛官になる」

それを言った瞬間に、ビクツとみほの肩が震える。やはり間違ひなんかじゃなかった。あの進路指導室で言ったことをそのまま話すまお。わかっていたが、やはり本人の前ではつきり言われると堪えてくるものがあるのか、再び口を開き、話を進める。

「お兄ちゃん、ずっと戦車の整備をやっていくんじゃないの？」

「……ずっとやろうとは考えてなかった。元から中等部でやめて、進学しようと考えてたから」

「どうして？あんなに三人でやってきたのに……頑張ってきたのに」

まおの言葉にみほはシヨックを受ける。元からということとは、黒森峰女学園に入る前から家を出て進学しようと考えていたことになる。今までやってきたことは何なのかと素直に怒りが浮かぶも、同時に悲しい方が大きかった。

「海上自衛官になるって、どうして黙ってたの？」

「いえば賛成してくれたか」

「…賛成なんて、するわけないよ。だってお兄ちゃんがなろうとしてるのは」

「そうだな。海に関わる仕事だ。父さんが亡くなった…ところでな」

いろんな所属があれど、海上自衛隊といえど誰でも思うのが海での仕事が思い浮かぶ。まおもそう言った場所での仕事を望んでいるが、目の前で涙で溢れそうなのを必死に我慢して話を続けるみほは決して望んではなかった。

「わかってるなら。なんで…」

まおは父のことを忘れてなんていない。当たり前だ、誰よりも父の隣で一緒になっていたのは他ならないまおなのだ。それがつらく、悲しいことだとわかっていながら、どうしてそんな場所に進んでいこうとするのかみほには理解できなかった。

「わかってるからこそ、俺は海に出ないといけないと思ったんだ」

「え……」

テーブルの上に置いてある拳をギュッと握りしめるまお。

「みほは、おじいさんのことは知ってるか？」

「おじいちゃん？それなら前に新年会の時に……」

唐突に何を言い出すのかと疑問に思ふみほだが、素直に返答する。しかし、返答を聞くたびに首を横に振る。

「違う。父さんの方の家、《海江田》のおじいちゃんだ」

「お父さんのおじいちゃん？う、ううん。よく知らない。もうなくなってるってことぐらいしか聞いたことないから……」

《海江田》とは父、常夫の旧姓のことである。常夫の母でありみほたちから見たら祖母である《おばあちゃん》は見たことはあったが、祖父は見たことはなかった。母が少し話してくれたが、自分たちが生まれる前にすでに亡くなっているぐらいしか知らなかった。

「そっか。やつぱりみほも、きつとまほも知らないだろうな。いや教える必要もなかったかもしれないからか」

「意味わかんないよ。おじいちゃんの話しとお兄ちゃんはどう関係あるの？」

いきなり話しを変えられ、まおがブツブツと言出しことにみほは意味がわからないの一点張りだった。

「関係あるさ。おじいさんである《海江田四郎》、そしてそのお父さん。俺達からしたら

ひいおじいさん《海江田巖》は海上自衛隊に所属していた」

「え!？」

「ひいおじいさんは《海上自衛隊の立役者》と言われ、おじいさんは《海上自衛隊始まって以来の英才》と呼ばれるほどの人たちだった」

「……知らなかった…お母さんや西住の人たちはそんなこと一言も」

「それはそうだろう。西住家は古いきたりか、海軍から引き続き海上自衛隊を毛嫌いしている人たちが殆どだ。父さんの家系が海軍一家なんて、俺達が知って下手に騒がれるのを母さんも嫌がったんだろう。だから俺やお前たちに父さんの家族のことを話さなかつたんだろ」

「で、でも、どうしてお兄ちゃんはそのことを知ってるの。私はおじいちゃんがそんな人なんて全然知らなかった」

「俺が小一の時父さんから直接聞いたからさ。そして、父さんも海上自衛官になろうっていう夢を持っていたことを知ったんだ」

「!!」

まおの口から、父の夢を聞かされ驚きを隠せなかつたみほ。同時にその思考は混乱へと向かっていく。無理もない、次から次へと今まで聞かされていなかったことが出てきたのだから。兄の進路を聞くはずが、父の家族の話しを語りだしたからだ。

「それが俺が海上自衛隊に入ろうって思った最初の始まりだった。父さんの夢だった海上自衛官に自分になって見せるってな」

「…じゃ、じゃあお兄ちゃんはお父さんの夢を叶えるために海上自衛隊に入るの？でも、そんなの子供の頃の話だよ。お父さんも本気でそんなこと言ったわけじゃ」

まだ小1の子供に親の夢になるなんて話はみほには懐疑的で信じられなかった。その頃のまおはまさに好奇心旺盛、やりたい放題な性格で、とてもそんなことを言うとは思えなかった。最もみほ自身もその頃と今の性格は180度違うものになってしまっているが。

「俺だってそのときは子供だから、父さんの言っていたを真剣に聞いてたかなんてわからない。あの頃はいろんなことが楽しかったからな」

まおは何も初めから海上自衛官を本気で目指そうなんて考えてもいなかった。

あの頃の約束も、まおにとっては記憶の片隅として忘れさられ、日々戦車道に励む母のしほ、その戦車道を鍛えられていたまほにみほ、戦車の整備に勤しむ常夫。そしてそれを傍らに見て、戦車整備を覚えていっていたまお。

しかし、当時のまおの評価は概ね単純バカが定着していた。勉強もロクにせず、家でも学校でも下らない問題を起こしていただけに、まおに戦車整備などとてもできないと周りから思われており、将来まで不安視されているほど。

ところがだ、ある日を境に、まおは急速に変わり始めた。おバカ行動は変わらないが勉強などの教養が飛躍的に伸び、これまで赤点オンリーだったのが嘘のように高得点を叩き出し始めた。戦車整備も昔から常夫のを見ていたからもあるが、小3に上がる頃には、一人でまほやみほが使っているI-I号戦車を整備できてしまったほど。

「でもさつきも言ったとおり、父さんがそのこと聞いたのが始まりだったのは間違いない」

「……ちよつと待つてよ。待つてよお兄ちゃん。お兄ちゃんの、その、なりたい始まりはわかったけど、海上自衛官だったおじいちゃんはどうしたの？おじいちゃんは確か私達が生まれる前に亡くなってるよね」

まおが海上自衛官になろうと言った始まりを話そうとした時、みほはどうしても気になったことがあった。それは祖父である《海江田四郎》のことだった。曾祖父である《海江田巖》が亡くなっているのは、年齢的には問題ないが、祖父は別だった。しほと常夫がかなり若いうちに結婚し、自分たちを産んでくれたことはみほも知っている。それに、祖母も数度しか会ったことはないが、かなり若い人なのは辛うじて覚えていた。

「おじいちゃんは俺達が生まれる4年前に潜水艦の衝突事故で亡くなってる。ひいおじいちゃんも護衛艦で帰投した際に病気で亡くなったって聞いてる」

「!!」

それを聞いた瞬間、凄まじい悪寒が身体を突き抜けていく感覚がみほに走る。

なんだそれは、父も海で、祖父も海で、曾祖父も海で。こんなことが3度も続いているなんて、偶然にしてはあまりにもできすぎている。となれば海江田家に生まれた男性は、まるで呪われるかのように海に関わっただけで死んでいることになっているではないか。

ガタガタと震えだし、心配そうな表情でまおを見つめるみほ。いまのみほには、まるで死神が手招きして手に持つ鎌を振りかざせる位置までまおを誘導しようとしているように見えてしまう。

「ダ、ダメだよ。お兄ちゃん……やつぱりお兄ちゃん、今まで通り、一緒にいてよ。お兄ちゃんまで、お父さんみたいに……」

「みほ。父さんたちが海で死んだのは、ただの偶然だ。それを俺に当てはめる必要はない」

「偶然じゃないよお!!お兄ちゃんまで、お兄ちゃんまで死んだら……!!だつてお兄ちゃん一緒にいてくれるって約束したもん!一緒に……!!」

バツと立ち上がって、泣き喚きだすみほ。周りにいた店員や客も何事かと思いい視線を二人に向ける。混乱しているのか、途切れ途切れで話が伝わらないが、必死に兄を説得しようとしているのはまおには痛いほどわかる。

「落ち着けみほ。俺はただ……」

まおも立ち上がって、宥めようとするも、今のみほは痲癩を起こしてしまい聞く耳を持たない状態だった。

「私は……私は絶対反対だから……!!」

「おいみほ!!」

耐えきれなくなったのか、そのままおから逃げるように走り去って店を出ていってしまうみほ。まおはそれを、追いかけることができなかった。このまま追いかけても、今のみほの状態はとてもしゃないが話を聞いてもらうことはできない。一旦落ち着いて話さないと、まともに取り合ってはくれないからだった。

「あの、お客様。オレンジジュースとアイスティーをお持ちしました……」

「ああ、2つともそこに置いてください。両方自分が飲むんで……」

店員も空気を読んでくれたのか、今になって頼んでおいた飲み物が来たのだ。言われるがままにまの前にオレンジジュースとアイスティーが置かれる。真つ先にアイスティーを取ったまおはそのままストローも使わずに一気に飲み干していく。

不意に、携帯電話が振動する。

画面には『母』と登録されている人物からの着信だった。言うまでもなく、まおの母『しほ』からの電話だった。

「はい、まあです」

『まあ。明日、朝一番の連絡船で実家に帰ってきなさい。学校側にはすでに言っています。内容は…言わなくてもわかっているわね』

恐ろしく冷たい声だった。いや、普段の母の声ではない。今の声は西住流師範代『西住しほ』の声なのだろう。

「わかってるよ母さん。俺も母さんに話すのをずっと待ってたから」

それだけ告げると、何も言わずれに切られてしまう。

電話をしまい、みほが頼んだオレンジジュースを見つめていた。

「自分の信じた道……か」

最後に残った、みほの頼んだオレンジジュースを飲み干すまあだった。

「苦っ……」

Reise—5 『伝わる夢』

「菊代。あなたは知っていたのかしら、まおの進路のことは」

西住流総本山である西住家。当主である西住しほと家政婦として仕えている菊代に、まおのことを聞いていた。広めの大広間にポツンと置いてある応接台には西住まおと名前が書かれた進路調査書が置かれていた。『第一志望：海上防衛学校・特進科。志望動機：国防に対し強い関心があるため』としか記載されておらず、行くと思っていたであろう黒森峰女子園高等部男子分校機械科は一切記載されていなかった。明日は、高等部の視察も兼ねて中等部の戦車道の様子を見る予定であった。しかし、今日の夕方に中等部の進路指導課から連絡が入り、まおのことについて率直に伝えられた。

『ご子息のまおくんは高等部への進学はしないと』

それを聞いたしほは、言葉を思わず詰まらせたのが今でも思い出す。

「いえ、まお様がこのような場所に進学しようなど夢にも思いませんでした。私はてつきりまほお嬢様と高等部に進むとばかり」

長年この家に仕えてきていた菊代でさえも、ずっとまほやみほ、そしてまおを見てきたつもりでいたが、まおがそのような将来を考えているとは考えていなかった。

「私だつてそうよ。あの子はまほやみほ、そして西住を支えるために戦車の整備を覚えさせ、黒森峰に入学させたのに何を今更。あの子は自分がどれだけの人間から期待が掛かっているかわかつていかなかったようね」

西住家の長男として、そして亡き夫である常夫の後を継ぐ者として。この西住流に仕える戦車道整備士として黒森峰女学園で成長しているはずだった。大人にも負けないほどの整備技術を有し、高等部ではすでに期待の新星と騒がれ、戦車道を支えてくれている戦車道関連のスポンサーからも将来的に就職の斡旋の話がきているほど。それだけまおは、戦車道で活躍するまほ同様に将来を大いに期待されているのだ。それをここに来て全てを置いて、全く違う分野に進もうとするなどしほは到底許せるものではなかった。いや、許すわけにはいかない。

「でも、それはまお様だつてわかっているはずです。それにまお様はお嬢様たちのことを気にかけているはずですし」

「あの子は、常夫さんの変わりにまほやみほのために躍起になっているのは薄々わかっていたわ。だから、あの子の学校での騒ぎには目をつむっていたのよ」

黒森峰女学園は他の学校と比べ厳格な校風が強い学校。それをまおやそのクラスメイトは、まるでそれらを壊すかのようにバカ騒ぎを起こすことが多かった。だがそれらが全て受け入れるわけもなく、学園側やOG及びOB会からは快く思われていなかった

た。学園の校風を著しく乱す存在であるという理由から、退校処分まで検討された程だったが、西住流宗家であるしほの横槍により、毎度有耶無耶とされている。まおはそれらを省けば、学業も開校以来トップで入学し、整備に対しても抜け目のない対応していた。そして何より、父という存在を失ったまほやみほのために、家でも学校でもよく相談に乗ったり、忙しい自分がして上げられなかった家族サービスなどをしていた。本当はまお自身も父を失って悲しいはずのを押し切つて。だからこそ、しほはそこだけ目を瞑り、まおの行動を庇う工作を裏で行っていたのだ。

「奥様、やはりまお様をお呼びに？」

「勿論そのつもりよ。あの子には高等部に進学する心構えやこれからの西住流戦車道をいかに支えなければいけないのかを。本当ならまほも一緒に来てもらいたいところだけど、まずは私とまおだけで話すわ」

「では私はまお様の迎えに行けばよろしいのですね」

「お願いするわ。連絡は私からしておくから。時間はまた折り入って伝えます」
「わかりました。失礼します」

一礼し、大広間から出ていく菊代。しほもそのままゆつくりと立ち上がり、自室の方へと歩いていく。部屋に入るなり、机に放り出されている携帯を握ると電話帳に乗っている息子の名前を探していく。まおと登録されている電話番号を見つけると、電話をか

ける。

『はい、まおです』

「まお。明日、朝一番の連絡船で実家に帰つてきなさい。学校側にはすでに言つています。内容は……言わなくてもわかっているわね」

率直に、言うことだけを本人に伝える。きつと今の自分は無意識に母ではなく、まほやみほに対するような師範代としての対応をしているのかもしれない。

『わかっているよ母さん。俺も母さんに話すのをずっと待つてから』

思つたより早く出たまおの声はどこか清々しい声をしている。それを聞くなり、しほはすぐさま電話を切る。どうやらまおは進路の話はずっと前からしたいと思つていたのかも知れない。だが、今までそんな素振りを見せることもなければ、家でも海上自衛隊に入るなんて話は一切なかった。だがそんなことは今のしほにはどうでもよかつた。

（まお、あなたは西住に生まれたのよ。西住の名を背負う者として、西住流に尽くすのが運命。だからこそ、まほやみほを鍛え上げ、それを支える基盤にならないといけない。それがあなたがこの家で生き残る唯一の方法なのよ）

しほはまおの進路の話は聞く耳持つつもりは毛頭ない。そうしなければ、まおはこの家に存在できなくなる。

『まおを養子として西住家から送り出せ』

それが幼いまおに告げられた運命だった。

西住家は女性主流の一族。驚くことだが、西住家直系は今の今まで女性しか生まれこなかったのだ。男が直系に血筋で生まれた事実は確認されておらず、たとえ生まれたとしても、血筋や古い仕来りにこだわる老人や重鎮たちからは、まおを西住家から排斥することにしたのである。皮肉にも双子として生まれたまほや次女として生まれたみほが女だったことが、まおを追い出す理由を更に強めてしまう。跡継ぎが決まったのなら、尚更まおが西住家にいる理由はないのだと。

その時は産んだばかりのしほも、そして夫の常夫も絶望した。

直系の生まれのしほも、そう言ったしきたりがあるのは聞いてきたが、いざ生まれたまおやまほを見た瞬間にそう言った価値観が一瞬で変わるほどのものだった。

それはそうだろう、ようやく実った命を、そして誕生した家族をそんな理由で追い出すなど納得できるものではなかった。

『絶対にどこへも送らない』

何もわからない我が子をそんな理由で放したくなかったしほは、上役であった当時の両親に頼み込み、なんとか周りに味方になつてくれる分家の人たちを説得して、『必ず西住まおを西住流に栄光をもたらす存在にする』とその場を収めることはできた。だが、そうした方法も今回が最後と念を押されてしまう。

以前似たような方法で重鎮達を説得したのが、常夫との結婚のことだ。常夫の家は祖父から続く海軍の家系であり、結婚当時はすでに二人ともこの世を去つてはいるも、帝國海軍、そして続く海上自衛隊を嫌う考えを持つ西住流としては限りなく認められるわけのない付き合いだった。結婚事態は、しほ自身が戦車道で実力で反対派を押し切り、バックとしてまお同様に分家の人たちなどを味方につけていたのだ。

だが今度ばかりは、まおは確実に西住家にいられなくなる。西住家、そして西住流のお膝元の黒森峰女学園、そのOG会や後援会、地元のスポンサーなどからも『戦車道を制覇する西住三兄妹』と言われている。ここで蹴つてしまえば、西住家の面目丸潰れとなり、当事者であるまおは確実に追い出される。それもよりにもよって海上自衛隊に入るなどと知られれば尚の事。最悪でもそこに入るのだけは絶対に止めさせなければいけない。

（まお。あなたは何を考えているの。常夫さんも…いえ、あの人の家族は皆があの海に逝つてしまったのよ…）

常夫の父も祖父も海で亡くなったことは知っている。そして何より、最愛の夫も海で亡くなっているのだ。以前はなんともなかつたが常夫が亡くなって以来、学園艦に三人を送るだけでも、血の気が引く思いだった。だが、それは学園艦が船ではなく一つの街として無理矢理に納得したからこそでもある。

だが、思えばまおはなぜ海上自衛隊に入ると言ったのか。考えられるのは、常夫の父たちの話を聞いたからだろうが、もう大分前の話。常夫が生きていた頃はまだまおは落ち着いた性格ではなかったし、ただ毎日自由気ままに送る日々を過ごしていた。その後、ただひたすら戦車の整備を一心に磨いていつていた。

そう今更言ったところで。

「…関係ないわね。あの子は西住の人間として生きていく。まほやみほと一緒に……ただそれだけよ」



「……ん」

自室のベッドの上で、ボコのぬいぐるみを抱きしめるように眠っていたみほ。どうやってここまで来たのか、正直なところあまり覚えていないが、自室まで走ってきていたようだ。服装は制服のままだからきつと疲れて寝てしまったのだろう。妙に身体が重く、ふと携帯を見たら、朝の6時ちようどを指そうとしている。

「……メール。お兄ちゃん……」

同時にメールBOXに誰かからのメールを受信していたのを見つける。メールを開いた先はまおからのメールだった。

『みほ。今日はごめんな。みほの言いたいことはわかる。でも納得できないなら俺はみほと何度でも話すよ。でもその前に兄ちゃん、母さんに呼ばれたから明日は家に戻る。話はまた戻つたらな』

「…お兄ちゃんのバカ」

メールを読んでも、あくまでも海上自衛官になるのは諦めないと言った内容だ。思わずみほも分らず屋の兄にボソツと言ってしまう。恐らく後にも先にもみほが軽口を叩ける相手はまおだけなのだろうと思う。

「お母さんと会うんだ。明日ってことは……」

むくりと起き上がり、メールの中身を再確認する。昨日の内に送られてきたメールなのだから、まおが実家に戻るのは今日ということになる。まだ朝の6時だ。学園艦はまだ天草灘に停泊している。母港である熊本港とは地理的な条件で入港できないため、港へは連絡船での移動になっており、定期連絡船が出るのは朝の6時30分から始まる。すれば、まだまおは学園艦内にいることになる。まだ6時だが、まおと急に話したくなつたみほは携帯をとるなり、まおの電話番号を見つけてかける。しかし、呼出音がない前に『おかけになった電話は電波の届かない…』と返される。どうやら、電波が届かないか、携帯の電源を切っているのか、連絡がつかない。

「寮にいるのかな」

窓の方に歩いていき、まおのいる学生寮の方へと顔を向ける。無論、男子寮と女子寮は離れているので、窓からそこが見れるわけではない。ただ、見えなくてもまおがそこにいるだろうという気持ちを確認したいのだろう。

「お姉ちゃんに……言つたほうがいいのかな」

再度、ベッドに腰掛けるなり、まほにまおのことを伝えるべきか悩む。まほはまおの進路のことは知らないはずだが、まおがすでに話しているかもしれない。まほは父が亡くなつて以後は、物事に動じた態度をみほは見たことがない。いつもクールで自他共に厳しい性格だ。驚きはするも、自分ほど慌てるようなことはないだろう。今日は母と進路のことで話すのなら、どの道わかることだろうと。

『お姉ちゃん朝早くごめんね。実はお兄ちゃんのこと。お姉ちゃんも知つてたらフライングかもしれないけど、お兄ちゃん高等部にはいかないで、海上自衛官になるって言つてた。勿論私はお父さんのこともあつたから反対したよ。それに今日はお母さんとそのことで話すから実家に帰るって言つてた。その……お姉ちゃんはそのことどう思う?』

そう打つと、送信ボタンを押す。まほの意見も聞きたい。きつと何かあるなら、まほも自分と同じく説得すると思う。高等部に行つてもこのまま三人で戦車道を続けたい。

「ひゃっ!?!」

そう思った瞬間だった、携帯から呼出音が鳴り響く。いきなりのことにみほは驚き、あわてて携帯を開くと『お姉ちゃん』と表示されている。まさかメールを見て早々に本人から電話があるとは思っていなかった。

「も、もしもし」

『みほ。今のメールの内容は本当なのか?』

「え、あの…」

いつものような声色ではなかった。震えるような声で、先程送ったメールの内容を確認してきたまほ。みほも、思わず口がたじたじになる。それにしびれを切らしたのか、まほが声を上げる。

『どうなんだ!!』

耳元で怒鳴り声を上げられ、思わずその場で縮み上がるみほ。

「ほ、本当だよ。昨日、そのこと知ってお兄ちゃんと話したから…」

『っ!!』

それだけを伝えると、ブツツと電話を切ってしまうまほ。

「お、お姉ちゃん……」

まほのあんなに慌てた声は聞いたことがない。

何が起きたのか理解できなかったみほ。

Reise—6 『否定する夢』

「に、西住隊長?!?こ、ここ男子寮ですよ!!」

「男女での寮の行き来は校則で禁止されてる。隊長ならそれぐらいわかんただろ」

みほからのメールを確認したまほは、血相を変えて中等部男子寮まで来ていた。すぐさまおの寮部屋の前まで行こうとするも、寮の玄関前でまほの侵入を拒むようにまおのクラスメイトである『高瀬 健児』と『井本 丈瑠』が制止していた。

「そこをどけ! 私はまおに用があつて来たんだ!」

「こんな朝っぱらから何かと思えばまおかよ。兄妹で会う用事なら時間と場所を弁えろよな」

「何だと貴様…」

言っていることは正しいが、言い方が気に入らなかつたまほは井本を睨みつける。

「おい井本! すみません西住隊長。まおなら部屋にいると思うんで。連れてきますよ」

「私が直接行くと行ってるだろ」

「いや、それはちよつと……」

「まおならもう出てったよ。西住隊長。実家に帰るって行つて」

ふいに後ろから声が聞こえ、三人が振り向く。声を掛けてきたのはまおのルームメイトであり、副整備班長である志波繁だった。志波の言葉を聞いたまおはすぐさま詰め寄ると、まおが出ていった時間を問いただす。

「それはいつだ！いつここを出ていったんだ！」

「もう30分くらい前ですね。確か一番の連絡船に乗るとかで…」

それを聞くなり、すぐにこの場から走り出していくまお。嵐のように去っていったまおに対し、悪態を付き始める井本。

「つたくあの隊長。普段は鉄面皮の癖して、まおのことだけになると変わりやがる」

「そう言うな。西住隊長にとってまおは唯一対等に接してくれる奴なんだから。俺は可愛いと思うけどな。そういうところ」

戦車道だけでなく学校生活においても、まおは他の生徒とは一線を画する存在であり、近づきたい印象が男子整備班にあった。とてもじゃないが同世代の女子とは比べ物にならないし、そんな人物のところになんの前触れ無く向かっていくまおは兄妹ながらすごいと素直に思う。それだからか、学校内でもあの西住流次期後継者と対等に接することができるのは同じ西住の名を持つ人物だけではないかと噂が立つほど。

「そういうのは、あの隊長にとってよくねえんじゃないか。まおはこの学校から去るって言うてるのによ」

「お前さんの妹だつて、授業終わつたら『お兄ちゃんく!』つて来るじゃねえか」

「俺の妹と比べるんじゃねえよ!それに俺の妹はあんなに愛想悪くねえし!」

「おいおい、こんな朝っぱらからなんの騒ぎだ。寮内まで響いてるぞ」

「ああ隆二。実は西住隊長が来ててな」

「西住隊長が?ふつ、遂に俺の魅力に気づいて口説かれにきたのかな」

「……チャラ男はほつておいて、皆部屋に戻ろうか」

「そうだな」

「ああ」

「はあ!?なんだよそれ!」

クラス一のチャラ男『池谷 隆二』の登場に、急激に冷めてきた三人はそそくさと自分の部屋に戻っていく。残された隆二は、結局大声で目覚めるだけという結果だけに虚しく叫ぶしかないのだった。

■

「お待ちしておりました。まお様」

「お迎えありがとうございます。菊代さん」

学園艦と熊本港を結ぶ連絡船で本土にやってきたまお。港に到着するなり、西住家で女中をしている菊代が待っていた。軽く挨拶を交わすなり、用意された車に乗り込み、

しほが待つている西住家まで向かう。

「……」

海岸線を運転する最中、菊代はふとバックミラー越しにまおを見る。ただ一点に集中するように有明海を眺めていた。

「母さんから聞いてるんでしょ？俺の進路の話は」

「……はい、昨日奥様から」

「まあ予想はしてましたけど。まさかすぐ来いってのはびつくりですよ。今日は高等部の視察とか言ってたから。息子の進路のために中断したってことなんですかね」

ふつと笑って、再度窓の方を見つめるまお。

「まお様。奥様はかなり真剣に考えてまお様をお呼びになつています。西住流師範代としてまお様と今後の西住流についてのお話になります。そこはご自覚を持って話合われてください」

少しばかりふざけて言つたまおの言葉に釘を指すように言う菊代。これまでの所、しほが西住流師範代としてまおに接したことはほぼない。もとより戦車道を履修していないまおにそうした対応は不必要であるし、まおだって戦車道には口を出すことは殆どなかった。まほやみほは母であるしほが師範代としての顔をしている時は師弟の関係であり、親子の関係ではないのを恐らくまおは知らないのかもしれない。ことが大きい

だけに、普段実家でのほほんとした態度は今回ばかりは許容できないと菊代は思ったのだ。

「西住流師範代だろうが関係ありません。俺はあくまで母と将来の選択について話すだけです。西住流がそこに入る余地は一切ないですよ」

自分の進路の話に西住流は一切関係ないと語るまお。その瞳は決して揺るがない真つ直ぐとしたものだ。

（まお様…）

ここまで真つ直ぐとした顔をするのは、久しくみなかつた。

長年…というより、生まれてからずっとお世話などをしてきた菊代でさえも、これからまおがしほに何を語ろうとしているのかはわからない。

「あの、まお様」

「菊代さんは」

お節介とわかりながらも、まおがなぜ西住家を出ようとしているのかを聞いてしまいうるようになった。しかし、その言葉を遮るように、バックミラーの方を向いたまおは菊代に告げる。

「生まれてこの方、ずっとお世話になってましたね。そしてまほやみほ、母さんや俺を見守ってくれて」

懐かしむように、そして感謝するように菊代に言葉を掛けていく。まるで今日で別れてしまうかのような口ぶりにも聞こえる。

「まお様……」

「これまででも、そしてこれからもずっと見守っていてください」

「はい……」

まおの言葉で押し黙ってしまふ菊代。

（まお様は……覚悟しているということですね）

恐らくまおの言葉は、西住家から出ていくこと、そして自身が選択した進路に向かうことに確固たる決意をしている。そう言う意味を含めて言ったのだと。

「まほお嬢様とみほお嬢様にはなんとお伝えするつもりですか。差し出がましいですがお二人はまお様のことを……」

「……もう付きます。降りる準備をします」

話を遮るように、菊代の話を切るまおだった。

■

（まお……まお……なんでだ。お前は……）

第2便となる学園艦から出る連絡船に乗っていたまほ。向かう場所は言うまでもなく実家である西住家。移動する間にも一心不乱にまおがみほに語った内容を考えてい

た。時刻はすでに戦車道の朝練が行われるはずの時間。まほはそれすら考える余裕がないほど慌てていたのだ。

(…私と一緒に高等部に来るはずだ。そのはずなんだ!)

高等部でも戦車道の整備士として自分と一緒にいてくれると信じていたまほは、必死にその話を肯定しようとしていた。

「何が……」

『お姉ちゃん朝早くごめんね。実はお兄ちゃんのこと。お姉ちゃんも知ってたらフライングかもしれないけど、お兄ちゃん高等部にはいかないで、海上自衛官になるって言ってた。勿論私はお父さんのこともあったから反対したよ。それに今日はお母さんとそのことで話すから実家に帰るって言ってた。その……お姉ちゃんはそのことどう思う?』

送られてきたみほの内容を再度確認する。それを見るなり、怒りで携帯を思わず床に叩きつけてしまう。

「何が……何が海上自衛官だ!!お父様を奪ったあんな場所につ!!なんでお前は!!」

今まさに眼前に広がる海に向かって吐き捨てるように叫ぶまほ。忌々しく海の方に睨みつけるその目にはうつすらと涙さえ浮かんでいた。

「私は絶対に認めない!お前はずっと私といってくれると言ったんだ!!」

最愛の父を亡くし、壊れかけた自分を救ってくれた兄妹の約束。それを破ろうとするまおを、まほは否定することしかできなかつた。

Reise—7 『息子の夢』

「奥様。まお様をお連れ致しました」

家につくなり、母であるしほが待っている応接間に案内されたまお。中からすぐに「入りなさい」と返事が帰ってくると、菊代が襖を開ける前にまおが手にかけて「失礼します」と碎けた感じで入っていく。

「ただいま母さん」

「……」

『おかえり』の返事もない。返されたのは無言の睨みだった。どうやら普段とは違う、西住まおの母としての『西住しほ』ではなく、西住流師範代『西住しほ』としてこの応接間に君臨しているようだ。

「そこに座りなさい」

「はいはい」

そう言われると、用意されている座布団に正座で座り込むまお。そしてゆっくりと目の前にいるしほに目を合わせる。最初の数秒はお互い何も語ろうとはしない。ただ黙って様子を見ているようにも見える。

「あなたも何故ここに呼び出されたかわかつているはずだから、単刀直入に言うわ。まお。バカな選択はせずに、まほと共に高等部へと進み、西住家の長男としての役目を果たしなさい。それがあなたを黒森峰に入れた理由のはずよ」

沈黙を破るようにしほが口を開く。怒気も込めた低い声から出てきた言葉はまおの進路を愚かな選択と一蹴し、まほと共に高等部へと進めという内容だ。その内容に眉を一瞬顰めるまおだが、しほは構わずに言葉を続ける。

「それから、高等部へと進学したら、これまでのようなバカ騒ぎは許すわけにはいかないことを肝に銘じておきなさい。高等部の戦車道は中等部とは比べ物にならないほどに規律の通った場所よ。中等部のような行動をしてもらつては、西住流の名に傷を付けることになるわ」

「俺は進学したらそう言った行動はしない。国防を担う人間になるんだ。それぐらいの自覚はちゃんと持つてるいくつもりだよ」

「誰が国防の話をしたかしら。今私が話しているのは、これからの西住流で如何にあなただの重責があるかの話をしてるのよ」

「母さんこそ何の話をしてるんだ。俺の進路表読んだじゃないの？その進路表のどこに黒森峰女学院高等部なんて書いてた？違うだろ、俺は特別防衛学校って書いてたはずだ！」

そう言うと、懐から出したのはまお自身が記載した進路表。それを座卓の上に叩きつけるようにしほに見せつける。だが、しほは進路表など見向きもせず、まおから視線を反らそうとはしない。

「その選択は一時の気迷いだと受け止めます。あなたは昔から興味のあるものには首を突っ込みたがる節があつたわ。大方、テレビは雑誌などで興味をもつたのでしよう」

なりたい理由がどうであれ、この話を早々に切り上げたいしほはまおが語つた内容を気の迷いと切り捨てた。

「だから話なんて聞く気がないってことか」

「そうよ。あなたはこれまで父の意志を継いで戦車道整備士として、立派なキャリアを築いてきた。そしてそれは今後変わることはないと信じています。西住、いえ母である私にとつては誇らしいことよ」

「……」

先ほどまでの強烈な視線が嘘のように、これまでまおが行つてきた経歴を褒めるように柔らかな視線に変わる。はつきりと面と向かつて言われたのは、正直初めてだったまお。母はあまり整備に携わつてからは褒めるような台詞は言わなくなった。『できて当然』。それがこの西住という家の常識だからだ。だからこそ、母からそのような言葉が出てきたことに思わず困惑してしまつたのだ。

「さあ、理解したのなら黒森峰に戻りなさい。今ならまだ昼から授業に出られるでしょう」

返事がないのを確認するなり、まおに帰るように促すしほ。そのまま立ち上がりこの場をあとにしようとした時。

「試験は夏休み明けだ。もう願書も出したし」

「さっきの話を聞いていたのかしら？」

足を止め、再度まおの方へ振り向くしほ。その視線はさきほどのとは打って変わって、鋭い視線だ。だがまおは視線を反らさず、母と視線を合わせるように立ち上がる。

「聞いてたさ。だからどうしたって話だ」

「何ですって…」

「はつきり言えば、そんなのは俺には関係ないんだよ」

「まお！あなたは今まで何のために戦車道整備士としてやってきたかわかっているの！！」

あからさまに関係ないと言った表情をしているまおは口を開く。だが出てきた言葉に怒りを感じたしほは声を上げてまおに怒鳴りつける。

「この西住を継ぐまほやみほを支えるために、その将来の基盤を作るために黒森峰に入学させたのよ！」

「そうだ。俺が今までやってきたのはまほやみほのためにやってきたんだ」

「わかっているなら！」

「でも、もうあの二人に俺は必要ないからだ。逆に俺がいるとまほは……」

「そんな勝手な話は許さないわ」

何か言いかけたまおだが、その前にしほが怒りの形相で割って入ってくる。

「母さん、俺がここに来たのは俺の進路の話だよな。だったら西住の今後がどうか、今はどうでもいいだろう」

「どうでもいいですって？」

「……そうだよ」

呆れるように返すまおに鋭い目つきで睨みつけるしほ。もしこの場にみほでもいたら震えがるほどの眼力だ。まお自身もここまで怒りを露わにする母は見たことがないかもしれない。いやただ忘れていた。目の前にいるのは母ではない。西住流師範代『西住しほ』なのだ。だからこそまおは引き下がるわけにはいかないのかもしれない。自分の進路は西住流師範代ではない母としてのしほと話さなければいけないと。

「俺は海上自衛官になる。それは黒森峰女子園に入らずと前から決めてたんだ」

「聞く耳を持たないわ。あなたは西住の人間。好き勝手できる普通の家とはわけが違うのよ」

「好き勝手じゃない。俺は自分の将来を親に話に來ただけだ。普通の家と何が違うって言うんだ」

「西住の人間として自覚と持ちなさいとあれほど言ったはずよ。あなたは上役や親族、黒森峰、さらに西住流を支援してくれている人々から大きな期待を背負っているのよ。あなたは気づいてないかもしれないけど、すでに西住家に影響を持つ存在となっているわ。それにあなたには亡くなった常夫さんの」

「俺は西住流のためにやっていたわけでも、ましてや父さんの意志を継いで戦車の整備をしてきたわけじゃない！」

「っ!!」

瞬間、しほの手が振り上がった。まるで風船でも割れたような乾いた音が応接間に響き渡る。まおの頬は赤くなり、しほから少しばかり距離が離れていた。それほどの強烈な平手打ちがまおに刺さったのだ。

「見損なつたわまお！あなたは子供の頃から何一つ変わってないわ！何のために常夫さんは……」

久方ぶりに受けた母からの平手に頬をさするまお。だがそれでも怒りが収まらないしほはさらにまおに詰め寄っていく。

「俺が父さんから引き継いだのは整備としての腕じゃない。父さんが語ってくれた夢を

引き継いだんだ！」

「!?」

まおから語られた内容を聞いた瞬間、明らかに反応が変わるしほ。

常夫がまおに語った？何を？

いや語ったことなどまおが今まさに言っていることだろう。だがそれは…

『父も祖父もずっと自衛官として仕事ばかりの人だった。いつも母さんを悲しませてたよ。そして最後は帰ってくることはなかった。そんな思いを生まれてくる子供たちに味合わせたくない。無論、しほさんにもね』

遠い記憶。まおとまほが生まれてくる前に言ってくれた話を思い出す。常夫自身から語ってくれた幼い日々のことを。

「あ、ありえないわ。あの人が海上自衛官になろうとしていたなんて…」

「嘘じゃない。全部父さんから聞かされたことだよ母さん。父さんから夢を聞き、そして海江田四郎海将補の話聞いて俺の決意は固まったんだ。そして何より学園艦という場所に行つたことが俺の決意をさらに固めたんだ」

学園艦という場所に行つたことはまさにまおにとつて最高の場所だったに違いない。広大な海を突き進んでいく船に乗れたことが、まおにさらなる決意をもたらしたのだから。

「ま、まお……」

「傍若無人と取られても仕方ないと思ってる。自分の立場がいかに重要な場所にいるのか。母さんたちにどれだけの迷惑を被ることになるのかも。でも俺は、父さんが語ってくれたことをここで終わらせたくないと思ってるんだ」

まるで先ほどと立場が逆転したように自分の思いを語るまお。一時の気の迷いなのではない。本気で海上自衛官になりたいと。

「俺は海上自衛官になりたい。それが俺の夢なんだ！」

「……」

「母さん!!」

「っ！」

押し黙ってしまったしほに、叫ぶように母を呼ぶまお。今のしほは間違いなくまおに對して狼狽えていた。言いたいことなんてたくさんある。『そんなこと関係ない。西住のために勝手なことは許さない』と。どんな相手であろうと常に冷静かつ冷徹に對応してきた。それは娘であるまほやみほと同じことだ。どんな戯言や弱音を吐こうが『常に前に進むのが西住流』と言ってきた。

今日の前にいるのはまほやみほと同じ自分の子供のはずだ。まほやみほと同様に西住流として接すればいいだけだ。ことは西住に関わる問題。ならば自分は母ではなく、

西住流師範代『西住しほ』として…

「俺のことを誇りに思ってるって言ってくれた母さんなら。わかってくれるって俺は信じてる」

(「…常夫さん」)

そう言われた瞬間、しほはどこかしら理解してしまったのかもしれない。まおは今まで自分が接してきた人とは違う。本当にひとりの母として自分に意見をぶつけてきているのだ。西住流なんて関係ない。かつて自分をひとりの女性として接してきてくれた常夫のように。

(「どうしたというの…こんな…まお」)

まおのことをわかっているつもりだったが、とんだ筋違いだった。もとより西住流としてまおに接したのが間違いだっただと。いやそもそも、戦車道を娘に教えて込んだ時期からまおに母としてどう接してきていたかわからない。いや、わからなかった。ただ、自分のことばかりにかまけて。

「この話はひとまず終わりよ。あなたは部屋に戻ってなさい…」

出てきたのは、話を打ち切ることだけだった。だがそれを聞いてもまおは逆に母を責めていく。

「話は終わってない。俺を呼びつけたのは母さんだろ。なら最後まで」

「いいから戻りなさい!!何度言わせるの!!」

無茶苦茶だった。こんな形で話を切り上げるなんて、今までしてきたことはなかっただろう。それだけ吐き捨てるのとまるで逃げるようにまおから離れていくしほ。

「俺を呼んだのは母さんだろ!!だったら息子の話を最後まで聞けよ!!」

背中を見せる母に向かってまおの声が家中に響き渡るのだった。

Re i s e — 8 『それぞれの思い』

「お兄ちゃん…お姉ちゃん…」

校舎の屋上で一人、佇んでいたみほ。今日は朝からゴタゴタだった。朝練を行うはずが、隊長であるまほが突如として行方知れずとなり、整備長であるまおも不在という状況に陥った。すぐに騒ぎとなり、収めるはずの副隊長であるみほがあたふたしてしまう事態になり、見かねた整備班から『西住隊長と西住整備長は西住師範代から急に呼び出されて今朝出ていった』と副整備長である志波が発言し、その場はなんとか収まった。はずだったが。

『西住隊長が何も言わずにいくわけないわ！というより何で副隊長であるあなたがそれを知らないのよ！』

『そ、それは…』

とエリカや他数名が反論し、同じ西住家の人間であるはずのみほが説明しないのかで騒ぎかけるも、最後の最後に整備班がその場を無理やり収める事態になってしまった。結局、今朝の朝練も、午前中にあつた授業科目：戦車道も隊長不在の状態で、機動練習だけに留まった。まほの言っていた母が来るということもなく。

「どうなつちやうのかな。これから……」

みほは「何か大きなこと」が起きるのではないかと、胸の内がザワザワして気持ち悪かった。

そういう気持ちになった時、みほは決まってここにきていた。校舎が学園艦の端に近いこともあり、屋上からは天草湾などが一望できる。だが、みほは海が嫌いであるため、見ようとはしない。いつも座つては空を見上げるばかりだ。ならなぜ、みほはこの場所に來るのか。

『お兄ちゃん。よくここにいるよね』

『あれ、みほじゃないか。もしかして付けてきたのか?』

『う、うん。気になって……』

『そっか。ここは、俺のお気に入りの場所だな……』

理由は一つ、”まおがよくこの場所に來るから”だ。もうみほが一年生になった頃からまおはこの場所にいたのを思い出す。途中からまほも加わつて、たまにここで昼食をとるようになったりすることもあつた。

(今思えば、お兄ちゃんがここに來てたのつて……海が見えるからなのかな)

先にまおがいた時は、決まってフェンスのそばで立っているのがお決まりだった。單なるカツコつけて黄昏れているつもりなのかと、最初の頃は思っていたみほ。

『……』

『お兄ちゃん？お兄ちゃん!!』

『んあ！悪い悪い。ちよつと意識がパアツといつてたわ』

だが何回か見る度に、その瞳は一点と海上の方を見据え、何か希望に満ち足りた表情をしていた。まるでその場所に居場所とでも言うような。

『……』

みほは、兄が見せるその表情が苦手……いや”嫌い”だった。

自分たちには決して見せることのない表情がみほは嫌いだった。

まるで自分達を置いて、その瞳が見つめる先に突き進んでいきそうで。

『……』

まおと同じように、フェンスのそばまで来るみほ。この場所ですいつもまおは目の前に広がる大海原を見ていた。同じ場所に立てば、まおの気持ちかわかるのではないかと。

『この匂い……』

海から舞い上がる潮風が鼻にツーンと来る。その匂いが色んなことを思い出される。

『お父さんいつてらっしやくい!!』

『ああ、みほもいい子にね』

かつて、最後になってしまった父を送り出す時。ちよつど今のように海の潮風に当て

られ、船へと乗船し家族へと手を振る父を。そして二度と生きては戻ってこず。

『お父さんっ!!』

「!?!」

咄嗟にフェンスから離れていくみほ。膝がガクガクと震え、自分を思わず掻き抱いてしまう。やはり、あの頃のトラウマはまだ直りそうになかった。落ち着くために、すぐに入り口の方まで歩いて行く。その場で再度座り込み、体育座りなる。

「やっぱり、お兄ちゃんはおかしいよ……」

改めてまおのなろうとしているものに疑問を抱くみほ。

ずっとまおは一緒に居てくれた。そばにいてくれた。だから自分は兄の気持ちが変わっているはずと思っていた。だって自分のことをわかってきてくれたから。

でも、わからない。

わからない。

わからないわからない。

わからないわからない……わからない!

夢を語ってくれたあの日から。西住まおが自分たちを置いて海へと向かおうとしているのか。そんなに父の夢になろうとするのが大事なのか。そんなの自分は望んでない。父や祖父たちが死んだのを偶然だと言っているまおはおかしい。絶対目に見え

ない何か、父たちを奪ったのだらうと。

「お姉ちゃんも、やっぱりお兄ちゃんのことか心配だから……あんなに慌ててたのかな」
今朝方のまほの動揺した様子も、きつと自分と同じ思いがあったからだろう。最近のまほは、まおに対し消極的な雰囲気があったため、また子供の頃みたいに険悪な仲にもなつてしまったのかと思っていた。

「私も行ったほうがよかつたのかな……」

「何によ……」

「っ!? エ、エリカさん……」

いつの間にそばにいたのか、同じ戦車道を履修している生徒『逸見エリカ』が黄昏れているみほにジト目で声をかける。

「どうしてここに?」

「私がここにいたら何か悪いことでもあるの? それにもうすぐ授業始まるのにボケつとしてるつもりかしら」

「う、ううん」

「なら早く来なさいよ」

「う、うん……」

そう言うのと立ち上がるなり屋上をあとにする二人。

「…もしかして逸見さん。あそこに私がいるの知ってたの?」

「どうしてそう思うのよ。別に…ただそう思っただけ。それよりも」

階段を降りていく最中にエリカが足を止めるとみほの方へと向き直す。

「隊長たちが実家に行ったのって、もしかして西住整備長の件で戻ったのかしら?」

「…どう、なのかな」

恐らくそうなのだろうとふと思うも、エリカに言うべきなのか迷ったみほは知らないふりをすることにした。しかし、それを聞いたエリカは胡散臭い目をしてみほを見る。

「ふうん。さつき整備班の話をチラツと聞いたんだけど、整備長、高等部に上がらないって本当なの?」

「え!?それは」

「その反応、やっぱりそうなのね!」

みほの驚いた表情を見たエリカは詰め寄って来る。

「え、あ、その…」

発破をかけられた。咄嗟にみほは単純な自分に呆れてしまう。エリカはそんなのはお構いなしにみほの肩を掴んで問い詰める。

「どうして!?まおさ…整備長は隊長たちと高等部でも一緒にやって行くんじゃないの!」

「い、痛いよ！それに、それを知ったのも昨日だし…」

「何よそれ。そんな大事な話を今したって言うの!?!もしかして隊長たちが師範代に呼ばれたのって、そのことじゃ」

「わ、わからないよ！お兄ちゃんもいきなりいかないとか言い出して、叫びたいのはこっちなの…」

「つ……悪かったわね。いきなり掴んだりなんかして…」

下手に問い詰めて涙目になったみほを見て、手を引つ込めるエリカ。バツの悪い顔をしてみほから遠ざかるように早歩きで進んでいく。

(何よ何よ何よ！ほんと大馬鹿だわ！まおさんあなたは！)

嘘だと思っていた話が事実だと確信してしまったエリカ。その胸の内は怒りの気持ちを抑えきれないで一杯だった。



自身が使用している執務室に掛けられている壁の時計がコツコツと乾いた音を立てて時を刻んでいる。ここに来てどれだけ時間が過ぎたかわからない。

『俺は海上自衛官になりたい。それが俺の夢なんだ！』

頭を抱え、先程のことを思い出しは。気持ちの整理がうまくできないでいた。

『父さんが語ってくれた夢を引き継いだんだ』

自分の知らない常夫のことをまおが語っただけに、二重にもショックが大きかったのだろう。

(本当に常夫さんは、海上自衛官になろうとしていたのかしら。どうしてその話を私にはしてくれなかったの……)

夫婦なのに、そのことを自分には言わなかったことに疑念を抱く。元々内に秘めていたのか、たまたま小さい頃のまおに冗談で言ったのか。考えればいくらでも理由が思い浮かぶも、あのまおの真剣の表情は事実であることを物語っている。

(でも結局。あの人は……)

海とは関わりない仕事だから大丈夫と言いながら、常夫は最後の最後で海に逝ってしまった。父親と祖父と続き、まるで呪われているかの如く、海で亡くなってしまった。もしまおが、常夫のようになってしまったら？

彼の遺体を確認しに行った時のように、もしまおの遺体がある場に安置されていたら

：

「っ!?!はあ……はあ……」

間違いなく自分は今度こそ耐えられない。壊れてしまう。

「まお……ダメよ。それだけは…絶対に」

だが事情がどうであれ、やはりまおを海の仕事、海上自衛隊に入るなどということだけは避けなければならぬ。

（まお…どうしてわかってくれないの？なぜそんな道に…）

頭を抱えこむしほ。なぜ自分の意見を理解してくれないのか。少なくとも、まおは家族を混乱させるようなことは常夫が亡くなってきてからしてきてはいない。それはまおが父に変わって西住家の長男として自覚を持って接してきたからと思っていたからだ。なのに、今になって海上自衛隊に行くなどと言ってきた。もし常夫が本当に海上自衛官になろうとしていたのなら、まるでそれが運命なのかの如く。

「まおを…ずっと見てきたはずよ……」

自分はまおを見てきていた。ずっと子どもたちのことを心配していたはずだ。師範代として活動する傍ら、常にまほとみほを……

まほとみほを……

「まお……」

まほとみほを…

『母さん、今回のテストの結果なんだけど』

『まお。私はまほやみほの稽古をつけないといけないから、あとにしてちょうだい』
『…わかった』

そうだ…

『母さん。パンターの整備なんだけど』

『あなたに任せているはずよ。私に一々言うことではないでしょ』

『そう…だね。あとは俺がやっておく』

自分は…

『まお。まほやみほのために精進しなさい』

『……わかつてる』

本当にまおのことは見ていたのだろうか？

『母さん……俺は』

『あとにしなさい。今から大事な会合があるから』

『……わかった。また今度にするから』

『なら早く行きなさい』

今思えば、まおは自分に意思を伝えようとする兆候は何度もあったのではないのか？

自分がまおを放置していたから…

言葉足らずで、まおに都合のいい印象を勝手に抱いていた自分の不器用さが…

「私は母親なのに……」

家族を大事にしなければいけないと思いつながら、今になってしほは、自分が家族を家族として見ていなかったことに気づき始めてしまった。

「どうすれば……」

どうやってまおを説得すればいいのか今のしほには到底案が思い浮かばなかった。ただ頭ごなしに言っても、今のまおならすぐに言い返すだろう。

「まお……」

今の自分ではまおと言葉を交わすことが、正直怖いと思ってしまう。自分にはつきりと物申す態度、話を聞くまでは最後まで妥協を許さない態度、どれもこれも今までしほ自身がやってきたことのはず。それが逆に自分がいざされるとこんな縮こまる事態になるとは、さらに相手が実の息子相手では、正直皮肉としかいいようがない。自分はどうかやら周りが思っているほど、強い人間なのではないのかもしれない。

「電話……はい。っ！」

ただ時間だけが過ぎていく中、執務室に置いてある電話が鳴り響く。すぐに出ると、相手の名前を聞いて表情が強張るしほ。西住家の上役の一人からだった。

「どうしてそのことを……ま、まおをですか！それは私だけの出席だけでは……わ、わかりました。すぐに連れて行きます」

一方的に伝えられた内容にしほは驚愕していた。

「なんてことなの……どうしてまおの話が」

先程の電話の相手から伝えられた内容。

『西住まおを、本日行われる西住家の会合に出席させよ。この経緯を問いただし、処遇を決める』

まだ上役までに話はいってないとばかり思っていたのに、なぜこんなに早く連絡が来たのか。黒森峰女学園がそこにまで報告していたのか。だが、なぜ西住流ですらないまおの処遇を決めると言い出すのか。それを上役皆が集まる会合で。

「まさか……」

嫌なことを思い出すしほ。かつて、まおが幼い頃に上層部から言い渡されたこと。

『まおを養子として西住家から送り出せ』

あの頃の宣告を再度言い渡そうとしていたのかと。

「どうすればいいの……」

今のしほにはそれを食い止める手立てが思い浮かばなかった。

だが……

「話すのは母である私と……だったわね」

まおが望んでいるのは母としての自分だ。

◆ 話が頓挫してしまい、母に言われるままに自室に戻っていたまお。

自分の話を聞く耳を持たないまま出ていった母に対する言葉にはできない苛立ちを抑えるために、自室に置いてあるCDレシーバーで音楽を聞いていた。

『クラシック？これおじいちゃんが聞いてたの？』

『ああ、モーツアルトを特に好んでな。これを聞くと魚になつた気分になれるって言うてたよ』

『へえ〜』

幼少期、祖父の実家がある美倉島という島に父と二人で墓参りに行った時に聞いた話。祖父『海江田四郎』が生前クラシックを嗜んでいた。常夫も影響を受けて古いレコーダーで聞いていたのだと。言っても、当時のまおはそこまで考えられる能力はなかったらしく、ただ音楽を流していただけで済んでいた。だが、ずっと聞いている内に自然とまおもこの世界に引き込まれていった。尤も、まおはモーツアルトよりベートーヴェンやドヴォルザークを好んで聞いたりしている。

「……………」

昔からまおが気持ちを落ち着かせるために聞いていたのが大体がこの手の方法だった。普段は気さくなまおでも、やはり苛立つ時や怒りがこみ上げてくることだってあ

る。だがまおは『絶対に家族には当たり散らさない』が信条だった。たとえ理不尽なことが起きてても、家族には笑って許せる奴になろうと。それがかつての父が行っていたように。それもいつしか、それが家族だけではなく、周りにいる全員へと広がっていった。

『だったら息子の話を最後まで聞けよ!!』

だが、今日だけは違った。最後の最後で母に当たりかけてしまった。母に対する妙な違和感を受けるも、呼びつけて起きながらそれはないだろうと。正直あの時は執務室まで行くこうかとまで考えたが、母の様子が違うのを思い出し、踏みとどまった。

(母さん……)

あの厳格な母が自分から逃げように行つたようにも見えた。あの母が。

『撃てば必中、守りは堅く、進む姿は乱れなし。鉄の掟、鋼の心、それが西住流』の言葉を体現した存在。西住流師範代”西住しほ”。妹であるみほがいつもビクビクしながら、母との戦車道をしていたのを沢山見てきた。彼女が戦車道に関わる時、母の姿などどこにもない。厳格に、冷徹に、冷静に、臆さずに、弱さを見せずに、その姿はまさに女傑。表情すら変えないあの瞳に睨まれれば、泣く子も黙るのではないかと。みほが前に愚痴つた『お母さんって、ロボットじゃないよね』と言われたことがあった。戦車道とは関わりのない、プライベートな時間でもしほはほぼ無表情なだけに、娘であるみほ

からもそう思われ始めていたのだ。だがその言葉をまおは即座に否定した。なぜなら……

『……っ。…常夫さん……っ』

まおは母の弱さを知っていたからだ。人知れず、悲しみの涙を流しているのを見たことがあったまお。きっと母には色々な背負うものが沢山あり、自分たちの面倒、師範代として多くの門下生を鍛えていかなければならない。母は自分たちには想像できない重荷を背負っているのだろう。だからまおは、母に深く追求することに躊躇いを持つてしまった。そして語るべき機会を先延ばしたツケが今まさにこうして回ってきてしまったのだ。

「まお……」

曲が終わったのと同時に、タイミングよく扉の外から自分を呼ぶ声が聴こえる。

「っー母さん?」

まさかの母が自分の部屋に尋ねてきたことに驚く。ヘッドホンを机に置き、扉の方へと歩く。扉を開けて、改めてしほと対峙する。その表情は暗く、目がよく見えない。

「まお。出かける支度をしなさい」

「出かける?どいこ?」

「西住流の会合よ。上役や長老たちがあなたの件で話があるそうよ」

「西住流の…会、合…」

まさかの場所からの招待に驚きを隠せない。それはそうだろう。西住流の實質のトップの人たちが集まる場所に呼ばれるのだ。まほやみほは何回か顔出しに行ったことはあるが、戦車道をやっていないまおが無縁の場所ともいえる。どうやら話はすでに西住流の中樞にまで行ってしまっているようだ。

「でもまお。あなたはその会合、一言も発言することを許さないわ」

「はあ？」

何を言い出すのかと頭の中で疑問符が乱舞する。自分の件で呼ばれるのになぜ何も喋るなどというのか。

「まお。あなたは母である私と話をしに来たんでしょ。なら、その会合で話すことはないはずよ」

「母さん…」

その言葉を聞き、目を見開くまお。

「わかったのなら、準備をして出かけるわ」

それだけ淡々と行ってその場をあとにするしほ。扉がボタンとしまり、机の方に戻るまお。再度、椅子に腰掛けるとふいに天井を見上げる。

「西住流…か」

『西住の家に男が生まれるとは…』

『これまで直系は女しか生まれていなかったから、上役も面倒になる前に養子に出そうとしたらしいわよ』

『しほさんが拒んだって話らしいぞ。西住流に必要な人間になるからその話はなしとかで』

『必要って、あんな傍若無人にのたうち回って、後継者のまほちゃんやみほちゃんに悪影響出なきやいいけど』

『どの道、西住流始まって以来の汚点になるのは間違いないわね。師範代は何を考えているのか…』

かつて、親族の集まりでこつそりと聞いてしまった自分に対する批判の数々。薄々と気付いてはいた。親戚連中の目が明らかに妹たちと違うのを。そしてその目が今日白日の下に晒される。きつと自分の進路を口実に出て行けどでも言うのだろう。日本戦車道を引つ張る西住流。だが血筋や家柄に拘りすぎるのがこの一族最大の汚点だとおは思っていた。そんな古臭い考えはいつか滅びを呼ぶと思っていたからだ。

(…：自分がこの家にいられるなくなるのが近づいているような気がする。それを望んでいたのかもしれない…：そうでないのかもしれない)

時計が針を進める度に、その思いが近づく瞬間が肌にピリピリと伝わってくる。こん

な感覚は、物言わぬ父と対面する時以来かもしれない。

(……武者震いってこんな感じなんだ)

気がつくくと、足や手が小さく震えている。その震えの理由はわかつている。これから自分が何をなさうとしているのかを。恐らくそれをしてしまえば、この家には二度といられないと思つたからだ。

「悩んでも仕方ないか……」

いくら考えたところで、導かれる答えは大筋見えている。服装は制服のままでもいいだろう。別段私服に着替えたところでめんどくさいだけ。

「ん……なんだ」

部屋を出ようとしたときだった。誰かが廊下を走る音が響く。途中、菊代やしほの驚いた声が聞こえる。この部屋に近づいている。

「まおっ!!」

扉が開かれ、入ってきた人物にまおは驚いた。

「ま……ほ……」

「はあ……はあ……」

まほだ。よほど急いだのか、息も絶え絶えで普段冷静に振る舞うまほが見せる姿ではない。だが今のまほにはそんなことはどうでもいいこと。哀愁漂うその表情でまおを

見据える。

「みほから聞いた……お前が高等部に行かないって」

「……………」

「冗談なんだろう？昔からまおは私やみほに冗談ついてたからな。お前は私と高等部に行くんだろ？約束だからな、ずっと……私のそばにいるって……なあまお」

「……………」

「何で黙ってるんだ。嘘なんだろう？また驚かそうとしてるだけなんだろう？お父様を奪った場所に行こうなんてのも」

「全部本当だ」

その言葉はまほの感情を爆発させるに十分な爆薬だった。

Reise—9 『まほとまお』

西住まほは双子の兄である西住まおのことが大嫌いだった。

「まおのバカア！バカバカバカア！」

「聞こえない！聞こえない！」

いつも人のことをバカにしてくるし、家を飛び出してくだらないことをやっては母を困らせてばかり。本当にこんなバカとしか言いようのない男子が自分の兄なのかと思うと、無性に腹が立って仕方なかった。

『先生つ!!まおくんがスポスポする奴で学校中のトイレの水抜きまくってます!!』

『また西住か!!全くアイツは!!』

小学校でもまおのバカすぎる行動は有名であり、同じクラスだったまほからしたら恥ずかしい限りである。

『流石ね。西住さん』

『こんなの大した問題じゃありません』

逆にまほはクラス、もとい小学三年生の中で飛び抜けてと言っていいほど、落ち着いた雰囲気醸し出していた。

『西住さんって、少し怖い感じがするよね』

『でも、まおくんがあんな感じだから意外とお家ではあんな感じなもかもね』

それだけに当初はクラスで浮いた存在となっていたのだが、まおという存在が同じクラスにいたがために、クラスメイトからも次第にまおと同じような感じで見られていた。

『私は、西住流を継ぐ人間なんだ。あんなバカまおと同じにされるなんて!』

戦車道の名門『西住流』が身に染み、プライドが高くなったまほがまおに向けている思いはいつもこんな感じだった。とは言ったものの、学校ではクールな印象が多いまほだが、家では毎日まおを感情のままに追いかけて回す日々が続いていたのだった。

「何をやっているのまほ!この時の機動戦術はそうではないと前に言ったはずよ!」

「はい。お母様……」

今日も母であるしほから容赦のない西住流戦車道を叩き込まれ、泣きたい気持ちで一杯であったのを我慢していたのに、まおから『泣き虫まほ』などと言われ、泣きたいどころか堪忍袋の緒が切れ追いかけて回す日が続いていた。

「いい加減にしなさい!まおはともかく、まほまでこんな泥だらけになって!」

「ごめんなさい……お母様」

「その田んぼが思ってたより泥濘ぬかるんでさ」

「いい加減にしなさいまお!! 事の発端はいつもまおじゃない!」
「あだっ!!」

最後には必ず家でも外でも暴れまわる二人を叱りつけるしほの怒号がいつも飛んでいた。ただでさえ戦車道でも怖いしほから怒られているのに、まおのせいで怒られるまおはへらへらしてゐるまおが嫌い、嫌いな仕方なかった。

「大丈夫お姉ちゃん。またお兄ちゃんのことでお母さんに怒られたの?」

「心配ないよみほ。まおのバカはいつものことだから」

それに比べ妹であるみほは自分に懐いており、何より西住家にとつては重要である戦車道を一緒にやっている。昔はまおと一緒にいることの方が多かったみほではあるが、今ではまほと一緒になってやるが多かった。ツライことがあつても、いつも頼つてきてくれているみほのために我慢しないとけない。妹を不安にさせるような情けないところを見せたくなかった。いつも気丈に振る舞っている母のように、自分もそうならなくてはいけない。なのに、そんな自分をぶち壊すかの如く、まおの存在はあまりに大きかった。自分や母にも迷惑をかけまくるまおをきつとみほも嫌いだろうと思ひ、ふと尋ねたことがあつた。

「私お兄ちゃんのことお姉ちゃんと同じくらい大好きだよ! 優しいし、いつも私のこと心配してくれてる。それに一緒にいると楽しいから」

自分が予想していた答えとが違うことにまほは戸惑った。みほもまおの支離滅裂すぎる行動で母に怒られているのが多かった。その流れはいつもまおがみほを誘っては下らないことをたくさんやって怒られているばかりのもの。拳骨まで一緒にもらっているためだけに、てつきり自分と同じ気持ちだと思つたまほは困惑してしまつた。

(なんでだみほ。どう考えてもまおのせいで、迷惑被つてるのに。絶対みほは間違つてる。私がいまほを正しい道に戻してみせる。これも戦車道……)

みほの言葉を信じられないまほ。このままだとみほはまおのバカがうつつて道を逸れる危険性があると思つたのだろう。一緒にやつている大事な戦車道まで影響しかない。なんとかみほが抱いているまおの気持ちを変えなくてはいけないと決心するまほ。

(でも、お父様にも相談してみよう。お母様も私と同じ気持ちのはずだし)

父である常夫にもまおのことを聞いてみたのだが。

「はははっ!!まほはまおのことそんな風に思つてたのか!」

「笑わないでくださいお父様!私は真剣です!」

まほからしてみれば何が可笑しかったのか突然笑い声を挙げて戦車を整備しているガレージを響かせていた。どうやら、まほが常にまおに対して思っていることを率直に『ようはバカで西住の家に迷惑かけまくる』といったのだが、それが常夫のツボに入った

ようだ。

「まおはまほが思ってるほどバカじゃないよ。ちよつとヤンチャがすぎるだけだ。それに、クラスでも学級委員長を努めてるんじゃないか。勉強でもまほに負けず、というよりまおの方がいいんじゃないのかい？」

「う、それは…」

常夫に指摘され、思わず押し黙ってしまふまほ。言うとおりに、まおはあんな感じではあるが、在籍しているクラスの学級委員長を努めている。最初は『はい！やります！やります！』などと、ただ目立ちたいだけだろうと思ひ、普段のまおの行動を見ているまほからしたら一週間で学級崩壊が起きると思っていた。が、実際は思ひの外皆を纏めていたのだ。

『お母さん!!お父さん!テスト100点!100点!!』

『す、すごいわね…』

『ほく、凄いいじゃないかまお』

『お姉ちゃんは?』

『……9、95点』

それに勉強の方でも、前まではまほの方が圧倒的に点数なども上だったのだが、三年生に進級してから急激に伸ばし、今ではまほよりも満点テストを取るのが多くなって

る。そのことでも、まほは非常に面白くない気持ちが強かった。

「でも、まおのやつてゐることはバカの一言です。それにお父様までまおの味方をして……」

そう言っているうちに、まほの目元に涙が溜まつていく。それを見た常夫はまほの頭に手を置いて優しく撫でる。

「まほ。お父さんは何も、まおの味方をしてるわけじゃないよ」

「お父様？」

「お父さんはまほのことだつていつも見てるよ。戦車道で頑張つてるところや、みほをしつかりサポートしてる。お母さんの教えを泣き言一つ言わずにやつてくれるじゃないか。そんな大変な中なのに、勉強も両立させてるなんて、文武両道つて言うのはまほみたい子のことを言うんだろうな」

「う、うん………」

父にそう言われたまほは照れくさかったのか、顔を赤らめながら俯く。父は決して自分のことを見ていないわけではなかった。

（お父様……）

ちゃんと見てくれている。それだけで、まほは十分だけだったのかもしれない。

まほは父親である常夫のことが好きだった。無論、それが愛とかではなく親としての

愛情だ。

俗に言うファザコンというやつかもしれない。

この頃のまほは、家族に対する思いはおおまかに完成していた。

『お父さんがいつも見てるよ』

『お父様』

父は自分をいつも見てくれている心の在処。

『まほ。しっかりとしなさい。お母さんもあなたに期待しているわ』

『はい。お母様』

母は師のような存在であり、自分に期待してくれている。

『すごいお姉ちゃん!』

『こんなの大した事ない。みほにもいずれでできるようになるよ』

みほは同じ戦車道を履修する者として模範になるべき存在。そして大切な妹だ。

『また泣きそうになってたな!』

『うるさいバカまお!!』

兄であるまおは……いらぬ存在。自分が当主にでもなつたら絶対に西住の家から追い出してやろうと思っていた。いつも自分のペースを乱す。それがこの愚兄まおなのだろう。常夫もまおに戦車の整備を教えているらしいが、たとえば父や母の頼みでもまおだ

けには自分の戦車の整備なんかさせたくなかった。不安要素の塊でしかないまおにさせたら何が起ころかわからなかったからだ。

自分は西住流の後継者……だから……

『やはり此度の長女、まほお嬢様は素晴らしい才能をお持ちのようだ』

『ああ、これで西住流はまだまだ安泰だ』

『いずれ黒森峰にも入学し、歴代最強の名を冠するかもしれんな』

自分の置かれた立場がどれだけ重要なのかは幼いまほでも理解している。西住流は古来より続く由緒正しき流派。その直系に生まれ、更にはその長女として生まれたのだ。自分は周りから多大な期待を寄せられ、母であるしほもみほよりもまほの方に力を注いでいる。その重荷がすでに10にも満たないまほに少なからず押し掛り始めていた。

「うう……」

だが、まほにはその多大な期待に応えられる心メンタルを持ち合わせていなかった。表面上はクールぶっても、いつも心の奥底では精神をすり減らす日々を続けていた。まほも必死にその期待に答えようとすると、幼かったまほに急激に西住流の教えをしたがために、肝心な心がそれに追いついていけなかったのだ。そんなことを続けていけばまほはいずれ耐えきれなくなり、壊れてしまう。だがそれでもなんとか耐えきれたのは父である

常夫の存在が大きかった。

この絶妙のバランスの上で西住まほという人間は存在できていた。

『凄いじゃないかまほ。お父さんも誇らしいよ』

『お父様』

大好きな父がいてくれることがずっと続いてくれれば、まほも西住流を継ぐことができるかと願っていた。

だがその願いは決して続くことはなかった。

「お父……様？」

父、西住常夫がこの世を去った。

それは幼いまほにとつてあまりにも突然すぎることであった。母から一緒に来てと言われ、兄妹3人でどこかもわからぬ病院に連れて行かれ、案内された病室にいるのは白い布を被せられた父の横たわる姿だった。

「ああああああああん！お父さん!!」

みほが声を上げて泣いていた。母も顔に手を当てて泣いていた。いつも気丈に振る舞うあの母が。それをそしてようやくことを理解した。

父が死んだ。

父が……死んだ。

「……………うあああああ!!」

それを理解した瞬間、物言わぬ姿となった常夫に泣きながらすがりつくまほ。しかし、いつも自分を撫でてくれた大きな暖かい手は、氷のように冷たかった。

(なんで、なんで……………お父様あ……………)

歯車を失った機械は、二度と動くことはない。換えは決してきかない。そんな部品がまほの中から突如として無くなってしまったのだ。

ようやく10歳に差し掛かったまほにはあまりに辛すぎることに。

「お父様……………うつ……………うつ……………」

常夫が死んで以来、まほは時々ガレージに来ては常夫が整備してくれていたII号戦車の中で未だに受けいられない現実を拒んでいた。きつとここにいればひよっこり来てくれるんじゃないかと思っていたからだ。そんなことありえるはずもないのに、まほはそこまで追い詰められていた。葬儀から数日後、しほから戦車道の練習を伝えられるが、そんな状態ではなかった。

いつも自分の戦車を整備してくれるあの優しい父がない。

いつも自分の見てくれていたあの暖かい父がない。

誰が自分を見てくれる？

誰が自分を理解してくれる？

母が？いや、母は違う。あの人は、西住流そのもの。父を、最愛の夫を亡くしたのに、葬儀の次の日からは何も変わらず戦車道を指導している。慰めの言葉なんてなかった。期待されても、こつちからは期待なんてできないだろう。

じゃあ、誰が？誰が？誰が自分を見てくれる？誰が、誰が自分を。

「誰か……………」

自分を。

「泣いてたのか？まほ」

「っ…………まお」

キューボラのハッチが開かれ、見下ろすように見ていたのはまおだった。それを見たまほは唇を噛み締めてまおを睨み付ける。最も会いたくもない奴に会ったからだろう。

「よう」

そんなお構い無しと、づけづけと戦車に乗り込んでいくまお。戦車の整備でもする予定だったのか子供用の繋ぎ服を着ている。持ってきた工具箱から整備の本を取り出して、読みながら整備を始める。

(なんで、コイツは)

まほはますますまおのことが嫌いになっていった。父が死んだのに、相も変わらず騒ぎ

を起こしてばかりだったのだ。人の気持ちを理解してくれないほど、愚かなのだとまほはそう思っていた。

「いつまでここにいても、お父さんは帰ってこない」

「っ!!」

言われたくないことを、一番言われたくない人間に言われ、顔をしかめるまほ。振り返りまほのほうに顔を向けるまお。いつものほほんとした顔つきじゃない。真剣そのもの。

「お父さんは……もういないんだ。まほがここでジツとしてるなんて、きつと望んでないよ」

「……さい」

「だから、まほも」

「うるさい……うるさいうるさい!」

突如激昂したまほは、まおを押し倒して胸ぐらを掴む。狭い戦車の中だ。上手く体勢をとれなかったまおはまほに抑えこまれる。

「うっ」

「人の気持ちなんかわからないくせに、偉そうに言うな! 言うな言うな!! 言うなあああああ!!」

たった二人だけの空間となったII号戦車の中に、まほの声が木霊する。

「まほの、気持ちはず、わかる！」

「うるさい！」

口を無理やり閉じさせようと、まおの口を手で塞ごうとするもまおが抵抗する。昔は拮抗していた力も身体が大きくなるにつれ、まおの方が次第に強くなっている。両腕を掴まれ、まおに手が出せなくなる。

「お父様が死んだなんて、うう、うっ……じゃあ誰が私を、私を見て……ううう……!!」

「僕が見てる」

「え……」

「僕がまほを見てる」

「っ!!」

まおの言葉にカツとなり、まおの顔面に頭突きをする。もろに鼻にくらい、鼻血が垂れるように流れる。まほがむくりと頭を上げると、まおの鼻血がおでこから垂れてきている。

「何がわかるんだ。お前なんか……」

まおなんかに見られて、何が安心できるものか。いつも人をおちよくってばかりで、迷惑をかけるくせに。

「まほの気持ちはわかる。わかるんだ。僕だって、お父さんがいなくなつて悲しいよ。でも、いつまでも悲しんでても、お父さん喜ぶはずない。だから、その…あの、ともかく、まほは悲しんでちやいけない！」

上手く表現できないのか、口籠りながら、まほには悲しんで欲しくないという気持ちを伝えるまお。しかし、興奮状態のまほには全ての言葉が自分を苛立たせるものでしかなかった。

「お前なんかには、お前なんかには何がわかるんだ！何が!!お前みたいなバカに、私の気持ちなんてわかつて欲しくもない！お父様じゃなくて、まおが死ねばよかったんだ!!」

それほどまほは心が追い詰められているのか。涙を流して、はつきりと死ねと言つてしまうまほ。だが、それに激怒するわけでもなく、悲しい表情でまほに優しく訴えかける。

「死ねなんて。まほが言つちやだめだよ。お父さんが死んだのを悲しんでるまほが絶対言つちやだめだ」

「うう……だつて……だつてえ……」

まおの言葉を聞いて、次第に冷静になつていく。まおから少し離れ、顔に手を当ててすすり泣きだすまほ。色んな感情がまほの頭の中を巡つていく。もう何がどうなつていいのかわからなかった。

「僕はまほを見てるよ。約束する。まほが辛い時や悲しい時も、そばにいるよ。勿論、楽しい時も」

「まお……なんで」

「なんでって……決まってるだろ。僕は兄ちゃんなんだ。妹を見守るのは当然だし、それ以外に理由は、まあ思いつかないけどな。あははは。ああ、勿論みほもだよ。みほもほつとくとすぐに泣きだすからな」

鼻血を流しながら、心配ないと笑みを浮かべるまお。いつもと変わらない笑みだ。こつちが邪険に扱っても、まおはいつも笑っていた。どんな時もまおは自分のすぐ近くで見っていた。

「……まお」

父とは違う、言葉に言い表せないもの。この気持が何なのか今のまほにはわからな。これまで目の前にいるまおが嫌いなはずだったのに、今はそんな気持が一つもなかった。自然と心の奥底から安心感が芽生えていた。

「まお。ごめん……」

「鼻血？いいよ。すぐに止まるし、うっ」

鼻に手を当てて、ズズと鼻血をすするまお。だが、クラッと来たのか一瞬表情をかめるも、すぐに大丈夫とアピールする。

「まおは私を…見てくれるの？」

「約束約束。まほのことは僕が絶対見てる」

そう言って、小指を出すまお。それを見たまほは、ゆつくりと小指を出して指切りげんまんをする。

「二人だけの秘密の約束だからな」

「うん。ありがとう…まお」

それが幼い二人だけの大切な約束。

それはずっと、断ち切れないものだと思っていた。

だが……

「ふざけるなあっ!!」

バツとまおの胸ぐらを掴み、壁まで押し付けるまほ。衝撃で壁に貼り付けている写真が数枚床に落ちてゆく。

「お前はあの時約束した!!絶対そばにいるって、私を…私を見てるって!!それを破るのか!!まお!!」

「……」

激昂するまほの問いかけに沈黙を保つまお。何も語らないまおに苛立ちを募らせ、涙目になりながら吐き出すように問いかける。

「あの時の約束を、お前は…お前は!!」

「何をしているのまほ!!」

しほが焦るようにまおの部屋に再度やってくるなり、まほを引き剥がそうとする。「放してください!私はまおに!!まおに!!」

しかし、まほはしほの制止も振り払い、まおから離れようとはしなかった。菊代も入るも、見たことのない感情的になったまほの姿に狼狽えたいた。

「……あっ!?!」

「ま、まお!」

突然まほが動きを止めて、大人しくなる。何が起こったのかまほは理解できなかった。

「ま……お……」

身体から力が抜けまおの方へと倒れ込んでいく。それを見ていたしほは驚きを隠せなかった。まほを大人しくさせるために、腹部にまおが衝撃を与えたのだ。気絶したまほをベツトに寝かせる。

「まお……」

「家族に手を出すなんて、最低なことだ。でも、今のまほはこうでもしないと止まらない」

拳を握りしめ、まほを気絶させたことを最低だと言い切るまお。まほの表情を見て、どこかしら思うのか、目を伏せるもすぐに立ち上がり、しほの方へと歩いていく。

「行こう母さん。会合の時間迫ってるんだろ？」

「え、ええ。でもなぜまほが」

「……………さあ」

しほの質問に対し、どこかしら曇ったような返事をしたまお。恐らくまおは知っているのだろう。まほがなぜここにいるのか。なぜここまで感情的に自分を責め立てるのかを。

(まほ。俺は約束は破らない……)

その気持は一切変わっていないと。

たとえば、この家を出ることになろうとも……

「う……」

薄っすらと目を開くまほ。部屋を出ていこうとするまおを呼ぼうとするも。上手く声が出ない。意識が再度遠のく。

行ってしまう。まおが……

『まお……まお……置いていかないで……』

その思いだけが、まほの心の中での永遠と響いていた。

Re i s e—10 『すれちがい』

西住流一門が集まる会合。あらゆる重鎮が一同に集まるこの会合は、西住流の今後の動向、今現在の門下生の指導方針、そして西住流のお膝元である黒森峰女学園の方針まで話し合われる。と行っても、西住流を全て決めるのは地位の高い長老衆たちの決断で全てが決まる。ここに集まるのも、自分たちの地位の確立を保証するための場でもある。

尤も、今現在はそんな話題で集まった訳ではない。

本日の議題は他でもない『西住まおの処遇』について開かれていた。

まるでその様子は、罪人を裁く、大法廷のように。

「き、貴様……それが西住に生まれた者の言う言葉か!!!!」

怒号が大広間一杯に響き渡る。すでのこの大広間は怒りという感情で満ち溢れていた。

「何度でも言っただけほしいなら言います。今のままだと。西住流はあと2、3年で島田流に抜かれます。あつけないくらいに」

睨まれても、尚も話しを切ろうとはしない。ただ一人、大勢の上役たちに取り囲まれ

るように、正座で座らせられていたまお。一緒に呼ばれていたはずのしほの姿はどこに
なかった。まおだけがこの会合に出席することだけを許された。

「自分が見てきた限り、西住流は時代に取り残されている感が大きくあります。理由は
簡単です。あなた方のように、古臭い考えを未だに残し、時代にそぐわない考えを押し
付けようとしているからだ。そんな状態だと、『日本戦車道ここにあり』とキャッチフ
レーズを先取りされた島田流に立場をひっくり返されるのは時間の問題です。西住流
はもう少し視野を広げて見たほうがいいでしょう。島田流の方が、まだ革新的で時代に
見合った流派だと思いますが」

「それが西住の家に生まれた者の言う言葉か!!」

一人の上役がつばでも吐き出すかの如く怒鳴り散らす。怯むこと無くまおはその上
役に顔を向けて述べる。

「あなた方は西住流をどう思うかと聞かれたので、正直に答えています。話を続けますが、
西住流の真髄とは力押しだけじゃないというのをあなたの方が深く理解しているは
ずです」

たかが15歳の少年のために、会合が行われるなどない話。だが、まおは普通の少年
ではない。西住流の直系に生まれた者。後継者に指名されることはないが、直系とい
う名の言葉は西住の一族には大きい存在となっている。だからこそ、まおを早々に西住か

ら排斥しようとしたことを起こしていた。生まれたてのまおを養子にだし、西住とは一切関係のない人間にしようとした。だが、その行動はしほによって起こることはなかった。

かつてしほが約束した『西住まおを必ず西住流に栄光をもたらし存在にする』という内容は、概ね上手く運んでいた。戦車道にとつて何より必須である、戦車の整備技術は他の整備士と比べ抜きん出ていると言つていいほどの技術を有し、黒森峰女学園に主である女子生徒を抜き開校以来トップの成績で入学している。多少人物評価には問題があつたが、それを抜いてもまおは黒森峰戦車道整備長を努め、成績優秀な生徒であるのは事実であつた。このまま高等部まで行き、まほと共に戦車道隊長、整備長と並び、栄光ある存在へとなる……はずだつた。

「この小僧を即刻西住の家から追い出すべきだ！西住流を批判するものなど置いてはおけぬ!!」

「それを剩え、島田を擁護する意見を出すとは!!」

既に事態はまおの西住家からの排斥にまで進んでいた。尤も、それを行うためにこの会合を開いたのだが、まおが火に油を注ぐ発言を次々に繰り返して、上役たちを焚き付けていつているのだ。

「もつと他からの意見を取り入れなければ、いずれ大きな失敗に行きます。西住流は勝利という言葉に拘りすぎてる」

「西住流は伝統的な流派！常に勝ち進み、他者を圧倒する！年端も行かぬ若造が何をわかつたようなことを！」

「その年端も行かない若造にこんな大勢で罵声を言うのが西住流っていう流派ですか。そんな考えが通じるのは十年も昔です。他の流派も少なからずその考えを変えて変革しています。お分かりですか。西住流が廃れていくのは時間の問題だと」

「貴様っ!!」

「もうよか」

まおの言葉に痺れを切らした上役の一人が立ち上がった瞬間、最前面に座っている西住流の長老衆が言葉を発する。僅かな言葉だが、呆れ怒りの感情がヒシヒシと伝わってくる。立ち上がった上役もその迫力に押され、すぐさま床に座る。

「西住まお。お主は母である西住しほから、西住流にとつて栄光ある存在とする言葉ば授かつとる。だが、黒森峰ん進学も断るんな母からん期待ば裏切ることになるんやなかんか？」

長老衆の一人がまおに対し、かつてしほが言ったことを告げる。それを聞いたまおは、特に驚くことなく即答する。

「母のその言葉は間違っています。自分は西住流・・・に栄光なんて齎しません。現に自分は西住流に入門した記憶も、教えを請いたことは一度もありません。西住流に入門し

ているのは妹のまほとみほです。それに本人の知らないところでされた約束も何の関係もありません。俺はここにいる皆さんが知つての通り、海上自衛隊：海の間人になります。もし俺が西住流の人間と仰るなら、陸にいるこんな鈍亀流派とは袂を分かつつもりです。色んなことを考えるなら、海から視野を広げて見たほうが遥かにマシでしょう」

「な!!」

「なんとという暴言を……」

その言葉を聞き、驚愕の声を上げる上役たち。鈍亀流派。まおはそのような言葉で西住流を表現してきたのだ。仮にも西住の家に生まれた人間が言う言葉ではなかった。ましてや母が自分を守るためにした約束も関係ものと切り捨てた。上役たちの熱気が再び高まりだした時。

「やはり西住流に男子が生まれたんな禁忌やったか。あん時にでん出しとくべきやったんやろう。……西住まお。そぎゃん浅はかな考えば持つならば今すぐ西住から出て行くがよか。そして二度と西住家敷居ば跨ぐことば許しやん。黒森峰女学園からも退学させる」

「そんなことを決める権利があなた達にあるんですか？俺を出て行かせたの無いなら、母を通して言ってください。今まで接してきたことのないあなた方の指示に従う気は

ありません」

自分の動向を決めるのは母にあると言うまお。正直ここにいる人達と会うのは初めてであるため、聞く気も更々ないのだろう。あくまでも強気な姿勢を崩さないまお。

「西住しほばこけ連れてくるばい。西住まお、話はまた追うて伝ゆる」

それだけ言うと、すぐにまおに退室するように言われる。ゆつくりと立ち上がり、背を向けて出入口まで向かっていく。退室する際にまおが吐き捨てるように大広間にいる人間に発する。

「それから、そんな下らない理由で個人を否定する連中は、いずれ社会の喰いものにされますよ」

帰ってきたのは罵声の嵐だった。

◆ 「まお……」

不安で胸が落ち着かないしほ。彼女が案内されたのは会合場所の大広間ではなく、待合室だった。まおただ一人だけが、上役に連れて行かれ大広間へと向かっていったのだ。全ては自分が上手く事態を鎮めるつもりのはずが、完全に後手に回ってしまった。

（お願いまお。お願いだから…）

まおが自分の言いつけを守ってくれてことを祈るしかない。

(常夫さん。あなたは私に言ったはずよね。お義父様海江田四郎と同じ道には絶対にいかないよ。なら、まおはなぜあなたの夢を追うとしている？それを私達家族には知られないように)

今朝の話し合いでまおから言われてずっと考えていた。常夫が海上自衛官に憧れを抱き、その夢をまおに託したという話は、未だに信じられなかった。自分と交際していたときに常夫の父である海江田四郎は不慮の事故で帰らぬ人となった。そのことが重なり、常夫は父と同じ道に行くのはありえないと話していた。どんな理由であれ、家族とは離れ離れになり、いきなり家族から去っていったのを。遺体さえ残らず。

だが、結界的に常夫はまおに海江田四郎と同じ海上自衛隊への入隊の夢を持っていることを話し、その道を息子のまおに託した。

「母さん」

「まおー！」

待合室の戸がスツと開く。現れたのは他でもない、まおだ。

「上役の人たちが母さんに来るように言ってるよ」

「あなた、何も言ったりはしてないでしょうね。進路の話は私と話すよ」

「母さん。西住流はいい流派だよ」

「……何を言ってるの？」

話の途中で、口出しをするまお。その表情はどこか清々しくも見える。話が見えないしほは、眉を擡めてまおを見つめる。今聞きたいのはまおが余計なことを話していないかということだ。

「こんな中坊の意見にも、上役たちは真剣に反論してくれる。あの中はまさに熱気の嵐だ。冷ますのは不可能なくらいに」

「まお。あなた、一体何を言ったの!!」

嫌な予感が頭をよぎり、まおの肩を掴むしほ。考えたくもない。自分が何とかする。

(まお・何で、私の言うことを……!!!)

これ以上ことを大きくくしないほしい。折角今まで常夫を失つても、なんとか一人でやってきたのを、ここに来てまおが全てを台無しにしようとしている。もうすぐ、自分は西住流の家元になる予定だ。そうなれば、好き勝手言っている上役たちも黙らせるところまで来たのだ。それをまおは。

「俺の道はもう決まつてる。あとはそれに突き進むだけなんだ。西住流は常に前に進む流派なんだろう?」

ここで西住流を出してくるまおに、苦虫を噛み潰した表情になるしほ。こういう意地悪な回答をするのはまおの悪いところでもあった。

「まお。私の意思も変わらないわ。この話は会合が終わったあとにつけるから、ここで

待つてなさい」

まおの言う通りだとして、それを自分が阻止しなければならぬ。これ以上家族を離散させる訳にはいかなかった。そう言つて、まおに背を向けるように部屋から出ようとする。

「母さん」

「話なら後で」

「あとでも言うけど、俺の”頼み”を聞いて欲しいんだ」



「……………」

薄つすらと瞳を開け、目を覚ましたまほ。外は既に暗くなり始めており、真つ赤になつた夕日が窓から差し込んでいる。

「……は、私の部屋か……」

見覚えのある部屋にまほの意識が次第に覚醒していく。普段からの疲れがきてしまったのか、まおに気絶させられ、そのまま続くように眠つていたようだ。

「まお……………」

それを思い出すなり、ベットから飛び上がり部屋を出るまほ。すぐにまおの部屋へと

向かおうとすると、廊下にはまるで自分を待っているかのようにある人物が立っていた。

「お、お母様」

「まほ。今日あなたがここに来たことは特に咎めるつもりはないわ。でも、明日はちゃんと学校に登校するのよ」

学校を無断欠席したことを特に咎めることはしないといったしほに、少しばかり安心感を抱くまほ。しかし、それは全てはまおと話をしたいといった思いがあつたからだ。そう、今はまおの行方を聞かなければいけない。

「わ、わかりました。お母様まおは……」

「ああ、あの子は……西住の家から勘当したわ」

「え……」

無表情でそう言い切つたしほの言葉に、頭の中が真っ白になるまほ。

「今なんと言つた？」

「まおを勘当した？」

「自分の息子を？血の繋がりを持つ子供を？」

「それは……」

そう告げたしほは、まほに背を向けて話を続ける。

「今まで見過ごしてたけれど、あれほど西住家に恥を齎すとは思わなかったわ。剩え上役たちに喧嘩を吹っかけるとは」

「!!」

上役という言葉聞き反応するまほ。上役たちということは西住流の会合に出席したのだと、理解する。前に自分も出席したことがあるからわかってしまったのだろう。あの場で下手のことを述べてしまえば即刻西住から葬られると。

「これ以上、西住家として生き恥を晒し続けるまおを許すわけにはいかない。だから勘当したのよ。わかったのなら、まほは部屋に戻ってなさい」

どこかしら震えているようにも聞こえる口調だが、放心状態のまほは気づくことはなかった。伝えることだけ伝えたいほはそのままこの場を去ってしまう。

(まおが……出て行く?ここから?私から?)

次第に不安が頭の中を駆け巡っていく。

(嘘だ……嘘だ嘘だ!!)

ぐちゃぐちゃになりかけた邪念を振り払い、まおの部屋へと向かう。いつも通りノックもせずに扉を勢い良く開ける。そこに広がっているのは、いつもの光景だった。ただ1つ、机の上に置き手紙と、まおがいつも使っていた携帯電話が置かれていた。

「まお……」

すぐに机までいき、置き手紙を手取る。

『自分の夢に進む』

手紙はたった一行だけしか書かれていなかった。謝罪の言葉もない。ただ、それだけしか書かれていなかった。

(なんで……どうして……)

『約束約束。まほのことは僕が絶対見てる』

かつて約束した言葉がまほの頭に蘇る。いつまでも一緒にいると約束してくれたあの日のことを。それがまほを救ってくれた言葉だったのに。

「まお……どうして!!」

歯を噛み締め、瞳からは涙が溢れそうになる。頭の中がぐちゃぐちゃにかき乱されていく感情が沸き起こる。

「っ!!」

手に持つまおの手紙を握りしめて、投げ出すように壁に投げつける。

(まお……許さない。許さない絶対に……私の信賴を裏切ったお前を……絶対に!!!)

そばにいてくれる。それをまおは破った。自分を見てくれると約束したのをまおは破った。一番信賴していたはずのまおが、自分を。怒りに任せて、壁に貼っている写真を乱暴に扱い、空中にばら撒かれる。パタパタと、足元に落ちていき、散らばった写真

を睨みつけ、憎悪の感情が湧き上がってくる。

「ああああああああああああああ!!」

それは、まおが自分にとって兄妹以上の感情を持っている現れでもあった。



西住まほにとって、兄である西住まおは最大の理解者だと思っていた。

『お前、クラスで友達出来たのか？ずっと俺と食ったりしてるけど』

『皆、西住流の後継者である私が怖いのだろう。別に困ったことではない。お前がいるから…』

表情に乏しいのはまほ自身理解している。そのせいで、交友関係が上手く築くことができなかつたのも。だが、まほは別段その程度のことはどうでも良かった。交友関係など築かなくても、自分のすぐそばにはみほが、そしてまおがいてくれる。それだけで充分だった。

だからこそ、まほは同級生で交友関係を築くことも、戦車道を履修している生徒たちとも深い関係を築こうとはしなかつた。

なぜなら、まほにはすでにそう言った関係がいたのだから。

「まお…」

「戦車の整備だろ？わかつてる」

多く語る必要はない。

「まお……」

「まほの考えでいけるさ。絶対に」

まおはまほの考えを即座に理解する。これは常夫では出来なかったことだ。

「まお……」

「俺はまほを信じてる。だって俺の妹なんだから」

それはもう、かつて好きだった常夫を遥かに越えるほどの思いを抱いている。

『みほと……まおがいてくれれば、私はそれだけでいい。他は何も……いらぬ』

『そっか……』

まほにとって、まおは最大の理解者だ。

『でも、もうあの二人に俺は必要ないからだ。逆に俺がいるとまほは……』

だからこそ、まおは。

『ダメになつてしまう……』

まほから離れるべきだと思つた。

まほが自立できなくなるのを、阻みたくなかつた。

遠くない未来、まほはきつと彼氏でも見つけて、子供も出来て、この家を継ぐことになる。

友達だつて一杯作るべきだ。特に”孤独”を嫌うまほには。

それにみほも、普段はオドオドしているが芯は強い。もつと自身をつければきつとい交友関係は広がるはずだ。

だからこそ、まおは『見守る』ことにした。そばにいらなくても。そう無理やり結論づけた。

これ以上してしまえば、自分もまほとみほに対して甘くなつていつてしまい、二人の将来を傷つけてしまう。この”西住”に必要なのは自分ではなく、まほとみほなのだから。

『私は…絶対反対だから!!』

『バカな選択はせずに、まほと共に高等部へと進み、西住家の長男としての役目を果たしなさい』

『私は絶対に認めない!』

だが、結局…まおの夢を理解してくれる者は誰もいなかった……

母も、まほも、みほも…まおのことを真に理解してくれるものは……

いたとすればそれは、父である常夫だけだったのかもしれない。

それでも、まおは突き進む。

『お父さんの夢は僕がなつてみせる!』

かつて幼い日に父と約束した。

父が通ろうとした道筋を進み。海江田巖曾祖父と海江田四郎祖父が歩んでいた場所へと。

それが『自分の信じた道』なのだから。

例えそれが――

――大いなる悲劇の始まりだとしても――

承く第62回戦車道全国高校生大会編く

VOYAGE—1 《あれから…》

『ごめんなみほ。西住を出ることになった。まほをよろしく頼む』

これだけのメールを送って、兄は家を出て行った。たった、これだけのメールを残して。

(どうして?なんで……お兄ちゃん……)

意味がわからなかった。

なぜ兄が西住の家出ていかなければならないのか。たった一日実家に戻っただけで、そんなことになってしまったのか。あの日のみほはそれを理解するだけの、冷静な状況を保つことができなかった。

みほは信じられなかった。まおが自分たちを置いていくなんてことが。家でも学校でも、いつも近くにいてくれたまお。嘘だと思いたかった。すぐさまおの携帯に電話なりメールするも、返事どころか応答すら得られなかった。いてもたってもいられず実家に電話した。応対してくれた女中である菊代からはメールと同じような結果しか得られず、直接実家に帰ろうとした時、まほが帰ってきた。話を聞こうとするも、今まで

見てきたことのないような形相でみほを睨みつけ。

「あいつは西住流に泥を塗り、私たちを裏切った。これから二度とあいつの話をするな。わかつたな」

「は、はい……」

完全に威圧され、みほはそれだけしか言うことができなかつた。姉のあんな表情は今まで見たことがなかつた。何があつたかわからない。だが、きつと何がかあつたはず。

「まおはもうこの家の子供ではないわ。今は悲しいかもしれないけど、それらを忘れて、これをバネに一層強くなりなさい」

嘘ではなかつた。母であるしほから直接話を聞き、全てが事実だとわかつた。それどころか、兄がいなくなつた悲しみを糧に強くなれとまで言つてきたのだ。なぜ母は悲しくないのか、どんなことをしてしまつたのか分りかねるが、きつとまおが言つた将来の夢が関係しているはず。常夫の件を考えれば、しほこそがまおを食い止めるべき存在のはず。まおから聞いた、曾祖父や祖父も海で亡くなつている話もきつと母も知つてははずだ。そんなことが立て続けに起きているのに、結果的にしほはまおを見捨てたと、みほにはそう見えてしまつた。なんとかまおに西住の家に戻すことはできないか考えた。

「お兄ちゃん……」

だが、みほには何もできなかつた。いつも、兄を呼ぶばかりが続いていた。自分はそんなに積極的に動けるような性格ではなかつたし、ましてやしほやまほに逆らうことなく、勇気がでなかつた。以前にも増して、しほは厳しくなり、まほに至っては別人と考えるぐらいに冷たくなつてしまつた。あの日からまほの笑顔など見たことがない。いつも三人で下らない話をしては笑つていたのに。

(こんなの……もう……)

みほには耐えられなかつた。実家に帰つても、話すことは戦車道や西住流の内容ばかり。家族らしい話なんてしたことがない。まおがいた頃とは180度変わつてしまつた家庭環境。いつも家族の中心にいたのはまおだつた。たつた一人の家族がいなくなつただけで、ここまで変わつてしまう。それだけまおという存在がみほ達には大きかつたのだ。月日が経ち、心にぼつかりと穴が開いたまま、みほは中学校生活が終つてしまつた。

「……お……まお!!」
「……ああ、航平か」

隊舎外に設置されているベンチにて、黒を基調とした制服に身を包んだ人物に声をかけていた《小暮航平》。どこかたそがれたようにしていたのか、声を掛けられていることに少しばかり遅れて反応して顔を上げる。潮風がボウつとしていた頭を再覚醒させる。

「熊本の海とは大分違うのか？ 休み時間になったらお前ずつとここにいるだろ」

「どこから見ても海は同じだ」

「全く。唯でさえお前学校内で教官たちから噂の的になつてるのに、そんなんでいいのか？」

入試枠僅か8名という狭き門である特進科へと入学したまお。最も若く、リスク（退校処分した際には中卒扱いのため）の高い15歳で願書を提出した時から、海自内では噂が立っていた。徹底的に経歴を調べあげられたまおの家族構成があまりに異質だったからだ。海自では知らぬ者はいないと言われる海上自衛隊の立役者『海江田巖』と海上自衛隊始まって以来の英才『海江田四郎』の子孫であるだけでも驚きだが、もう片方の血筋が日本戦車道のトップに立つ流派《西住流》の直系ということも把握されている。そんな“スーパーサラブレッド”が入ってくる。その事実が海自内ではかなりの衝撃だったからだ。万年人員不足であり、他の防衛学校に比べ不人気さを挽回するためにプロパガンダに利用される云々が度々出てきていたが、年に似合わぬ態度やリスキーな発言が目立つ等から若干扱い難い人物評価になりつつあるのがここ最近顕著になってい

た。要は何を考えているのかわからない烙印を押されているのだ。

「まあ自分でも変人って思ってるからいいんじゃないのか。それに、別に海を眺めるのはいいだろ。好きなんだから」

「てつきり、故郷に残した妹たちのことでも考えて黄昏れてるのかと思ったんだけどな」
妹たちというのは、まおの妹であるまほとみほのことだ。大まかな事情を知っているだけに少しばかり複雑だとは理解している航平。

「考えなくても夢に出てくるよ。いつも泣いてるけどな」

「罪悪感があるなら、連絡すればいいだろうに。尤も、名字まで変えてまでここに来るとは思わなかったけどな」

「当たり前だ。それが俺の決めた道なんだからな」

そう立ち上がり、ベンチに置いていた錨を配した制帽を被るまお。

「今の俺は《海江田 まお》だ」

故郷である熊本から遠く離れ、《西住まお》は、名字を改め《海江田まお》として、神奈川県は横須賀市にある海上防衛学校にて、日々道を歩んでいた。

VOYAGE—2 《祖父・海江田四郎》

戦車道の全国大会が間近に迫り、母港である熊本に帰港することが多くなつた黒森峰の学園艦。西住流本家が存在する熊本にて大会前の追い込み訓練を行うためにだ。

今年は何人未到の10連覇を制するために、これまで以上に生徒たちは期待により、躍起になる履修生が大多数だった。だが、副隊長に任命されたみほだけはあまり皆の気持ちに同調できないでいた。

『西住まほの妹だから、副隊長に任命された』

『普段はトロいくせに、戦車に乗つてるときだけ粋がつてる』

副隊長に任命されてからというものの他の履修生たちからは“予想通り”の反応をされた。

そんなこと言われなくたってみほ自身が一番わかっている。自分は人の上に立つほどの器は持ち合わせていない。戦車で指示をだしているのだって、みほが持ち合わせているパンツァーハイみたいなものであり、その時だけは自分を忘れてやることができる。それは古くから戦車に精通しているからそうなっているのかはわからない。本当は副隊長なんて役職には付きたくはない。

『みほ。明日からはお前が副隊長だ』
姉まほがやれと言われれば、やるしかない。

『西住流名家の子として、模範となるよう期待しています』
母しほから期待していると言われたら、答えるしかない。

だつて自分は西住流に生まれたのだから、戦車道に生きるのが運命。

だが、昔に比べて戦車道に対し抵抗感が溜まっていくのを感じていたみほ。ただだ
だ、勝利のみ追求した西住流戦車道。それを至上とする黒森峰女学園戦車道。

西住流の戦車道が本当に自分に合っているのか？

そんな疑問に対し、答えてくれる人物はいない。たまに帰省して家に帰っても、みほ
は何もする気も起きないでいた。

「お兄ちゃん……」

だが最近になり、みほは衝動的にまおの部屋に訪れることが多くなった。冷たく閉ざ
された扉を開き、まおが出ていって以来何一つ変わっていない部屋に。

「……」

まおがいつも使つてる椅子に座り、机の引き出しや本棚を物色し始めるみほ。家を出
ていったまおを最初は悲しみ怒りの感情を抱いたが、なぜまおが自分たちを置いていつ
てまで自分の夢を叶えようとしたのか気になった。よくよく考えれば自分はまおが

語っていた祖父たちのことを何も知らない。少しでもまおを理解したかったみほはこういった行動をとるようになったのだ。すぐそばにいる姉まほではなく兄まおを求めようように。

「この写真……観艦式？」

適当にとつた本をパラパラ捲っていた時に、挟まっていたのか何枚かの写真が落ちてきた。その中の一枚には、父である常夫と小さいまおが二人で映っている写真があった。すぐ後ろには『144』と大きくマーキングされた護衛艦をバックにして撮影しているようだ。裏には『観艦式での写真』とマジックで書かれている。いつの間にこんな写真を撮っていたのかと不思議に思うみほ。そしてもう一枚の写真を見たとき、みほは感慨深く見つめた。

「海江田……四郎。この人が私の……おじいちゃん」

海上自衛隊の制服を着用し、凛とした表情で映っている人物にみほの目はいつていた。先程の写真と同じように、裏には『海江田四郎』と書かれている。この人こそが、まおが言っていた海江田四郎であり、自分たちの祖父にあたる人物だった。



二年生へと進級した海上防衛学生は、海上自衛隊の要である護衛艦での航海演習が始まる。それぞれの学生たちは、各学科に適した艦へと分担され、海上での授業を受ける

ことになる。ただし、特進科の学生のみは練習艦を選択でき、分隊長（航海長、船務長など）補佐として航海演習に望む。幹部候補生でもあるため、全てが他の学生と異なっている。それは無論、特進科に所属する海江田まおもだ。

「返事が来ない？潜水隊群司令部からか？」

「ああ。乗艦願はずでに受理されて、返事が来てもいい頃なんだがな。教官に聞いても、通達なしの一点張りだ」

横須賀基地にある学生食堂で昼食を摂っていたまお。隣の席には幼馴染の航平、そしてクラスメイトである普通科の生徒たち数名が共にしていた。話題は来週から始まる航海演習の内容で盛り上がっていた。すでに他の学生たちは配属先の練習艦が決まり、特進科の学生もまお以外は決まっている。

「でも海江田。お前が希望した練習潜水艦のたつなみは、一度乗ったら全員学校を辞めていくって言われてる艦だぞ。艦長で教官でもある深町二佐があまりに厳しすぎるとか」

一人の学生がまおに話しかける。特進科と普通科は基本的に上下関係が存在しており、例えば年下であっても、上官と同じような扱いを受けることがある。将来的に階級は常に特進科が先を行くからであり、そうした関係を若い内から培っていく必要があるからだ。だが、そうしたのを別段気に留めていないまおは、普通科の学生たちと関係なく

対応している。本来なら食堂も特進科用のがあるのに、わざわざ皆が集まるここで摂るほど。

「性格は豪胆で豪快。本当なら群司令になれるほどの力量なのに、粗暴な言動などから、未だに二佐に収まって、部下が逆に出世し、更に教官になつても、未だに候補生を無事に卒業させてないからそのせいでも未だに出世してないとか」

「最悪だな。練習艦に回つたのも、扱い難いからじゃないのか？」

「かもな」

知つてる限りの深町二佐の情報を言うクラスメイトたち。学生たちの間ではあまり深町二佐の印象は良くなく、これまでたつなみに乗艦することが決まつた学生たちは皆が時代が違いすぎる深町二佐についていくことが出来ず、防衛学校を次々に辞めていつている。その評価のせいもあり、出世が遅れに遅れてしまつている状態。恐らく退官まで一生そのままだろうと言われている始末であり、学生たちもできることならたつなみに配属は嫌だと願つているのも少なくなく、上層部もそれを考慮してか《たつなみ》には基本的に若い衆が集まる防衛学校の学生は選ばれないようにしている。

「深町二佐は、環^リ太平洋^ム洋合同演習^{パッ}の演習で空母カール・ビンソンを5回も沈めた成果を残してる。それを達成できたのも、今も昔も深町二佐を除けば海江田海将補だけだ。人物酷評するなら、それ以上の成果を出してからでいいだろ。それだけ優秀な人物の下に付

けるだけでもありがたいだろうに」

「それはまあ……」

まおに反論され、思わず口籠るクラスメイトたち。プライドの高い学生が在籍する特進科で一番親しみやすいまおではあるが、こうした時は自分たちより更に上をいつている人物の風格になるときがある。特に目元がかなり鋭くなるらしい。その表情を見て航平は心の中でぼやく。

（流石に親子つてところか。いや妹のほうか？）

まおの母親である西住しほの目元とよく似ているからだろう。前までは優男だったが、防衛学校に入ってから表情も徐々に凛々しく変わってきている。本人は意識しているかわからないが。

『続いてのニュースです。まもなく開催される第62回戦車道全国高校生大会。優勝候補とされる黒森峰女学園。今年、西住流後継者と目される西住まほさんが戦車道の隊長に就任し、王者黒森峰を率いるようであり、今年の戦車道大会は大きな盛り上がりを見せることでしょう。優勝すれば前人未踏の10連覇を達成することから、地元の有識者、戦車道連盟や学園から期待の声が掛かっています。ますます盛り上がりを見せる戦車道は、今回の大会の結果では来るプロリーグ設立に大きな成果を生み出すことになるでしょう。尚、プロリーグ実行委員会委員長には、あの西住流師範代であり次期家元の

西住しほ氏が就任するとの情報も入っており、文部科学省から直々に……」

食堂に設置されているテレビからは、来月から始まる戦車道の全国大会の内容が報道されていた。ちょうど話題を変えるいい機会だったのだろう。一人の学生が話しを戦車道に変える。

「戦車道ねえ。プロリーグ設立に躍起になっている文科省が予算むしり取ってやるみたいだけど。そんなのに金を使うくらいなら、こつち海自に回せばいいのに。砲弾やミサイルだって、練習でも撃てないのにな。女学生は撃ち放題か」

クラスメイトの一人は呆れたようにテレビの方を見てボヤク。どうやら戦車道の存在には否定的なようである。安全を確立されたスポーツ競技とされ、放たれる砲弾や戦車の装甲は日本が開発した特殊なカーボンで守られ、搭乗者は怪我を負うことするならしい。尤もそうした技術は先進国などしか利用できず、発展途上などの国は軍事利用に転化されるのを恐れ、あまり戦車道は普及していかないらしい。戦車道がマイナーと言われるのもこれが一つとされる。

「文句言っても仕方がないだろ。そもそもこつち海上自衛隊が使ってるのは高価な兵器で、使う用途が根本的に違うんだ。そんな安々と撃てるわけないだろうに」

「それに撃たないってのは日本が平和だって証明だろ？俺はそのことは誇らしいと思うけど。ただ『備品がほぼ使いまわしになっているのは嘆くな』って教官たちが言っ

たな」

「そういえば『くらま』も廃艦処分から練習艦に鞍替えしたとか言ってたな。元々は練習艦そのものを建造するのが、急遽予算不足で白紙になったとかで」

「いやそれは、数年前にゆきなみ型を3隻も作ったもんだから、過剰装備とかで騒がれたから予算を減らしたってニュースで言ってたか？」

「日本の海を守るのに、装備少ないじゃ話にならないだろ」

「いつそ作るなら原潜のほうがいいんじゃないか？潜水艦不足もあるし」

「日本が”原潜”なんか作れるわけないだろ？」

クラスメイトたちの話がどんどん盛り上がっていく。うら若き学生たちは、連日こういった話をしていいる中、まおはその話題に乗れないでいた。どちらかと言うと、テレビに映っている戦車道に関するほうに興味がいっていた。自分が西住の家から出てからというもの、かつて祖父が暮らしていた美倉島で生活しており、咎めとして戦車道や西住流関連の情報は知ろうとはしなかった。それは防衛学校に入っても同じだ。だが、今日偶然とはいえその情報を知る機会を得てしまった。

(まほ。みほ…)

テレビに映るまほの冷徹な表情を見るかぎり、自分のことを吹っ切ったのかわからない。かなり強引な別れをただけにまほ自身も自分に対する怒りは相当なものだろう。

だが、みほの表情は上辺だけは凛々しくしているが明らかに無理をしている表情をしている。

「どうしたんだ海江田？ さつきからテレビ睨んでるけど、戦車道が気になるのか？」

「あの西住姉妹のことが気になるんだろ？ あの顔は十分男を虜にする魅力があるからな」

「冗談。天地がひっくり返ってもありえないですよ」

まおを誂うように言う学生達。だが、まおは目をつむってぶつきら棒に返答するなり、食べ終えたトレーを持って立ち上がる。

「もう行くのか？」

「ああ、午後に会いたい人がいるからな」

「会いたい人？」

「さつき出た話題の人だ」



海面を裂き、穏やかだった水面に波を起こしながら黒い巨大な物体がまるで鯨のようにせり上がる。無論、その姿が鯨ではなく“潜水艦”であるというのは今の世の中誰でもわかるであろう。浦賀水道を通り、かつての母港であった海上自衛隊横須賀基地を指し、航行しているのは潜水艦隊第1練習潜水隊に所属している《やまなみ型潜水艦2

番艦『たつなみ』。と言っても、今は老朽化により、練習潜水艦として改修されたほうがまかり通っている。

「ふう……」

艦橋（セイル）ハッチが重々しく開かれると、大柄な男性がタラップを上がってくる。それに続くように、乗組員たちも艦橋に着くなり、首から下げている双眼鏡で周囲の監視を始める。

「速力12ノット。進路2—1—0。3番バース、接続用—意」

『3番バース、接続用—意』

艦橋に上がり、母港である横須賀基地に向かっている人物の名は『深町 洋』二等海佐。殉職した《海江田四郎》海将補と並び評される優秀な潜水艦乗りだ。

「久方ぶりの横須賀ですね。深町艦長」

「何年経っても変わらねえよ。海も、この港もな……」

俄然に広がる海。そして船の帰るべき場所である港を見つめる深町。

「ふっ。俺のたつなみに乗り込もうなんて物好きがいるなんてな。それもあの海江田の孫か……」

VOYAGE—3 《たつなみ艦長・深町洋》

たつなみを無事に入港させた深町は、早速目的の場所である横須賀基地第2潜水隊群司令室へと足を運んでいた。

「ご苦労さまです。深町艦長」

「別に苦労してまで来てねえよ速水。いや、速水司令殿」

つく早々にソファアールへと座り込んだ深町の態度に別段怒る様子を見せない潜水隊群司令。名を『速水健次』。階級は海将補であり、第2潜水隊群司令を務めている幹部自衛官である。そして何より、かつては海自潜水艦『たつなみ』で副長を務めていた深町の腹心の部下であった人物でもある。

「あなたに改めて言われると不思議ですよ。本当ならこの部屋も、この地位も深町艦長がいるべきだった場所でしょうに」

「こんな堅苦しい部屋に居座るなんざ俺の性分じゃねえよ。田所司令の頃からずっと蹴ってたんだからな」

「深町艦長がもう少し候補生に対する言動を改めれば、もっと上に行けたでしょうに。渡瀬だって、もうすぐあなたの階級を越しますよ」

現在は深町より先に出世を果たしてしまっても、かつての上司と部下という関係も続いているのか。こうした二人の扱いは幾分か崩した対応をしている。ちなみにたつなみの航海長を務めていた渡瀬吾郎も別の潜水艦の副長を務め、来期からは一等海佐として艦長になる話も決まっている。

「何言つてやがる。大体最近の若い連中は忍耐も根性もない奴ばかりだ。俺が若い頃と比べれ天と地ほどの差もありやがる。そんな軟弱な精神を持った奴に日本の海を守れるわけねえだろ」

若干怒り気味に文句を垂れる深町。ここ最近入隊してくる若い自衛官候補生の軟弱ぶりに呆れているようだ。

「深町艦長の言うこともわからなくはないですが、ここ数年は海上自衛官になりての間が減少傾向にあるんですよ。日本を守るにしても、まず人手を確保することが最優先でしょう。陸自なんか、戦車道の後押しで入隊希望者が続出らしいですし、海自もそうしたものを模索してららしいですし」

何かしらプロパガンダをしてでも、海自の人員を確保しようとしていることを明かすも、すぐに深町を鼻を鳴らして否定する。

「そんなもので釣るほど、”スポーツ”と”実戦”は違う。それに対する覚悟もな。俺たちは選手じゃなく軍人だ。それをここ最近の若い連中はわかつたらん」

「でも、その軟弱な若い連中の中にあなたの元に行きたいという骨のある候補生がいま
すよ」

机の上に書類を置いて、深町に見せる。最も深町自身はこの書類をすでに前から拝見
している。そこには乗艦願と記載され、海上防衛学校特進科『海江田まお』と名前が記
入されており、これまで経歴などが赤裸々に記されている。

「まさかあの海江田艦長のお孫さんが海自に入隊したと聞いたときは驚いた限りではた
よ。かなり話題になってましたからね。それが何の因果か。同じ潜水艦乗りになるた
めに、あなたの『たつなみ』に乗りたいとは」

「運命でもなんでもねえよ。それを決めたのはこの小僧自身だ。だが、海江田あの野郎の孫と聞
いたときは流石の俺でも驚いたさ。息子には会ったことはあったが、まさかその孫が
入ってくるとはな」

海江田四郎の息子である海江田西住常夫とは観艦式で会ったことがあり、海江田によく似
た好青年だったことを思い出す深町。もつとも彼とはそれ以来会うこともなく、そのま
ま常夫は水難事故で亡くなっている。一族揃って海で亡くなるという不運の中でも海
江田まおは入隊してきた。

「まあこれだけのことがあっても入ってくるのは、肝が座つてんだろ」

「なのに、あなたはその回答をずっと保留にしたままなのはどういうことですか？ 正式な

命令書を出さないのは、あなたのこれまでの”教育”に問題があるため、乗艦可否を委ねているからです。以前はすぐに回答を送るのに今回に限っては期限を過ぎても回答がないのは何か彼にあるからではないのですか？」

深町には、特例で候補生の乗艦の可否をすることでできる権限を与えられている。それはこれまでの教育に問題があるため、ある程度彼が見定めた人物を乗艦させようとする意図があった。言動に難があるとはいえ、深町は潜水艦乗りでは最も優秀なのは間違いない、その人物からの教えを乞うのは中々チャンスがないのだ。が、結局は彼の厳しすぎることから、こうした事態になってしまっている。深町自身は観察眼は中々あり、書類を見ただけで可否をとるため、返答は早いのだが、今回の乗艦希望者である『海江田まお』だけは中々返答がなかったのだ。なので、群司令である速水は点検を兼ねて深町を横須賀基地に呼び出しことにしたのだ。

「海江田艦長の孫だから、何かしらあるのではないのですか？」

「…そんなんじゃない。ただこいつは俺が直に会って決めたくなっただけだ」

言葉では言っても、内心は海江田四郎の孫という点では強い興味を持っていた。だが深町の興味はそれだけではなかった。

「それにコイツの姓は海江田だが、本当の姓は西住だ。西住と言えばあれだ。戦車道で有名な流派だろ」

「よくご存知ですね。あまりそっちには興味がないかと思つてましたが」

「新聞やテレビで特集でもされてればいやでも耳に入つてくんだよ」

そう言った方面には興味が無いと思つていた速水だが、西住という名は戦車道に興味がなくとも嫌でも耳に入ってくる名なのだ。

「経歴書には家庭的事情により姓と住所の変更つて書いてあるが、要は家出してまでここに来たつてことだろ？ それに双子の妹にひとつ下の妹と別れてまでだ」

「さあ、理由はそこまでは聞いていません。入隊志願書にはしつかり保護者の印鑑が押されていましたから、こちらとしては手続きに何の支障はありませんし」

「押したのは海江田の女房だろ。コイツの親が押したわけじゃねえ」

まおの親である西住しほの印鑑ではなく、海江田四郎の妻である人物の印鑑とサインが書かれているのに可笑しいと感じる。もしかしたら、まおが海上自衛隊に来ることを親であるしほが認めていないのではないかと、深町の直感はそう言っている。

「深町艦長は海江田まおの素性が知りたいんですか？」

「そんなんじゃないねえ。ただ、海江田がそうだったように、こいつのすまし顔が何となく似てんだよ」

貼られている顔写真に少しばかり疑いの目を向ける深町。どこか清々しくも、何か秘めている感じの目をしている海江田まおを。それはかつて同期であり、ライバルだった

海江田四郎の目とどこか似ていると。

「もし彼と会いたくないなら手配しますけど」

「んなもん必要ねえよ。俺が散々遅らせたんだ。こつちから出向くのが筋だろ」

「なら……ん？」

何かしら手配しようとした速水は、突然なりだした内線電話に顔を移す。深町に軽く会釈して受話器をとり、相手口と会話をする。少しばかり笑みを浮かべた。

「どうやら、出向く手間が省けたみたいですよ深町艦長」

受話器を置いて、再びソファの場所まで戻っていく。何やら朗報とでもいったような表情をしている。

「あん？」

「向こうからあなたに会いたいと連絡があつたみたいです」

「なんで海江田の孫が俺がここに来るのを知ってるんだ？入港連絡なんて学校まで言うてねえだろ」

「私が伝えておきました。深町艦長のことですから、おそらく自分の目で見たいだの会いたいだのと言うと思いましたが」

「それわかつて俺をここに」たつなみ「ごと呼んだのか？つたく余計なお世話だつての」

「何年あなたの元にいたと思ってるんです？」

女房役とまでは言わないまでも、速水も長い付き合いになる。深町のことはそれなりに理解しているつもりなのだろう。

「それと結論は今日中に出してくださいよ。これは命令です」

「わあつてるよ。速水司令」

制帽をかぶり直し、ソファから立ち上がる深町。部屋を退出する間際、群司令室に飾られた“海江田四郎”海将補の写真立てに目が入る。

「海江田艦長も天国で喜んでるかもしれないね。自分の孫が同じ道を行ってくれるのを」

それに気づいた速水も呼応するように話しかける。しかし、振り返った深町の顔は神妙な表情をし。

「俺はまだ、海江田が”死んだ”なんて信じてねえからな」

あれから何年経とうとも、深町の勤は海江田四郎の死を信じていないのだった。

VOYAGE—4 《航海の先は》

『だから私の名前は逸見エリカ！何度言わせればわかるのよ!!』

『わかつてるって！逸見江リカちゃん！』

初めて親しくなった男の子は、私の名前を冗談のように間違えてくれていた。何気ない家族とのシヨッピング中。ふとしたことで出会った男の子は、笑顔を絶やさずにそう呼んだ。

『なに人の名前微妙に間違えてんのよあんだ!!』

『リカちゃんだろ？覚えてたって!!』

『ムキーーーー!!』

——本当に間抜けとしかいいようのないその雰囲気^{きづ}に当時の私は大層怒り狂っていた。なんせ、何度も言ってるのに私の名前を永遠に間違えるのだから——

『僕まお。よろしく』

『ふん。男のくせに女みたいな名前じゃない！変なの!!』

——それに対抗するかのよう^{よう}に、その男の子の名前をバカにするように言^いってやった。皮肉だ。全力で皮肉^くってやった——

『ほうほう。リカちゃんは今迷子なのか』

『どうしたらそう聞こえるのよ!! アンタの頭どうなってんのよ!! って、アンタだって迷子でしょ!!』

『僕は迷子じゃない。皆が迷子なんだ』

『何よそれえ!! アンタどんだけ捻くれてんのよ!! バカア!』

『ふぐつ!』

— 持っている人形を思いっきりその顔面にお見舞いしてやった。ホント、本当にあの頃の彼はバカにつきることだらけだった。そうだったはずなのに—

「……夢」

なぜ今ごろになってあんな昔の夢を見てしまったのか。そんなこと考えたところでもう意味ないはずなのに。

「ああ、もうっ!」

もう記憶の片隅にしまっていたことだったが、ふと思い出すことがある。それはエリカにとって大切な思い出なのか、葬り去りたい思い出なのかはわからない。今頃見たところで、当の本人はもう黒森峰にはいないのだから。

あの夏以来、西住まおは突然と黒森峰を去っていった。理由は一切わからない。ただ

退学処分と話に聞くと西住家を勘当されたとも聞く。意味がわからなかった。まおがそこまでされる処分はなかったはずだ。成績もよく、多少なりに黒森峰の気質にそぐわないことはあれど、戦車整備も抜け目もなかった。それにあのまほやみほとかなり仲が良かったはず。それを陰ながら見たことのあるエリカからしたら信じられない話だった。そこらへんにいる兄妹仲よりいいのではというぐらい。正直自分の姉よりも親密さがあつた。整備班の男子たちに聞いても答えられないと言われ、なぜ去つたのかみほに聞いても、わからないの一点張りであり、まほに至つては話すら聞いてくれないほどであり、更には睨まれる事態になつてしまつてゐる。それからはまおに関する話は一切していない。いや出来なかつた。あれ以来、まほは明らかに変わつてしまつた。訓練は厳しくなり、本当にただがむしやらに勝利のみを追求するものになつてゐる。だがそれが黒森峰の、西住流の戦車道であるから誰も悪いとは言えない。そしてなぜそうなつたのか。

「隊長……」

まほは何も言わない。誰にもそれを言おうともしない。恐らくみほにすら満足な会話はしていないのだろう。だが一つだけ確信できることがあつた。まほやみほがおかしくなつたのは、間違いなくまおが原因なのだろうと。だからこそ、一発ぶん殴つて文句を言つてやりたかつた。でも、それが出来ないのも知つてゐるからエリカは齒がゆ

かった。何もわからないし、知らない。少なくとも自分はまおと……仲が良かったはず。でも、もういない人間に何を言っても無駄だ。

『西住流は王者の戦車道だ。どんな者が立ちまはだかろうと、それを全て叩き潰す。それに付いてこれない者は容赦なく切り捨てる』

（私は隊長まほさんのためについていくと決めた。たとえばあの人まほさんに「私達まほさんが見えていなくても）

どんな理由であれ、ずっと憧れだったまほのためにやると決めたのだ。

『お兄ちゃん……』

（だから、みほ……アンタも早くあんな奴まおのことなんか忘れなさい。どんな理由があつても、私達を裏切つたんだから……）

だから早くみほにはまおのことなど忘れて、戦車道に集中して欲しかった。鉄の掟鋼の心。それが西住流なのだから。

「作戦室にでも行つて、作戦内容でも確認しようかしら」

朝食にしては少しばかり早いし、外で気晴らしにジョギングでも遅い時間。もうすぐ全国大会の準決勝も近い。作戦室にでも行つて、練度を上げたほうがいいと。すぐに到着するなり、先客がいたことにエリカは驚いた。

「あれは……みほ」

先客はみほだった。パソコンで調べ物をしているのだろう。エリカが部屋に入ったことも気づいていないようだ。

「こんな朝早くから調べ物なんて。流石ですな副隊長」

「い、逸見さん!?!」

ビクツとなりみほは慌てて表示しているディスプレイを消す。

「ど、どうしたの!?!」

何か見られたくないものでもあったのか、普段おどおどばかりしているみほが更におどおどしているではないか。そんな様子を怪しいと感じたエリカはみほのほうに詰め寄っていく。

「はあ?どうしたじゃないわよ。それよりも何をそんなに熱心に調べてるのかしら」

「ちよ、ちよつとプラウダとか調べてて、あの、私もう部屋に戻るから!!」

すぐに机に置いてある誰かが映った写真と本を手にとつて逃げるように資料室から出ていく。作戦のことを調べているのなら、エリカが見ても問題ないはず。それを見せようとも話そうともしないということとは。

「ふん、相変わらず嘘が下手ね」

みほが使っていたパソコンを操作し、何を調べていたのか履歴を確認するエリカ。元々パソコンがあまり得意ではないみほならおそらくそこまで手が回ってはいないだ

ろうと踏んだのだ。どうにもここ最近のみほの様子が可笑しいのは前から思っていた。全国大会も順調に勝ち進んでいるが、どうもみほの気持ちが入っていない

「……海上防衛学校広報誌？ 一体何を調べてるのよ」

出てきたのは、作戦関連どころか戦車道すら全く関係のないことだった。防衛学校と言えば、自衛官候補生を育成する学校だったはず。ここ黒森峰でも陸上防衛学校に入學していく生徒も少なくはない。だが、みほが見ていたのは海上防衛学校。つまり海上自衛隊関連の資料だ。確かみほは海が嫌いなはず。父親が海の事故で亡くなったことを知っているエリカは疑問符が消えないでいた。いや、なぜ海自なのか。気になったエリカはマウスを操作し、みほが調べていたことを更に見る。

「海江田四郎……って誰よ？」

次に出てきたのは、海江田四郎と記載されている項目だった。当然そんな人物をエリカは知るはずもなく、項目をクリックして中身を確認する。

「海自始まって以来の英才と呼ばれた男。これが一体なんだって言うのよ……」

開かれた資料は海自のフリー百科事典であり、海江田四郎という人物は海上自衛官であり、潜水艦の艦長をしているという人物の情報が乗っている。どうやら最後は衝突事故を起こし、乗組員ごと行方不明となっているらしい。だがそれがなぜみほがその人物や海自のことを調べているのかもよくわからない。

「ん……これは」

” 《速報》海自が誇る天才の孫現る……!?”

検索履歴を見ると気になる内容のスレットが目に入った。先程の内容と照らし合わせるならば、おそらく海江田四郎の孫ということになる。興味がそそられたエリカはそのままクリックし、中身を見る。

” 今年度行われる防衛学校最大の試練と言われている航海演習が始まる中、あの海自にいた天才『海江田四郎』の孫が現れた模様。出自はなぜか不明であり、防衛省による情報操作がされているのではと疑いが掛けられているが、噂ではあの西住流戦車道の者ではないかと言われている”

「まさか……いや、まさかね」

言葉では言っていない、頭ではそのいきつく答えが出てしまっている。そして、その人物が載っているであろう壮行会の動画を再生した。

『いよいよ護衛艦での訓練を開始することとなるここ海上防衛学校では、学生たちを送り出す壮行会が執り行われています。日本の防衛を担うことになる若き自衛官の卵たちは海上防衛の要である護衛艦での演習は大きな意味を持っています』

ネットに流れている映像には、海自の制服に身を包み、護衛艦をバックに映る自衛官候補生の生徒たちの姿が映っていた。海上幕僚長や防衛大臣が激励の言葉を掛ける中、

ずらりと並んだ候補生たちが流れるように映し出される。

「まお……さん?」

いた。最前列にいる制帽を被った男に目が入ったエリカ。映像はほんの一瞬だったが、あの顔は決して忘れない。再度巻き戻し、その場所で静止させ改めてその顔を確認する。

「何で!!」

それを見たエリカは激高と共に席を立つ。間違いない、あの顔はまおだ。あれから3年余りたち、動向も不明だったまおが、熊本を離れ横須賀にいる防衛学校へと進学していた。だとするならば、夏休み後にまおが消えてのもの、入学準備云々があるのなら合点がいく。だからみほは海上自衛隊のことを色々調べていたのだろう。まおがそこに行っているのなら、少しでも情報がほしいとばかりに。だが、エリカからしたらそんなことはもはや問題ではない。久方ぶりに見たまおの顔を見て感情を爆発させる。

(なんなの!?!あの人はあんなこと^{海上自衛官}をするために黒森峰^{こくもり}を去ったつていうの!?!あの西住流の家^いに生まれて、将来を約束された家を出てまで……私から……あの二人からいきなり離れて!!)

言いしれない怒りが沸き起こるエリカは、拳を強く握りしめるのだった。

海上自衛隊横須賀基地から出向して数日。海上防衛学校最大の山場ともいえる航海演習が始まった。横須賀基地から第一、第二練習隊がそれぞれ別れるように、所属艦である護衛艦《くらま》《あさぎり》《さわかせ》は日本を一周するように横須賀基地を目指す航海を行う。

「前方に漂流物確認できず。航行に支障なしか…」

露天艦橋ウイングに設置されている双眼鏡で周囲を見渡していたのは、潜水艦に乗艦願いを出していたはずの海江田まおの姿があった。作業服を着込み、艦番号にKURAMAと刺繍され、飾緒を施された作業帽を被っている。

「犬吠埼沖……」

最初の目的地である小笠原諸島での演習を終え、現在は最初の海自基地がある大湊基地最初のこの海域はまおにとってある意味特別な場所と呼べるところだった。

潜水艦《やまなみ》がソ連原潜ロシアと衝突し、そのまま圧壊したのち全員が行方不明となる海自史上最悪の事故とされている。そしてその《やまなみ》の艦長を務めていたのが、ほかでもないまおの祖父である《海江田四郎》。最も、深町を始めこの衝突事故には不可解な部分が多く、本当に死んだのか疑いを持つものも少なくない。

「精が出るな海江田」

「麻生掌帆長」

声を掛けられたまおはすぐに振り向く。声の主は船務科所属であり掌帆長を務める麻生保海曹長。あそうやすし つい半年前までは第一護衛隊群所属であるイージス護衛艦《みらい》に乗艦していた経歴をもっている自衛官。

「特進科のお前は、もっと他にすることがあるだろうに。同じ科の二人は早々にCIC幹部候補生で研修を受けてるぞ」
戦闘指揮所

「梅津艦長は最初に乗艦する際に、自分の目と肌で艦を知っていつてくれと言いました。自分はただそれを実行しているだけです。それにCICよりこのの方が艦に乗ってる感じがしますし」

露天艦橋から見える地平線に少しばかり視線を向ける。この光景を再びここで見られたことはまおにとっては嬉しい気持ちもあった。小学校の頃に父の常夫と二人で観艦式を見に行った際に乗艦したのがこのくらまだったからだ。

（父さん……）

本来ならば、まおはここから海を眺めることはできないはずだった。

「小暮に聞いた。あの“たつなみ”に乗艦する予定だったらしいな」

船務科に配属されたまおの幼馴染の小暮航平からここに来た経緯を聞いていた麻生掌帆長は話をふる。話を聞いたまおも少しばかり残念そうに答える。

「ええ、できることなら祖父と同じ潜水艦サブマリナー乗りになるために、深町二佐のところで学びたかったのですが」

「あの人は変わり者だつて聞くからな。型破りというべきか」

乗艦する艦艇や所属する部隊は違えど、深町洋という人間は問わず有名なのである。最も、操艦技術に關しては確かな実力を持っているのは間違いない。

「だが、海江田海将補と長い付き合ひのあるあの人のことだから、てつきり乗せるかと思つたが」

海江田四郎とは防衛学校から同期だつた深町ならば、乗艦させるかと思つていたが、やはり情だけで動くわけにはいかないと思つた麻生。

「しこり」がある人間に潜水艦サブマリナー乗りは務まらない。それが乗艦を拒否された理由です」

「しこり？何か思いつめてることがあるつてことか？」

「それはまだ自分にもわかりません」

あの日、深町艦長が横須賀を訪れた際に会話をすることができた唯一の日。非常識とは知りながらも、たつなみに乗艦したい気持ちがあつたまおは深町に言うも、帰つてきた言葉は『乗艦拒否』だつた。理由は口ではわからないと言いながらも、まほとみほのことを指しているのはわかつていた。何も言わずに勝手に出ていったのを深町に見抜

かかっていたのだ。深町は直感でまおがそのことを後悔している。だからすっかりそのことを解決してから改めて来いと。

「なあに、まだ始まったばかりだ。あの人のところでもなくても、来年の航海演習時に別の潜水艦を希望すればいいさ」

「はい。でも、今はこのくらまで学ばせていただきます。それに途方に暮れていた自分を拾ってくれた梅津艦長にも感謝していますし」

たつなみの乗艦を拒否され、正直乗る護衛艦がなく途方にくれていた際に事情を知ったくらまの艦長である梅津三郎一等海佐が後進の育成のためにと乗艦を許可してくれたのだ。梅津艦長もまもなく退官を控える身であり、イージス艦《みらい》の艦長を最後に第一線から引き、くらまの教官兼艦長として任官してきたのだ。その際に当時副長であった角松洋介二等海佐の推薦もあり麻生掌帆長を始め数名のみらいクルーが教官としてくらまに乗り込んでいる。

「なら尚更その活躍を期待しないといけないな。お前にも複雑な事情があるだろうが艦長もお前に期待しているから、しっかりな！」

「はい……期待に添えるように」

「その意気だ。きつと天国にいる海江田海将補も喜んでるだろう」

そう言って、露天艦橋ウインドブリッジを後にしていく麻生掌帆長。その後姿を見ていたまおは改めて

海上へと目を向ける。

(その言葉は間違っています麻生掌帆長)

天国にいる。その言葉を聞いたまおはただ否定の言葉を浮かべる。

(海江田海将補は……天国にはいません。今もこの海のどこかに……)

その確信を、まおはすでに知っているのだから…

VOYAGE—5 《過去、未来、現状》

「そう…ですか。ご迷惑をおかけしました」

徐に通話を切ったみほは、落胆するように携帯をベツトに手放すなり倒れ込むように横になる。ようやく見つけた兄のいる場所へと意を決して電話を掛けたが、返ってきたのは『西住まお』なる人物はいないという返答だけであり、それ以上は申し上げることができないというものだった。相手が国防を担う自衛隊だけに学生とはいえ防衛機密であることから詳しく教えることができなかったのだろう。

「あれは絶対……」

そんなはずはないと、絶対にあの映像に映っていたのは兄だと確信していたみほ。生まれてからずっと一緒だった兄まおの顔を見間違うはずがなかったからだ。

もつとも、今のみほにはまだ知る由もないが書類上において“西住まお”なる人物は海自にはおらず、今は姓を変え海江田まおとしているのだから。

「……………」

まおが残していった祖父である“海江田四郎”の写真を見る。『海自始まって以来の英才』と言われ、すでに十年も前の人物だがネットや海自関連の本でも未だに載ってい

るほどの人物であり、更にはその父、みほから見れば曾祖父にあたる”海江田巖”海将補は海自に功績を残した『海上自衛隊の立役者』と言われており、海上自衛隊の創設に尽力した人物……らしい。正直、自分の祖父だという実感は未だに湧かない。今の今までそんな事実を知らないだけに、祖父だと言われても今のみほの頭では理解が追いついていなかった。今までのすごい人と言えば、母であり次期西住流家元と言われるしはや国際強化選手に選ばれている姉のまほぐらいしかいかなかったからだ。

もつとも、祖父たちが実際どれぐらいすごいのかなんて今のみほからしたら正直どうでもいいことだった。祖父のことを調べたのも、まおが何を思っ出ていったのかを少しでも理解したからだったのだから。

あの時、まおが言っていた父の夢のことや祖父のことを。

「お父さんに……似てるかも」

改めて写真を見直すみほ。雰囲気は確かに父である常夫によく似ている。凜とした表情ではあるが、どこか優しげのある表情は父も同じだったからだ。だが、そんな優しい表情をしてくれる父は死んでしまった。祖父や曾祖父も”海”に関わったばかりに帰らぬ人になっている。そんなことが立て続けに起こっているのに、兄のまおは関係ないとはかりに家を出て行ってしまった。母や姉は忘れろと言われても、家族の中心だったまおのことを忘れろなんて無理な話だった。

（戻ってきてよ。お兄ちゃん……）

まあも同じく父と同じように優しい表情をいつも浮かべていた。小さい頃からバカなことをしでかしては母から揃いも揃って怒られていたが、いつもまあと一緒に笑っていたみほ。小さい頃から憧れていたまほとは違い、まおは親しみやすい人物であり、母や姉には言えない愚痴をいつもまおに話していた。本当に身近にいる、友達のような存在だった。だからこそ、いきなりいなくなつたまおが、ふらつと帰ってくるのではと淡い期待を抱いていたが、もういても立つてもいられなくなつてしまつたのだ。もう電話しても無理ならば、次はどうすればいいのかと。

『副隊長、ちよつといいかしら』

そんな時だった。みほの部屋の扉からノックがしたかと思うと、すぐにエリカの声が聞こえてくる。机の上に置いてある資料や、祖父の顔写真を引き出しにしまい、返答を返す。

「う、うん。大丈夫だよ」

「失礼するわね。少しばかり用があつてね」

扉を開けて入ってきたエリカ。どうやら何かの用事で来たらしい。と言つてもエリカがみほに話すことなんて戦車道ぐらいのことしかない。おそらく全国大会かなにかの話だろうと思つたが、予想は大きく裏切られることになる。

「単刀直入に言うわ。どうも全国大会に身が入っていないかと思ったら、こんなことを調べてたのね」

そう言つてエリカが手に持っていたプリント用紙をみほに見せつける。そこには、みほが調べていた海上防衛学校や、海江田四郎のこと、そして現在行われているであろう、練習艦隊の情報が記載されていた。

「そ、それは!？」

なぜエリカがその資料を持っているのか驚くみほ。見せつけているプリントの中に練習艦隊のまであるということは、まおが映像に映っていたことも知っているはず。

「もう3年になるのよ。連絡の一つも寄越さないんでしょ?家にすら帰ってないんでしょ?」

まるで確認するかのようになり、まおがいなくなつてからのことを言うエリカ。

「いい加減諦めたらどうなの!?!私達にも何も言わずに学校を出ていつて、あの馬鹿騒ぎしてた整備班にすら別れを言つてないのよ。どう考えても私達のことを何も思つてないって証明でしょ!」

そう言うなり、持っていた資料を机に叩きつけるエリカ。いつまでもうじうじしているみほに対し、はつきりと諦めろと告げる。

「……エリカさんにはわからないよ」

エリカの言葉に拳を強く握り締める。事情を知らないのに何を言っているのだと、珍しくみほは怒りの感情が湧き上がる。そんなのお構いなしにと、エリカはさらにまくしたてる。

「ええわからないわね！でもね。隊長だって、それを吹っ切つて今の黒森峰を引つ張つていこうとしてるのよ。こんなこと調べるよりも、プラウダに勝てる作戦を考えるほうがマシでしょ！今年の大会は黒森峰が全国大会10連覇を成し遂げるための大切な大会なのよ。出ていった人間なんかより、今いる隊長を私達で支えないといけないでしょ！」

エリカの言うことはわかっている。今年は黒森峰女学園が戦車道全国大会で優勝したならば前人未到の10連覇を成し遂げることになる。学生やOG会、そして西住流門下生や後援会の多くの人々が応援してくれている。それだけの期待の中で、一人でも気持ちが違う人間がいれば不和を持ち込むことになってしまう。それが副隊長という立場にある人間なら尚更だ。だからこそ、せめて今だけはみほに戦車道に集中して欲しかった。

「お姉ちゃんとは……あまり話したくない」

率直な言葉が出てしまった。

「今のお姉ちゃんは……昔のお姉ちゃんじゃない」

今のはまほは昔とは違う。変わってしまった。まおが家を出ていつてから。まるでまおの痕跡を消すかのように、整備班とは必要以上に接触させないようにし、わいわいやっていた中等部の頃とは明らかに激変してしまった。高等部が規律が通っているとかいいう話ではない。ただひたすら勝利のみに固執した戦いをまほはは繰り広げていた。そんなまほの姿を見て、みほは言いしれない違和感と恐怖を感じてしまった。

「確かに隊長は変わったわ。でもねここはあの馬鹿騒ぎばかりしてた中等部とは違うのよ。規律も通って、西住流戦車道が深く関わる聖域とも言える場所なの。いつまでも中等部の気分でいられたら迷惑に決まってるじゃない」

「だからって、勝つことだけに固執する戦いなんて、私は嫌だよ。それにいくら白旗が上がってなくても、戦意のない戦車をみんなで叩くなんて、そんなの戦車道でもなんでもない」

準決勝で行われた聖グロとの試合。まほから出た指示は全ての戦車を潰せだった。数が減るたびに、黒森峰が誇る重戦車が集中砲火のごとく、一両ずつ潰していく作戦。無論、それが西住流の戦車道というなら聞こえはいいが、長い間西住流を見てきたみほからしてみれば、そこに礼節や礼儀のかけらもない。ただ憂さ晴らしをしているだけにしか見えなかった。だからこそ、まおがいた頃の中の中等部での戦車道が好きだったみほ。勝てば皆が喜んでいたし、まほもチームでの勝利を尊重し、みほもそれらに純粋に従っ

ていた。

「…それが西住流戦車道なのよ。勝つこと尊び、常に前進する。後ろ向きな考えを持つ人間なんか置いてかれて当然でしょ」

そうは言うものの、エリカの言葉はどうも歯切れがよくなかった。エリカ自身も理解したくはなかったが、今のまほは正直目も当てられないのは彼女もわかっていた。でも、憧れの人でもあるまほが勝つことを求めているのなら、自分はそれに従う。それが自分にできる最善の方法ならば。

「……………」

これ以上は平行線だろう。みほは何も言わなくなつた。気が弱いくせして昔から強情なところは変わつてはないみほにため息混じりに告げる。

「はあ……………いい副隊長？まおさんなんかいなくても、黒森峰は何も変わらないわ。それと、うじうじするなら大会が終わつてからにしなさい」

それだけを告げると、みほの部屋から出て行くエリカ。これ以上の会話は不要だと思つたのだろう。たが、今のみほは明らかに身が入っていない。いつまでもいない人間のあとを追つてもらつては困るのだから。

「お兄ちゃんがいてくれた方がいいに決まつてるよ。勝つただけにやる戦車道なんて…私は嫌だ」

一人残されたみほは、ぽつりとそう述べる。もしまおが高等部に進学していたら、きつと現状は大きく変わっているのだと。

◆ 『金沢港にて練習護衛艦《くらま》《あさぎり》《さわかせ》の一般公開を開催。予定は……』

自室に戻ったエリカのスマホに映る画面には、一般公開される予定である海自のイベントが映し出されている。时期的にはちょうど全国大会が終わったあとの予定だ。

（大会が終わったら、真っ先に行つてやるわ。自衛隊だろうがなんだろうが関係ないんだから！）

◆ ジツとしていらなかったのは、エリカも同じだった。

横須賀を出国し、小笠原での航海演習を経て、最初の目的地である大湊基地まで数時間を切っていた。くらまの艦橋では入港に向けての準備が進められており、候補生達は初となる基地入港に緊張感を漂わせていた。だがそれは大湊基地に入港すれば、陸での休暇も待つていることから来る高揚感も来ていることも合わせてだ。

「海江田、航海長補佐として初の基地入港だ。露天艦橋ウイソングでの状況をよく観察するんだ。次の金沢港ではお前が指揮を執るためにな。年齢的にも一番若い立場だが、将来的には

自分より年上の自衛官を纏める立場にいずれ置きかれる。今回はその前振りと捉えてくれ」

「はっ！わかりました。航海長」

海図室にてくらのまの航海長補佐としての最初の演習任務がまおに下る。と言っても、先程くらのまの航海長が指示した通り、今回は露天艦橋ウイ・レンブリックにて護衛艦の入港状況を観察すること。指揮を直接とる麻生掌帆長の動きや航海科員の様子を見なければいけないためボウつとはしてられない状況でもある。

「海江田。青森湾にはプラウダの学園艦も入港している。あつちはこの艦の何十倍の大きさだから、距離感をよく掴むことも忘れるな」

「わかりました。しかし航海長、プラウダの学園艦は来週入港と聞いていましたが」

航海長が付け加えるように助言をする。プラウダと言っても、学園艦では日本最大の黒森峰にいたまおからしてみれば、距離感などはそう難しい話ではない。正直気になる内容はプラウダの学園艦のこと。前の報告ではプラウダはくらのまとズレるように入港すると聞いたはずだったからだ。

「どうやら戦車道の全国大会決勝が近いから、青森の演習場を使うために予定を繰り上げて入港したらしい」

「なるほど、だから若い連中が妙に騒いでた訳ですか。入港すれば、プラウダの学園艦に

入れますからな」

共に話を聞いていた麻生掌帆長が納得したように顎に手を当てる。プラウダの戦車道の隊員は揃いも揃って綺麗だと聞く。ずっと海にいて刺激を求めたい隊員が見に行くつもりなのだろうと。無論、そんな浮ついた気持ちを見過ごす訳もなく、航海長は呆れるように述べる。

「そんな浮ついた目的で上陸する気なら、全員制服で上陸させるように艦長に打診していたほうがいいだろうな。制服を着ておけば少しは気が引き締まるだろう」

「まあ、自分はどんな格好でも構いませんけど」

外出するのに、制服だろうが私服だろうがどちらでもいいまお。別にプラウダに行く気もないし、休暇でも艦上でやれることはあるからだつた。

「やつとるようだな」

「梅津艦長！」

ふいに海図室に現れたのは、くらま艦長を務めている梅津三郎一等海佐だ。すぐさまその場にいる全員が敬礼するが「まあそのままです」とやんわりと返す梅津艦長。すぐに海図とうを一通り見るなり、皆のほうに顔を戻す。

「入港準備は予定通り進んでおるようだな」

「はっ、予定通り1600には大湊基地へと入港します」

「うむ。久方ぶりの入港だ。候補生たちもそうだが、我々も初心に戻って作業をしよう。それとさきほど上陸がどうこう聞こえていたが」

「ああ、若い連中の服装の話ですよ艦長。停泊しているプラウダの学園艦に行くとかで」
「どうやら先ほどの会話を梅津艦長は聞いていたらしく、聞こえなかった部分を麻生掌帆長が説明する。」

「まあよかろう。航海長、久方ぶりの陸地だ。候補生たちが自覚を持って行ってくればいいや。」

「わか「自分も艦長の意見を支持します」は?」

航海長が答える前に、まさかの海江田が同調する意見を出したのに驚く。

「おいおい。何、どさくさに紛れて言ってるんだ海江田。お前はどっちでもよかつたんじゃないのか?」

航海長が答える前に、まさかの海江田が同調する意見を出したのに驚く。こういうちやつかりしたところが抜けきれていないのもまおらしいのかもしれない。

「いえ、自分の意見はしつかり伝えなければと思いました」
「つたく調子のいい奴だ」

「航海長。先はまだ長いです。次の機会がまだありますよ」

「ははは、ありがとうございます」

「フォローしてくれる麻生掌帆長にすなおに感謝する航海長。色々話をしていろいろに定刻の時間は迫ってきていた。」

「入港の準備に取り掛かるか。各科員には所定の位置につくように下命を」

「了解！」

「いよいよ最初の寄港地である大湊基地に向けて入港準備が始まる。艦内に号令が流れ、各科員は慌ただしく動き出すだろう。航海長や麻生掌帆長も艦橋へと移動をしていく。」

「海江田。少しいいかな」

「はい。何でしょうか艦長」

「続くように艦橋に移動しようとしていたまおだが、梅津艦長に呼び止められる。」

「自分に連絡が？」

「ああ。今日、”西住みほ”という女子学生から防衛学校に電話があったそうだ。”西住まお”に合わせてほしいとな」

「っ！」

梅津艦長から発せられた言葉に驚きを隠せないまお。内容は今まさに言ったように、防衛校にみほから連絡があったこと。どうやら梅津艦長にダイレクトに連絡があったらしく、確認を兼ねてまおに聞いたようである。

「西住みほとは、海江田の……」

「妹です。でももう3年程会っていませんが……」

隠す様子も見せずに素直に答えるまお。防衛校に入ってから、久方ぶりに聞いた名前に懐かしむ感情が湧いてくる。

「そうか、まあ西住まおという人間は学校には実際にはいない。それにあまり深くは答えられるわけもないから、話は淡々と終わったそうだ」

「みほが……妹が何を思っただけで電話したのかは自分にはわかりません。出て行って以来話していませんから」

梅津艦長にそう告げるが、はつきり言っただけは嘘だ。黒森峰の現状が、戦車道の動向がそうなっているのかは今のまおには知る由もない。だが、あの時テレビで見たみほの表情から察するに、良くないことが起きていることだけは確信できていた。

「そうか、まあお前の家が複雑な状況なのはわかっておるが、家族のことは大切にするんだ。私たちが守っておるのはそういう人たちなのだからな」

「了解です。梅津艦長」

最後に敬礼し、その場をあとにするまお。帰り際に梅津艦長から一枚の紙を渡される。紙に書かれていた内容はみほの携帯電話の番号だった。無論、電話番号変わっていない。別段なくても、まお自身今でも家の電話番号はもちろん、みほの携帯。そしてま

ほの携帯番号だつて覚えている。だが、電話をかけることは今の今までしなかった。正直な話、まほやみほに泣かれたのは辛かった。心が揺らいだが、結局我が身可愛さに家を出て、西住を捨てた。まともな別れもせず。

(みほ、この3年間でお前は変わったか？なにか目指すべき目標は見つかったか？俺は見つけたよ。父さんが死んだあの日から、俺の航海は始まった。結末がどうなろうと、俺はやり遂げる……絶対にな)

露天艦橋まで移動し、夢の始まりでもあるこの航海は大きな意味を持っている。

「ん……あれがプラウダの学園艦か……」

『くらま』の露天艦橋から映る先に、旧ソ連軍の艦艇『キエフ級』をモチーフとしたプラウダの学園艦がまるで重鎮するかのよう停泊していた。

プラウダと黒森峰の決勝戦はもう間近だった。



『必要以上に攻撃を加えるのは王者の戦い方ではないわ。あれではただの無法者の戦い方よ。西住流とは……』

「私は西住流を体現しているだけです。その何がいけないんですか？」

隊長室にて、まほは母であるしほから先の戦いの叱責を受けている最中だったが、話は平行線のまま続けられていた。内容はもちろん、まほのあまりに異常な作戦の

ことだった。あくまでも西住流の戦いをしていると聞かないまほは、痺れを切らして電話を切りあげようとする。

「師範代、話がこれだけなら私は失礼致します。それから安心してください、決勝戦でも変わらず西住流に相応しい王者の戦いをお見せしますよ」

『まほっ!!』

挑発するように発した言葉に激昂するも、すぐに電話を切るまほ。だがその表情はどこか浮かない顔色をしている。

(なぜお母様は私をわかってくれないんだ……どうして誰も)

爪を噛み、母に叱責されたことを理解できないまほ。何が悪いというのか。自分はただ西住流を体現しているだけだ。圧倒的な力でねじ伏せ、勝利を齎せている。

そうすれば、きっと誰もが自分を認めてくれるのだと。

だが、結果は全くの真逆。母には非難され、たとえ上手くやっても西住流として当然という言葉ばかり。誰も《西住まほ》という人間を見ようとはしてくれなかった。思い返せば、それをただ一人見ていたのが：

「ハハハ……」

ふいに頭によぎり、薄ら笑いをするまほ。そして何かブツブツ呟くように天井を見上げる。

「まおのせいだ……全部……全部あいつが悪いからだ……全部、マオノセイダ」

VOYAGE—6 《地吹雪とブリザード》

「航平。お前俺と付き合つて良かったのか？他の連中はプラウダに行つたり、街に出向いたりしてるのに」

上陸許可により、護衛艦『くらま』から下船していたまおと幼馴染であり、共に防衛学校の海自候補生である小暮航平の二人は遅めの昼食をとるために、海岸線を歩いていった。

「いいんだよ。それにこうしてまおと話すのも久しぶりなんだから。同じ第2分隊でも、俺は船務科でお前は航海科。配置が違う上に、飯だつて士官室じゃないかお前は」
「俺だつて科員食堂で飯が食べたいさ。でも、特進科の候補生は、常に緊張を持つてやる必要があるから士官と食べるのが伝統なんだと」

「幹部自衛官になる人間は違つてことか」

海上防衛学校特進科は幹部自衛官を育成するための科であるため、普通科である航平とは違うルートに行く。そうしたのもあるためか、艦内でも寝る場所も違い、食事も一緒にとることもあまりない。「伝統遵守」である海上自衛隊ならではの理由の一つだ。

「それにしてもやっぱりでかいなあ。プラウダの学園艦は」

足を止め、陸奥湾に停泊しているキエフ級に似た巨大な艦を眺める。

「プラウダは黒森峰に次ぐマンモス校だからな。艦歴もさることながら、建造にはロシア…というより旧ソ連の政府が多額の援助をしたとかだからな。でも、確か青森港に停泊してるんじゃないのか？」

「なんでも戦車道で使用する訓練場がこの近くにあるらしくて、ここまで移動してきたらしいぞ」

「へえ〜（そういえば決勝戦が近いとか航海長が言ってたな。使用する訓練施設ってこのことだったのか）」

基地への入港前に、海図室での話を思い出すまお。

「それに比べて、日本を守る船が小さいこと…」

その丁度真向かいに、海上自衛隊大湊基地がある。基地の棧橋には、まおたちの乗る《くらま》他、同じ練習艦隊所属の《あさぎり》《さわかせ》が接舷している。そして第3護衛隊群第7護衛隊所属の護衛艦が停泊しているが、学園艦に比べれば遥かに小さい。

「艦がでかければいいってもんじゃないだろ？」

「確かにそうだけだよ。でも、もしあれを護衛するとなれば、結構大変じゃないか？もし

テロリストとかどっかの国で軍事行動を起こされて占拠とかされたら」

「それを抑止するために学園艦に自衛隊の駐屯地をつて話が何回かあったけど、教育的象徴である学園艦には置けるかって話だとき」

日本領海内を自由に航行している学園艦ではあるが、防衛上の観点から空自、陸自の駐屯地を設置する話があがったことがあるもの、文科省や教育委員会他、色んな団体などが反対を強く唱えていた。教育を目的に建造された学園艦に軍事施設を持つなど、以ての外とのことらしい。

「学園艦に空自の戦闘機なんて配備したら、それこそ空母とか言つて騒ぎそうだしな」

「まあ、日本が本格的な“空母”を持つ日がくれば現状は変わるかもしれないがな」

日本にとって悲願の航空母艦保有の話はまだ先は長いだろうと考えるまお。だが、現在乗っている《くらま》に変わる新鋭の護衛艦は巨大な飛行甲板を保有した艦である。周辺各国や内部からはもっぱら“へり空母”などと言われているが。

「だが、今は空母よりもっと必要なことがあるはずだ」

「……」

まおが欄干に手を置き、力を込める。それを見た航平は、以前話聞いたことをまおに述べていく。

「お前が前に論文で書いた、“日本の防衛構想”で、学園艦を減らすべきだの、海自に陸

自の特殊作戦群のような特殊部隊を設立すべきとか。教官たちは度肝を抜かれたらしいからな。そんなことを学生が考えることじゃないって言ってたようだし。お陰で『海江田まおは軍事的思想を持つ人物』なのではって烙印押されたからな。そういうには自衛隊内では煙たく扱われるらしいって教官も言ってたぞ」

特進科1年最後の課題で出されて小論文にて、まおは防衛構想を嘘偽りなく書いたところ、教官たちから困惑されていたとのこと。少なくとも16歳の人間が書くことではないとのことらしく。

「軍事的思想なんてバカバカしい。俺は自分の考えを論文にまとめただけだ。それに特殊部隊設立は前から議論に出ていただろ。最も海上保安庁がすでに特警隊^{SST}っていう部隊がいるから、出るたびに暗礁に乗り上げるみたいだがな」

「すでにあるのに、同じようなものを作ってもってだろ？俺もそれは思うけどな。それに日本はまだ”防衛出動”どころか”海上警備行動”海上警備行動”は、海上での人命・財産の保護、治安の意地を目的とする自衛隊の活動で、武器の使用については正当防衛、緊急避難の場合を除き、人に害する攻撃を加えてはならない。この世界観では海上自衛隊創設以来、一度も発令されていない。”すら発令されたことがないだろ。そういう意味では日本が平和ってことじゃないか」

戦後に入り、日本は平和な時代が続いていた。もちろん、不審船だの密漁船などの間

題は起きているが海上自衛隊が出動するほどの有事は発生しておらず、今日までは防衛出動「防衛出動」は外部からの武力攻撃やそのおそれのある場合に自衛隊が出動することで、必要な武力を行使できる。はもちろんのこと、海上警備行動の発令すらされていない。

「学園艦の方も、少子化の影響とかで児童が減少してるから、文科省が予算不足を補うために外国に売り渡す方向で進めてるだろ。俺はそれに合わせて書いただけだ。もつとも、主な目的は戦車道のプロリーグ開設に伴う資金繰りらしいがな」

戦車道が盛んな日本では、まもなく戦車道のプロリーグが開設されると話題になっている。聞けば、母である西住しほが実行委員会の委員長を務めるとの話も聞いている。

「ああ、確か台湾に売り渡すって話だったな。茨城県の……どこだっけ？」

「確か”大洗”が母港の学園艦だったはずだ」

そのために数年前から莫大な維持費のかかる学園艦を随時廃艦とし、海外の国に売却することを始める動きが出てきている。文科省が選定した話では、最初に選ばれたのが茨城県にあるとある学園艦であるとのこと。

「まおは学園艦が減ることが防衛上で有益になるって考えてるのか？」

「学園艦で生活してた人間が言うのもどうかとは思いますが、今のところはそう考えてる。お前も知ってると思うが、日本は世界で世界第6位の領海を誇るんだぞ。日本じゃまだ

ないが海外では海賊行為が多くなっている今、海に多く出る学園艦をカバーできるほどに護衛艦や海保の巡視船の数は圧倒的に足りてない。それどころか、護衛艦には臨検する部隊すら設置されてない状態だ」

学園艦という代物は無論日本だけが保有しているわけではない。世界中のあらゆる国が保有しているが、過去何度かは海賊やテロリストと言った類が外国の学園艦をシージャックするような事件が起きている。海洋国家である日本にとつては急務な話ではあるが、政治や団体と言った横槍がそれを有耶無耶にしているのだ。

「特殊部隊はまだしも、せめて護衛艦付きの臨検隊ぐらいは設置してもいいだろ。ノウハウは海保から学べばいいんだから」

「学ぶと言つても、お互いナワバリ意識が強いから今は無理かもな」

海での警戒監視及び規律の花形は「海上保安庁」になっている。出動回数も多く、船への乗り込んでの立ち入り検査などの経験上では圧倒的に上をいく。そも海上自衛隊が出動することがないことが、何よりの平和の証であるので、ある種では良いことなかもしれないが。

「でも凄いなまお。あんなにおちゃらけて小学校一の問題児だったのに、裏ではそんなことを考えたんだからな。俺なんか船長やつてる親父に憧れて、海自に入ったのに。そこまで深くは考えてなかつたぜ」

「俺だつて対して変わらぬ。もとから海は好きだつたし、父さんから海江田四郎爺ちゃんの話も聞いて、ここまで来たようなものだしな」

幼い頃、父である常夫を初め、祖父である四郎、曾祖父である海江田巖が育つた場所『美倉島』。そしてまお自身も短い期間ではあつたが、黒森峰を転校してからはその島で生活をしていた。そこから色んな人達から海江田家の話などを聞いていくうちに、海江田四郎という人物に興味を持ち、父が言つてくれたことを聞き、今日まで至つている。

「けどよ。確かお前の爺さんの海江田海将補は潜水艦サブマリナー乗りだろ？ てつきり、それになりたくて海自に入つたと思つてたんだけど、実際は色んなこと考へてたんだな」

「潜水艦には勿論乗りたい。深町艦長に断られたときは正直焦つたけどな」

「別に焦らなくても、来年また頼めばいいじゃないか。それに任官したあとでも」

「今焦らなくても、まだ来年度も航海演習はある。たとえそれが無理だとしても、任官したあとでもいいだろうと。」

「俺はこの海上自衛隊に入つて、自分に一体なにができるのかを探してる。そのためには少しでも早く色んな知識を得ていきたいだけだ…」

「そう言つて、海の方を眺めるまお。いつからこういつたことを思うようになったのかは定かではない。昔から人とズレてる感性を持つてゐるは知つていたが、航平にはどうしても気になることがあつた。」

(……まお。別にそんな生き急ぐみたいなき考えはしなくていいんじゃないのか？それにお前には妹二人のこともあるだろうに……)

正直まおがここまで色んな考えを持っていることに感心するも、自分たちは未だに20にも満たない年齢であり、正式にはまだ自衛官ですらない。若いうちに国防に意識が高いとかならば、模範的な自衛官であろうと聞かえがいいだろう。だが、まおの悪い部分は、夢中になると周りが見えなくなってしまうくらいがあり、行き先をいえばそのまま行きつぱなしのこともあった。そして、まおの目標以前に、まほやみほという問題を残したままのはず。ほほ何も言わずに、家を出て行ってしまい、これまで一度も連絡をしてこなかった。そして等々みほの方からコンタクトを取ってきたというのに、連絡の一つをする様子も見せない。このまま突っ走って自衛官になれば、なにか取り返しのつかないことになるのではと心配する航平。

「そういえば、来週あたりに熊本港で一般公開する予定だったよな」
「そうだったな……それが？」

惚けたように答えるまおに、呆れながら話を続ける航平。

「わかんねえやつだな。まほちゃんとみほちゃんに会ってこいって言うてるんだよ！」
「まほとみほに？なんで？」

「なんでって!?お前、そのときに決着つけるチャンスだろ！海自の制服着ていって、立派

になった姿を見れば格好いいって思われるかもしれない。そしたら話だつて上手い
くだろう！」

予定では、石川での一般公開の次は熊本で実施することになっている。そうなれば、
半舷上陸の許可も下りるだろうし、実家が熊本にあるまおにとつては、ここいらで話を
つけるチャンスなのではと思う航平。

「あの二人が俺のことを格好いいと思つたことはないよ」

父が亡くなってからは、父親代わりと面倒を見てきてはいたが幼少期から散々いたず
らや、盛り上げ役をやつてきただけに二人から慕われてはいても、格好いいなどと思わ
れてはいないとわかっているまお。

「それに今になっては何を言つても納得なんてするわけない」

夏休み前に起きたまほとみほとの話だが、話し合いで解決できるようなレベルでは
なかった。まおの話は無視してでも止めようとしておる。あの厳格な母しほですら自分と
の話し合いから逃げ出したのだから。それはまおにとつて最大の誤算だつた。

「そんな話を急にされれば誰だつて混乱するだろ普通。それを逃げ出すように出ていっ
たのはお前もだろ！」

もつとも、まお自身がもつとから強行的にことを進めようとしていたのは事実であり、
急に話すのではなく、もつと早くに家族に打ち明けていれば多少なりに結果が変わつて

いたかもしれない。逃げ出したというのはまおをまた同じなのかもしれない。

「そうかもな……」

今更言い訳しても、意味がないと思うまお。航平の言うことが一番当てはまるのかもしれない。

「俺だつて親父たちに話して猛反対されたけど、最後はちゃんと許しをもらつてきてるぞ」

「おばさんには未だに反対されてるだろ」

「え、なんで知ってる!？」

「お前が家に連れてつたときに言つてただろう」

とは言うものの、航平の父親には最初は反対されたが、最後息子の話を聞き入れてくれた。だが母には『今の日本に息子が軍隊に入つて喜べる親なんていないわ』と言われ、反対の言葉を言われてしまい、未だに保留中ということ。

「でも、いいお母さんじゃないか。お前のことを心配してくれてるんだから」

「な、それは……つて俺のことはいいんだよ。もう3年だけ。いい加減家に寄つたつてバチは当たらないだろ」

頑なに、家に一度帰るべきだと訴えかける航平。彼にも2つ下の妹がおり、まお同様仲睦まじい関係だ。唯一違ふとすれば、こちらは反対などせずに、兄である航平の意思

を尊重して送り出してくれたこと。小さい頃から西住三兄妹を知っている航平にとつてはこのまますれ違いの関係にさせてはいけなかつたのだ。

「何年たつても、俺はもうあの家には戻れない。出ていった俺にも意地がある」

覚悟して西住を出た以上は、戻るといふのは容易なことではない。

「意地つて、カッコつけてる場合じゃないだろお前」

「別にカッコつけてるとかじゃ」

「何十年たとうが、お前が西住まほと西住みほの兄貴であることは永劫かわらないだろ」

まおが生きている限り、まほとみほの兄であることに何ら変わりはない。その言葉がまおの心にグサリと突き刺さる。

「……………わかつた。一回家に帰つてみる」

思うところはあるのか。航平の言葉に従う。最も「帰る」と口では言つてみるが、西住家の敷居を跨ぐのは正直難しい。家に戻れば、西住流一派が黙つてはいないからだ。残念ながらあの上役たちはまおのことを快く思つていない。というより消えてほしいくらいに思つている。西住流の直系に生まれた男児というだけで異端児扱いされているだけに、今になっては入ることすら難しいかもしれない。前だったらそんな関係ないと言つて乗り込んでいただろうが、今のまおは候補生とはいえ、給料を貰つている海上自衛隊所属。しかも幹部候補生だ。リスクな発言などが目立つだけに、これ以上の

騒ぎを起こせるような状況でもなかった。そこらへんはまお自身も反省しなくてはいけない点でもある。ともかく、実際に会うならば、どこか違う場所ということになるだろうと考えるまお。最も全ては会ってくれればになるが。

(……みほから連絡も入ってるしな)

熊本への入港は少し先だが、その前にみほに一度連絡をしなければならぬ。理由はどうであれ、向こうがコンタクトを取ってきたのなら、それに答えなければいけないだろう。

「よっしゃー！新しい目標ができた祝いだ！俺が予約した店で上手いもん食っていこうぜー！」

「そういえば、予約してる店ってすぐそこだろ」

「老舗のうなぎ屋らしくてな。まあ相手はちよつと耳の遠いお婆ちゃんみたいだったから心配だけど」

「なら、一回確認の電話入れてみたらいいじゃないか。確か人気店なんだろう？」

人気店でちゃんと予約が入っているのが怪しければ連絡するしかないと思うまお。午後からは大湊基地に第1護衛隊群所属のイージス艦『みらい』が入港することになっている。現在『くらま』の艦長をしている梅津一佐が在艦していた艦であり、挨拶に行くと言っていたのを聞いており、自分も同席したいとお願いしているのだ。それに遅れ

るわけにはいかない。

「電話って、もうすぐそこなのか？」

「確認を怠るのは、艦内では致命的だぞ」

「はいはい。了解しました」

ジト目になったまおに言われて、おちやらけたように敬礼する航平。持参している携帯を手に取り、予約をしているはずであろう店に電話をする。

「……ええ、予約が取れてない!? そんなはずは……ちよつとまっつてください! 今そつちに向かいますから!」

「お、おい! 航平」

どうやら本当に予約が入っているのが怪しいようだ。電話を切るなり、予約を入れていたはずの飲食店の方へと走っていく航平。

「悪いまお! ちよつと確認してくるからその辺ブラブラしててくれ!」

「ブラブラって。はあ……」

まさか置いていかれるとは思っていなかったらしく、ため息をつくまお。周辺をブラブラと言っても、別段周りに何かがあるわけでもない。このまま、航平のあとを追ったほうがマシだろうと考え歩きだす。

「(道端に戦車があるだけみたいだし……本当にこの辺は……) 戦車?」

まるで周りに溶け込むように道路の端で鎮座している戦車を発見する。まさか戦車が止まっているとは思わず、近くまで歩いていく。シルエットの陸自の戦車ではないと即座に判断できるが、もつと近くにいかなければよくわからない。

(T-34……旧ソ連の戦車か。それにこのマークは)

近くまで来ると、停車している戦車が旧ソ連が使用しているT-34だとわかったまお。戦車道の整備士ライセンスを取得する際に、一通りの戦車を覚えていたのが役に立ったようだ。戦車にあるマークからみると、どうやらプラウダ高校が保有している戦車なのだろう。

「どうかしたんですか？故障ですか？」

久方ぶりに間近で見る戦車に興味を持つまおだが、とりあえず人がいるか確認してみることにした。

「もう遅いじゃない！待ちくたびれたんだから……って誰よ!!」

キューポラからこちらを見下ろすように出てきたのは、まるで小学生と思えるほどの小さな少女だった。

(小学生……じゃないよな)

「む！あなた今カチューシャのこと小さいなんて思ったでしょ！」

(おまけに察しが良いな)

思ったことを率直に答えられ、感心するまお。「思っていました」と素直に謝り、なぜこんな道端で停車しているのかを聞いてみる。ついでに少女の名前がカチューシャだと判明する。

「ちよつと戦車の調子を見るために、走らせてたら急に動かなくなったのよ。それで他の隊員が運搬車を呼ぶために行ったの」

「無線機は？」

「それも動かなくなったのよ！」

なぜ一人残していったのかはまおは知る由もないが、皆カチューシャに気を使ってしまったところ全員で行ってしまつたのだ。まおも似たような理由なので今は共通の被害者なのかもしれない。

「べ、別に寂しいとかあるわけないじゃない!!きつと知らせを聞いたノンナたちがすぐに来てくれるんだから！」

強気なことを言っているが寂しかったんだなと思ひ、戦車の後方に移動していく。どうやらエンジンの様子を確認するためのようだ。

「ちよつと見てみていいか？」

「へ?素人が見てもわかるわけないでしょ！」

「まあ見るだけだつて」

そう言うのと手慣れた手付きで蓋を上げるなりエンジンの様子を確認するまお。すぐに「工具箱とかは？」と聞き、戦車に備え付けている工具箱から道具を取り出していく。その様子をカチューシャはジツと見つめていた。

「エンジンの変速機が少し緩んでる。エンジンが上手く動かなくなつたのも、これが原因だろ。整備するときに注意するように担当の整備士に言つたほうがいいな」

すぐさま原因を見つけて、カチューシャに報告する。完全ではないが「少しばかりは動かせるようにする」といい、そのまま修理を始めるまお。

「ふくん。あなた、戦車に詳しいのね」

「昔、ちよつとかじつていたくらいだな」

と言っているが、まおは戦車道専属整備士の最年少ライセンスを持っているので、正直な話かじっているというレベルの話ではない。

「……：そういうえば自己紹介まだだったわね。私はプラウダ高校のカチューシャよ」

「海江田まおだ。よろしくカチューシャ」

まおという名前を聞き、少し小馬鹿にしたように笑うカチューシャ。

「ふふつ、意外に可愛い名前してるのね」

「カチューシャだつて、お人形さんみたいで可愛いじゃないか」

「なっ!?だ、誰が可愛いよ！カチューシャに可愛いさなんていらなんだから！」

仕返しとばかりに、まおに可愛いと言われて指をさして向きになるカチューシャ。顔を真っ赤にして慌てふためく姿は純粹に可愛らしい仕草なのだが。

「全く……ところで、あなたどこかの学校の整備士でもやってるの？」

「いや、戦車の整備士はやってない」

これだけの技術を有しているのに、戦車の整備士をやっていないというまおに疑問を感じたカチューシャ。一目見ただけでエンジンを把握する技術なんて、只者ではないと思っただからだ。そんな生徒はプラウダにだっていやしない。

「ならどうしてこんなところにいるのかしら。プラウダの生徒じゃないようだし。何者なの？」

何者かと言われ、どう答えようか迷ってしまう。素直に「防衛校の人間です」と言うか、「俺の学校はあの基地に浮かんでる護衛艦だ」と言うのがいいのか。

「海上……みんなを守るための勉強してる。そのためにここに寄ったんだ」

まおの勝手な推測に過ぎないが、下手に自衛隊の候補生とか言えばカチューシャがビビるのではないかと思い、率直に、そして安易な説明にすることにした。

「ふくん。なんか胡散臭いわね」

「はは……」

故障臭いと言われて、思わず苦笑いをするまお。それはそうだろう。自分だってそう

思うのだから。カチューシャも興味を無くしたのかそれ以上は聞かないことにした。

「……」

そのまま作業を進めていたまおだったが、時折戦車の方に顔を向けた。

「どうしたの？」

「いや、戦車ってこんな小さかったっけって思ってたな」

今まで散々整備してきたはずだが、久方ぶりに扱った戦車が異様に小さく感じられた。その違和感とは、戦車ではなく護衛艦『くらま』に搭載されている主砲『Mk-4 2 5インチ砲』をいつも見ていたからかもしれない。やはり戦車を長年扱ってきただけに、無意識のうちにそう言ったものを見る習性がついたのだろう。大きさもスペックもT-34と比較すれば圧倒的なものかもしれない。

「カチューシャの戦車が小さいって言うの!?! プラウダにはね、カー^Kバー^Vたん¹が²いるんだから! それを見ればいかに大きいかわかるわ!」

小さいと言われカチンときたカチューシャはキューポラから出ると、まおの前まで移動し、仁王立ちで指を差す。聞いてもないプラウダが保有している戦車のことまで言っている。

「カ、カーバーたん? それってKV-2のことか?」

デカイとカーバーという単語から、旧ソ連軍が誇る重戦車『KV-2』のことかと思

い口に出すまお。推測はどうやらあたりのようでありこれまた得意げに言うカチューシャ。

「そう！偉大なカチューシャを象徴する戦車なのよ！決勝でも黒森峰の Maus な一撃で葬るんだから！」

「ああ、そう言えば決勝はプラウダと黒森峰が試合をするんだっけ」

「ふふん！今までプラウダは万年二番手なんて言われてたけど、それももう終わりよ！ぬるま湯に浸かりきった3年を追いやり、隊長であるカチューシャが引つ張っていつてるんだから！」

カチューシャの言う通り今年のプラウダは確かに一味番う。プラウダは強豪校の一つではあるが、万年準優勝止まり。あと一步というところで、黒森峰にいつも負け越している。だが、カチューシャが入学した当時はそんな万年二番手の環境に甘んじている連中ばかりであり、優勝など来ないだろうという先輩だらけであった。そんなぬるま湯状態をカチューシャは革命を起こした。絶対勝利の名のもとに、カチューシャは実力ある3年を排除し、隊長に就任したのだ。そこまでの道は決して楽な道ではない。その結果がここまでの勝利を齎しているのだから。

「へえ！年生で隊長になったのか。凄いな」

そんな並々ならぬ険しい道など露知らず、勝手にカチューシャ1年生だと思つたまお

は感心する。

「誰が1年生よ!?カチューシャは高校2年生で今年で17歳なんだから!!」

心外とばかりに、顔を真赤にして怒るカチューシャ。一度ならず二度までも間違えるまおに怒り心頭だった。

「あははは、ごめんごめん（なんか……エリカみたいな子だな）」

高飛車なところや、こうしたやりとりを懐かしむまお。相手は向かいから色々と絡んできてきた逸見エリカだ。カチューシャとのやりとりはまさにエリカと繰り広げてきたようなことばかりだった。

『ごどもだけせんしやに乗ってえ!先生に言いつけてやるんだから!!』

『じゃあ、リカちゃんも乗ろう!そうすれば先生にいえないだろ!』

『何度いえばわかるのよ!リカじゃなくてエリカよ!ばかあ!!』

『ぶふえ!!』

『お兄ちゃんが吹っ飛んだ!すご〜い!!』

『ふん。バカまおにてんちゆうがくだったんだ』

幼い日々の記憶が薄つすらと蘇る。それこそちょうどカチューシャくらいの身長の頃の話だ。

(マズイ。また小さいとか思ってる)

これ以上カチューシャを茶化すと悪そうなので、話題を戦車道に戻すことにしたまお。

「…確か黒森峰の隊長は西住まほつて言つて、あの西住流の後継者なんだろう。結構手強い相手なんじゃないのか？」

「ふふん。あなた黒森峰の試合見てないのかしら？」

「試合？ いや、見てないけど…」

最近は海上での航海演習ばかりであり、世間的なことは断片的な情報しか入手できていない。試合の中身までは流石に把握まではしていなかったのだ。まおが知っている黒森峰とはあくまで自分が在籍していた中等部までの話だ。あの頃は自他とも認める最強を誇る強さを持つていたがために、そのまま引き継がれてきてきた隊員ならばそれなりの実力があると踏んでいた。現に黒森峰は話に聞くと今年優勝することができれば10連覇を達成すると聞いている。

「あんな単純なゴリ押し戦闘で勝てるほどプラウダは甘くはないのよ。それに今までの試合だって、前半は西住まほが指揮してるとみただけで、後半からは完全に指揮系統が乱れてきている。そこからはただの力押しよ。記録を見て、西住流戦車道を徹底的に研究したから、抜け目なんかないわ！」

「……」

ゴリ押し戦法と言われ、少しばかり眉を潜める。確かに黒森峰の戦車道は西住流の戦車道とほぼ同じ。強力な重火器を繰り出し、正攻法で攻める戦法をとる。傍から見ればゴリ押し戦法と言われるかもしれないが、まおが知る黒森峰中等部での戦車道は《正面突破を主として柔軟戦法》を取っていたはず。正攻法を司るまほと、柔軟な対応で戦法をとるみほの合わせた戦術だ。もしそれを高等部でもできているのならば、ゴリ押し戦法などとするはずがないだろうと。

(……考えても仕方ないか)

違和感は拭えないが、今の自分は全く関係ない部外者。深く考えたところで答えがでるわけでもない。

「でもいいのかカチューシャ。作戦要項を今あつたばかりの人間なんかに教えて。もし俺が黒森峰の関係者だったら、作戦なんか筒抜けだぞ」

「う……それは」

「全てが上手く言ってるからって、ちよつと調子に乗ってるんじゃないのか？」
「……………」

まおに釘を刺され、バツの悪そうな表情をするカチューシャ。確かに言われてみればここまでの試合の流れは順調に言っていた。誰もが認めよう、今年のプラウダは史上最強だろうと。だからこそ、ここに来て調子に乗ってしまった試合を台無しにするのは決し

て行つてはいけない。

「下手な過小評価も妄想も、ロクなものとは生まない。そんな状態で戦つても、自分たちが積上げてきた努力を一瞬で無駄にする。カチューシャはそんなことをするために努力してきたんじゃないだろ？」

「と、当然よー！」

「なら、それにちゃんと答えないと。みんなカチューシャを信じてるからこそここまで来たんだろ」

「……うん」

まおの言葉が効いたのか、少しばかりシヨボンとするカチューシャ。あとはカチューシャ率いるプラウダの問題になる。優勝できる云々は、最後までやりぬいたほうに軍配がある。それが戦車道というもの。

一通り話を終え、まおは再び修理の方に集中していた。

(むう。当然といえば当然だけど、ドイツとはやっぱり違うよな)

レギュレーションが国ごとで違うのは当たり前ではあるし、まおも久方ぶりに扱い戦車のエンジン。下手に修理するのではなくとりあえずエンジンだけでもかけられるようにすることにした。最悪無線機が使用できればいいはずだ。

「よく見たらあなた、”西住まほ”に似てるわね」

ジツと見つめていたカチューシャが、目つきが鋭くなったまおの顔を見てふと聞いてきた。

「…そうか」

「ほんの一瞬よ。あなたの顔、フワツとしてるから錯覚かもしれないけど」

「フワツとって……」

どんな表現なんだと、疑問に浮かぶまお。確かに小学校のころは間抜けそうな顔と言われたことがあるので、遠からず間違つてはないとは思うが、今はそんな表情をして護衛艦に乗れるわけがない。だが今はそれ以上に気になることができた。

（俺がまほに似てる……）

まほに似ていると言われたことに少しばかり衝撃を受けるまお。自分はずっと父親似と言われてきていただけに、まほに似ているなどと言われたのは初めてだったからだ。

（まさかな…）

考え捨て去り、エンジンの蓋を閉める。応急処置はひとまずこれで終わり。あとは実際にかかるかを確かめなければいけない。

「終わったの？」

「それを今から確かめる」

そのまま、操縦席まで行きエンジンをかける。擬態音が鳴り響き、エンジンがかかる独特な機械音が体を突き抜ける。修理は上手くいったようだ。それがわかったカチューシヤは飛び跳ねるように喜ぶ。

「ホントに直ったのね！すごいわね！」

「いや、一時的に動かせるようにしたっただけだ。それにエンジンが動けば無線機も使えるだろ」

操縦席の蓋を開け、エンジンがかかったことに喜ぶカチューシヤに伝えるまお。

「まあ、迎えがきたから無線機の必要はなかったみたいだけだな」

「え？」

まおが顔を向けたほうを見るカチューシヤ。停車している後方の道路にはブラウダ所有の運搬車がすでに近くまで来ているのが確認できる。言っていた迎えの運搬車の方が先についていたようだ。

「ノンナ！」

停車した運搬車から、背の高い女性が出てきた。カチューシヤが「ノンナ」と名前を読んだ女性は同じくブラウダ戦車道を履修する生徒であり、カチューシヤの腹心であり副隊長を努めている人物。カチューシヤを一人残してきたと間抜けな話を聞き連れて急行してきたのだ。

「カチューシャ、お迎えに上がり…っ！」

戦車のところまで近づいた時、一緒にいるまおの顔を確認したノンナは少し驚いた表情をする。それに気づいたまおは怪しい人物と思われるのもあれと思い、すぐに自己紹介をしようとする。

「ああ。俺は海江田ま」

「彼が戦車を動かせるようにしてくれたのよ！」

まおの言葉を遮るようにカチューシャがノンナに告げる。

「…そうだったのですか。助けてくださりありがとうございます」

「いえこちらこそ。それに困ったときはお互い様ですから」

丁寧に頭を下げるノンナに答えるように、会釈するまお。結局上手く自己紹介できないまま、カチューシャの指示のもと戦車を運搬車に移す作業が始まった。まおは邪魔にならないように路肩の方に移り、その様子を眺めていた。

「ノンナ。ちよつと様子を見てくるから」

「はい。私もこの方に御礼をして向かいます」

どうやら気になるようであり、戦車のもとへと向かうカチューシャ。その場に残されたまおとノンナ。不思議とノンナが言った言葉に違和感を感じるまお。

（お礼…）

先程すでに言葉を交わしたばかりのはず。これ以上何をやる気なのかとまおは気になった。

「お礼つてさっきので十分なんだけど」

まさか饗す気かと思ひ、断ろうとした時だった。

「あなたは、西住まお」さんですね。黒森峰で戦車道の整備長をなさっている」
「！」

ノンナと二人になった途端、振り向きざまにまおに質問してきた。まるで初めから自分のことを知っていたかのように。

「…確かに俺は西住まおだ。でも、整備長っていうのは中等部までの話だ」

自己紹介も満足にできていない内に自分の素性を知っていたことに内心驚くまお。

「知っています。中等部3年の夏季休み時に突如としていなくなつたと。まさかこのような場所でお会いになるとは思いませんでした」

「俺も、まだ自己紹介も満足にできていないのに知られててちよつとびっくりしてるよ。戦車道をしていない人間のことまで調べてるんだなプラウダは」

「調べるも何も、最年少で戦車道整備士のライセンスを取得した方です。その手の方ではかなり有名な話ですよ。それにあなたはあの西住まほの双子の兄であることも有名です。もう少し自分に興味を持ったほうがいいですよ」

戦車道の関連雑誌にもまおのことは何回か取り上げられたこともあるため、少し興味を持って調べればわかることらしい。更には言えば戦車道に精通しているものならば一度は聞く”西住流”。まおはその直系の長男であり、メディアでも有名な”まほ”の兄でもあるのだ。

「ああ、そうかもな。その辺の話はまほとかが多かつたからな」

中等部のころは自分に関することにはあまり無頓着であつたため、そこまで興味はなかつた。だがまお自身の影響は少なからずあつたのは事実であり、高等部での整備長の椅子も約束はされており、就職の斡旋の話まで出ていたのだから。

「そうですか。あの、話は変わるのですが。少しお聞きしたいことが」

「聞きたいこと?」

「なぜ、カチューシャに近づいたのです。我がプラウダの戦術でも聞き出そうとしたのですか?」

そう言った途端、冷たい眼差しでまおを見つめるノンナ。おそらくこちらが本題なのだろう。先程までの親しげにしてくれたような表情は欠片も残していない。見たものを震えがらせる眼差しだった。

「近づくも何も、道端に戦車が止まってて、ちよつと近づいてみたらカチューシャが出てきて、話を聞いてるうちに戦車の修理をやっていたところかな」

「は、はあ。そうだったのですか」

あまりに拍子抜けした対応に若干困惑気味になるノンナ。自慢ではないが、自分の表情はブリザードの如く冷たい表情をしていると。その迫力ある表情を持つて、カチューシャに歯向かうものを黙らせてきたのだが、まおにはあまり効かなかったようだ。もつとのまおの実家はそれ以上に恐ろしい母や鉄仮面のまほを相手にしているわけなので、慣れきっているのかもしれないが。

「まあ俺は仮にも西住家にいた人間だし、対戦する学校の肉親なわけだからな。怪しむのも無理はないか」

自分のことをスパイのように思い、カチューシャに近づいていたら誰だって怪しむだろう。今は戦車道全国大会の決勝戦が近づいている日。プラウダにとっては悲願の優勝が目の前に来ているのだから。

もつとも、作戦要項をバラしかけていたのはカチューシャの方であり、逆に自分が釘を指しましたというのをまおは伝えないことにした。

「ノンナさんだっけ？黒森峰のことは調べてるんだろ？」

「…はい」

だからこそ西住まおという人間を知っているのだ。そしてその実家でもある西住流を。

「黒森峰の戦車道は西住流の影響を受けている流派だ。仮に俺が偵察目的で聞き出してたら、逆にこつちが響燈を買う。俺が知っている限りは」

黒森峰女子園の戦車道は西住流の影響を受けている学校。西住流は『勝利こそ全て』を体現する流派だ。その教えは卑怯な手を使わず正々堂々正面から叩き潰す戦法を取る。その考え事態が正しいかどうかは置いておき、その教えを主とする流派ならば小細工のように話を聞き出すようなことしないだろうと考えを言うまお。

「それは、そうですねが…」

まおの言葉を聞き、ノンナもそれ以上の追求はしなかった。本当に追求をしたかったのは自分が慕うカチューシャに仇する存在なのではないかと考えていたからだ。

「ま、それも今となつては俺にはあまり関係ない話だがな…」

「随分西住流に対し、他人行儀な話し方をされるのですね。あなたはその流派の長男でしように」

仮にも自分の実家だと言うのに、まるで他人事とばかりに喋るまおに違和感を感じるノンナ。

「それに先程あなたは自分のことを『海江田です』と言いましたね。それは一体…」
（流石にそこまでは知るわけないか……）

自分が海自にいることや、なぜ自分が家を出ていったのかはノンナは知らないよう

だ。ネットなどでは入隊式や演習の壮行会などで顔バレで少しばかり騒がれているが、そこまで話題にはなっていない。実際まおが黒森峰や西住家から去つても、メディアでも騒がれていないことから、あくまでも戦車道という大きな枠の中での主役は西住流の後継者であるまほとみほということなのだろうと思うまお。

「俺は、西住の家を出奔した身なんだ。だから海江田まおつて名乗つてる。それに今は戦車道とは全く関係ないところで生活をしているんだ」

「戦車道とは関係ない？ それに出奔ですか？ なぜそんな…」

次々と出てくると言葉に驚くノンナ。黒森峰を出たのは知っていたが、どこかの学校で戦車道の整備士をやっていると思っていたからだ。生まれた頃から戦車に精通し、それを整備する人間。ましてやまおは西住流本家の人間。今更別の道などあるはずがないと。

(……)

なぜかわからないが、ノンナはまおの話聞き入っていた。西住まおという人間は黒森峰の攻略する上で調査はしていた。兄であるまおならば西住姉妹にいくらか影響を与えている部分あるだろうと思いついていたのだ。だがそれも中等部での活躍を期に黒森峰を転校。実際に敵対する関係にはなり得なかったが、不思議と興味は湧いていた。

そして今、その本人が自分の目の前にいるのだから。

「あの……」

「ノンナ！終わったわよ！」

そんな話題に走ろうとした矢先、カチューシャがノンナを呼びに戻ってきた。どうやら戦車の積み込みが終わったようだ。

「じゃあ、これでお別れだな」

「え、ええ。色々ありがとうございました」

「こっちも、久方ぶり戦車イジれてよかったよ」

改めてお礼を述べるノンナ。久方ぶりに戦車を扱うことができたことは良かったと素直に喜ぶまお。

「ね、よかったら。このままプラウダまでこない？戦車を直してくれたお礼もしたいし。プラウダ特製のボルシチがあるの！」

「いや、このあと外せない用事があるんだ。悪いなカチューシャ」

ここまでして貰ったのに、ただで返してはいけなそうと思いまおを饗そうとするカチューシャ。だが、まおの方も航平との食事の約束もあるし、午後からは基地に戻らなければいけないため、カチューシャの誘いを断る。更に言えば、自分の身元が西住まおというのが割れている以上は、プラウダに迷惑をかけかねない。ここは断るのが一番だ

ろうと。

「あらそうなの。それなら仕方ないわね……」

残念そうに、項垂れるカチューシャ。よほどまおにお礼がしたかったのだろう。それを見たまおはカチューシャに言葉をかける。

「試合頑張つてな。陰ながら応援してる」

「当然よね！絶対私達が勝つんだから！」

応援してくれると聞き喜ぶカチューシャ。長いようで短い時間ではあったが、まおとカチューシャ、そしてノンナとの出会いは終わりを告げた。

「じゃあね、マオーシャ！」

「また会いましょうドオ スビダニヤ」

「あ、ああ（マオーシャって、なんか魔王まおうみたいな言い方だな）」

手を振りながらT-34カチューシャとノンナを見送るまお。マオーシャとあだ名を付けられて、困惑気味はまおではあるが、自然とカチューシャという人柄がわかった。あの小さな身長の子だ。まおもカチューシャと対面したときもそうだったように、甘く見られて、苦労が多かったのは間違いない。だが、カチューシャはプラウダの隊長を努めている。そこまでの道のりは険しかっただろう。そしてそのカチューシャを支えているのがあのノンナということなのだろう。

「頑張つてな。カチューシャ」

決勝はもう間近。お互い屈託のない試合をしてほしいものだ。

(決勝戦が終わったあとにみほに電話するか……)

黒森峰もプラウダと同じくまた決勝を控える。隊長であるまほとそれを支えているであろうみほに下手に干渉するのはやめたほうがいいだろう。

今は10連覇がかかった決勝戦。邪魔立てはせずにことが終わったあとに連絡することにしたまおだった。



「あの、みほさん……みほさん！」

「ふえ!? な、なに? 小梅さん?」

黒森峰女学園にある戦車道で使用するとある作戦室。本日の訓練報告をまとめるために、副隊長であるみほと、その手伝いのために同じ履修生である赤星小梅が中にいた。

「な、なんか上の空のようだったの……」

「ちよつと考え事してて……ごめんね心配かけちゃつて」

中等部1年からの付き合いであり、みほにとつては数少ない友人である赤星小梅。西住流という枠に囚われることなく接してくれる人物でもあるのだ。

「隊長となにかあったんですか……」

「うん。急にフラッグ車を変更するって言われて。1回戦からずっと隊長車にするはずだったんだけど」

「きつと隊長はみほさんを信じて託したんですよ」

「そうだと、いいんだけど……」

なぜ、自分にフラッグ車を託したのか未だによくわからないみほ。急に呼び出されたかと思うと、いきなり作戦変更を言ってきたのだ。もう決勝戦まで日がないというのに。

『みほ。お前なら私の気持ち理解できるはずだ。だからこそ、それに答えてくれ』

『う、うん』

『頼むぞ。黒森峰が、いや西住流こそが最強の王者だということを知らしめるんだ。私とみほの二人でな』

『お姉ちゃん……』

作戦変更の話聞いた際に言われたまほの言葉。以前のまほならば、考えていることが大方わかっていたみほ。仲間を理解し、共に戦っていくことが中等部での戦車道だったからだ。でも今は違う。まるで弱肉強食かのように、強いものだけがのし上がっていくような場所になっていたのだ。そしてそれを率先し、率いたのが誰でもない姉であるまほなのだ。

ただ一つだけわかるのは、まほがまるで何かに追い詰められているように見えた。

そしてそれをみほに理解して貰おうと必死になるように。あのフラッグ車変更の理由はもしかしたらそう言った意味があるのかもしれないが、今のみほはそこまで考える余裕はなかった。ようやく得られたまほのことで頭がいっぱいだったからだ。

「あの、隊長もそうですけど。エリカさんともなにかあったんですか？」

「え……」

「みほさんの部屋から飛び出してくるのを見ちゃって……」

どうやら、エリカが部屋に乗り込んできたのを小梅は目撃していたようだ。かなり血相を変えて部屋を出ていったのを見たのでなにかあったのではないかと思い、恐る恐る聞いてみたのだ。

「……実はお兄ちゃんのことです」

「西住整備……まおさんのことですか？」

まおの名前が出てきて驚く小梅。

「うん。実はお兄ちゃんが出ていってから色々調べてたんだ。いきなり出ていって、どこにいるのかもわからなくて。それがエリカさんにバレちゃって『こんなことするくらいならプラウダ戦でも考えなさい』って」

「みほさん……」

エリカと一悶着を起こしたあの日。母にも姉にも隠れて調べていたまおの足取り。ウジウジしているだけでなく、自分から動き出したが、運悪くエリカに見つかってしまい叱責を受けてしまう。だが、理由は不明だがまほから特に何も言われていないところから別段言いふらしてはいないようだ。

「実はお兄ちゃん。海上自衛隊に入るって言って出ていったんだ」

初めて小梅に打ち明けるあの日の出来事。小梅自身も、なぜまおが黒森峰から出ていったのかは本当の理由は知らなかった。様々な憶測が広がり、何が本当のことなのかわからないまま時間が過ぎていた。だがちょうどその頃からだろう、まほが急に変わってしまったのは。高等部に上がり、改めて西住まほを隊長に据えて戦車道を初めた時、中等部とは雰囲気も体制も。そして、中等部では笑っていたまほの笑顔すらも。

「海上…自衛隊にですか。でもみほさんの家は…」

しかし小梅は疑問に感じた。彼女は知っているのだ。みほの父親が海で亡くなっているということ。それが原因でまほやみほがあまり海という場所に関わろうとしないのも。それはきつとまおも同じことだろうと。

「うん。それで反対したんだけど、結局は家を飛び出していちやつて。それつきりで…」
最後に会ったのはあの喫茶店での会話つきり。家に帰ってもまおの姿はどこもなく、『まほをよろしく頼む』というメールを残して。

「これ…」

小梅に自分が調べたまおに関する資料を見せた。資料と行っても、まおが写っていた写真を出しただけであり、それ以上は調べようがなかったのだが。

「まおさん…」

みほから手渡された写真を眺める小梅。言う通り、確かにそこには見知った顔をした人物であるまおの姿が写っていた。

「海上自衛隊に行かれていたんですね。本当に…」

いつもつなぎ服を着用しているイメージしかなかったまおが、海上自衛隊の制服に身を包み、見たこともない表情で整列している姿が写っている。

「防衛学校に電話して見たんだけど、『西住まおという人はいない』って言われちゃって」「そんな！この写真に写っている人はどう見てもまおさんですよ！」

自分ですらこの写真を見てまおだとわかるのに、聞いたら違いますという反応をした防衛学校に疑問を浮かべる。何を隠す必要があるというのか。

「うん。私もそれは思ったんだけど、相手は自衛隊だから。そんな深くは聞けないし、きつと教えてくれないと思う」

「なにかカラクリがあるんですよ。あの、私も一緒に調べてもいいですか？」

「え、小梅さんも？」

「はい。その、私もまおさんにも色々お世話になりましたし、それにいきなり出ていってみんなに迷惑をかけてるんですから一言ガツンと言いたいですし」

「あははは……でも、いいの？小梅さんにも迷惑かけちゃうし……」

エリカに散々言われてしまい、少し傷心気味なみほ。小梅にまで迷惑をかけるのではないかと思いい心配する。そんなみほに対し、小梅は笑みを浮かべて返す。

「友達が困ってたら、助けて上げたいじゃないですか」

「小梅さん……ありがとう」

小梅の気遣いに思わず嬉しくなり涙目になるみほ。やつぱり友達という存在は本当に大切なんだと改めて痛感するも、次の小梅の言葉で少し冷めてしまう。

「でも、写ってるまおさんの表情。なんか凛々しいというより、格好いいって思いました」

改めて写真に写るまおの表情を見て、純粋にそう述べる小梅。彼女もまた、ハチャメチャだった中等部時代を過ごしてきたのだ内の一人なのだ。真剣な表情なんて10秒も持たず、滅多に見れなかったまおの凛々しい表情に笑みを浮かべる。

”もしかしたら、これが本当のまおの顔かもしれない”と小梅はこころの中で思う。

「お、お兄ちゃんが？まさか……」

先程の感動がなんのその。そんなことを言う小梅に何を言っているんだと驚きを目

が点になるみほ。こんな凛々しい表情をした人物が兄だとは思えなかった。だってそうだろう。みほの知る兄とは、幼少期の頃から馬鹿げたことをしてはいつも母に怒られていたばかりだったのだから。でも、いつも張り詰めていた西住家を和むようなことをしていたことを知っていたからこそ、そんな兄が好きだったみほ。

（お兄ちゃんのこと……格好いいなんて思ったこと。いままでなかったかも……）

自分のこれまでの人生で、姉であるまほは対しては格好良いという印象を抱いたことはあつたが、兄であるまおを格好良いと思つたことはなかったみほ。クラスの中にはまおのことをイケメンと言っているのを聞いたことがあつたが、まおという人間の行動を見てきただけに、そう見ることはなかった。《ダサくて優しい》。それがみほの抱いているまおの印象なのだから。

（なんか……不思議な感じがする）

改めてまおの表情を見ると、姉であるまほと重なって見えてきていた。もとより双子ではあるが、二卵性双生児であるため、顔つきなどは全く違っていた。まおは父親似、まほは母親似と、それぞれの特徴を持っていたが、今のまおの表情や顔つきはまほによく似ていたのだ。もしかしたら、本当は稀にしか生まれない異性一卵性双生児なのかもしれない。

（違う……違うよ。私の知ってるお兄ちゃんは……こんな顔なんかしないよ）

兄までもが、姉のように冷徹な表情をすることが信じたくないみほだった。

VOYAGE—7 《声のない悲鳴 to MAHO》

—あいつは…あいつは！

『約束約束！僕はまほと一緒にいるよ！』

—あいつは、私を裏切った!!

『まほ。黒森峰、無事に合格したぞ。一緒にやっていけるな』

『ああ、お前がいれば百人力。みほが来れば千人力ってところだな』

『ははっ、なんだそれ』

—信じていた！信じていたのに！お前は、私を置いて!!お前は!!

—壊してやる。お前がいた場所も、何もかも。

「整備を2日繰り上げて終わらせろだど!!無茶苦茶にもほどがあるぞ!!」

「黙れ。それがお前達整備班の役目だろ。言われたとおりにやれ」

「ふざけんな!!俺たちはお前の都合のいい手足じゃないんだぞ!!まおがいなくなったからって俺たちに当たるな!」

「なんだと。誰が…!!」

裏切ったのはアイツだ!!

「そうだ。悪いのは私じゃない。アイツが悪いんだ。アイツが私を裏切ったからだ!!
だからお母様も、切り捨てたんだ。」

「師範代。西住流のためとはいえ身内をも切る精神は、正直尊敬に値にしますよ。今後
も西住流を含め、日本戦車道を牽引していくのはあなたを置いて他にはいないのですか
ら」

「え、ええ……」

「何を躊躇う必要があるんだ。まおを勘当したのは、お母様。あなたでしよう? あいつ
は西住流の恥晒しだと。裏切りものだ」と断罪したのは。

「それは……」

「あいつは西住流の恥晒しです。いなくなつて清々しています」

「躊躇う必要はない。あいつは裏切りものだ。」

「流石は西住師範代、しほ殿のご令嬢だ。実の兄であつても、断罪する精神はまさに鋼の
心ですな」

「やはり、西住流の教えを想定より早くしたのは間違いなかつたな。これで西住流は盤
石だ」

「そうだ。私はお母様の時よりも早くに西住流を教えを受け、ここまでやってきたの
だ。」

「当然です。私は西住流の後継者。私の精神は西住流そのものです」

私は幼少期からそれを教えられてきた。

いつも見てくれていたお父様に縋るような自分は捨てた。

捨てたんだ。

「黒森峰は強者のみを必要とする、ついていけない弱者は邪魔なだけだ。エリカ、中等部から共にやってきたからと言って、お前でもそれは変わらない」

「は、はい」

情など西住流には必要ない。例えそれがかつて共に戦った戦友チームメイトといえど。

”だから、アイツは私にとっては何でもない”

『必要以上に攻撃を加えるのは王者の戦い方ではないわ。あれではただの無法者の戦い方よ。西住流とは…』

だからお母様も黙って見ていてください。

私が西住流の戦車道を知らしめる。

そのためには、ついてこれない者は切り捨てる。

「みほ。私達で黒森峰を勝利に導き、西住流戦車道が王者だと言うのを知らしめるんだ」
「……うん」

だが妹のみほは違う。みほはずっと私と一緒に西住流戦車道を極めてきた。

中等部のような、チームによる勝利などではなく、強さによる勝利こそが西住流なんだ。

だから、そんな不安な顔をするなみほ。お前ならわかるはずだ。

今のお前に必要なのは裏切った”アイツ”じゃない。

この私のはずだ。

だからこそ、西住流を”理解”しているはずのみほを再び副隊長に据えた。

お前は西住流の娘で、私の妹だ。

そして戦車道を共にやってきた。

勝利こそが西住流の全てだ。

向かってくる敵は全て叩き潰す。例えば、一台のみであろうが容赦はしない。

黒森峰女学園の10連覇は私が成し遂げなければならない。

上役たちのように、西住流という強さを示しさえすれば、きっと誰かが私を”西住ま

ほ”を認めてくれる。

そうでなければ私は…私は…

『隊長！副隊……が飛……出して……私達ど……動けばいいんですか!?!』

悲鳴にも近い、声が無線機から聞こえてくる。その言葉を聞いた瞬間、私の頭が焦りと恐怖で塗り替えられていく。

「っ……動くなみほ！フラッグ車を離れるな!!みほ!!」

マイクに向かって叫ぶも、聞こえてくるのは雑音と豪雨による轟音だけ。

『戦車―川…落ち……』

無線からの声が雑音が酷く何が落ちたというのかよく聞こえない。ただわかるのは、みほがフラッグ車を放棄したということだ。

『プラウダの……車が……!! た……長!』

やめろやめろ。

「みほ!! 勝手に動くな! 私の指示を聞け!!」

なぜ、勝手に動くんだ。

なぜフラッグ車を離れるんだ。

行くなみほ!

なんで、なんでお前まで行くんだ!

頼む行くな!!

勝たなければいけないんだ! 勝たなければ!!

どうしてわかってくれないんだみほ!!

どうしてだ!“アイツ”は私を、私を理解してくれたのに!!

頼む——

『く、黒森峰女学園！フラッグ車！行動不能！』

頼む——

私を……
一人にしないでくれ……

頼む…助けて…まお

VOYAGE—8 《声のない悲鳴 t o MIHO》

物心がついた時、私こと西住みほには姉まほと兄まおがいた。

姉である西住まほは、とつてもかっこよくて、頼りになるお姉ちゃん。

そして兄である西住まおは、お姉ちゃんとは真逆でいたずら旺盛で、みんなからはバカって言われて、かっこいいとは言えないけど、とつても優しいお兄ちゃん。

そんな二人の兄と姉、厳しいけど優しいお母さん。そして、いつも笑顔を絶やさず、太陽のように温かいお父さん。

私を入れてこの5人が私の家族。

それだけなら、本当にごく普通の家族であつたのかもしれない。

でも、それは違う。

一つだけ違うことがあつた。

『西住流戦車道』

戦車道を嗜む者ならば必ず一度は耳にする流派『西住流』。

”撃てば必中 守りは固く 進む姿は乱れ無し 鉄の掟 鋼の心 それが西住流”

”勝つ事”強き事”を尊び、情などに流されずに必ず勝利する戦車道。

それが私の生まれた家の宿命ともいえる存在だった。

小さい頃の私は、流派とかよくわからずお姉ちゃんやお兄ちゃんや戦車を乗り回しては遊んでいた。

本当に楽しくて、それがずっと続けばいいって思っていた。

でも、それは長続きはしなかった。

まだ小学生低学年だった頃、西住流戦車道を本格的に指導が始まった。

それは本当に厳しくて、その時のばかりはお母さんが鬼のように怖かったのを今でも思い出す。

でも、ちゃんと戦車を動かせばお母さんは褒めてくれたし、何より憧れのお姉ちゃんと一緒にやっているのだから乗り越えることができた。お兄ちゃんやお父さんも応援してくれている。

西住流をまだ理解できない私ではあったけど、みんながいてくれればそれで良かったと思った。

そうやって自分は大きくなるのだと信じて疑わなかった。

でも、私にとって”最大の転機”が起きた。

欧州でのプロ戦車道の専属整備士の講習という名目で、一月ほど日本を離れなければいけなかった。

父は海が好きだったため、時間はかかるが、飛行機ではなく船での移動を要望した。

家族一緒に港まで行き、父を見送ったあの日。最後の最後で泣きながら『行かないでお父さん!!』と言って父に抱きついたのを思い出す。寂しくもあつたが、父は必ず電話や手紙を書くから安心しなさいと行って向かっていった。私もそれを信じて、父に手を振って見送った。一ヶ月我慢すればまた会える。いつでも声を聞こえるのだから、大丈夫だと。

でも、父は二度と生きて私達の前には戻っては来なかった。

戻ってきたのは、お父さんだった遺体。

つい数日前まで、いつも変わらない優しい笑顔でいたお父さん。

世界が閉じた感覚がした。

始めてみた人の死。その最初の人が自分のお父さんだった。

いつも頭を撫でてくれた暖かい手は、氷のように冷たくなっていった。

子供の頃の私は、それを死と理解するのに時間は長くはなかった。

『あああああん!!お父さん!!お父さん!!』

お父さんが死んだその日から、私達の家族は4人になった。

それからというもの、私は自分でも驚くくらい、大人しい性格になった。いつものように明るくできるようなことができなくなった。それだけお父さんの死がショック

だったのだ。あの日から全てが変わった。ガレージでいつも戦車の整備をしていたお父さんの姿はない。お父さんの姿はもうあの遺影が入っている額縁の中でしかなかった。

悲しみと寂しさ。それが全て押し掛かってきた。

だけど、お兄ちゃんはそれを全部取り払おうとしていた

『父さんがいなくなつて、僕がいるだろ！それにまほやみほだつて！天国で見てくれる父さんに僕たちは大丈夫だつて見せてやればいいんだ！言うだろ三人寄れば文鎮の知恵だつて！』

『それを言うなら文殊だバカまお』

『え、あ、そう？』

『ぶふつ、お兄ちゃんカッコ悪い…』

正直、お兄ちゃんは「希望」だと思つた。私の……きつとお姉ちゃんにとつてもそうだと思つた。

前まではお互い喧嘩していたのに、逆にびっくりするぐらい仲が良くなった。

『まお』

『戦車の整備ならもう終わったぞ。あとで見といてくれ』

すごいやりとりだと思つた。お姉ちゃんはお兄ちゃんを呼んだだけで、そこまで理解

しているのだ。それが少しだけ羨ましいと思った。でも、お兄ちゃんは昔から私のことも何も喋らなくても理解していた。

「何かあったのかみほ？」

黒森峰中等部に入學してから何週間かたった日に、たまたま二人で夕食を食べているときに、ふとお兄ちゃんが話しかけてきた。

「ふえ？ど、どうしたのお兄ちゃん？」

「まほと何かあったんだろ？そんな顔してる」

本当にお兄ちゃんには敵わない。何も言わなくても私の考えがわかるみたいだ。悩み種はもちろん、お姉ちゃんとの関係だった。中等部に入っていきなり副隊長に任命され、気難しい言葉をかけられることも多くなったと。

「アイツはちよつと口数は少ないけど、みほのことをいつも心配してるよ。まほもなみほと一緒に戦車道ができることが嬉しんだ。だからちよつと力を入れすぎたんだろ」

「そうなの……かな。なんかお姉ちゃん、中学校に入ってから冷たくなった気がして。まるで、お母さんみたい……」

「まほはな。恥ずかしがり屋なんだ。それに母さんも同じだ。前にロボットじゃないかとか言ってたけど、そんなことはない。母さんも父さんが亡くなって大変な中、俺たちを育ててくれているんだ。絶対にみほを蔑ろにするようなことはしてない。俺が保証

する。俺がな」

「ふふっ。ありがとうお兄ちゃん」

正直、どこからその自信がくるのか不思議だったが、その言葉は嬉しかった。もとより、お姉ちゃんが口数が少ないのは知っていたし、お母さんも優しい人だとずっと昔から知っている。

「でも、私これからやっていけるのかな」

「安心しろ。俺が黒森峰を楽しいところに変えてやるよ。約束する」

親指を立てて、任せろと言ったお兄ちゃん。この言葉は後に本当に実行され、質実剛健と言われた黒森峰女学園の戦車道は大きく変わった。黒森峰にいることなんか忘れろくらいに。お姉ちゃんともお兄ちゃんを交えて改めて話をして、一緒に頑張ろうと言ってくれた。

お兄ちゃんはいつも、悩みを解決してくれてきた。

「お兄ちゃん！」

「ん？なんだ、急に畏まって。このエビフライならやらないぞ」

「ち、違うよ！」

もう、そんなことじゃないもん。

「えっと……お兄ちゃん……その、ずっと一緒にいてくれる？」

「こう面と向かって言うのは恥ずかしい気持ちはあったけど、どうしても聞きたかった。」

「そんなの…当たり前前だろ。俺はみほのこと見守ってる。だから心配すんな」

その言葉が聞けただけで、良かった。

「でも、なんでそんな急に聞くんだ。前にも同じこと言ったような……」

「えへへ。なくんでもない！早く食べてポコ見ないと！勿論お兄ちゃんの部屋でね!!」

「うえっ！また、ポコかよ。俺の部屋じゃなくてもリビングでも見れるだろうに」

「お兄ちゃんの部屋のテレビが一番大きいんだもん」

「なんだそれ…まああんまり遅くなるんじゃないぞ」

「うん！」

純粹に嬉しかった。お兄ちゃんもいつでもそばにいてくれる。

それが私には嬉しかった。

なのに……

でも、そんなお兄ちゃんはこの家を出ていった。

信じていたのに。そばにいてくれると言ったのに。

その時の私はいろんな感情が入り混じり、普段なら絶対に考えないようなことまで思ってしまった。

”お兄ちゃんは《西住流》なんて関係なく自由にやっつてゐるなんて、ずるいよ。いつつもそうだった。戦車道もやつてないからわかりっこない”

家を出ていった当初。私はお兄ちゃんに、少なからず嫉妬と怒りの感情抱いたことがあつた。こつちは西住流師範代の顔となつた母に毎日怒られてばかりの日々が続いているのに、お父さんの夢を継ぐとか言つて、私たちを捨てたことに許せない気持ちがあつた。お姉ちゃんだつて、きつとそうした気持ちがあつて、お兄ちゃんを裏切り者呼ばわりしたんだと思つた。

そして何より、お父さんを奪つた”海”に行こうとするのが許せなかつた。

こんなに心配しているのに、出て行つてしまつた。どうしてこんなときに限つて私の気持ちを理解しようとしなののか。

だからお姉ちゃんの言う通り、兄のことを忘れようと思つた。

でも、お兄ちゃんを”嫌い”になるなんて出来なかつた。

寂しかつた。

本当にただそれだけだつた。

やつぱり、お兄ちゃんにはそばにいて欲しかつた。いつもみたいにバカやつて、笑つていたかつた。また前にみたいはどこかに連れて行つて貰いたかつた。お兄ちゃんがいてくれればお姉ちゃんだつて、こんなに変わらないで済んだんだと。

当然だったと思う。中等部だってお兄ちゃんがいたからこそ、みんながみんな。戦車道を楽しみ、勝利を掴みとっていたのだから。お姉ちゃんもそれをわかってくれていたのだと思った。いつも戦車道に口を出していたお母さんも、お兄ちゃんが始めたことには何も口を出さなかった。

お父さんが死んだときも、いつも元気づけてくれたのは他ならないお兄ちゃんだったからだ。

”お兄ちゃんがいれば全部解決する”

それが私の出した答えだった。

そうすればきつとお姉ちゃんも昔のお姉ちゃんに戻ってくれる。

家族で楽しかった時間が戻ってくるのだと信じた。

だからこそ、私はお兄ちゃんの足取りを調べるようになった。

”海上自衛隊”

そこが兄が入った場所だった。自衛隊のことは、授業でテレビで知っていた。お母さんも陸上自衛隊の講師をしているのは知っていたし、教え子の一人でもある蝶野亜美という自衛官とも何度か顔を合わせたこともある。陸上自衛隊の一大イベントでもある総火演にも一緒にいったことがあった。

だが、お兄ちゃんが向かったのは海上自衛隊。今まで興味も関心も全くなかったとこ

ろだった。

”海江田四郎”

その人物が私の出発点だった。この人はお父さん西住常夫のお父さん。つまり私のおじいちゃんということになる人物だ。

”海自始まって以来の英才”と言われるほどの自衛官であり、未だに名前が残っているほどの人。更には、その父である”海江田巖”は”海上自衛隊の立役者”と言われて、海上自衛隊に功績を残したということ。そんな人物が自分の親類だったのも驚いた。でも、お兄ちゃんもお父さんから話を聞いたと言っていたので、その辺はすでに知っていることだろう。だが、わからなかった。どれがお兄ちゃんを突き動かすものがあるのかわからない。私はそのままお兄ちゃんが残したものから色々調べていった。そして、ついにお兄ちゃんの姿を見つけることができた。

TV—3520—練習艦《くらま》。

この船にお兄ちゃんは乗っているようだ。壮行会での映像にはその船にのる姿がしっかりと映っている。確かお兄ちゃんが写っていた写真に同じようなシルエットの船があったはず。

やつと、ここまで来ることが出来た。

嬉しかった。嬉しかったはずなのに…

だけど、久しぶりに見たお兄ちゃんは、別人みたいだった。

違う。私がいいたかったお兄ちゃんはこんな顔なんかしてほしくなかった。

これではまるで、お母さんやお姉ちゃんと同じ表情をしている。冷たくて、怖い。

そんな顔なんかしないでよ。

私の知ってるお兄ちゃんは、こんな顔なんかしない。

話したい。今すぐお兄ちゃんの声が聞きたかった。

でも。私にはそこまで行き着くまでの時間も余裕もなかった。

全国大会の決勝が始まる。それが終われば、解放される。

そうすれば、今度はたくさん時間ができる。夏休みに入れば直接出向くことだってで

きるのだ。

小梅さんも、協力してくれるって言ってくれている。きつとお姉ちゃんにも話せば一

緒にやってくれるかもしれない。お姉ちゃんだって本当はお兄ちゃんにいて欲しいと

思っているはずだ。

今は心を無にして、隊長であるお姉ちゃんの言うことだけに従う。

これが終われば区切りがつくんだ。

勝てばきつと、何かが変わる。お姉ちゃんだって、きつと……

でも…

『み、水が!!助けて!!』

小梅さんが乗る皿号が崖から滑り落ちるように増水した川へと転落していく。同時に無線機からは、助けを求める乗員の悲鳴が聞こえてくる。

「あ、ああ……」

それを見た私は全身の体が震え上がった。あの時のことの記憶が呼び起こされる。

冷たくなった父の姿を。

「いやっ!!」

気づけば私はキューポラから飛び出し、一目散に流されようとしている戦車に駆け出していた。まだ間にあう。今行けば助けられる。無我夢中で、泳いで、泳いで……

記憶が残っているのは、すべてが終わったあとだった。

「返しなさいよ！それは私達が今まで持つてた優勝旗なんだから！私達の……優勝旗なの……」

エリカさんの悲痛な叫びが聞こえてきた。選手たちの阿鼻叫喚。もう試合会場は滅茶苦茶だった。正直何がおこったのか記憶にない。

”黒森峰女学園、悲願の10連覇ならず”

その事実だけが、伸し掛かった。

そして、次に気づいたときには、お姉ちゃんが私の肩を掴んでいた。

「どうしてだみほ!!どうしてフラッグ車を放棄したんだ!!どうしてわかってくれないんだ!みほっ!どうして!!」

肩を揺さぶられ、まるで懇願するように言ってくるお姉ちゃんに私の心は限界だった。

「わ、わからないよおっ!!私はお姉ちゃんじゃないもん!!お姉ちゃんのこと……何もわからないよ!」

お姉ちゃんの気持ちなんて一つもわからない。何も言わなくても理解してくれるお兄ちゃんと私は同じじゃない。

それなのに、お姉ちゃんの方こそ、どうして私をわかってくれないの!?

小梅さんの乗ってる戦車が落ちたんだよ! 仲間が大変な目にあっただよ!!

『まほはみほのことをいつも心配してる』

かつてお兄ちゃんが言ってくれたことを思い出すも、今のお姉ちゃんは全然違う。

勝つことがそんなに大事なことなの!! 私はお父さんにみたいにもう誰も死んで欲しくないから!!

なのに、お姉ちゃんは……お、お姉ちゃんなんて……

「お姉ちゃんなんて”大嫌い!!”」

手を振りほじめて、絶叫するようにそう言った。言ってしまった。

その時の私は何もわかってもらえないお姉ちゃんに、それしか言えなかった。

「あ……わ、わたしは……ハハハ……また、アイツか……まおが……!!」

お姉ちゃんが何かブツブツ言っているのが聞こえるが、今の私がそんなことをまともに聞ける状況ではなかった。

私も限界だった。

でも、私は勝ちよりも大事なことを守ったことは正しいと思っていた。

思っていたのに……

「アンタが助けにいかなければ10連覇できたのに!!」

「隊長の目指す勝利至上主義を否定したのよ!!」

「それでも西住流なの!!」

なのに、なんでみんなそんなことを言うの？

「……………」

どうしてお姉ちゃんはわかってくれないの？

「あなたも西住流を継ぐ人間だといいい加減自覚しなさい。犠牲なくして大きな勝利を得ることはできないのよ。それをよく考えなさい」

どうしてお母さんは私を怒るの？

だって、人を助けたんだよ。

私、間違ったことなんかしてないもん。

お兄ちゃん……

私、何も間違ったことなんかしてないって言っつてよお…

『俺はみほのこと見守ってる。だから心配すんな』

約束したのに！

嘘つき！どうして、そばにいてくれないの？

助けてよ…

お兄ちゃん……！！

VOYAGE—9 《無力》

「射っ!!」

号令と共に、くらまに装備されている対潜ミサイル“アスロック”を装填しているランチャーから一筋の火が吹き、轟音と共に空中へと解き放たれていく。轟音はすぐさま風切音へと変わり、練習目標である海上へと一直線に飛んでいく姿はまさに意思をもった矢の如く。

「おお…」

軌道を描くように空中を飛翔しているミサイルに思わず目が追いかけてしまう航平。露天艦橋^{ウイシン}から見るミサイル発射の瞬間は、横須賀を出港してから何度か目にする光景ではあるが、やはりいつ見ても言葉に言い表せない感情がこみ上げる。

「小暮、ちゃんと録画しておけよ。しっかり撮影しておかないと広報部からうるさいからな」

同じ船務科所属であり直接の上官である麻生掌帆長は飛翔しているアスロックを確認しながら、航平に指示を出す。

「任せてください掌帆長。ばっちり撮ってますから」

航海演習の記録用として航平のヘルメットには小型カメラが備えられている。これまでの艦内での状況や演習内容が記録取められており、その様子を時折海上自衛隊の広報がホームページや動画投稿サイトなどに配信されている。本来は通常の艦艇で行うが、少しでも海上自衛隊を知ってもらおうと練習艦隊としては初の試みだったりする。

「掌帆長。SH—60J1号機、2号機、目標に向かっていきます」

「おう」

麻生掌帆長が見つめる上空には、くらまに搭載されているSH—60J二機が状況確認するように飛行している。現役時代は対潜哨戒を主としていたこのくらまにとってはなくてはならない存在。

「アスロックの次は、短魚雷ですか？」

「定石通りならな。現在本艦は魚雷攻撃を受けている前提だから、操艦の判断が遅れれば、魚雷の的にもなるし、防禦の航路も間違えれば不発に終わる。いかに迅速かつ正確に伝達するかが大きな鍵になる」

「でなければ、この艦はあつという間に海の底ですか……」

「そうだ。自分たちの身を守らなければ、人の命など守れるわけではないからな。我が身を守り、生き残る戦闘こそが、他を守ることに繋がる」

生き残らなければ、守れるものも守れない。命を守るのは決して容易なことではない

と、改めて認識する航平。

「一つでも指示を間違えたらですか…自分たちも正確に指示を聞かなければいけませんね」

「何、今日は海江田の初の操艦指揮だ。その指示に従おうじゃないか」

艦橋の方に目を向ける麻生掌帆長。そこに映るこの艦の航海指揮官をしている姿を見ていた。

「……………」

従羅針儀のそばで、針路を確認するかのようにジツと見つめているまおの姿。そう今現在このくらまの操艦指揮を担当しているのはまおがしている。

『第三戦速。面舵…040。ヨソソロ』

戦闘指揮所

もつとも現在は戦闘訓練であるため、本来の操舵指揮はCDCから指示が行われているため、艦橋に備えられているスピーカから針路などが指示される。だが、航海指揮官としてそれらを正確に伝え、艦橋全員に伝達し指示を飛ばさなければ一瞬で艦は海の底だ。今までは専ら訓練の様子等を眺めていることしかしていなかったまおもいよいよその訓練を身を以て感じる時がきたのだ。若い年齢だとかそんなのはここでは一切関係ない。入隊し、他の候補生とは一步も二歩も先をいく特進科として決して逃れられない道なのだ。乗組員全員の命を預かる立場に、ひいては日本を守る要にならなくてはな

らない。

「第三戦速。面舵040。ヨーソロ！」

速力、針路を伝えられるとすぐさま、復唱し操舵手へと伝えるまお。若干声に緊張が含まれるのか、少しばかり声に張りが見られる。

「落ち着け海江田。冷静に指示を飛ばせ。お前の声ならしつかりみんなに聞こえているぞ」

「はっ、了解！」

すぐそばで見ている航海長も、緊張気味のまおの肩に手を置き落ち着かせるように言う。その言葉どおり、くらはまは指示された針路へとゆつくりと旋回を始める。

「雷跡視認！距離1500！」

見張員から本艦に向かってくる魚雷の状況が伝えられる。もともと訓練であるため、実際に向かってくるわけではないし、見えているわけではない。魚雷への対応、防禦のための短魚雷発射と絶え間なく状況は変化していく。

「教練対空戦闘用意」

対潜戦闘から続いて対空戦闘の号令が掛かる。

「第二戦速。取舵」

すぐさま針路の変更を指示するまお。すでに操艦による訓練は大湊基地を出港した

時からひっきりなしに行われている。占位運動、戦術運動、洋上補給、艦隊行動等、変化する訓練内容を慌てずに捌いていかなければいけない。途中悪天候に見舞われ、荒れ狂う洋上を航海する訓練も実施されている。それが終われば報告書としてまとめて航海長に提出する。その結果を踏まえて、来年、そして任官された際のそれぞれの配属などが決まっていくのだ。

その後、数時間に及ぶ本日の訓練過程が終了し、艦内は通常配置へと戻される。

当直を交代し、夕食を撮るために艦内通路を歩いていたまお。朝から操艦訓練をしてきたまおの表情はどこか疲れたような感じだった。

「さすがのお前でも、朝からガチガチだったな」

「ガチガチしないやつなんていない」

途中で合流した航平と一緒に今日行われた訓練内容について話していた。航平の言う通り、戦闘下での航海指揮官は初めてであり、緊張の一日だった。

「お前と同じ特進科の梅野さんはCICで攻撃指揮官してたらしいけど、概ね冷静だつて聞いたぞ」

「あの人は、顔に出さないタイプなだけだよ」

梅野とは3歳年上のまおと同じ特進科の候補生であり、父親や祖父も海上自衛官というまおに負けず劣らずの海軍一家でもある。1年時の成績も首席であり、非常に優秀な候補生の一人でもある。因みにまおは次席だったらしいが。唯一違ふとすれば、父親も祖父も全員存命しているということだけだ。

「でも明日はいよいよ、深町艦長率いる『たつなみ』の探知訓練だろ？ かなり大変なことだつて船務長たち行つてたけどな」

明日は潜水艦の探知訓練を行うのだが、その相手はあの深町艦長が乗る『たつなみ』だ。

「相手が誰であろうと訓練通りにやるだけだ」

とは言うものの、類まれの操艦技術を持つ深町艦長を相手にするのは相当な苦勞をすると踏んでいた。後にも先にもアメリカ海軍の原子力空母『カール・ヴィンソン』を5回も仕留めたのは、深町艦長と亡き海江田艦長の二人であり、この記録はまだ塗り替えられてはいない。定石通りの手が通じないことでも有名であり、補足するのは容易ではない。

「さつさと飯食うぞ。今日は士官室使えなから俺も科員食堂で食べられるし」

「へいへい」

積もる話はあるが、腹が減つてはなんとやらの如く、疲れた体にはエネルギーが必要

だと早く食事が摂りたかったまお。科員食堂へと到着するなり、トレーを手に取る。今日は金曜日。海自名物である金曜カレーの日でもある。カレーが好物であるまおには嬉しいメニューだった。

「お、テレビ」

航平が食堂に備えられている艦内テレビに目が行く。

「テレビが映るってことは、大分陸に近づいたんだな」

「止まったテレビ見ても仕方ないだろ」

まおの言う通り、電波が悪いのかあまりいい映りとはいえなかった。砂嵐になったり映像が止まってりと、見ないほうがまだいいかもしれない。内容も天気予報なのかかわからない。

『先週行われたました戦車道全国高校生大会決勝について……』

電波が戻ったのか、すでに番組が変わっていた。それもちよいといタイピングで戦車道に関する内容が流れている。その内容を聞き、テレビに顔を向けるまお。

「全国大会、先週だったのか」

カチューシャたちから戦車道の決勝戦の話は聞いていたが、大会の日時までは聞いていなかった。

「なんだ、お前知らなかったのか。てつきり知ってるかと思つてたけど」

「先週は台風の残骸で出来た大荒れの海上にいて、陸の情報なんてわかるわけないだろ。公開予定だった金沢港も大雨の影響で中止になってそのまま艦内にいるんだからな」

そも艦内では携帯でメールや電話、ネットもできないし、その前に携帯などの情報端末は没収されている（そして更に言うならまおは携帯を所持していない）。最近の護衛艦は無線LANなど設置しているらしいが、旧式艦でもあるくらまにそんな便利なものなどはない。艦内に貼られる情報掲示板のニュース等にマイナーかつ海自と全く関係のない戦車道のトップクスなんて貼るわけもない。唯一の情報源である上陸予定だった金沢港での一般公開も先週の大荒れの天候のお陰で中止となつてしまつていたと踏んだり蹴つたりする。

『この大会により、黒森峰女学園を破つたプラウダ高校の優勝は数十年ぶりであり……』
（そうか。カチューシャたちが勝つたのか……）

黒森峰女学園が負けたと聞き、複雑な心境なまお。カチューシャたちのことは応援はしたが、まほたちに優勝して欲しかった気持ちもあつた。決勝での黒森峰女学園の敗退、そして10連覇達成できなかったのは大きな痛手となつただろう。負けは負け。試合の流れはカチューシャたちのほうに軍配が上がつたのだとまおは思った。勝つことよりも負けて学ぶことのほうが多いとはよく言うし、まほたちにはまた来年の大会で

……

「お、おい！まおあれ見ろ！」

「え？」

何かに驚いた航平に言われ、再び映像を見たまお。そこには濁流の中に滑り落ちるように向かう戦車と、それを追いかけるようにかけ降りるみほの姿だった。

「みほっ!!!」

増水した川へと飛び込んでいったみほの姿を見て思わず叫ぶまお。食堂中に広がり、いきなりどうしたものかと隊員たちがまおの方を見る。その様子に気づいたまおは「あ、いや………」と言って黙ってテレビの内容を見ていた。

「まお……」

その様子を見ていた航平は複雑な表情で見ているしかできなかった。無理もない自分の妹が濁流の中に突っ込んだのだ。それを心配しない人間なんているはずもない。”逃げた”出ていった”忘れた”などと言っているまおだが、心の奥底は何も変わってはいなかったのだろう。航平自身だってそうだ、自分の妹もそんなことをしたら叫んでいる。

「あの子やるな。あの濁流に躊躇いなく行ったぞ」

「バカ、危険行為だ。素人が行ったら二次被害が出るぞ」

「陸自は何やってんだ。試合会場内でスタンバってるんじゃないのか？ 連盟に入ってるのに」

まおの言葉の影響か、他の隊員たちも映像の方に興味が出ていた。

（そうか……水没した戦車を）

断片的な映像ではあるが、みほがなぜ濁流の川に向かって行ったのかわかった。滑落した戦車を救助しに行ったのだ。だが、それは救助に行ったみほも同じく危険な行為だった。増水した川に救助のノウハウもない人間がいけばどうなるのかは想像に難しくない。非常に危険な状態だ。即刻中止し救助するべきところだが、試合はなぜか続行されており、フラッグ車を担当していたみほの戦車は車長がいなくなったところを狙い撃ちにされてしまい、黒森峰女学園の敗北が決定したのだ。

（アイツ……無茶しやがって……）

敗北がどうであれ、みほが行った救助により搭乗員は助け出すことができたようだ。みほも無事だったようであり、一先ずは安心したまお。

『日本戦車道連盟は、水没した戦車に対する安全上は問題なく、救出作業も早急に行われる準備があったと発表しており、黒森峰女学園からの再戦要請は受け付けないとしております。救助活動を行った女子生徒に対しても、二次被害が被る可能性もあつたとし、黒森峰女学園側に注意喚起の通知を出したとも言われており—』

内容を聞いていたまおの眉は顰めていた。日本戦車道連盟は悪天候の中で置きたアキシデントによる試合結果を、無効試合にせず、問題ないと判断したのだ。あろうことか、みほの行動のほうに問題があつたと判断までしている。全ては結果論でしかないが、状況がそうしてしまっていた。

「安全上って、あんな悪天候でもやるのか戦車道って」

「あの雨も元は台風が変化していたものだし、地盤だつて緩んでいたはずだ。あんな中で大会やつてるのも俺は初めて見るし」

もともと台風が低気圧に変わった時点で大雨は予想はされていた。それが北上し、風を伴う大雨となつて北海道へと向かつていき、それが原因となつて金沢港での一般公開も中止となり、予定を変更して島根県浜田港での一般公開を行うように司令部から通達があつたばかりだ。

「あの発表も、大方安全神話である戦車道のイメージを下げたくないからだろう」

整備士をしていたまおにとつて、絶対安全ということがないのはわかつていた。水没すれば普通に浸水するし、足場が崩れれば戦車だつて谷底に落ちて損傷して乗員は怪我をする。特殊カーボンと言つても、あくまでも衝撃を緩和したりするのが目的なので人の人間が、絶対無事、というのではない。どんなスポーツも武道もそうなように、この世に絶対安全というものは存在しない。それらの危険性を少しでも減らしていくのが大

会組織委員会であったり、上の人間たちがやらなくてはいけないもの。大きな怪我や死人が出てしまつては戦車道のイメージが大幅ダウンしてしまう。結果的にみほの行動によつて死人がでなかつたことが、安全性を強調することになつてしまつたようだ。

「みほちゃんも勝利より、人命を優先したんだな」

「昔からあいつはそうだったよ……」

昔に比べ大人しくなつたみほではあるが、人を思いやる気持ちや優しさは変わつてはいない。父親のことで怖いはずであろう水の中に飛び込んでまで助けに行つた。結果が敗北であっても、仲間の命を救うことを優先したのだ。

だが、その敗北の結果が何をもちたらずのかは流れている映像が物語つていた。

（まほ……）

画面にはだた呆然と立ち尽くしているまほの姿が痛々しく映つている。それを見た瞬間何かを察してしまうが、その様子をただ黙つて見ていることしかできないまほ。この映像も、先週の内容の特集。何も知ることでもできず、ただ時間だけが過ぎてしまつていた。

今のまほにまほとみほがどうなつていいのか、全くわからない状況だつた。もし、この映像を見ることができなければ、本当に何もわからずに進んでいたのだ。

「まほ。島根の入港は3日後だぞ」

「わかってる。あの二人なら……大丈夫だ。きつと……」
その言葉に、あまり自信が持てなかった。



暗雲。

今の黒森峰を表現するならば、一番しっくり来る言葉だろうと思う。

決して太陽などが差し込まない、文字通りの暗雲。光差し込まないシユバルツバルトに由来する黒森峰という名前にピッタリな状況だと我ながら関心してしまう。

西住まほ率いる黒森峰女学園は、悲願の戦車道全国大会10連覇を達成することができなかった。

たった一つアクセントから起きた一人の行動によって。

勝利至上主義を主とした黒森峰女学園の戦車道はたった一度の敗北で、真つ二つに分裂した。

西住隊長が掲げる勝利至上主義に歯車がかかった連中と、みほの行動を擁護する連中とで別れてしまった。

みほを擁護しているのが中等部からのエスカレーター組と言われる生徒たちだ。そ

れはつまり、西住まおが発端となった中等部での戦車道を理解している生徒たちだったのだ。

「みほさんの行動は間違っていない。目の前で仲間が大変なら助けるべきよ！」

「副隊長の無意味な行動によつて、誇りある黒森峰女学園の戦車道は汚れた！西住流の娘のくせにそれを破った！」

無論、高等部から編入してきた生徒たちはそんなことは知る由もない。彼女たちが求めたのは西住まほの圧倒的な存在感と西住流という最大の流派の影響を受けている黒森峰女学園ならば華々しいキャリアが得られるのだと思つたからこそ。後援会でもある戦車道のOG会とも相まつて状況は最悪な一言だった。

更に歯車を加速させるように戦車道も連盟からの注意喚起により、しばらく訓練等も中止されてしまう始末。

『今回の大会において、危険な状況は皆無だった。戦車に対する安全性は確保されており、救助は不要だった』

日本戦車道連盟の決定事項は、みほの状況を更に悪くしてしまったのだ。

戦車道連盟は何をトチ狂つたことを言っているのかと。近くでみほのフラッグ車を護衛していたからこそ、状況がわかつてしまう。無線機から聞こえてくる助けを求める悲痛な叫び声と、それを必死に落ち着かせるようにする赤星小梅の声が。特殊カーボン

と言つても絶対安全なんてない。そのことを……西住まおは言つていたのだから。

「返しなさいよ！それは私達が今まで持つてた優勝旗なんだから！私達の……優勝旗なの……」

くやしかった。お前達プラウダはそんな優勝旗を持つ資格はない。こんな勝利で優勝旗を掲げるプラウダが許せなかつた。勝利に対する誇りもないようなことがそんな嬉しいのか。その時の私は悔しさのあまり泣きながらそう叫んでいた。

ことが終わつても、私は分裂した隊に戻れる気はなかつた。そんなことを言い合つている場合ではないと。負けは負けだし、みほが助けに行つたのも攻める気にもならない。あの時小梅たちに死人が出ていればそれこそ取り返しのつかない事態になつていた。それこそ、黒森峰女学園どころか戦車道という競技すら危ないことになつていた。

だからこそ、そんなことを気にせず、さっさとみほには戻つてきて欲しかった。

「アンタ。いつまでそうしてゐるつもりよ。終わつたことをいつまでも引きずつても意味ないでしょ！」

ウジウジしていたつて仕方がない。ここで、しっかりしなければこの先みほは下を向いてばかりになる。

「放つとしてよ！今は誰とも話したくない！」

中から聞こえてくるのはみほの悲痛な叫びと啜り泣く声だけだった。熊本の家から

帰ってからというもの、みほは自室から出てこようとはしなかった。

叫んでいられるのは、まだ気力がある証拠だし、食事も少しではあるが摂ってくれている。とりあえず、今はまだ大丈夫だ。

「お兄ちゃんが来てくれるもん……きつとくるもん」

みほから帰ってくる返答はこんな内容ばかりだった。きつと今のみほにとつて、兄であるまおが来てくれることが救いのだろう。

「あんな奴に頼つてどうすんのよ。みほ、アンタがしつかりしないと、隊長は……」

絶対に来るはずがない人間なんか頼つても仕方がない。それにここにはアンタを、みほのことを庇ってくれる人たちだっている。いつまでも、籠もつてないで出てきて欲しかった。でなければ、隊長が……

「此度は、私の失態で黒森峰女学園、ひいては西住流に泥を塗る結果となつてしまい、大変申し訳ありません」

隊長はただひたすら、師範代であり母親でもある西住しほと関係各所に頭を下げに行っていた。ただ目には生気がなく、虚ろな瞳で本当にロボットのよう言葉が続けるだけだったらしい。

誰も、劳いの言葉もかけず、隊長としてそして西住流後継者としての重責が積もつていくだけだった。

隊長は……孤独だった。

だからこそ。

「私が、隊長を支えなくちゃ……」

みほも部屋から出てこない。隊が分裂し、誰かがまとめなければいけない状況だが、肝心の隊長もこの場には現れようとはしない。みほと同じように隊長室からあまり出てくる様子がなかった。

ならば、今こそ隊長を支えなくてはいけない時だと。

そうしなければ、自分も気が狂いそうだったからだ。

頼れる人なんていない。

自分が西住まほという人間を支えなくてはいけないのだから。

だけど……

「……て……お」

「隊長？」

隊長室で眠っていた姿を見て夢で何かうなざれているか、何かをつぶやくように言っているのが聞こえた。そして次に瞬間その言葉が私に追い打ちをかけた。

「…助け…て…まお」

「!？」

薄つすらと流れる涙と共に、ここにはいない薄情者まおの名前が出たことに驚いた。

その言葉を聞き、私はすぐに隊長室をあとにした。いやその場にいたくなかった。壁に手を当てて、そのまま座り込んでしまう。

「私じゃ……私じゃダメなんですか……隊長……私じゃ……」

隊長もみほも、心の奥底では西住まおがいるのだ。それだけあの男を慕っている。

結局私は“無力”だった。

悔しさに涙が溢れでてしまう。あんなに憧れて、中等部と一緒に戦車道をし、高等部ではどんなことがあるかと付いていこうと思った。

『まほのことを憧れじゃなくて、仲間として見てくれた嬉しい。アイツもきつとそういうのを求めている』

だが、それだけではダメだった。憧れだけで人を理解するのは到底できないことを。それを言っていたのが、あのまおだった。そして、まほのことを最も理解しているのも彼だった。

そして、何より“自分もまたまおのことを慕っていた”ことに怒りがこみ上げてくる。

「西住……まお」

違う。そんなことはない。

私は西住まおが嫌い。大嫌いだ。

遠慮なく、人に関わろうとし、お節介を焼く、大きなお世話な人間、人の心を簡単に見透かすあの態度。そしてムカつくほどお人好しで優しかったあの性格も。

昔からそうだった。

西住まほの兄であることも、西住みほの兄であることも気に入らなかった。

その全てが嫌いだった。

「アンタのせいよ。全部アンタが出ていくからよ」

そうだ。全ての発端はまおから始まったのだ。ならその責任はとってもらおう。

「いつもそうよ。期待させておいて、出て行って……身勝手に……」

今からやるのは、隊長と愚図いているみほのためだ。そして黒森峰戦車道を元に戻すために動く。

決して、西住まおを頼るためではない。

そう自分にいい聞かせる。

決意は固まった。

向こうが来ないなら、こっちから行ってやると。

VOYAGE—10 《声のない悲鳴 to ERIKA》

私こと逸見エリカは、気が強くて生意気な性格をしていたらしい。間違ったことがあれば、それを強く指摘し、そのくせ自分が間違えたことは認めない。おまけに祖母がドイツ人であり、所謂クォーターという奴だ。髪は銀髪に近い色をし、日本人離れした肌色に瞳の色。そんな性格、そんな外見があるからか、私は大分浮いていた。それは家でも同じだった。

私には年の離れた一人の姉がいる。姉は秀才でスポーツも出来て、地元でもちよつとした有名人であった。そんな姉に両親はチャホヤしていたが、性格は嫌味つたらしくて、いつも私を馬鹿にしていた。そのせいのあり、私は姉に嫉妬と嫌悪を抱いていた。私だって、学校でも優秀な成績を出してる。運動だって上手にできるのに……

私は、他人に私のことをもつと見てほしかつた。認めてもらいたかつた。周りも私を避ける。

家族も避ける。

皆遠ざかる。

そんなのは嫌だつた。”孤独”は……嫌

そして、出会ったのがあの人だった。私が嫌いな人。そう嫌いなものよ。
『君、迷子?』

『アンタだつてそうでしょう』

初めて会つた、あの日から。

『僕まお。よろしくリカちゃん!』

『リカじゃなくてエリカよ!!何度言わせんのよこのバカ!!』

人の名前は平気で間違える。

『これセミの抜け殻なんだ。リカちゃんのお人形にも着飾らてあげる!』

『きやああああ!!何すんのよこのバカア!!』

会つたびに人を怒らせるいたずらをしてくる。

『おつ!!リカちゃん!!』

『ア、アンタ!?!』

別段、家に近いわけでも、学校が同じなわけでもなかった。本当に狙つてくるように鉢合わせをするようなことが多かった。それは向こうから、はたまた私のほうから突つかかるような繰り返しをしてきた。本当に何を基準にして生きているのか、時々気になるくらいだ。下らなくて、意味不明でバカな男の子。

年齢も知らない。どこに住んでいるのかもわからない。

そんな友達なのかどうかもわからない不思議な関係がほんの少しだけ続いた。

『今日も、いないわね…』

でも、10歳を過ぎたあたりから急にバツタリと会うこともなくなった。それが悲しいなんて思うことはない。別にのが好きでもなんでもなかったし、むしろ会わなくなって清々していたのだ。あのまおと一緒にいると、なんだか自分のペースを乱されて嫌だった。あんなバカみたいに大声で叫ぶことも、着ていたワンピースが泥だらけになって追いつけつこなんてらしくないのだから。

『あ、やっぱり載ってるわ!』

ちょうどその頃だったか、私はあることに急速に興味を持ち始めていた。

”戦車道”

私の世界を大きく変えた武道だ。重厚な装甲を唸らせ、陸上を制覇していく姿に私は魅了された。そして、その代表たる流派が地元で君臨している事実を知って胸が熱くなった。

”西住流”

強きことを尊び、常に勝利を追求する戦車道だ。私はその教えに急速に惹かれていった。そして、それらの中である人の名前を見つけた。

”西住まほ”

戦車道の雑誌に何度も特集され、あの屈指の流派である西住流の後継者と目されるほどの選手であり、本場のドイツチームを打ち破った実力を持つ。凛々しく、常に冷静に対処する。たった一つしか年が違わないのに、その姿は遙か彼方にいるような存在だった。私は一瞬でその人に魅了され、虜になっていった。他人を認めきれない私が、初めて憧れた人だ。

それからの私は少しでも戦車道の腕を上げるべく、地元の戦車道のユースコースに入り、西住流に関することを勉強していった。そして、行く行くは西住流に入門し、西住まほに少しでも近づくために。

それらを打ち込むうちにあの男まの子おのことは記憶の片隅に消えていつていた。もう会うことはないだろうし、今の自分は新たな夢と目標を見つけたのだ。

”憧れの西住まほの隣に立ちたい”

それが私の向かうべき夢でもあり、目標だった。

あとはそれに一直線に向かっていくだけ。

小学6年になり、来年はいよいよ黒森峰女学園に入るために勉強に打ち込んでいった。無論、戦車道に関する勉強も怠ったりはしない。その中で、西住まほには双子の兄と私と同じ年の妹がいることを知った。妹のことを詳しく知ることはできなかったが、姉と同じく西住流の教えを受け、優秀だというのを聞いた。自分の同じ年でそんな妹が

いると聞き、自然と自分を阻む壁、いや勝手にライバルという認識が浮かんだ。この妹を打ち負かすことができれば、きつと憧れの存在に近づくことができる。

そしてもう一人。双子の兄の方だ。最年少で戦車道の整備士ライセンスを取得し、黒森峰女学園の入試を本命である女子を差し置いて開校以来トップで合格しているという話だ。だが、別段興味が沸かなかつた。西住流の生まれと言っても、男であるのなら戦車道をしているというわけでもないだろう。あの西住まほの双子ならば、それぐらいの優秀さでないといけない。見たことも会つてこともない人物に当時の私は勝手な理想を押し付けていた。それぐらいに西住まほをという存在を絶対視していた。

それから数カ月後、私は念願の黒森峰女学園中等部に入学を果たした。まるで、宮殿と見間違ふような校舎。ドイツ風の入学式やオリエンテーションなどを経て、ついに選抜科目の選考が来た。

『きやーーーーッ!!西住まほ隊長よ!!』

『西住隊長ーーーー!!』

『まさに西住流の後継者ね!!』

一糸乱れぬ戦車の隊列。その先頭を走る戦車に乗っていた人物こそ、西住流の後継者であり、黒森峰女学園中等部戦車道を率いる人物『西住まほ』だった。

「す、すい…」

たった現れただけで、これだけの黄色い声援が来る人物。周囲から見ている生徒たちの注目が半端ではなかった。西住まほ。ついにここまで来ることができた。

「来たのね。ついに…」

名門校“黒森峰女学園”は質実剛健であり、強い責任感を持ち、規律を律し、常に人の前に立っていく校風だ。そしてその流れを組むかのように戦車道も、常に勝利を掴みとる。その教えは黒森峰の創設から深く関わる西住流の教えから来ている。それは中等部でも同じことだ。

ついに来たのだ。

ここが…ここが私の憧れた——

「ようこそ戦車道履修生の諸君!!俺たち整備班は君たちを大歓迎だ!!楽しい楽しい黒森峰の戦車道をやつていこう!!」

隊列を崩さない戦車隊の後ろを進む一台のハーフトラック^{S d K r z g}。その助手席から規律の通る場所とは程遠い、デカデカとメガホンを使って言ってくる声が聞こえた。

その声には聞き覚えがあつた。そしてその顔には見覚えがあつた。

嘘でしょ。嘘でしょ!?

信じられなかった。小さい頃に会つたあの男の子がいたのだ。ここはあんな馬鹿面であホな奴がいていい場所じゃない。それを感じた私は、すぐに戦車道のエリアに移動

し、戦車が鎮座している格納庫に真っ先に向かう。その中に黒を基調とした整備用の作業服を着こなす先程の人物を見つけた。

「な、なんでアンタがここにいるのよ!!」

「ん? 新入生かな…ああ!! 君は確か逸見江リカちゃんじゃないか?」

「だから!! 逸見! エリカ! だって言ってるでしょ!!」

私の顔を見てすぐにお決まりのフレーズを口に出し、自身もいつものツツコミを出してしまふ。コイツあの頃から何も変わってないじゃない。い、いけないわ。私はもうあの頃のようにコイツに振り回されていた

「こ、ここはアンタのようなバカがいていい場所じゃないのよ!!」

「いや、懐かしいな。そうか、”エリカ”ちゃんだったのか。なんで間違えてたんだろうな?」

こ、コイツツツ!! 私の話なんか聞いてやしない。本当にムカつくやつだわ!!

「なんだまあ! いきなり新入生ひっ捕まえるなんて、とんでもない女たらしだな!」

「まあ、お前だけはそんなやつじゃないと思ってるのに!!」

「いや、違う! この子は小さい頃からの知り合いでな」

「おいおいこんな可愛い子が幼馴染って言うてるわけかよこの西住流の坊っちゃんわよ!」

な、何なの……あの煩い連中は。ひよつとして、こいつら全員が戦車道の整備士たちなの？ 黒森峰女学園戦車道の整備士たちは皆が困難な入学試験をパスした優秀な連中ばかりと聞いていたはず。

ちよつと待つて……今、西住流の坊っちゃんつて……

「その新入生」

短い言葉ながらも、凜々しい声が聞こえる。声の主の方に振り向き、思わず見入ってしまう。

「え……あ、に、西住、ま、まほさんー」

西住まほ。私が憧れ、追い求めていた人だ。間近で見れば見るほど、きれいでここにいる誰よりもオーラが違っている。いきなり現れてきたまほさんに私は身震いする。あの憧れの人がいきなり目の前に来たのだ。

「こいつは私の双子の兄だ。入りたての新入生がバカ呼ばわりする言われはないぞ」
「え……」

憧れであつたまほさんからの最初の言葉は、怒気の籠もつた言葉だつた。

鋭い目つきで睨まれてしまい、体が縮こまってしまう。

「あ、あの……」

初めて間近で会つたまほさんとの出会いが最悪な形になつてしまつた。

「おいまほ。せっかく入ってきた新入生ビビらせてどうする。これからお前と一緒にやっついていく仲間なんだから」

「む、そうか。すまなかつた。だが、会って間のない人間にそう言う言葉をかけるのは関心しないな」

「え、いや。私の方も…すみませんでした」

あの男の言葉で、まほさんの先程の表情が消えた。

「名前は？」

「い、逸見…エリカと言います」

「逸見か。中等部戦車道隊長の西住まほだ。これからよろしく頼む」

そう言つて手を差し出してくれた。憧れの人にいきなり会うことができて嬉しいはずなのに、出会いの印象が悪かつただけに素直に喜ばなかつた。

「そしてコイツが私の双子の兄の西住まおだ。整備班の班長をしている。もし、文句等があるのなら、まず私を通してからにしてくれ」

「ああ言つてるけど別にまほに通さなくていいからな。文句ぐらい聞けるから」

シヨックだった。よりもよつて私の憧れの人の兄がコイツだったことに。そして、それらに歯車をかけるかのように、妹の登場があつた。

「今日から副隊長をしてもらうことになった。西住みほだ」

「よ……よろしくお願いします！に、西住みほですっ!!」

どうしてこうなった。戦車道に入隊して早々に、気に食わないことが同時に起きた。

あの噂の西住まほの妹である西住みほが、一年生にして副隊長に任命されたのだ。おどおどして、自信なさげで、西住流本家の威厳のかけらも感じさせないあの雰囲気。気に入らない。あんな腑抜けたようなやつに私が負けるようなことだけは絶対にいやだった。戦車道で実力がどれだけあるのか、見定めてやろうとした。だが……

「うそ……でしょ」

初の新入隊員同士の模擬戦において、西住みほ率いる部隊が圧勝した。圧倒的だった。周囲の状況を把握し、素人も多い中の隊員たちを上手く配分しての統率。当然といえば、当然かもしれない。みほも小さい頃から西住流の教えを受けているのだ。たかが数年初めた程度の私では手も足もでない。私は必死に勝ちたくて、ただがむしやに戦車を動かしていた。

「うう……っ……」

私は自分が恥ずかしくなり、誰もいない格納庫で、自分が担当している戦車の中で嗚咽を抑えきれず泣いていた。

滑稽だった。実に滑稽だった。ユースに入って、少しばかり、指揮が出来たからと浮かれていたのに、入学して早々に打ちのめされた。すぐに気持ちを切り替えて次に進め

ばいい。そうやってここまで来たはずだった。でも、違う。今回は違う。根本から違う。こんなはずじゃないと必死に自分に言い聞かせる。早く格納庫から出て、寮に戻らないといけない。

「止まりさないよ……止まってよ……!!」

そう思つて涙を拭うも、涙が止まらなかつた。こんなみつともない姿は嫌だった。見られなれたくない。こんな弱い姿を誰にも見られたくはない。

「誰が泣いてるかと思つたら、エリカちゃんだったのか……」

ハッチが開かれて、覗き込むように見てきたのはあの男、西住まおだった。

「何かあつたのか?ま、まさか入隊早々に椅子が硬くて痛かつたのか!？」

「違うわよ!!このバカ!!」

何言つてくるのよこの男は。本当にずれたことばかりしか言わない。もうほつといてよ。こんなみつともない姿、誰にも見られてたくない。

「どっかいきなさいよ。アンタにはわかりっこないんだから……」

「昼の新入生同士の試合のことで泣いてるのか?」

「っ!？」

泣いている原因を的確に言われ、思わず驚いてしまう。その言葉を聞いて、バツと立ち上がり、目の前の男に吐き捨てる。

「そうよ!! 負けたことをうじうじ泣いてるのよ!! わかったなら一人にしてよ! ほっときなさいよ!!」

「泣いてる人間ほっとけるわけないだろ。安心しろ、ここにはもう俺と君しかいないから」

「だから、どつか行つてって言ってるでしょ!!」

何よ! づけづけと人の中に入って来ないで! この男だけには弱いところを見られたくなかった。

「いやもうエリカちゃん泣きまくってるのは何度も見たことあるから大丈夫だ」

「何よそれ。慰めのつもりなの!?!」

何なのよコイツ。何がしたいのよ。

「…勿論」

「その間は何よ」

でも、言う通り、昔の私はよくこの男の前で泣いていた。その度に助けられていた。こんなふざけたやり方ばかりで。

「ふっ」

「いきなり笑って何よ。気持ち悪い」

「ああごめん。昔こうして戦車の中で泣いてるやつがいたなって思い出してな」

「何？私もそいつと同じでみっともないって思ったわけ？」

「そんなことはない。そいつも、こうやって泣いて再び前をむこうとしてくれた」

「アンタの身の上話なんか興味ないわよ！」

そう言つて戦車から出るなり、格納庫を後にしようと思つて背を向ける。

「エリカちゃん!! ああやつて、必死になつてゐる姿のほうが。俺は好きだけどぞ！それだけ戦車道に真剣になつてゐるのがよくわかる」

「つ…バカ!! やつてもないアンタには一生わかりっこないわよ!! それとエリカちゃんなんて、みっともないから二度と呼ばないで!!」

その言葉とともに、私は逃げるように後にした。これ以上一緒にいると、自分がどんどんさらけ出されそうで嫌だった。

西住まお。やっぱりコイツはバカでしかないわ。慰めかたも下手くそ。全く関係ないことを口走る。何も成長していかない。もう関わるのはよそう。もう昔とは違う。私はただひたすら向上し、まほさんと並ぶために頑張るのだから。

でも、それからしばらく経つた頃だった。黒森峰女学園の戦車道といものを目の当たりにした。西住流の流派通り、圧倒的な火力で制圧し、蹂躪していく戦車道。それは黒森峰女学園でも同じと思つてた。だけど、中等部の戦車道は少しばかり違つてた。火力を重点に置いているのは間違いないが、チームによる連携攻撃を主としている作戦

が多かった。つまりは『強さこそが勝利』ではなく『皆で一丸となつてこそ勝利』である。それがこの戦車道だった。私は呆気にとられた、私が知っている西住流とは違う。そんな馴れ合いをするような場所でもない。それに歯車をかけるかのように、あの整備班がバカ騒ぎの如く、盛り上げていく。違う、ここは小学校の運動会じゃないのよ!!何よあの振つてる旗!掲揚台の旗じゃないの!!なんで格納庫の中でカレー作つてんよ!隊長!!嬉しそうに食べないで下さい!待ちなさい!!練習試合初めたら、的屋なんてするのよ!!ここは祭会場じゃないのよ!!なんなのここは……

私は、自分が今どこに通っているのかを今一度思い返した。

ここは黒森峰女学園。名門校のはずよ。なのに、これは一体なんだ。何か可笑しい、何がどうなつたらこうなるんだと。いや理由はわかつてる。全てはあの男が初めたのは想像に難しくなかった。

調べるしかない。こんな頭が痛くなるような場所にいたら、高等部に上がつても思うと気持ちがついていけないかった。そのためには、いち早くあの西住まおという人間を改めて知る必要があるわね。なら、副隊長みに近づいて色々聞き出すしかない。

「まあ、あんな馬鹿げた行動起こすんだから、家でも苦労してるんじゃないの?」

「えへへ。お兄ちゃん家でもね、あんな感じなんだ」

そんなへらへら笑つてんじゃないわよ!褒めてるんじゃないよ、私はアンタの兄を馬

鹿にしてんのよ!! なんなの、この妹は。いつもこんな感じにへニヤへニヤしてるのに、戦車にのると人が変わる。でも、違う、副隊長みは私にとつては越えるべき壁なの!!

「ねえねえエリカさん! この人形はねボコって言つてね!!」

「何よその人形…」

いつのまに私は、越えるべき壁でしかないはずだった副隊長みと仲良くなっていた。初めはただ、あの胡散臭い男の実情が知りたいだけが、時が経つにして話が弾んでいき、いつの間にか名前で呼ぶようにもなっていた。その環境に不思議と私も居心地いいと思つてしまった。知らぬうちはこの中等部の環境を楽しく思えてきていた。毎日が全く違うことが起こり、皆笑つてた。それを初めたのがあの西住まおだ。堅苦しい環境を変えらるほど、あのまおは他に多大な影響を与える力を持つている。

落ち着きなさい私。そう、これはみほを越えるために、そして憧れのまほさんに追いつくために、そしてあの胡散臭いバカを見返すために仲良くしてるのよ。

そう言い聞かせる。

気づけば、私はすでにこの中等部で2年という月日が流れていた。

いつの日だったか。アイツが偶にいる校舎の屋上にいるのを見つけた。その日はフェンスに寄り添つて、海の方を眺めている。

「ふくん。あなたでもそうやって黄昏ることがあるんですね」

いつも、馬鹿面してくせに、今の顔の表情がなんとも言えない冷めた目をしていた。一応先輩でもあり、整備長をしているので敬語は使うも、どうも嫌味ないい方になってしまふ。もともと敬語なんかいいとは言ってるけど。

「俺だつて、こうして一人で落ち着きたい時だつてあるよ」

そんな私の言葉に気づくこともなく。いつもとは違う雰囲気だった。何よ、気持ち悪いわね。

「海なんか見て何かあるんですか?」

「……どこまでも自由にいけるあの海が、俺は好きなんだ」

いつもとは違うトーンの声が聞こえた。自由?海?ホント何なのよ。そんなの…

「らしくない言葉ね。聞いてて気持ち悪くなってくるわ」

「ははは、そこまで言うか?」

そうよ。そんなロマンチストな言葉、アンタには似合わないわよ。いつもへらへら笑っているほうが、性に合ってるわ。

「そういえば、来年はいよいよ高等部ですね。そこに言つても、まだあんな馬鹿騒ぎを続けるんですか?」

「そうだな。それはまだ考え中だ。それに今はまほとみほのこともあるし」

考え中?どういう意味なのよ。まほさんも、高等部では隊長の椅子は確約されている

し、あなたも整備長の椅子があるんでしょ。何を考える必要があるのよ。それに高等部は驚異の8連覇を果たしている。来年勝てば、私達が高等部に進学した際には10連覇を目指すことになる。それはもう黒森峰女学園戦車道に栄光を残せるものだ。どこに考える要素があるってのよ。まほさんとみほに何があるってのよ。

「俺はな。まほとみほに強くなつて欲しいんだ。あの二人は本当はそういうものを持つてる」

「何言ってるのよ。隊長と副隊長は十分強いじゃない」

「俺が言ってるのは戦車道のことじゃない」

「あの二人は絶対的な存在。皆がそう思ってるわ」

「…その考えは早々に捨てたほうがいい。人に必要なのって信仰じゃなくて信頼だろ。せっかく、皆が一丸となつて戦車道やってるのに、まほに対する評価は全く変わらない」

「何言ってるのよ。当たり前でしょ!!あの人は私達とは違うの!」

「そうだ。私達のような凡人なんかとは違う。同じ立場なんかじゃ…」

「エリカはまほのことを神か何かと勘違いしてないか?アイツはただ戦車道が上手つてだけで、他にも色々」

「何よ偉そうに!!戦車道もやってもいないあなたには、隊長がどれだけ素晴らしいかわからないでしょ!!」

それでも、西住流に生まれた人間の言う言葉なの!?!隊長はいつだって立派な人よ。そう、私達とは違う。

「お前が憧れているのは、西住流の西住まほなのか?」

「当然でしょ!!だから私は…私は…」

言葉が続かなかった。上手く言えない。

「エリカ。別に今すぐじゃなくていい。まほのことを憧れじゃなくて、仲間として見てくれたら嬉しい。アイツもきつとそういうのを求めている」

その言葉が私にはよく理解できなかつた。

「何よ…それ…」

人を憧れて何が悪い。憧れだった人のところに近づけて何が悪い。私の憧れだった人を腑抜けのような人柄に変えたのに何を言っている。いつもそばにいるくせに何を言っている。仲間とか言いながら、あの二人にはまほとみほ甘いくせに…

どうして、どうしてあの二人はまほとみほばかり構って…

私には……

「俺はエリカのことすごい人間だと思ってる。だから、エリカは。エリカの信じた道を行けばいい。それだけの意思がお前にはあるよ」

「…うるさいわね!!」

知ったような口ぶりして、相変わらずで嫌だった。

「ふん。アンタも昔みたいに、我が道を行けばいいじゃない。そのほうが性に合ってるわ」

「……俺の道か。ありがとうエリカ」

「な、何よ急に……」

「いや、ただ言いたかっただけだ」

「ふん」

胸が熱かった。こんな気持ち私が私は嫌だった。顔が赤くなる。

わからない。こんな気持ちは知らない。

でも、時々この気持が逆の時もあった。

まほさんたちと並んでいるまおを見ると、胸が痛くなってくる。

わからない。

そうだ、私は西住まおが嫌いなはずだ。だから、この胸の痛みは隊長の隣に立っているあの男に対しての嫉妬なのだろう。

きつとそうだと自分に何度もいい聞かせる。

だって、まほさんは私達を見ていない。いつも見ているのは。

『まお』

この人ばかりだった。いつも隊長の目はまおの方ばかり見ていた。だから、振り向かせたかった。

だけど…

アイツがまほさんを変えた。黒森峰の戦車道を変えた。みほを変えた。

私も変えられた。

何もかも変えていった。

なのに、アイツはいきなりいなくなって、色々変えたくせにあとは知らん顔で
あんな場所海上自衛隊にいる。

許せない。

アンタのせいで、黒森峰女学園戦車道はわけのわからないことになり、分裂した。

西住まほも西住みほも見る影もなくなってしまった。

私も、もうおかしくなりそうだった。

だから、アンタを…

アンタを…

一体あれから、どれだけ飛んだだろうか。見渡す限りに広がる青い海。宛もなく飛び、私の望んでいる連絡を今か今かと待っている。

『接近中の航空機に告げる。こちらは海上自衛隊…』

来た。私の待っている声が…

無線機からこちらに呼びかける声が聞こえる。相手は海上自衛隊の護衛艦の搭載機のようなのだ。”あさぎり”搭載と聞こえ、あの壮行会で映っていた艦の一つで間違いなかった。でも、私の求めている艦は”それ”じゃない。

「黒森峰女子学園機甲科1年、逸見エリカです。計器に異常が出て、予定のコースから外れ

てしまいました。燃料も残り少ない状況です。救助を…お願いします」

VOYAGE—11 《緊急着艦》

第一練習隊旗艦《くらま》

午後から行われる対潜演習のために、艦内それぞれの部署では慌ただしく打ち合わせが行われた。新たなヘリコプター搭載護衛艦の就役に伴い、3番艦『あおば』を残し『しらね』と共に入れ替わる形で役目を終える目前の《くらま》。諸事情などから急ごしらえで練習艦に代替されるも、半年前までは対潜を主とし、観艦式では観閲艦として努めていた護衛艦だ。現在真逆に航海をしている《しらね》率いる第二練習隊も、結局発見することができなかった今回の演習の目標艦《たつなみ》そしてそれを手足のように扱う艦長である《深町 洋》。

二度目の演習のために、くらまにて打ち合わせをしていた深町はたつなみとの通信のために艦橋に向けて艦内を歩いていった。

そして、その途中聞き覚えのある若い声が聞こえてきた。

「お久しぶりです深町艦長」

幾分作業服が似合うようになってきた若い海自候補生——海江田まおが立っていた。

「おう。くらまに乗ってるって聞いてたが、本当だったんだな」

横須賀基地に会って以来の再会になる深町とまお。軽く顔を向けると、そのまま艦橋の方に歩き、後を追うようにまおも続く。

「梅津艦長が路頭に迷っていた自分を乗せてくれましたので」

まおは元々《たつなみ》に乗艦願いを出していたが、とある理由により乗艦拒否を言い渡されていた。直前にそうなってしまい、乗艦できる艦がないのは深町も理解していたため、くらま艦長を務める梅津三郎に連絡し、くらまに乗艦してもらうように願いを出していたのだ。無論、まお自身はこのことは知らずに梅津艦長が自分を拾ってくれたと思っているようだが。

「《しらせ》に乗って南極にいかなくて済みました。南極に行ったら3、4ヶ月は帰ってこれませんから」

ちなみに深町が根回しをしてくれなかったら、特別練習生として南極観測船《しらせ》に乗艦するハメになっており、むこう半年は日本に帰ってこれなくなっていたのだ。

「ふん。南極に行けば幾分か頭も冷えて恋しくなるんじゃないのか？」

「南極に行っていたとしても、結局3年もほったらかしにしたんですから何も変わりませんよ」

口ではそう言うも、ここ数日で知ってしまった黒森峰の情勢が頭があつた。”知らぬが仏”という言葉があるが、今のまおにぴったりなことだろう。もともと直上怪行のき

らしいがあり、そのせいもあつてか、いつか大事になると小中学校では注意されることがあつた。常に冷静な判断力を求められる自衛隊において、致命的だと思つたまおはその感情を矯正する真つ只中であつたのだ。何かアレば即座に動くのがまおだつたからだ。「変わらないか。それは本当にそう思つてんのか？」

「え…」

「似合わん」ことをして自分を苦しめることにいいことなど何も無い。ガキの頃…つて今もガキだが、やんちゃしてた頃のほうがイキイキしてるんじやねえのかお前は」

経歴等は資料や話を聞けば、海江田：西住まおという人間性はいくらかはわかる。それがいいのか悪いのかは置いておくとして、深町が思うのは今のまおが果たしてそれが自身にとって正しいことなのかを本当に認識しているかだつた。

「ここはそういう場所ではないじやないですか。教官から一番最初に言われました。俺たちは普通の学生じやない。自衛官としての知識を学び、国民の負託に答えるための場所だ。入隊するときも、それらに関する宣誓書も書きました」

「そんなことは全自衛官が知つてることだ。俺が聞きたいのはそんなことじやねえ。人間なんてそんな変わるもんじやねえだろ。たつなみに来たときに言つたな『しこりがある人間に潜水艦乗りは務まらない』つてな。今のお前をひと目見ればわかる。言いしれない不安があるんだろ。そんなんじや、潜水艦乗りどころか海上自衛官する危ういぞ」

「…」

家族に対しての準備も何もせず漠然とした中で、この海上自衛隊へと来たまおに対し、その危険性を告げる深町。気持ちに身が入らず、常に不安ごとなどを秘めていれば、思わぬことが起き、最悪それらが“死”につながることになる。

「梅津艦長はとつくに気づいとる。定期報告かねてあの人と面会もあるなら、言いたいことは伝えたほうがいい。少なくとも、あの人はお前に目を掛けている。まあこんなこと俺が伝えることじゃねえがな」

「深町艦長」

艦長である梅津一佐にはまおの様子にはどうやら気づかれていたようだった。顔には出すまいとしていたが、わかる人にはわかるといふことのようなのだ。

「小僧」

「はい？」

振り向きざまにまおの顔を見る深町。いきなり“小僧”呼ばわりされるも、それに対して特に反論は言わないまお。深町にとつて“海江田”という名は今も昔も《海江田四郎》ただ一人であるために、まおのことは出会ったときから一貫して“小僧”呼ばわりであり、認めていないといふこともまおは理解していた。

「お前、家族は？」

「は？ 家族……ですか？」

振り向きざまに深町が質問を投げかけた。家族構成を知っているはずの深町にいきなり家族と言われ、呆気にとられるまお。

「家族はつて言つてんだ!!」

「は、母と妹が二人います…」

深町の強気に言われ、冷や汗をかきながら答えるまお。

「ふん。よくわかつてんじゃねえか」

その言葉を聞き、笑みを浮かべる深町。

「は、はあ…」

一体何を言わせるのかと思ひ、少しばかりに困惑するまお。

「小僧、お前がもし死んだとき、誰が悲しむかをよく考えるんだな」

「…」

それだけを伝えると会話もそこで終わり、二人はそのまま艦橋へと足を運ぶ。

(海江田、俺もいらん年取つたらしいな。お前の孫に説教たれてるんだからな)

向かう途中に、ここまで一個人に肩入れするのは柄じゃないとふと自虐的に思う深町。同期であり、ライバルであり、そして友人だった海江田の肉親だからなのか。もしかしたら、乗艦を拒否したのはまおにこれ以上肩入れするのを心のどこかで思っていた

からかもしれない。

「遅いぞ海江田！ 憧れの深町艦長だからって、ノロノロくるやつがあるか!!」

「申し訳ありません航海長!! 配置に戻ります!」

少しばかり、長話しすぎたらしく艦橋に入るなり航海長から怒鳴られすぐさま配置の場所に戻るまお。仮にも幹部候補生かつ航海長補なので、気を抜かれては困るのだから。深町はそのまま艦長席に座る梅津のもとに向かう。

「そんじや梅津艦長。自分はたつなみに戻りますんで。午後からはお手柔らかに頼みますよ」

「若い連中にはいい勉強になるから、こちらもよろしく頼むよ」

「こつちも梅津艦長が相手ですから、更に気を引き締めますよ」

挨拶に来た深町に答える梅津。昼行灯などと揶揄されることがある梅津であるが、培ってきた技術は本物であり、練習生が多いと言っても油断するわけにはいかない。たつなみとて練習艦であるため、練習生の技術向上を目的としているも、深町自身もまだまだ学ぶべきことはあるのだ。

「やれやれ。司令の私には別れの挨拶はなしかね深町艦長?」

梅津とは反対側の方に用意された司令席に座っている第一練習隊司令。梅津とも同期かつ同じく退官間際であり、第一護衛隊群第一護衛隊司令を経て後進の育成として最

後の仕事に練習隊司令を任命された経歴を持つ。

「まさか、お偉方は最後に挨拶してこそでしよう司令。横須賀に戻ったら一杯やりましょうや」

「ははは、ならいい酒を所望しておこう」

航海演習が無事終われば、横須賀にて酒を酌み交わす約束をする深町。目上かつ階級も立場も上ではあるが、短い会話ながら司令と深町の仲がわかる。

「お話中すみません！司令、あさぎりから緊急連絡です！」

その時だった。通信士官が艦橋へと駆け込み気味にやって来る。緊急連絡と聞き、深町と話し中だったが通信士官の方に振り向く司令。

「緊急連絡？内容は……」

「はっ。周辺海域哨戒中のヘリが救難信号を発信する航空機を発見したと」

「救難信号？その接近中の機からか？」

「はい。どうやら動力系統や計器に異常があるとかで、燃料も本土まで戻る量もないとのことですよ」

「なんだって、そんなになるまで海の上を飛行してたんだ？」

司令のそばで報告を聞いていた深町は、呆れるように言葉を吐く。

「操縦者は探しものをしていたと」

「探しもの？こんな海の上でかね。遭難等の連絡は海保からは来ていないか？」
「いえ連絡は何も」

国外からの不審機というのであれば、空自が緊急発進スクランブルをかけているはずだが、その連絡は別段入っているわけでもなく、海上保安庁からもそういった連絡は入ってはいなかった。

「その救難信号を発している航空機の搭乗員の身元は？」

事情がどうであれ、まずはその航空機の状況をいち早く理解するべきだと判断した司令は他に情報がないのかを確認する。

「はい。報告だと操縦者は女子高生のようです。哨戒機の乗員も直接目視で確認していると」

「女子高生？学生がこんな海の上で探しものしてることか？」

深町と同じく内容を聞いていた航海長は驚くように声を上げる。女子高生ということはまだ10代の少女ということになる。ますます理解不明な事情に艦橋内の乗員たちは困惑する。

「氏名と学校名ですが、黒森峰女学園機甲科1年――」

通信士官からの連絡内容を聞いていたまお。

（黒森峰……）

操縦者が黒森峰女学園の生徒と聞き、軽く顔をしかめる。戦車道の大会が終わり、夏休み期間中であるため黒森峰女学園の学園艦は母港である熊本港に停泊しているはずだが、ここは日本海。そんな場所にいるのが疑問で仕方なかったが、次の通信士官の言葉で呆気に取られてしまう。

「逸見エリカ」と名乗っています」

（逸見…エリカ?!）

その名前を聞き、思わず体がビクつき振り向いてしまう。

（なんでエリカが…お前）

なぜ、ここでその名前が出てきたのか理解できなかつた。逸見エリカという名前はまおが知る限りたった一人しかない。それが機甲科一年ならば尚更だつた。

「黒森峰？あのバカでかい学園艦を持つてる学校か。エライなところから来たもんだな」

黒森峰女学園という名前は、この場にいる物ならば誰もが一度は聞いたことはある。日本最大規模を誇る学園艦であり、学園艦の海上防衛でも必ず出てくる名前でもあるからだ。

「搭乗している航空機ですがF a 2 2 3^ド_{ラッ}^ヘのようです。識別番号も登録されている番号と一致していますから黒森峰女学園の所有機で間違いありません」

「ドラツヘ？」

接近してくる機体に対し、聞き慣れない言葉に眉をしかめる航海長。他の隊員たちも航海長と同様の表情をしていた。

「第二次大戦に使用されたドイツ軍のオートジャイロですよ航海長。大戦中に世界で初めて量産されたヘリコプターでもあります。もつともそれに見合う戦果があげられたわけではありませんが」

説明してきたのは部下でもあり航海科員である、柳一等海曹。くらまに来る前は、梅津艦長や麻生掌帆長と同じ第一護衛隊群所属のイージス艦《みらい》に乗艦していた。そして超がつくほどの戦史オタクであることは艦内では有名であり、聞けば聯合艦隊司令長官であった山本五十六のホク口の数まで知っていると言われているほど。

「第二次大戦の？ 黒森峰は戦車だけじゃなくてそんなレトロな機体まで保有しているのか」

「あの学園はドイツとの交流が盛んですからあるのかもしれない」

黒森峰女学園に留まらず各学園艦は各国の年代物の乗り物等などがたくさんあるため、これに限った話ではない。

「海江田」

「はいっ！」

エリカのことを考えてしまい、思わず声が裏返りそうになるもなんとか抑え梅津のほうに振り向くまお。

「確かお前は黒森峰にいたことがあったな」

「え、ええ。あそこは男子分校があり途中で転校はしましたが、中学の夏までは在籍していました」

黒森峰女学園の名前を聞き、まおが在学しているのを知っていた梅津。無論、まおが本当は西住という姓であることも把握している。まおが元黒森峰女学園の学生と聞き「何？ そうなのか海江田。なら知ってるのかその黒森峰の学生を」

梅津の言葉を聞き、隊司令もまおの方を向き直し

「逸見エリカという学生が自分の知っている人物なら、小学校からの知り合いです」

「幼馴染というやつか。こんな時に現れるとは、偶然なのか……」

まおの言葉を聞き、都合よく幼馴染といえる仲の人物が救難信号を発していることに疑問を感じる麻生掌帆長。

「で、どうするんです艦長。本土まで戻れないなら時間はあまりないのでは……」

「周辺海域にいるのは恐らく我々だけだろう。でなければ救難信号を真つ先に拾うはずもない。哨戒機の話だと航路はこちらに向かっているのだろうか？」

「はい、ともかく本土の方に誘導させるために……」

通信士官の話の聞き、顎に手をあてる梅津。

「梅津艦長。くらまに着艦させるのはどうでしょうか。少なくとも僚艦の《あさぎり》に比べれば飛行甲板は広大です」

くらまに着艦させてほしいと具申すること自体が以下に無謀かつ、軽率な発言なのはまあだつて理解はしている。冷静にするべきだと先程まで深町に言っただけなのにこの様に失笑したいくらいだ。だが、結局は思考するよりも先に口が動いてしまった。

「海江田。お前も幹部候補生なら、こういう時こそ私情に流されずに冷静に事態に対応すべきだ。今のお前、普段より声が張ってるぞ」

操縦者と知り合いと言っていることが事実ならば、尚更冷静な対応が必要だと促すのは船務科を総括している船務長。

「わかっていきます。ですが、操縦者は恐らく長時間の飛行をしているはず。体力的にも限界が来ている可能性が…」

「だがな海江田」

「まああさぎりより、飛行甲板の広いくらまのほうが多少はリスクは少ないだろうがな」
無茶とも言えるまおの進言に対し理解を示すかのように、ヘリコプターの発着艦に特化しているくらまの方がリスクは低いのではと言葉を漏らす深町。

「深町艦長、想定されていないヘリでの着艦はあまりに危険過ぎます。もし誤って失敗してしまつたら本艦が受けるダメージは大きいです。それに相手は護衛艦などの発着艦もしたこともない一般学生ですよ。多少どころではなく、リスクがあまり大きすぎます」

深町の言葉に対するように船務長。想定されてもいないドラツへによるくまら着艦を危惧するのはもつともな意見だ。規格が違いすぎるヘリでの着艦、ましてや揺れる艦上に降りるのはベテランでも大変な作業だというのに、それを一般の学生が行うのはあまりに危険すぎる。失敗すれば操縦者はおろか、くらまに被害まで被る可能性がある。

「なら他の方法があるのか？このまま海に落ちてくださいつて伝えて海保にでも」

「誰もそこまでは言つてないだろ。だから今こうして……」

「議論してもしかたねえだろ。早いとこ決めねえと、本当に落っこちるハメになるぜ」航海長の言葉に反論するも、本当に接近するドラツへの燃料が残りないのなら、時間的猶予もないのも事実。深町も、これ以上の議論している暇はないと釘を指す。

「…司令。時間的猶予もあまりありません。降りられる場所が我々だけだということのなら」

まおの話聞いていた梅津。振り向くなり何を言おうとしているのか理解した練習

艦隊司令は、梅津の方を振り返す。

「このくらまに民間機を下ろすか、梅津艦長」

「はい。救助を求めている民間人を見逃し、墜落となれば」

「自衛隊たる存在意義を失う…か。だが、船務長の言う通りリスクが高すぎるとは思わんか？」

状況的には本土まで戻れないならば、くらまに降ろした方が安全なのは間違いはない。だが、それはくらまを危険に晒すことには何も変わりはない。

「出来得る限りの万全は整えます。ですが、より安全性を考慮するならば、着艦させる場所に艦を急行させるべきかと…」

「うむ……」

梅津の話の聞き、目を閉じ思考を巡らせる隊司令。拒否し着水させて救助か、着艦させ機体も操縦者も救助か。時間的にも即座に決断しなければならぬ事案だ。艦橋にいる全員が隊司令に顔を向ける。言葉一つでこの艦隊の行動は決まるのだ。

「……人命の掛かった緊急事態ということだと、司令部にはそう報告する。くらまに民間機を緊急着艦させよう。そう下令を梅津艦長」

目を見開く隊司令。《くらま》に黒森峰女学園の航空機を着艦させる判断を下した。

「了解しました司令。ことが済みましたら…」

「ああそれから、先に言うが責任は私が取る。それが司令としての仕事でもあるからな」司令の言葉を聞き、何かを言おうとする梅津の言葉を遮るように、責任は自分が取ると告げる。責任感の強い梅津ならば必ず言うだろうと思ひ、先に言ったのだ。

「で、どうすんだ船務長。異論があるんじゃないのか？」

「司令と艦長が判断したのならそれを支持するのは当然だろう」

若干茶化し気味に言う航海長に対しそう発言する船務長。事情がどうであれ司令が判断し、艦長がそう命令するのなら異論を唱える必要はない。任務に対し全力で取り組みただけだ。

「梅津艦長。司令…ありがとうございます。」

リスクを承知の上で着艦を許可したことに頭を下げて感謝の言葉を述べるまお。

「感謝の言葉なら無事に降りれたらするんだな海江田。それに無事に着艦しようがしまいが、横須賀に戻った後はお前自身も相当なペナルティはつくぞ」

事情がどうであれ、まおの言葉は練習生として行き過ぎた言動でもあるため、何かしらのペナルティがある可能性があると告げる隊司令。そこだけは見逃すわけにはいかなかったのだろう。

「承知の上です」

司令の言葉を聞き、最初に具申したのは他ならないまおだ。どの道、この件に関して

は司令部を通して、防衛省まで報告が上がる。詳しい事情などが聴取されれば、自分の処遇もなにかるだろうと。

「艦内マイクを」

状況説明のために、艦内マイクにて各科員に説明を始める梅津。

『達する。艦長の梅津だ。現在周辺の海域において民間機から救難信号を受信したと報告があつた。燃料も残り少なく、本土まで戻ることは不可能とのことだ。よつて、異例だが我がくらまに民間機を緊急着艦させることにした。演習航海中の真つ只中ではあるが、人命を守るのは自衛隊としての本分だと思つてゐる。各科員全力で取り組み、着艦には細心の注意を払い実行してもらいたい。以上だ』

くらま艦内に響き渡る艦長の言葉を聞き、各部署が慌ただしく動き始まる。特に動きが大きいのは飛行甲板と格納庫の科員たちだ。先程着艦したばかりのSH-60Jを押し込むように格納庫へと収容を始める。

「深町艦長。至急内火艇を用意させる。それに乗つてたつなみに……」

「それはにはお呼びませぬ梅津艦長。そんな余裕はないでしょうし、後ろにいるたつなみも万が一に備えて同行させてもらいますよ」

艦隊を離脱するため、深町にたつなみに戻るための内火艇を準備させようとするも、乗りかかった船と言わんばかりに協力を申し出る。

「通信士官。《あさぎり》と《さわかせ》の艦長に至急連絡を。詳しい事情は私の方から直接伝える」

「俺のほうもたつなみの副長たちに連絡する」

「了解しました！」

真つ先に連絡が来ているであろう僚艦である《あさぎり》《さわかせ》も命令を待つているであろうと、直接連絡をとる梅津。そして深町率いるたつなみの乗員たちも状況を知っておかなければならない。

「航行中の着艦は相手の技量を考えればまず不可能だ。完全に停止し、風と波が穏やかな場所でなければ無理だろう」

必要な連絡を終えるなり、すぐさま海図室にて、ドラツへの残りの航続距離を割り出し最適の着艦場所を探す作業を始める。航行中の艦に着艦するのはベテランのパイロットでも難しいと言われるため、完全停止でやらなければならない。

「気象員の話だと、風速は現在1、2 m程度の無風状態とのこと。ドラツへの相對距離からしてこの場所が最適化と思います」

意外にも真つ先に提案を出したのはまおだった。いつの間を確認したのか、すでに周辺の気象状況まで把握し、ドラツへに見立てている消しゴムまで準備し海図の上に置く。

「うむ…海江田の案に私は異論はない。皆はどうか？」

まおの提案する場所には問題はないと判断する梅津。

「私の方からはありません。よく調べたな海江田」

「少しでも早く助けたいと思っただけです」

航海長の言葉を聞くも、あくまでも民間人を救助すると言うまおに対し、近くで聞いていた深町は顎に手を当てる。なぜ、その逸見エリカという少女がこんなところにいるのかも、少なからずまおが関係しているのでは推測する。

「今日の航海指揮官はお前だ。しっかり動けよ！」

「了解!!」

航海長から航海指揮を任されたまお。すぐさま識別帽をかぶり直し、ヘッドセットマイクをつける。

「面舵一杯！機関最大戦速！」

力強く号令を発する梅津。艦橋は一気に緊張感に包まれた。戦闘ではないにせよ、これは訓練ではなく、人命の掛かっている。

「面舵一杯つ!!機関最大戦速!!」

艦長の言葉を力強く復唱したのは、現在の航海指揮官であるまおだ。命令を聞いた操舵手は操舵輪を大きく回しスロットルを最大に動かす。

「うおっ」

艦隊を離脱するため、フル回転を始めるタービンは大きくうねり声の如く艦内から響く。面舵を取り《くらま》はゆっくりと傾き始め出す。艦橋員の一人が倒れないように手元もものを思わず掴む。滅多に出さない最大速度を出し、海面を大きく切りながら接近するドラツへと少しでも近づくために全速度で急行する。

航跡を残しながら突き進むくらはまは、着艦予定のポイントにはそう時間は掛からなかった。すぐさま緊急着艦のために艦内は準備に取り掛かっていた。万が一海上に墜ちたときのために、くらはまから内火艇が降ろされ、後方を付いてきたたつなみからもゴムボートが展開される。

「露天艦橋より艦橋！目視にて目標機を確認！あさぎり哨戒機を追尾するように向かっています！」

露天艦橋《ウイング》にて状況を確認していた麻生から連絡が入る。海江田も露天艦橋に出るなり、掛けている双眼鏡で確認する。特徴である両翼のロータに、小さいながらも久しく見る黒十字の校章が黒森峰女学園の機体であることを示していた。そしてその太陽の光で乱反射し、よく見えないまでも中には逸見エリカが乗っているのだ。

「海江田、もしその“逸見エリカ”という女生徒がお前の知り合いならば、向こうもいく

つか話しやすかろう。一緒に格納庫に来てくれないか」
「…わかりました」

梅津に呼ばれ、共に格納庫に来るよう言われる。

「それから念の為に衛生科の桃井一尉も格納庫に呼んでくれ」

「はっ！」

体力的にも精神的にも疲弊している可能性を考慮し、衛生科を待機させることにした梅津。着陸した瞬間に張っている気が切れることもありうるからだろう。

一方、飛行甲板ではドラツへの着艦作業が今まさに始まろうとしていた。甲板に立つ誘導員がゆっくりと近づくとドラツへに合図を送りながら誘導していく。

「若いのにやるじゃないか…」

様子を格納庫から見えていたくらの飛行長は感心するようを見ていた。あれほどレトロな航空機を普段より遥かに狭いであろう飛行甲板に近づいていくのは相当な技術がいる。

だが一瞬強風が吹き上げ、ドラツへが煽られ大きく傾く。

「あ、危ないっ!!」

甲板員の一人が叫ぶ。その場にいた全員が一気に青ざめる。万が一のためにスタンバイしている応急員の握る消化ホースに力が入る。

「くっ!!」

ドラツへ内部ではなんとか体勢を立て直そう、操縦桿を必死に握りしめるエリカ。
 (絶対に…降りるんだから!!)

絶対降りなければいけない。この艦に乗っているはずの人物に会うまではとエリカは降りかかる疲労感を跳ね除け、操縦桿を傾ける。

ローターが甲板に接触しそうにすぐさま機体の体勢を戻し、再び飛行甲板に戻っていく。ドラツへは甲板を完全に捉えることができ、高速回転するローターはゆつくりと回転を抑えていく。普段はお目にはかかれぬ機体に目が奪われてしまう乗組員たち。

「ボサツとするな! 機体をワイヤーで固定するんだ!」

号令と共に発着艦員たちが強風等でバランスを崩さないようにドラツへをワイヤーで固定していく。

「一時はどうなるかと思いましたが、あの女学生中々やりますよ艦長!」

「ああ、あとは操縦者が無事であればいいだけだ」

様子を見ていた飛行長は梅津にエリカの飛行技術の高さを称賛するように説明していた。どうか、最悪の事態を回避することはできたことに安堵するも、まだ操縦者の安否が重要だ。

「本当に女子高生だな」

「しかも、綺麗だ」

操縦席側の扉が開き、銀色の髪をし、黒を基調とした学生服を着た少女が降りてくる。見ていた乗組員たちもその姿に密かに目が奪われる。

「大丈夫かい？今担架を持ってくるから…」

「だ、大丈夫です。自分で…歩けます」

乗組員と軽く話をするなり、そのまま格納庫の方に案内され、歩み始める。

(エリカ…)

格納庫から見ていたまおはひと目見て誰かを理解した。幼少期からずっと絡んでは遊んでいた少女であり、まほをずっと負い続けていた少女でもある。

「くらま艦長している梅津だ。まずは無事に降りられて何よりだよ」

格納庫まで付き添われる形で来たエリカに近づいていく梅津。

「黒森峰女学園1年の逸見エリカです。助けて頂いて、ありがとうございます」

護衛艦に対し、民間機で着艦するという前例のない無謀な状況下を許可した梅津艦長に感謝の言葉を述べるエリカ。彼女自身もいつもは、気が強くあたりが強い性格だが、感謝の気持ちだけは決して忘れない。

「っ!!!」

そして、艦長である梅津のすぐ後ろにいる人物の顔を見たエリカの顔は一瞬で強張っ

た。

「……エリカ」

見覚えのある黒森峰女学園戦車道整備士の作業服や作業帽でもなく、海上自衛隊専用の作業服と識別帽を被っている。だが、エリカはその人物の顔を決して忘れることはない。

「何……やってんのよ。アンタは…!!」

その瞳は言いしれない怒りで一杯だった。

VOYAGE—12 《聞こえた悲鳴》

演習航海中に起きた黒森峰女学園の航空機をくらまに着艦させる件から数時間。司令部に事の次第を説明した後、急遽午後から予定していた対潜演習も中止。やはり、民間機をくらまに降ろしたのは多少なりに問題があったようであり、司令部からの命により《あさぎり》《さわかせ》のみ一般公開が予定されている浜田港に向かい、《くらま》単艦のみ別行動をとることになり、ひとまず海上自衛隊佐世保基地へと向かっていた。演習に参加することになっていった潜水艦《たつなみ》も呉基地に戻るために関門海峡までくらまの後方を航行していた。

「深町艦長。くらまに乗り付けてきた女子高生ってどんな子だったんですか？」

後方でくらまに随行しているたつなみ艦橋にて、艦長である深町の補佐をしている副長が聞いてくる。無論たつなみも緊急着艦には同行しているため、大まかな状況は聞いていたが操縦していた女子高生のことまでは聞いていなかった。

「随分と感情豊かな学生だったな。怒ってるかと思えば泣き出すし」

「なんですかそれ？怖かったから泣いていたのはわかりますけど、怒るって……」

深町の話がいまいち理解できない副長は首を傾げる。

「それにしても大した学校だよ黒森峰つてところは。学校の名譽を守るために、バレーに海上で引き渡そうなんてな。それじゃあ瀬取りと一緒にやねえか」

愚痴るように言う深町。当然のことだが、着艦した民間機の所有物である黒森峰女学園にも連絡は当然入っていた。一生徒が危険な操縦をし、あまつさえ護衛艦に乗り付けるなどという事態に難色を示し、ただでさえ、学園の看板ともいえる戦車道にて優勝間違いなしと言われた全国高校生大会で敗北してしまい学校全体に暗雲が立つ中で、そんな事件が取りただされては問題になるだろうと考え早期の收拾を図ろうとしていた。黒森峰側からの提案は着艦したドラツへと逸見エリカを引き取るために、学園艦から回収船を向かわせ、海上で受け取ること。だがこれは黒森峰女学園側が勝手に提案していることであり、ドラツへ及び逸見エリカを保護している《くらま》及び横須賀司令部が了承しているわけではない。

「でも艦長。あのままくらまに載せておくわけにはいかないんじゃないですか？あれじゃ哨戒機も飛ばせないでしょうに」

やり方は気に入らないまでも、副長の言う通りドラツへをくらまに乗せつばなしには出来なかった。元よりドラツへが格納庫へ入るわけもなく、飛行甲板を独占しているため哨戒機も発艦できず、更には着艦の衝撃で飛べなくなる故障が起きてしまっており、言い方は悪くなるが”邪魔”で仕方がない状況でもあった。

「つたく、海江田といいあの小僧といい。色んな問題を呼び寄せやがる」

「問題ですか？まあ、着陸衝撃で、計器等に異常あるとか…」

双眼鏡で、くらまの飛行甲板に鎮座しているドラツッへを見る副長。

(問題はそこじゃねえよ…)

深い理由も話してないので、深町の言う問題とは見当違いのことを言っている副長に對し心の中で否定する。

「どうするんだ小僧……」

先行する《くらま》を目視する深町。その艦内には今回の件の中心的存在に一気になってしまったまおのことを気にかけていた。

練習艦《くらま》士官室

くらま艦内にある士官室には、今回の件についての話し合いが行われていた。用意されている机には隊司令を初め、梅津艦長、砲雷長を兼任している副長、航海長、船務長、飛行長、そして下士官を纏める先任伍長である麻生海曹長が上座から順に座っている。「ごくろうだったな桃井一尉。その後はどうかな逸見エリカさんの様子は」

そしてもう一人、衛生科衛生士をしている艦内で唯一の女性自衛官である桃井一尉。梅津艦長からの要請により、もしものためにもと待機してもらっていたのだ。そしてそ

の予想は的中であり、途中で倒れてしまったエリカを医務室へと移動することになって
いる。様態の報告も兼ねて士官室に呼ばれていた。

「はい、今は大分落ち着いて医務室のベッドでぐっすり眠っています。着艦の衝撃によ
る外傷等も特に見受けられません。ゆっくり休めば明日にも目が覚めると思います」

報告するようにそう告げる桃井。だが、付け足すように眉を変化させて続ける。

「ただ、彼女は精神的疲労というのでしょうか。かなり無理をしているようでした。食
事もあまり採っていないようでしたし、今は驚くほど熟睡していますが……」

「精神的か……」

「はい。長時間による飛行だけではないようです」

普通の人間とは明らかに違う疲労をしているのを診ていて感じ取っていた桃井。少
しだけではあるが、エリカとも会話もしているが本当に一介の高校生が取るような疲れ
方ではなかったのだろう。

「まあ精神的疲労と言うのは、大方見当は付いてるな」

桃井の言葉に対し隊司令はある種の理解を示していた。あの格納庫での一件にてエ
リカが言っていた言葉も含め、原因があることを。

「戦車道ですか。確か今年の大会で黒森峰女子園はプラウダに敗退して準優勝で終わっ
たと」

すぐ近くに座る梅津が艦内に入ってきているニュースを思い返すように呟く。世間的にはまだまだマイナー競技である戦車道に深く関心を持ってはいなかった。黒森峰女学園が今年優勝すれば10連覇というのも関連のニュースで初めて知ったばかりだ。だが、部隊は違えど陸上自衛隊に指南を行っている流派西住流の存在は知っている。

「もつともそれがどう結びついているのかは深くは我々にはわかるまい。黒森峰の学生から事情を聞くには…」

「しかし艦長。私には未だに信じられないのですが、本当にその逸見という女生徒が海江田に“会うため”だけに来たというのですか？」

救難信号を発信し、なぜあのような海域を飛行していたのかが気になっていった副長。そしてその真実を聞き、どうも納得がいかないといった顔をしている。

「錯乱気味に叫んでいたから、信憑性はなんとも言えませんの間違いないとは思いますが副長。海江田とその逸見エリカという学生の関係性からいえば」

「だから、幼馴染だの同級だのの理由だけでそんな危険なことをやったのが信じられないと言ってるんだ。下手すれば退学云々の前に死ぬんだぞ！最近の学生っていうのはそんなことをやるのか?!」

「自分に言われても…」

航海帳の言葉に畳み掛けるように更に語尾を強めて言う。例の格納庫でのエリカの

言動も信じられるのならば、彼女の目的である探しものとは“海江田まお”のこと。聞けば、二人は小さい頃から知り合いらしく、詳しい理由はエリカが錯乱気味の発言のため、真実味が不明だがまおに対し黒森峰女学園に来てほしいだの、西住姉妹を助けられないのかだのという内容。本当に突拍子もない事態だったため、周りに聞いていた者は何を言っているのか理解できないのが大半だった。もともと、副長からすれば事情がどうであれたつた一人の人間のためにそんな危険を犯すような真似までしてここに來ることがどうにも腑に落ちなかつた。

「それだけ海江田がとても彼女……というより黒森峰女学園にとつて重要な人物ということなのだろう」

「たつた一人の人間にそれほどの影響があるのですか？確かに海江田が多少変わったのですが、そこまで影響があるようには……」

隊司令の言葉に対し、どこか納得のいかないといった表情の船務長。若干16歳ながら入隊し、有名である海江田四郎の孫ということで話題に上がるほどの人物ではあるが、実質それぐらいしかない人物と思つていた。

「海江田は特防特別防衛学校では多少リスキーな発言などがありますが成績等に関しては優秀なことに間違いありません。素行に関しても問題もありませんし、他の学生たちとの協調性も概ね良好だと聞いています。幹部候補生でありながら、普通科の棟まで

行つて学生たちと一緒に食事までしているとの報告もあります」

「私も艦橋では一緒することもありますが、若い部分も目立つところはあれど、海江田に対する評価は良いほうだとは思いますが。他の乗組員たちとの関係も良好です」

改めてまおの特別防衛学校での簡単な経歴を説明する航海長。事前に貰っている内申書などでまおのことを確認はしており、実際に会い、部下として行動しても大方内申書に相違はないと判断していた。そしてそれに対し、同じく艦橋等で一緒にいること多い麻生も付け加えるように意見する。

「最も今は、そのおかげで隊員たちとも大きな衝突もありません。ただ隊員たちの中に困惑が広がっている感があるのも事実です」

事情はどうであれ、エリカがこの艦にやつて来たのはまおが原因であるというのは徐々に広がっている。それにより訓練内容も中止し、久方ぶりの上陸予定もまたも繰越しになってしまい、それが後にいらぬ衝突を引き起こすのではと危惧する航海長。今のところは皆がまだ事態を上手く飲み込めていないため、大きなことにはなっていないのが現状だった。

「というかその黒森峰の学生は海江田の彼女か何かか？」

副長が確認するように航海長に聞く。

「いえ、本人はそういった関係ではないと否定しています」

あくまでも、幼馴染でありかつては後輩だということをおおから聞いていた航海長。それ以上の関係はないと言っており、ますますエリカとおおの関係性がわからない上に、今回のような件が発生しているため複雑化が懸念されていた。

「…司令、海江田のことは私に任せてくれませんか。気になることもありませんから…」
 これまでの話を聞いていた梅津が口を開くなり、まおのことを任せてほしいと進言する。

「梅津艦長！海江田の件なら直属の上官である私が話をつけますよ！アイツは今当直ですから、艦橋にいるはずですし」

わざわざ艦長である梅津が直接聞くような手間は取らせるわけにはいかない、航海長が言葉を漏らす。なんなら、これが終わり次第すぐにまおを呼び出さして詳しく事情を聞くことだってできる。

「心配はいらんよ航海長。これは私自身個人のお願いでもあるんだ」

「こ、個人ですか？」

「まあ任せてくれないか航海長？」

「は、はあ。艦長が言うのであれば…」

「…ここまで言われてしまい航海長も言うわけにもいかずに押し黙ってしまった。」

「ふむ。海江田とは私も一度ゆっくりと話してみたかったが、梅津艦長に一任しよう」

「ありがとうございます司令」

梅津の個人的な願いというのも気になり、まおのことはひとまず任せることにした司令。しかし、一つだけ確認というよりも、確実なことが待っている事実を皆に伝える。

「だが、今回の件で司令部は海江田まおを」黙認、できる存在ではなくなったということも事実だ。どんな理由であれ、個人の問題を持ち込んだのだからな。司令部に事態の詳細を報告すれば、想像に難しくない処分が待っているだろう。着艦を許可した私も含めてな。最もその件はすべてが終わったあとでいくらでも受ける覚悟はある。今は今後の同行をどうするかだ」

処分云々はすべてが終わったあとにいくらでも受ければいいだけのこと。隊司令の言う通り、とりあえず今は今後の艦隊の行動を考えなくてはいけない。その言葉を聞くと副長が状況を説明するように、ホワイトボードに貼っている周辺の地図を指して説明を開始する。

「はい、問題はいつまで黒森峰の学生と航空機を乗せておくかということです。我々は予定している演習項目を大幅にズラして行動しています。候補生たちの教導期間に影響を考えれば一刻も早い引き渡しが必要と考えます。黒森峰女子園側からは回収船による海上での受け渡しを要請し、すでに出港しているとのこと。もつとも大つぴらに目立たないようにしてほしいの付け加えですが」

司令部から連絡により、黒森峰女学園側からの要請を説明するも許容しがたい内容だったため少しばかり顔を顰める副長。

「方法はどうかあれ、時間が経つのは双方とも良くはない。手っ取り早いのは黒森峰女学園まで言つて降ろした方がいいとは思うがな。どのみち熊本には寄港する予定でもあるからな」

「確かに整備の整つた港湾施設の方がまだ安心はできますからね。別れた艦艇も一日もあれば合流できるでしょうし、黒森峰に直接向かうのは検討事項として最良かもしれませんが」

隊司令の言葉に同調するように言う副長。熊本港には一般公開で予定している寄港地でもあるし、移動させるならば堂々とドラツクを降ろした方が安全性は高い。

ひとまず、時間もあまりないため方向性を決定し、司令部に具申するための案をしばらく続けることにする一同だった。

練習艦《くらま》露天艦橋

艦長たちによる会議が行われてからそれなりに時間が経つた頃。《くらま》露天艦橋には双眼鏡片手に周辺の海域を監視しているまおの姿があった。無論一人ではなく、他の隊員である小暮と柳一曹の姿も見られる。

「まお…」

時折まおの方を向く小暮だが、まおの見せる表情は複雑だった。まおとは保育園からの幼馴染ではあるが、残念ながら逸見エリカという少女については知らなかった。小学校区も別であり、黒森峰女子学園に行っていない小暮にとつては知るよしもないこと。航海長たちから何か知らないかと言われるも、教えられそうな情報はなかった。

(…)

すでに数時間経っているが、まおにとつてはまだ力強く印象に残っていた。



無事に《くらま》に着艦したエリカは梅津艦長と軽く挨拶を交わすなり、すぐ近くにいたまおの方へと顔を向ける。

「何…やってんのよ。アンタは…!!」

まおの顔を見た途端、歯を食いしばり特徴的なツリ目が更に鋭くなっていた。

「エリカ。なんでお前が…」

3年ぶりに見たエリカの姿に懐かしむも、なぜエリカが海域にいたのか気がかりだったまお。

「…アンタのせいよ!!アンタのせいで、黒森峰はメチャクチャになったのよ!!」

「何だと…」

そんなまおの言葉を遮るようにエリカの悲痛にも似た叫び声が格納庫に響き渡る。それを聞いていた他の隊員たちも二人のやりとりの方へと顔を向ける。近くにいた梅津は、それを止めはせずに状況を見守っていた。事態が飲み込めないのは梅津も同じだったのだ。

「アンタがいなくなった後の黒森峰がどうなったか知ってるの!?!隊長は氷のように冷たくなって、みほなんかアンタのことをずっと探して!!皆バラバラになって…」

「……」

出てくる言葉に対し、まおはあの時学校で見たテレビの映像を思い出していた。自分がいなくなったことにより、隊を纏めるべきまほが暴走し、誰にも止めることができずに黒森峰女学園の戦車道は最悪な方向へと突き進んでしまったのだと。そして、恐らくその最悪な結果

「お、おい海江田。彼女一体…」

一体何を言っているのかもわからず、錯乱にも似たエリカの言葉を聞いていた乗組員の一人がまおに話しかけるも、それを聞いた瞬間エリカの目がキツと見開く。

「アンタ”西住”まおでしょ!何が海江田よ!!西住流戦車道宗家に生まれて、天才的な整備力も持つてる!黒森峰にもトップで入った!あの二人の兄で!!一体何が不満なのよ!」

”海江田まお”ではなく、”西住まお”という名前を聞き、なんの事だと言った顔をしだす隊員達。そんなのお構いなしにとエリカの言葉は続く。

「似合わないのよ!!いつもヘラヘラしてるアンタにそんな顔も、その姿も!!いつも薄汚れて戦車整備してる方がよっぽどマシよ!!」

海上自衛隊として所属し、その服をまとうまおをことさら似合わないと切るエリカ。そんな真面目な顔なんて知らない。見たくもない。いつもバカ面して当たり前のように格納庫で戦車を整備していた姿の方がよっぽどいいと。気持ちが高ぶってしまい、言葉が散乱として自分でも思ってもいない発言が出てきてしまう。それでもエリカはもう止まることはできなかつた。

「エリカ…」

まおが見たエリカの表情は悲痛の顔だった。普段の彼女ならば絶対にしないであろう表情に眉を顰めてしまう。想像すらないほどエリカは追い詰められ、それを今のおにぶつけようとしている。

「おかげで黒森峰は負けたわ!!負けたのよ!!でも、そんなのもうどうでもいいのよ!!黒森峰は無様よ!!負けたことをいつまでもぐずぐず言つて、みんな勝手なことばかり言つて!!誰もかれもみほのせいにしてえ!!誰も隊長を…誰もまほさんを助けようともしない!!」

あれほど西住流の掲げる勝利主義に拘り続けていたエリカが”10連覇という目標”も”黒森峰の敗北”という事実もどうでもいいと言いつ切る。敗北の原因を作りそれをしきりに攻め立て、みほを追い込み、栄光を踏みにじってしまった隊長であるまほを誰も労いも庇いもせずに、責める者も擁護するも、誰もかれも自分の言い分ばかりを言ってくる。そんな状況を本当になんとかしてくれるのはまおのはずだったと。

「まほさんも…みほも。ずっとあなたの名前呼んでるのよ!!きつと来るって部屋に閉じこもって…なのに、アンタはこんなところで知らん顔してるわけ!?ふざけんじやないわよ!!」

「…」

二人が自分を呼んでいるという言葉を聞き、目を見開くまお。正直、嫌悪されて同然のことをしてでも、まほもみほもまおに救いを求めていることを思い知らされる。

「…小僧」

様子を見に来ていた深町は、エリカとまおのやりとりを見て状況が少しずつわかってきた。まおはやはり飛び出すように家を出ていったのだと。そしてそのことに対し、理解が追いつかなかった妹たちの行き着いた姿は想像に難しくなかった。

「言いなさいよ……何か…言いなさいよ!!」

黙ってばかりいるまおに対し、苛立ち覚えたエリカは大きく手を挙げる。

「ちよっ!!」

殴りかかる。流石にそれは阻止しなければと思った隊員たちがエリカに詰めようとする。だが、エリカの拳がまおにはいかなかった。

「なんでよ…なんで私達のところにはいないのよ!何が悪かったのよ!何が…!」

まおにもたれ掛かるように袖を掴み、絞り出すように声をだす。恐らくこの言葉こそエリカが本当に言いたかったこと。どうしていなくなつたのか。なぜ何も言ってくれないのか。いつも自分のことを聞いてくれるくせに、まお自身が何かを語ることは決してなかつた。何か不満があつたのなら、それを無くすようにする。言葉を繰り出す度にエリカの瞳から涙が溢れ出す。

「まお…さんっ…ひうっ…お願い、します…隊長をつ…みほ……をつ。黒森、峰を……私達を…助、けて、ください…まおさん、だけなんです…お願い……します……お願いします…」

溢れる涙を拭く余裕もなくへたり込んだエリカは鳴咽しながらまおに絞り出すように声を出した。



(エリカ…)

今のまおには目の前に広がる海域よりも思い浮かぶのは、エリカの悲痛な表情だつ

た。本当ならば、エリカ自身も相当つらいはずなのに、真っ先にまほとみほを助けてほしいと懇願してきたのだ。そして、今回の一連の行動に移り今に至ることになっていゝる。すべてはまおに会い、彼を黒森峰女学園に帰ってきてほしいという願いを伝えるために。

「海江田…」

西住^{本物}ではなく、海江田^偽の姓を呼ばれ、声がする方へと振り向くまお。

「梅津艦長…」

「いいかな。少し話がしたくてな」

番外編 《勝利者などいない》

『栄光なき勝利』

10連覇を目指す王者《黒森峰女学園》を見事に破ったプラウダに対する評価を表す言葉だった。

カチューシャと共にプラウダの戦車道の栄光を取り戻るため、万年2位止まりに墮落しきった3年生を排除し、共に戦ってくれる同志たちと共に勝ち取った勝利。

人は結果を求める生き物のはず。どんなことであれ、最後に勝ち残ったほうに栄光は下るのだと。だが、世間は結果ではなく”過程”に極端に注目した。

『救助活動していたフラッグ車を狙い撃ちにした卑劣な優勝校』

冗談と思いたくなるような諷い文句だ。だとしても、それは疑いようのない事実だった。

そう…あの運命の決勝戦。台風から変化した温帯低気圧により、当日は大雨の予想がされており、大会は延期の可能性があると予想していたが、連盟の判断は予定通り開催するとの通達だった。連盟側が開催するなら、それに従うしかない。大会予定通り開始し、展開的には序盤は黒森峰…というより西住流が得意とする電撃戦に押される形に

なった。

「ノンナ。予定通り、黒森峰を誘い込むわ。陽動お願いね」

「わかりました。しかし、フラッグ車は乗りますでしようか」

中盤に差し掛かるころになり、ようやくこちらの作戦が始動する。これまでの黒森峰の戦術を研究したところ、隊長である西住まほは早期決戦と敵戦車を必ず一台ずつ潰していく作戦をとる。大方、圧倒的な力をもつて蹂躪するといったところであろうが、試合終盤に差し掛かるにつれ、ともかくあたり構わず撃つて撃破している。集中力の跡切れか、はたまた短気な性格なのかはわからないが、非常に危うい展開でもある。それを補うように行動しているのが、妹である西住みほの存在だ。小隊規模の戦車を率いて、相手校の戦車を錯乱させる作戦を取ってくるのだ。その隙を西住まほの主要な部隊が狙い撃ちにするというもの。一見単純に見えるも、西住みほの行動は読みにくいものがあり、尚且つフラッグ車である西住まほを必ず狙われなければならない相手校の意図を讀んで動いている。

「大丈夫よ。西住まほと妹の西住みほを分断すれば、自然と黒森峰は瓦解していくわ。終盤は勝手に力押しで来るところをフラッグ車を変えたのは驚いたけど、どっちも倒す予定だから大して変わらないけどね」

ならばと、カチューシャも同じ戦法をとればいいと作戦を立てた。こちらも陽動を出

し、フラッグ車を敢えて無防備にさせる。確かに黒森峰は西住姉妹あつて機能する。中核である二人、最低でも片方をつぶすことができれば、瓦解するのは想像にむずかしくない。訓令戦術などしないのは、これまでの試合を見て明らかだ。だが、一つ気になったのは今まで西住まほがフラッグ車を、西住みほにしたことだった。何かしらの意図があつてのことだと思つたが、すでに試合は終盤に差し掛かる。見事に我がプラウダは、西住姉妹を分断することに成功し、早期決戦を望む黒森峰側の意図を読み、狭い崖地まで誘い込むができた。あとは、待ち構えるこちらの戦車部隊が抜けてきたフラッグ車を狙い打てばプラウダの勝利は間違いないかつた。

そう。先頭を走る黒森峰の戦車が、濁流の川へと滑落するまでは…

「ノ、ノンナ副隊長!? 戦車が川に落ちてます!!」

隊員の言葉を聞き、すぐさまキューポラからその様子を見た。

(試合を止めなければ、さらに危険が…)

その時の私は迷つた。前方を進む戦車が落水し、更にはすぐ後ろにいたフラッグ車の車長が飛び出したのだ。砲弾舞う試合ではあまりにも危険な行為。だが、西住みほは迷うことなく落水していった戦車に向かつていく。正直試合をしている場合ではない。即刻中断し、救助隊を要請しなければいけないからだ。だが、生憎この場は運営本部から最も遠い場所。こんな大雨が降り、すぐ駆けつけることなどできるわけがない。しか

も今は試合中だ。黒森峰の後続車が無防備となったフラッグ車を守るように出て来ている。偵察部隊がこちらを発見したとの連絡も入る。下手に出て、こちらのフラッグ車が狙われ兼ねない疑念が一瞬の判断を鈍らせる。

「撃ちなさいノンナ!!撃つて試合を終わらせるのよ!!」

その時だ。無線機からカチューシャの声が響く。その言葉を聞いた私は砲手を務めるIS-2から砲弾が放たれる。

(申し訳ありませんカチューシャ)

この状況で私たちができること。それは試合を一刻も早く終わらせる。この状況ではこれ以上のことはないのだと自分にいい聞かせる。そう、カチューシャの判断は正しいのだ。

『く、黒森峰女学園!フラッグ車!行動不能!よつて優勝はプラウダ高校!!』

雨粒を押しつけ、風を切りながら進む砲弾はフラッグ車に命中する。それを決定づけるかのように、一本の白旗が掲げられる。同時に響く試合終了の合図。結果はもういい。早くあの落水した戦車を救助するのが先だと。

待機していた陸自の救助隊が到着したのは、西住みほが乗員達を救ってから数十分がたった後だった。

その後、時間が遅れて表彰式が行われるも、おそらく誰も予想もしていなかった展開。そして優勝間違いなしと言われた黒森峰を破ったプラウダに対し、喝采や拍手などはなかった。

(重い…ですね)

カチューシャと共に受け取った優勝旗は降り続ける雨の影響か、将又この場の空気を表すかのように重かった。

「返しなさいよ！それは私達が今まで持ってた優勝旗なんだから！私達の…：優勝旗なのに…」

黒森峰戦車道の隊員の一人が涙を流しながら悲痛な叫びをあげていた。他の生徒も同様なのだろう。だが、その場にいるはずであろう西住まほの姿はどこにもなかった。

「ノンナは何も悪くないわ。あの時はああするしか試合を終わらせる方法はなかったんだから。あなたは私の指示に従った。ただそれだけなんだから」

閉会式が終わり、気持ちが晴れない中でカチューシャが言葉をかけた。悪いのは自分だと、そういつて責任を向けさせようとする。

「来年も勝つのよ。きつと、マオーシャも応援してくれるって言ってたんだから…」

マオーシャ。短い時間かつた一度会っただけであったが、カチューシャは海江田…いや西住まほのことを大変気に入っていた。カチューシャは気に入った相手にしか、

自身に似た名称を付けない。それほどまでにあの西住まおに惹かれたのかもしれない。かくいう私自身も個人的に興味を持つ相手ではあった。何をして、どんなことをしているのかはわからない。カチューシャの言う通りきつと今もどこかで戦車でも修理しているのかもしれない。

本当の絶望は大会が終わったあとだった。

『卑劣な勝利。王者を破る愚者の戦車道』

『勝利至上主義はここにもあり。そこまで勝ちをとるかプラウダは』

『救助をせず、勝利を目指す最低な風習』

ようやく雪辱を果たし、久方ぶりに優勝旗を持ち帰ったプラウダに対する世間の評価は最低だった。戦車道をしていない在校生たちからは冷たい目で見られ、それを面白くなくネットにはあることないことを勝手に書かれ続ける。

”勝てば官軍負ければ賊軍”

そんな言葉があるが、今回ばかりはそうとはならなかった。事態がどうであれ、救助するために車長が飛び出したフラッグ車を狙ったプラウダの行いは良くなかったということなのだろう。

—撃たずに救助隊が来るのを待てばよかった—

—共に救助するべきだった—

—カチューシャというたった一人の王政のような状態をするからあなる—
—場慣れしている3年生を中心とするべきだった—

などと、戦車道をやってもいない生徒、教師からの批判が相次ぐ。そして同じ戦車道を共にする同志たちも、そんな評価に影響され、徐々に部隊の衝突が始まっていた。

風の噂では、黒森峰女子園は内部分裂を起こしているとの情報も聞く。中心として存在する西住姉妹に至っては再起不能状態との話もあり、勝利至上を主とする西住流としては彼女たちの敗北は許容できるものではなかったのだろう。彼、あの二人の兄である西住まおはどう思っているのか。あれ以降、会うことも。そしてもしかしたら今後也會う機会がないかもしれない。

『^勝プラウダと^敗黒森峰。目指すものは同じだったであろう両校の戦車道は、完全に機能を停止していた。何をどうすればいいのか、何が正しかったのか。』

「ん…」

疲れ果て、赤子のように眠るカチューシャの目から薄らと涙が浮かんでいた。この小さな体にいろんなものが押し掛かっている。隊長として決して、挫けるわけにはいかない。『小さな暴君』と揶揄される言葉通り、その一心で平常心を保っているのだ。

『『プラウダに真の栄光を』』

来年度も行われるであろうが、どれだけの生徒が戦車道が続けてくれるのか。私たち

はその言葉を体現するために闘ってきた。そしてついに掴んだ栄光は、誰からも評価されないものだった。

「安心してください。カチューシャ。あなたの栄光も誇りも私が守って見せます…」
そう。あなたは何も心配しなくてもよいのです。

すべての責任は、フラッグ車を打ち抜いた私にあるのですから…

来年こそ、勝者となり、あなたの栄光を称えましょう。

だから、カチューシャは安心してください。

ただ、もし何か言える言葉があるならば…

あの決勝戦に……

真の勝者などいなかった。

VOYAGE—13 《兄として》

梅津艦長からの誘いにより、まあと二人きりで飛行甲板へと訪れていた。夜ではあるものお、月明かりと輝く満点の星空のおかげで、二人の顔ははつきりと見えていた。

「艦長。逸見エリカの件なのですか…」

話が見たいと言われてここまで来たまおであったが、どうしても気がかりだったエリカのことを聞く。結果的に自分の起こした行動により、エリカに何かしらの罰則でもあるのでないかと思つたからだ。

「安心しろ。こちらから彼女をどうしようといことはない。私達は彼女の救助要請に応じ、緊急着艦を許可し保護した。ただそれだけだ」

あくまでも《くらま》乗組員一同の意思により、エリカの要請に応じたと言う梅津。海上で困つたものがいれば、助けるのはシーマンシップに則る行為だと。

「だが、黒森峰側からはおそらく何かしらの処罰があるだろう。そればかりはどうしようもない。事情がどうあれ、行動を起こしたのは彼女なのだからな」

「…」

海上自衛隊からあるとすればせいぜい説教のようなことで済むであろうが、航空機を

所有している黒森峰学園側からすれば、予定もしていない航路を行き、あまつさえ損壊までしているのだ。どのような処分が下るのかは不明ではあるが、最低でも免停の上、退学処分は覚悟せねばならない。それはエリカにとつては戦車道に人生を捧げてきたものにとつては築き上げてきたものの崩壊と言つても良いのだ。だが、エリカにとつてはそれすらも投げ出す覚悟でここまで来ている。全ては自分に帰つてきてほしいという願いのもとで。

「まあそう神妙な顔になるな海江田。私がここに呼んだのは、少しばかり話がしたいと思つてな」

「話ですか……」

「何、ちよつとした経過面接みたいなものだと思つていい。お前自身が今後どうしたいのかも聞きたいしな」

まおの方へと顔を向け、そう告げる梅津。自分が何をし、どう行動したいのかを。つまりは本音を言えと言つてきているのだとまおは直感する。

「…できるのことなら、泳いででも行こうと思ひました。でも今の自分がいったところで、余計に苦しめるだけなんかじゃないかと思つてもいます。自分一人の起こした行動が、結果的に周りに多大な迷惑を被ることになりましたから……」

本音を言えば、今すぐここから出て黒森峰に行くと昔の自分ならなりふり構わず動い

ていただろう。だが、それをすれば今度は脱柵したなどと大きく騒がれ、間違ひなく海上自衛隊という組織に迷惑どころではない不始末をつけてしまう。さらにいえば、結局自分が良しと思つた行動がエリカを始め、黒森峰女学園の戦車道が崩壊する引き金を引いていることを理解し、どう動くべきなのかを阻害してしまつていた。正直、今の自分が行つたところで余計にまほとみほを苦しめることになるのではないのかと。その思いが不思議と両手の拳に力が籠もつていく。

「私はお前の家族のことはよくは知らない。だが海江田。お前自身のことは私なりに見ているつもりだ。少なくともお前は、人に迷惑をかけるわけでも、人に嫌われるような人柄ではないと思つている」

「長い期間を海自で過ごし、多くの隊員たちと行動をしてきた梅津の言葉には重みがあった。まおの妹たちはよくは知らないまでも、この場にいる海江田まおという人柄には理解を示している。でなければ、危険を冒してまで助けを求めてきたエリカが来るわけがないと。」

「そして海江田。すべての事情をお前一人に責任があるというのなら、それは大きな思い違いだ。事態の切つ掛けがお前だったとしても、その後のことは全ては各々が招いたことでもある。我々が彼女、逸見エリカを救助したのと同様にな」

すべての責任が自分にあるのではと言うまおに対し、その考え事態が思い違いだと促

す梅津。確かに物事の切っ掛けがまおに有ったのは間違いないだろう。だがその後の行動は黒森峰女学園戦車道隊を含む回りの人間たちがそれに対し何かしらの対処をしようとしたのかを。必要なのは各々がそれに対しどう考え、動くことが重要なのかと。「二人の人間のために、危険を行う行動は容易なものではない。もつともそこまで大つびらに事態に対処しない回りにも疑問が残るがな……」

潮風に当たらないようにビニールシートで覆われ、鎮座しているドラツへの方に顔を向け、ため息交じりに話す。エリカの行動にしろ、頼れる相手はもうまおしかいないという状況に疑問符があつた梅津。切羽詰まつてきたエリカの叫びがあまりに悲痛だったのも相まつてのことだった。

「黒森峰……というより、自分の生まれた家。戦車道西住流は敗北を決して許さない流派でした。犠牲なくして勝利はない。本当はもつと違うものを磨いていく流派だったのでしょうけど、時代と共にそれは変わっていききました」

気持ちの吐露とでも言うのか。梅津に対しての言葉というより、自分なりの心境を語り始めたまお。月明かりに照らされている海面を眺めながら、淡々と言葉を述べ。

「艦長も知っているとありますが。自分には双子の妹のまほ。そしてひとつ下の妹のみほがいます。でも西住流に生まれた自分にとって、その二人のことが小さい頃は”嫌い”でした」

「…」

嫌いだつたというまおの告白に内心驚いた梅津。少なくともこれまでの話から聞限りは、まほとみほはまおのことを慕っているという印象を抱いており、事情はどうであれまお自身も二人のことを大切にしていると思つていたからだ。

「事情は色々あつたのでしようが、西住流の後継者でもあつたまほとみほは親戚連中や上役たちから重宝されていました。でも、男に生まれてしまった自分はあまりいい印象を抱かれませんでした。正直、二人に妬みなどの感情があつたと思います。まあそれで二人…というよりまほを特にちよっかい出してたんですけど」

嘘や偽りではなく、これは幼かつたまおが持つていた感情だつた。西住流という女系主流の中で唯一男として生まれ、あまつさえただ女として生まれただけのまほとみほは手厚く可愛がられるのに不満がないわけがなかつた。バカと言われるほどの性格だつたまおもこれには気づいていたのだから。だからなのか、長女でもあり次期後継者と言われたまほに対し色々ちよっかいを出しては喧嘩をしていたのだ。

「勉強なんか頑張つても、あがきやうのない事実もありましたし、正直あの頃は絶対家を出てやるつて思つてました。ちよっかいの頃から、祖父が海自にいたという話もあつて、自然とそつちに惹かれていききました」

どれだけ勉強などで、まほやみほの上を行こうとも、西住流は戦車道の流派である。

重要なのは戦車道でどれだけの功績を残せるかなのだ。あまり関心もなく、というよりも自身を否定する存在である戦車道に対し好きになれるわけなどなかった。母や父が褒めてくれることは嬉しいも、やはり母は娘たちの方に傾倒していくのは事実ではあつたし、一緒にいてくれることが多い父でも、やはり戦車道の整備士として動く性質上は娘たちに寄つていけるのは否めなかった。そしてその中で父方の話を思い出し、自然とそちらの方に惹かれていったのだと。だからこそ、中学にでも上がれば家を出て、それらを勉強できる場所にも行こうとまだ幼かいながら真剣に考えていたのだ。

「それが海上自衛隊に入隊した理由……か」

「何もなければそれが理由だったと思います。でも、そう考えた矢先に父が海で亡くなりました。もういきなりでしたね。まだ色々と言も聞いてほしかったし、自分なりの成長した姿も見せてもらいたかった。その時の妹二人は見たことないくらい泣いてました」

父の訃報を聞き、突然すぎる別れに理解が追いつかなかつた当時の自分。それを受け入れられず、寡黙を通したまほもイタズラ旺盛だつたみほもわんわんと泣き叫んで悲しんだ。自分に抱きついて泣いていた二人を見て。

「その時やつとわかつたんです。『ああ、自分はこの二人の兄なんだ』って。『絶対に守り抜かないといけない』って……ある意味、目が覚めた気分でした」

西住流だとか家柄だとかそんなのすべて放り出して、「まほ」と「みほ」という人間を守らないといけない。自分はこの二人の兄なんだと心に刻みつけて。皮肉なのか、父が亡くなったことにより、自分が何とかしなければいけないという感情がまおを兄として自覚させる切っ掛けになったのだ。

「自分が海上自衛隊に改めて入ろうと思つたのは、その延長のようなものでした。そばにいてやりたい気持ちはありましたが、そばにいるだけではないと思ひました。けど、結局はそれも間違いだったようですけど……」

守りたい気持ちも、父の夢も、そして自分の探している道が半端の中で駆け出した道は全てが終焉と向かつているようにも見えた。

「間違いかどうか判断するのはまだこれからだろう。それだけの思いがあるのなら、全ては妹たちに出つてからでも遅くはない。それにお前自身の口から本当のことを伝えればいい。気運か、くらまもちょうどその場所に向かつているからな」

「向かつている？黒森峰にですか？」

黒森峰女学園に向かつていると聞き、驚きを隠せないまおは思わず振り返る。

「司令部の決定だ。洋上回収ではなく、直接届けるためにくらまは航行しておる。事情はまあそれなりにあるがな」

秘匿したい黒森峰女学園側の事情は理解するが、同調できるわけではないため、海上

自衛隊としてはこのまま学園艦もしくは熊本港での係留によって引き渡す考えを明らかにする。早計に解決したいこちら側の事情も考慮してのこともあるが。

「それに海江田。先程も言ったが、これまでのことが全てが間違ったかどうかは判断が早い。必要なのは、どう行動するべきかだ。何もせずに静観するより、何かをしてでもやろうとするほうが一番大事なはずだと私は思う。お前の妹たちは今のお前を必要としているのは間違いないだろう」

「…」

エリカの言葉を思い出し、まほとみほが自分の名前を呼び助けを求めているのは事実だ。事情はどうであれ、それに向き合わないといけないのは当たり前のはず。それは自分自身で誓ったことなのではなかったのかと。

「梅津艦長。色々ご迷惑をお掛けしました。そしてありがとうございます」

頭を下げ、謝罪と感謝の気持ちを書べるまお。その言葉が何に対してなのか、表情を見るなり意味を汲み取る梅津。

「決意は決まったようだな」

「はい。全ては自分が招いてしまったことです…とはもう言いませんが、自分がすべきことは理解したつもりです」

「そうか、なら無事にたどり着けるように海江田もこれまでの成果を出さないと」

「はい！勿論です！」

敬礼をし、先に海江田は艦橋へと戻っていった。一人残った梅津艦長はふと空を見上げていた。

「梅津艦長」

「やはり、聞いていた航海長」

死角となつていたドラツへの裏側から出てきたのはくらま航海長だった。どうやら、梅津艦長と海江田の話が気になつて先回りしていたのだ。もつとも梅津艦長は航海長がいることには先程ドラツへの方に向いた際に気づいてようだが。

「盗み聞きするような真似をしてしまい申し訳ありません」

「まあそう頭を下げなさんな。聞いていたのなら、ちようどよかつたよ」

海江田は航海科所属であり航海長補佐をしているために、直属の上官である航海長としては聞いて置かなければと思つての行動だった。梅津の方も航海長には今の話は伝えておこうと思つていたため、話を聞いていたのは都合が良かったようだ。

「艦長は、海江田が脱柵してでも行こうとしたのを止めるために話をされたのですか？」
「まあそれも少なからずはあつたがな。海江田自身が本当は何を思っているのかを聞きたかつた面もあつた。アイツはまだ若く未熟な部分が多い。だが、海江田は自身で切り開ける力を持っている。もつともそれが今後どうなるかも、海江田自身が決めることだ

がな。家庭の問題も含むから、我々が介入できることは少ないが手助けをすることぐらいはできる」

「しかし、今回の件で海江田自身の立場が危うのは変わりません。それを冷静に判断下すのかは……」

「無論、海江田を艦から降ろすのは簡単だ。だが、それを下せる判断はまだ早い。司令部も海江田の今後の動向がどうなるかを決めかねておる。性格は違えど海江田四郎と同じく、人を惹き付ける強いものを持っているからな」

海江田四郎という存在は今でも海上自衛隊に根強く残っている。それほどまでに多大な影響力を持つている存在でもあった。そしてそれらを惹き付ける強いカリスマのようなものも持っている。まだまだ発展途上であるまおではあるが、確実に祖父と同じく人を惹き付けるものを持っているのは事実だった。それが今後吉と出るか凶と出るかはまだわからない。そしてそれを導かなければいけないのが自分たち年長者としての役目だと熟知している。

「しかし、海江田の奴小さい頃は色々あったんですな。それを聞いてくれた父親も亡くなり、自分一人で家族守っていかなくてはいけないとは」

「私にも建築会社に就職した息子と学生の娘がいる。息子にはできれば私と同じ道を行ってほしい気持ちもあったが、どうも艦上勤務が多いこの仕事が嫌なようだな。で

も、それはそれで良いと思つた自分もいる。息子の人生は息子のものだ。それが良いと思つた道なのならばな。おそらく海江田の父親も同じ思ひだつたはずだろう」

すでに亡くなり会うことは叶わない西住常夫という人物の思ひを梅津なりに説いていく。自分と同じ道に行つてほしいなどという願ひはあくまでも自分のエゴでしかない。大切なのは、やろうとする自分が何をしたいのかということ。子供を信じることにそれが親というものであり、父親というものだろうと。

西住流と決められたレールで過ごすしかないまおに対し、父としてこれからという矢先に亡くなつてしまつた常夫。

(父さん…)

艦内を歩き、改めて自分が何をしようとしなければいけないのかを考えていたまお。すでにいない父を思い、あることを思い出していた。

『お父さんどれぐらいで帰ってくるの?』

『そうだな。早くても一ヶ月くらいはかかるかな』

欧州で行われる戦車道の整備講師として出張することになり、いよいよ明日に出発と迫つていた。荷物の再確認をしている

『だから、まお。お父さんがいない間はまほとみほをしつかりな』

『いいよ別に。アイツ等は西住流が守ってくれるんだから…』

不貞腐れるように言うまお。どうせ、自分にはないものをあの二人が持っているのだから。それを聞き、知られてはいけないことを知ったのだと直感する常夫。

『……いいかいまお。もしお父さんに何かあつたら、お前が二人を守るんだ』

『僕が?なんで…』

自分じゃなくても、西住流とかいう凄い流派が守ってくれるのなら必要ないと思つたまお。どうして、こうもまほとみほのことばかり構うのかと。

『西住流には、まあ色々難しい言葉は並んでるけど、それとは違う強い心を誰よりもまおは持つてる。でも、まほとみほにはまだそれが無い。その時に強い味方になってくれるのはまおしかない』

西住流とは関係ない者として、必ず二人の味方になれると考える常夫。自分でもしほでなく、まほとみほに最も近くにいるのは他でもないまおなのだから。そしてまおには二人には西住流ではない強い心を持っている。

『でも、回りはみんなして…』

『大丈夫だ。父さんがいるだろう。まおのことは父さんに任せなさい』

だからこそ、まおには自分がいると鼓舞する。

『帰つたら、皆でお話をしよう。家族皆でな。だからその時まで母さんたまほとみほを頼むぞ』

『うん……まあやってみるけど……』

それが、父である常夫と交わした最後の言葉であり、約束だった。一体何を話そうとしていたのか、何をしようとしてくれたのかは今になってはもうわからない。その答えを自分で探し出さなければいけないようになったのだから。

（父さん……正直、俺はまだ迷ってる自分がある。でも、今度は俺なりの気持ちをまほとみほにぶつけてみる）

会ったところでどうなるかはわからない。だが、まほとみほが苦しんでいるのなら、それを放っておくことはできない。迷う必要がどこにあるのかと。

海江田まおは、改めて西住まおとして、二人の兄として向かう。

《くらま》は、様々な偶然と出会いが重なり、黒森峰女学園へと海を進んでいくのだった。

【第62回戦車道全国高校生大会編】

—完—

(母さんは今何をしてるんだろうか……)

苦しんでいるのは、妹たちだけではなかったことを今のまおはまだ知らなかった…

番外編 《たった一人の体験航海》

「ん…」

エリカが目を覚ましたのは、明朝のことだった。大会以来久方ぶりにぐっすり寝たよ
うな気分がしていた。ベッドの上で微かに揺れる感覚は自分が船の上にいるのだとい
う感覚がしている証拠だ。そう自分は、まおが乗っている護衛艦に降りたのだと改めて
思い出される。

「あら、目が覚めたのね」

「桃井…さん」

遮られているカーテンが動き、メガネを掛けている女性自衛官がエリカの様子を見に
来ていた。名前は眠る前に聞いていたので覚えている。

「どこか気分が悪いところはない？」

「いえ、特には。おかげでゆっくりと休めましたから…」

「ならよかったわ。びっくりするぐらい眠ってたから、このまま起きないんじゃないか
と思ったんだから。まだ若いんだから、変に疲れを貯めるもんじゃないよ」

「は、はい…」

エリカが横になつてゐるベツトに座り、まるで母に言われるような感じがしてゐた。どうもこう優しくされるのが慣れてゐないエリカはこそばゆい気持ちになる。規律も厳しく、軍隊学校などと揶揄されることもある黒森峰女学園の環境に育つたエリカにとつてはあまり慣れないことだつたのだらう。もつとも今乗つてゐる物はまさにその軍ともいえる組織の戦闘艦に乗つてゐるだが。

「さて、起きたら栄養のあるものを食べるのがいいんだけど、艦長があなたに艦橋に是非来てほしいつて連絡があつてね。もつともあなたが大丈夫ならだけど」

「大丈夫です。あの、艦橋に連れて行つてください!!」

呼んでゐる理由は色々あるだらうが、もしかしたらまおがゐるかもしれないと感じその要請に応じるエリカ。まおに会つて思わず感情が爆発してしまい、みつともない姿を晒したため、回りにいた海自の人たちに対して恥ずかしい気持ちはあつた。無論それはまおに対しても同じ気持ちだ。だが、貯めていたものが一気に爆発したおかげなのかクリアな感覚もあり、今はまおに会いたい一心だつた。

「わかつたわ。なら、安全のためにこれとこれを着なさい」

エリカの意志を汲み、桃井は用意してゐた隊員が使用してゐる予備のライフジャケットとメツトを渡す。身なりを整え、すぐにライフジャケットとメツトを着用するなり桃井の案内のもとくらまの艦橋へと向かつていく。

(自衛隊の船つてわりには、なんか古いわね)

艦橋へ向かつていく途中で、くらまの艦内を見渡していたエリカ。すでに艦歴30年以上は経過している艦であるため所々が痛いんで見えていた。もつと最新のものばかりと思つていただけに、少しばかり拍子抜けしたような感じはあつたが、まだ現役であり戦闘可能な護衛艦であることに変わりはない。

「艦長。逸見エリカさんをお連れしました」

「おお、ごくろう桃井一尉。そしてようこそ、逸見エリカさん。我が《くらま》へ」

「は、はあ……」

艦の最高責任者である梅津艦長とは一度顔を合わせており、あれだけの騒ぎを起こし、あまつさえ大迷惑を掛けているはずなのに、自分を歓迎するように声を掛けてくれたことに疑問を感じたエリカ。

「艦内にはいささか窮屈だと思つて、艦長が君をここに案内したんだ。最も君に興味があるかは別だけどな。私はこのくらまの航海長を務めている」

困惑気味なエリカに航海長が補足するように説明をする。まおがそうだったように、エリカにも責任を重く感じていては駄目だろうと、何かしらラックスできないかと考えた。最も護衛艦にできることは限られているので、たった一人ではあるもののエリカをゲストとして体験航海をさせることにしたのだ。

「いつも乗っている戦車に比べれば、いささか乗り心地が良ければいいのだがな。おつと、私はこの艦隊の司令を務めているものだ。ひとつよろしく逸見エリカさん」

「い、いえ。こちらこそ…」

梅津艦長の反対側に座るその上を行く艦隊の最高責任者である隊司令が、エリカの方を振り向き自己紹介がてら挨拶をする。それに続くように、艦橋にいる者たちがそれぞれ自己紹介をしていく。

(な、なんなの。ここの人たち…)

ここにいる人達は、この国を守ることに誇りを持って活動している人たちのはず。規律が十二分に通じ、これほどまでに和やかにやるような場所ではないだろうと思っていたからだ。それこそ今まで緊張状態で過こしてきた黒森峰とは違った場所だった。少しばかり違うかもしれないがまるであの中等部にいた頃に似ていた。

「あ…」

その中で、識別帽を被り艦橋中央で羅針盤の前に立っているまおの姿を確認した。

「それで、君の気になる人物が航海長補佐を務めている海江田まおだ。西住まおと言ったほうが聞き覚えはいいかな」

「べ、別に気になつては…」

「ははは。今は航海指揮官で航海に関する指示を出す立場にある」

航海長がまおの紹介をするも、気になる人物と言われて反論気味に答えたエリカ。茶化された気分がしてどうも恥ずかしい気持ちで勝ってしまった。

「補給艦《はまな》視認!! 方位0—5—0、艦右舷に接近します!!」

露天艦橋にいる見張員が給油のために佐世保からやってきたとわだ型補給艦3番艦である《はまな》を確認し、艦橋へと報告する。甲板には洋上給油のために、隊員たちが準備に取り掛かっていた。

「艦長」

「任せるよ」

「はっ。艦減速。第一戦速、進路は維持!!」

洋上給油のために、《くらま》を《はまな》と平行航行のために減速指示を出すまお。他艦橋員もまおの指示の元、先程までの和やかな感じが嘘のようにキビキビと動き出していく。それに答えるようにゆっくりと速度を落としていく《くらま》。対向している《はまな》も面舵を取り、《くらま》の方へとゆっくりと近づいていく。

(……あの目)

指示を飛ばしているまおの姿を見て、思わずまほと姿が重なっていた。本人に自覚はなくとも、まほを知る者からすれば今のまおの目つきなどはまほによく似ていた。

(やっぱり双子なのね……)

それが良いことなのか、悪いことなのかはわからないが、近く見てきたエリカにとって、目に映るまおが他人のような気がしてどうも嫌だった。

「はまな。補給位置に付きます」

二艦の速度が同調し、《はまな》から給油のためのワイヤーが《くらま》に繋がり、蛇管が取り付けられたトロリーブロックがゆっくりと向かってきている。給油はおおよそ1時間程度だと予測され、その間に艦はほぼ同速度で海を航行していく。露天艦橋ウイシグに出る許可が出され、エリカは海風が吹く艦橋から出る。

「まさか、お前とこうしてここに立つ日が来るなんてな」

「ふん。そうかしら」

給油状況を確認するため、露天艦橋ウイシグに來たまおに対して、どうも強気な姿勢を変えることができないうエリカ。一方のまおも、エリカとまさか護衛艦で一緒に立つ日が来ることは夢にも思っていなかったようであり、普段なら喜べる状況なのだろうが今はそれを素直に喜ぶことができない複雑な状況だからだ。

「やっぱり似合わないわね。その格好…」

「格好だけ気にしてたらこの仕事はやってられない。」

「仕事…」

エリカなりに色々調べところ、学生と言っても給料は貰っているし、災害等が起きれ

ば出勤する。まおは候補生らしいが、自分達とは立場が違う人間。今の彼は俗に言う一般人とは違うのだ。

「まあいいだろ。それよりエリカに聞きたいことがあるんだけど」

「何よ」

「Ⅲ号に乗ってた搭乗員たちはどうなったんだ？」

みほが助け出していることはテレビの報道で知っていたが、その後がどうなったのかわからなかったのだ。

「…幸い大した傷もなくて、検査入院しただけで済んだわ。でも、多分もう戦車道には戻ってこないわ」

「どういふことだ」

「自分たちが敗北の原因を作ったって。今の黒森峰は敗北の責任をとやかく言ってるから、それに会うのが怖いらしくて。もう殆ど転科や転校届けを出してるそうよ」

みほの責任が問われるのと同じように、落水してしまったⅢ号の乗組員たちにも責任の所在が問われていたのだ。厳格である黒森峰の校風柄、どんな仕打ちが待っているかを恐れて転科や転校届けを早々に提出したらしい。もつとも、それらがみほの心に更に傷をつける結果になってしまった。

「残ることになってるのは、小梅だけ。それもどうなるかわからないけど」

小梅が残ると言っても、非難の集中が彼女一人に押し掛かることもあるからだ。

「赤星か……」

その名を聞き、懐かしむように呟くまお。中等部から一緒にみほ、そしてまほたちとやってきた所謂昔馴染みの戦車乗りだ。みほとはかなり仲が良く、一緒になって買い物等に行ったりするほどの間柄。それは無論、本人は認めていないがエリカも同じではある。

「エリカ。俺は黒森峰女学園に行く。だけど、お前の要望に全部答えられるかわからない」

「……」

まおの口から黒森峰女学園に行くという言葉を聞き、胸が思わず熱くなってしまふ。同時に、全てが解決できるかどうかともわからないと言われるも、来てくれることだけでも十分嬉しかったからだ。

「今の黒森峰女学園をどうこうできるのは、俺じゃなくてももしかしたらまほやみほかもしれない。なんだかんだで、あの二人が引っ張って来たからな」

（違う。黒森峰を引っ張って来たのは、間違いないくアンタよ。だから……）

いなくなつて欲しくなかった。まおがいればよかったのだと、今でも思っている。回りが何を言おうとも、あの頃の戦車道を引っ張って言ったのは間違いないくまおなのだ

と。

「まほとみほは学生寮なのか？それとも実家の方に？」

「隊長たちは師範代に連れて行かれて、学園艦にある別邸にいるわ。学校の寮にいたら、回りの目があるだとかで……」

すでにまほとみほは黒森峰女学園の女子寮にはおらず、西住家が学園艦に構える別邸に移動していると話すエリカ。無論別邸があることはまおも知っており、中等部時代も利用したことがあるので、場所などはわかっている。

「別邸にいるなら、会うのはそう難しくはないか……」

学園艦に付けば、おそらく色々な人物たちに会わなくてはいけないだろうが、真っ先に会わないといけないのはまほとみほだ。

だが、どちらか先に会うべきかがなのか。

まおが懸念すべきことはそのことだった。

転々再会、そして美倉島へ

航跡—1 《問いかけ》

あの子が、まおが出ていってから我が家の雰囲気は大きく変わった。

あれほどまでに騒がしかった西住家は、ただ静かな家庭へと様変わりしたのだ。

だが、当時の私はそれでよかったのだとその時は後悔などしていなかった。あの子は人の話も聞かず、西住流としてこれからという時に全てを壊して出て行った。

「俺を勘当して欲しい。それが一番今の問題を解決する手っ取り早い方法だ」

あの上役達（プロローグ）Reise—10『すれちがい』参照との話し合いのあとにまおからお願いの内容。あろうことか子供が親に向かって勘当して欲しいなどと言ってきたのだ。それがこの場を収めるのはそれだけだと。

「つ!!…勝手になさい!!」

どうしてこの子は私の気持ちも全く理解しようとしなのか。昔からイタズラ旺盛で、問題ばかり起こす子ではあったが、ここまで愚かかつ家族をなんとも思っていないような発言に、色々な出来事が重なり余裕のなかった当時の私は叫んでしまった。

その後はまおが勝手に簡単に荷物をまとめて出て行った。場所は常夫さんの生まれ

故郷である瀬戸内海にある小さな島である『美倉島』。そこにいるお義母様と一緒に暮らすと聞いていた。だが私にとつて、いえ西住流師範代である西住しほにとつては、もうどうでもいいことだった。あの子は由緒正しい西住流に泥を塗つたのだ。生き恥を晒し続けるような真似をするまおを断罪したのだと。当時の私の余りにも愚かな行動に本当に辟易してしまう。

それから、私とまほ、そしてみほの三人での生活になつた。そして真つ先にみほから連絡が入つてきた。あの子はまおに一番懐いていたから当然だろうとは思つた。だからこそ、失つた悲しみを糧に強くあらなければいけないと促した。常夫さんの亡くし、私もそれを周囲に悟られないように強くあらうとしたように。上役たちも、戦車道に最も精通している娘たちを重宝している。ならば、それらの期待に答えるようにしなくては。私もいずれば西住流家元となり、西住流を盤石なものしなければいけない。

そのために、不要なものは切り捨てなければいけない。

《撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れ無し。鉄の掟。鋼の心。それが西住流》

それが全てだった。私はそのために、これからもやっつけていくだけだと。

そしてそれをまほとみほが継いでいくものだ。

まほもそれに答えるように、力を更に磨き上げていつてくれている。

だが、大きな歪が起きつつあった。

まほが私の言うことを聞かなくなった。

表面上は話を聞いていたようだが、それを実行しようとはしなかった。それが高等部へと進学すると、顕著に現れてきた。進学早々に、一気に一軍の座を獲得し、第61回戦車道全国高校生大会へと参加したまほ。その力はまさに圧倒的だった。単機で敵を撃ち抜き、指揮する隊長を差し置いて回りに冷静かつ冷徹な指示まで出していたのを感じた。

あれでは、ただの八つ当たりをしているようにしか見えないではないか。

では誰に？

相手は想像に難しくなかった。

きつとまおに対してなのだろうと感じた。

あの運命ともいえる日。まおの元にやってきたまほは今まで見たことないほどに感情を露わにして、激しく取り乱していた。

思えば、みほよりもまおに懐いていたのはまほだったかもしれないからだ。二人は殆ど一緒にいるところを見ていた。その怒りなどが今のまほを形成しているのであれば、それは危険なことなのではないかと。

止めるべきだ。今ならまだ間に合う。

だが、なんと言えればいいのか。西住流師範代として叱責するべきなのか。母として何

か強いえばいいのか。

それは無理だ。上役たちはまほの圧倒的な強さともたらす勝利をこれでもかと称賛していた。とてもではないが、口を出せる状況ではなくなってしまった。

それから。いやもつと前から家族らしい会話が何ひとつなくなってしまった。食事も黙々と食べ、話すとすれば西住流や戦車道の話ばかり。いつもここにまおが入ってきて、くだらない話をしては私が注意をして、まほやみほがやんわりと笑うのが当たり前だった。

だけど、そのまおはもういない。その時、私は後悔の念に駆られ始めていた。

常夫さんと約束した。まおも必ず立派に育てようと。大切な子供の一人なのだからと。

それを私は未熟な感情一つで追い出し、見ようともしなかったことに。

まおは今何をしているのだろうか。言っていたとおり、防衛学校に入っているのだろう。

自衛隊には知り合いなどはいくらでもいるから、どうしているのかを聞くのは簡単だった。だが追い出した手前、そんな真似はできなかつた。

その思いのまま、何もできずに流れに身を任せて時が経ってしまった。

みほも高等部へと上がり、ついに西住姉妹率いる黒森峰戦車道が始まった。その時点

であらゆる方面から多大な期待が寄せられていた。それに合わせるように高等部からの入学志願者も一気に跳ね上がったとも聞く。それほどまでに話題性が上がっているのだから。

”負けは絶対ありえない。黒森峰10連覇は間違いないし”

すでに回りは優勝気分です。二人を褒め称えていた。それに歯車をかけるようにまほはますます歪んでいるように見えた。

「必要以上に攻撃を加えるのは王者の戦い方ではないわ。あれではただの無法者の戦い方よ。西住流とは…」

勝てばいいという精神は西住流としては間違いではない。勝利至上主義のもと、それは決して間違いではない。だが、必要以上に戦車に攻撃を加え、まるで無法者が礼儀もなく、敵を蹂躪しているだけ。恐怖を与えるようなことではないのだと。私は始めてまほの持っている異常性に疑問符が生じた。あれ以上のことをさせてはいけない

『私は西住流を体現しているだけです。その何がいけないんですか？』

その言葉を最後にまほとの話が終わってしまった。

どうして、私の言葉をわかってくれないのまほ。

あなたがやろうとしているのは西住流なんかでは…

西住流とは…勝つための流派？

それならまちがいでないのか？

その問いに答えてくれるものはいないまま、決勝戦が始まった。

そして最悪なことが起きてしまった。

(やめなさい!!やめてみほ!!やめて!!)

濁流の中に流れるみほの姿を見て、思わず顔に手を置いて取り乱していた。常夫さんとの最後の別れが頭に浮かんでしまう。大会運営は何をやっているのか、早く中止して、救助を送るべきだ。なのに運営側は、何を渋るのかモタモタ状況を見ているだけだった。中止にしてしまえば、後の進行状況や大会運営に更に資金が掛かってしまうという

ことで止まっていたのだ。それに痺れを切らした私は運営に乗り込んでい今すぐに救助隊を動かして迎えと言おうとしたその時だった。

『く、黒森峰女学園！フラッグ車！行動不能！よって優勝はプラウダ高校!!』

審判の声が会場中に広がり、プラウダ高校が優勝した結果を報告する。

結果を聞いた途端に動き出した救助隊。もつともその前に、みほが搭乗員を殆ど助けていたので、どのみち間に合ってなどいかなかった。

黒森峰女学園の敗北。それは最悪な結果であることには変わりはない。

敗北した黒森峰女学園……といよりも西住流戦車道は敗北した西住流後継者であるは

ずの娘二人の指揮のもと。それは最早言い逃れしようのない。西住流の顔とも言える二人の娘たちが結果的に王者西住流に泥を塗ってしまったのだ。たとえ、緊急事態だったとしても、みほの行動は人としては称賛されても西住流では言語道断だったからだ。そして運営側も、みほの行動を危険行為として嚴重注意の処分を黒森峰に下した。私は口から何かを言おうと思ったが、その後の処理の方に気を取られそれどころではなかった。

その日からはお詫び行脚の日々だった。

上役、出資者、黒森峰女学園戦車道のOG会など、行く先々で批難の言葉が突き刺さっていた。

まるで手のひらを返すように、まほやみほ、そして指導者たる私を叱責していく。言い返したい気持ちもあったが、勝利至上主義の精神を持つ者としてそれを許さない自分がいた。

「此度は、私の失態で黒森峰女学園、ひいては西住流に泥を塗る結果となってしまい、大変申し訳ありません」

まほの口から出たのはそれぐらいだった。感情のない言葉はただ入力された内容を吐き出すコンピュータのように。

「……………せ……いだ。全部……まお……だ……」

移動する中、俯くまほがしきりに何かを呟くのが聞こえるも、なんと行って声を掛けて上げるべきなのかわからなかった。

「でも、お母さん。私、人を助けたんだよ!!落ちていった小梅さんたちを助けよう」と……家に帰って、私はみほを呼び出し此度の事情を聞いた。そんなことはわかっている。この子は優しい性格をしている。まおやまほも言っていたからわかる。西住流の精神には向いていないことに。

「あなたも西住流を継ぐ人間だといいい加減自覚しなさい。犠牲なくして大きな勝利を得ることはできないのよ。それをよく考えなさい」

なのに、出てくる言葉がこんなものばかりだった。違う私が言いたいのはそんなことじゃない。私は……

「違うよ。そんなの違うもん。お兄ちゃんならわかってくれるもん!!」

今でもみほにとつての理解者がまおだということに私は恥ずかしくなった。所詮私は母として見られていなかった。

「みほお嬢様!!」

「ほうっておきなさい菊代。しばらくすれば冷めるでしょう」

涙を流すみほに対し、私の口からはこんな言葉しか出なかった。

私は、娘たちに対して何を言っただけであらうかかわらなくなっていた。

どう慰めるのことにしてやればいいのか。どう優しく接してやればいいのか。

当然だ。その役目をいつもしていたのは他ならないまおだったのだから。まほとみほが負けて凹んでいるときも、失敗したときも、いつもまおが二人のそばにいたのだ。

いつの間にか私は娘を西住流という枠組みを形成するための物として育てようとしていた。

「ああ、私は…」

ようやく私はこれまでのことを激しく後悔してしまった。

私は女傑などと言われる評価を受けるが、そんなのは大きな思い違いだ。学生の頃は、たった一人の跡継ぎとして最有力ということで大きな期待を受けていた。だが、それに耐えられない自分がいたのは事実だった。

そんな時に出会ったのが戦車道の整備士として他校から来てくれていた常夫さんだった。彼に支えられて結婚した。大切な心の支えがあつてこそ、私はここまでやってこれたのだ。そして3人の子供に恵まれた。まお、まほ、みほ。大切な私の子供だ。

「母さん。まほとみほを…お願いします。勝手な息子のことなんか忘れてください」
頭を下げるあのときのまおのことを思い出す。

常夫さんを失って、その空いた穴を埋めるように西住流師範代として行く行くは家元となり、跡継ぎの候補であるまほとみほのためにと教えをしてきた。それが私のこれま

で教えて受け、そう教育されてきたのだから。長く続く西住流という伝統をなくさないためにと。

「ごめんなさい…まお」

私は、息子の真意もわからず。親としてしてあげなくてはいけないことを全てまお一人に押し付けてしまっていた。そして、それを始めて打ち明けようとしたまおの話を自分の都合ひとつで追い出してしまった。

だけど、今の私には何をどうすればいいのか。

なんと行って、まほとみほにしてやればいいのか。

教えて、まお。

私はどうしたらいいの…

どうしたらいいの…

常夫さん。

航跡—2 《悪夢》

何も見えない暗闇の中に、まほはたつた一人顔を隠すように座り込んでいた。まるで回りの声を遮断し、現実を直視しないかのように。

「まおが悪いんだ。アイツが裏切るからだ」

黒森峰女学園の敗北により、取り返しのつかない事態に直面したまほは現実逃避をするために、責任はまおにあるとしきりに呟いていた。そうしなければ、自分を保つことができなかつたからだ。全ては自分を裏切つたまおが悪いと。それが今のまほにできる最後の抵抗だつたからだ。

「お姉ちゃん……」

「み、みほ」

ふいに聞こえた妹の声に顔をあげるまほ。暗闇に佇み、顔を俯かせていたみほ。幻のようにも見えるみほの姿は、今のまほには現実と大差ない認識だつた。

「お姉ちゃん。なんで私を助けてくれないの？妹のことより自分の立場や西住流が大切なの？」

顔を上げ、侮蔑を含むような目で見つめるみほ。その言葉には、母や西住流、回りの黒森峰の学生たちから罵倒された際に何も言うことができずにいた。何をどう言つてやればいいのか。そのときのまほはそこまで考えられるほどの思考が出来ていなかった。

「わ、私は、西住流の後継者として……そ、その使命があるんだ。わかってくれ……それにみほも私と同じ西住流を継ぐ者なんだ。だ、だから……」

「だから……何?」

立ち上がる力もなく這いつくばるようにみほに抗弁を述べるまほ。そんなまほに対し、みほはゆつくりと近づいていき、まほの前に座り話を聞く。だが、まほのだとだとししい言葉にイライラしたのか、重い言葉がみほの口からでる。

「西住流は私の全てなんだ。それがなくなってしまうたら私は……」

「結局、自分の立場が大事なんだね。」お兄ちゃん”ならそんなの関係なく助けてくれるのに」

お兄ちゃんという言葉を聞き、齒軋りをするまほ。そしてすぐに立ち上がり、みほの肩を掴んで吐き捨てる。

「アイツは私達を捨てて裏切ったんだ!! そうだ、今回の件もみんなまおが悪いんだ!! 全部アイツが……」

黒森峰女学園が負けてしまったことも、みほがこんなことになってしまったのも、自分がこんな苦しいハメになってのも、全部まおがいなくなったからだ。そうみほに言い聞かせて、納得してもらおうとする。

「そうやって責任転嫁して逃げるなんて…最低だよお姉ちゃん。本当最低…」
帰ってきたのは、侮蔑の言葉だった。

「そんなの、自分のことに責任持てないってことでしょ。そうやって人のせいにして楽しいんだお姉ちゃんは」

「な！そんなことはない！！私は、西住流の後継者としてやってきたんだ！！それにみほ、私はお前を守るために」

「お姉ちゃんの言葉、全然信用ないよ。それに私を守るって、結局私も西住流として違った行動したら捨てるんでしょ」

何を言おうが、全てが嘘でしかないと断罪するみほの言葉に必死になって弁解しようとすするまほ。

「ち、違うんだみほ！私はお前と一緒に！」

「そんなのお姉ちゃんが勝手に言ってることでしょ！私の気持ちもわかろうともしないくせに、押し付けられないでよ！！」

「み、みほ…」

縋り付くまほを振り払うように突き飛ばしたみほ。思わぬことをされ尻もちをつき、呆然とした表情でみほを見上げるまほ。

「もう私、あなたのこと姉だと思いたくもない。人のことなんとも思わない人なんて嫌い」

自身を否定し、そう吐き捨てるみほ。その言葉がまほの心を抉るには十分過ぎる言葉だった。

「ま、待ってくれみほ！頼む話を聞いてくれ！嫌だ、嫌だ。お前まで私を置いていないで！！」

幻影のように消えていくみほに縋るように手を伸ばしていく。自分にとって大切な、かけがえのない妹までも自分から去っていくのは耐えられない。置いていかれるのはもう嫌だった。

「勝手に言ってくれば」

最後の言葉は、余りにも無情なものだった。

「そんな……みほ、みほお……っう……」

完全に消えていったみほの姿に、手をつけて涙を流すことしかできない。まさに悪夢のような出来事にまほは呆然とするしかない。だが、それはまだ始まりでしかないのだ。

「隊長」

「…お前たち…」

現れたのは、黒森峰女学園のタンクジャケットを身にまとう今まで一緒にやって来た隊員たち。その目は自分に対する憎しみや怒りと言ったものを含むものだった。その中心にいるのは、後輩の仲では中心的存在のエリカや小梅の姿があった。その二人も今までに見たことのないほどに、まほを睨みつけていた。

「隊長にとつて、私達は単なる戦車を動かす。いいえ、西住流の矜持を目立たせるための駒だったってことなんですね」

「違う。違うんだ小梅。わ。私はお前を、お前たちを駒だなんて」

「そう思ってるから、見捨てようとしたんですよね。流されて行く私達を」

「し、知らなかったんだ!!お前たちが流されていくなんて。あとで知ったんだ。小梅たちを決して見捨てようとしたわけではないんだ!!」

浮かび上がるのは、あの決勝戦の出来事。崖から滑り落ち、そのまま落水した事實は大会が終わったあとに知っていた。無線の状態も悪く、フラッグ車の言葉も何を言っているの半分以上は理解していなかったのだから。

「でも隊長は西住流なんですよね。犠牲なくして勝利なしなら。知ってても見捨てたんじゃないですか?」

「そ、それは…」

否定の言葉を言えばいいのに、その言葉が口に出てこなかった。勝利至上主義の西住流において、それは間違っていることなのだから。どのようなことがあると、勝利を求めることが西住流。すでに精神も安定しておらず、自身を肯定してもらうために西住流に必死に縋り付いていたまほの心は踏み込んではいけない場所にまで片足を入れている状態だった。

「弱い人間なんかいらんなんていったのはあなたじゃないですか隊長」

「エ、エリカ…」

弱い人間などいらん。それは間違いなく言ったのは他でもないまほなのだ。そのために、弱い選手を徹底的に排除してきたまほの行動はすでに、これまでずっとやってきた選手を裏切る行為でもあった。

「私は、黒森峰女学園を優勝しようとしてきたんだ。そのためには必要なことだったんだ!!そのために」

「そのために、みほや私達みたいな弱い人間を捨てるんですね。見損ないましたよ隊長」
あれほど自分のことを憧れを抱いてくれていたエリカ。西住流を、自分を優先したばかりに、今となってはそれまでの信頼をも壊してしまったのだ。

「あなたみたいな人に憧れてたなんて、ホント一生の過ちですよ」

隣に立とうと必死になってやってきたエリカに対し、自分がやってきたことは彼女の期待を裏切るのには十分過ぎることだったのだろう。

「エリカ。私は…」

大切なはずの後輩の信頼も失い、誰もかれもまほに対し侮蔑の目を向ける隊員たち。

「まほ。あなたは西住流に泥を塗ったのよ。恥を知りなさい」

「お母様…」

現れたのは、母でもあり師でもある西住流師範代の西住しほ。

「あなたには期待してたけど、とんだ思はずしだったようね。栄光ある10連覇も達成できずに、多くの人間の期待を裏切って」

「ち、違いますお母様!!私は…私は!!」

弁解しなければ、母に見限られるということは西住流から見限られるも同然だったからだ。妹も失い、隊員の信頼も失い、最後に西住流まで失ってしまったらもう何のために生きて良いのかわからないからだ。

「あなたのような情けなく、弱い人間は西住流には必要ありません」

「そんなお母様。私は必死に西住流のためにやって来たんです。そのために、弱い自分を捨てて、認めてもらうために…」

「あらそう。なら、あなたを認めることは永遠にないわ。弱い西住なんて、いらぬのだ

から」

「お母様…そんな…」

「いけないと言われ、激しくショックを受けるまほ。それを言われてしまえば、まほに残るものなど何も無いからだ。それらに追い打ちをかけるかの如く決定的な人物が現れてしまう。」

「まほ」

「お父様…」

「すでにこの世にはいないはずの常夫の姿があつた。その目はまさに憐れみと悲しみで埋まっている。」

「まほには優しく凛々しく育つてほしかった。そんな薄情な子は、僕の子供じゃない」
「そんな。お父様まで。いや、お父様…」

「一番慕つていた父である常夫にまで否定の言葉を言われてしまい、まほの心は限界だった。回りにいた人々は消えていき、暗闇に一人残されたまほは涙を流すことしかできなかつた。妹に見放され、隊員たちから侮蔑され、母には捨てられ、父には失望され、そんな状況にまほはただ涙を流すことしかできなかつた。」

「アイツは…!!」

暗闇の中にたった一筋の光を見つけた。見間違いのない、最も信頼していた兄である

まおの姿だった。それをみたまほは涙も吹かず一心不乱に駆けだした。

「まお……まお!!」

何でもいい、全てはまおが招いたことなのだ。全部はまおのせいだと言わなければいけない。こんなことになったのも、全部まおがぶち壊したのだ。そうでもなければ、まおが構ってくれないと。縋るようにまおの肩を掴む。

「誰だお前」

帰ってきた言葉は予想外の言葉だった。

「ま、まお?」

狼狽えるまほに対し、他人を見るような目で見つめるまお。

「他人が気安く俺に話かけるな。さっさと消えろ、目障りだ」

まおはすでに他人なのだ。もう自分のことなど眼中にすらない。構ってくれない。まほもまおを他人と切り捨てていたのである。遠ざかっていくまおという他人の背中を見ることしかできないまほはゆっくりとへたり込む。

「私は……ああああああああああああああああ!!」

「はっ……あ、くうう……」

パツと目が覚め、意識が覚醒していく。見慣れた天井が見え、閉ざされたカーテンから光が差し込んでいる。

”夢”

そう。全ては夢でしかなかった。いや、悪夢と言ったほうが正しいのだろう。

だが、それがどうも現実味を帯びてしまいまほの心を傷つけてしまう。夢で言われたことを直接言われたわけではない。直接話しさえすればわかることのはず。しかし、今のまほにとってそれが全て現実なのではないかという恐怖があり、外に出ることが出来なかった。面と向かって話すことが出来ない対人恐怖症がまほに芽生えつつあったのだ。

「みほ……ごめん……」

誰もいない部屋でまほはポツリと呟く。みほの姉として、何かしてあげなければいけないのはわかっていた。みほが傷ついているのはまほにだって十分理解している。だが、自分も誰かに救いを求めているのも事実だった。

今いる別邸には、みほも一緒にいる。会いに行こうと思えば、すぐにでも会いにいけるほどの距離。

『お姉ちゃんなんて大嫌い!!』

その言葉がまほの頭の中にしきりに響いていた。それは夢でも幻でもない、現実になされた言葉だ。大切に行っていると思っていたのに、本当は自己のことばかり優先し、みほのことを利用しかけていた自分に嫌悪感が湧き出る。

みほに会うことが怖い。本当に見放されるのではないかと思ひ、あれから声もかけることもできなくなっていた。本当にすぐ近くにいないのに。たまに聞こえてくるみほの泣き声を聞き、自身の情けなさに涙を流す日々が過ぎていた。そこまでまほの心は追い詰められていた。

「まお……なんでだ。助けて……」

シーツを掴み、まおの名を呟く。まほの眠っていた部屋の壁には、家族や戦車道で共にやってきた仲間の写真などが飾られていた。そう、今まほが眠る部屋はまおが使用し

ていた部屋だった。深い憎しみや怒りの感情をぶつけるためにあえてまおの使用していた部屋で寝泊まりしていたまほ。だが実際は、まおとの繋がりが断ち切りたくない感情がまほをこの部屋に向かわせていたのだ。いつも自分を助け、見ていてくれたまお。そばにいてほしい。声をかけてほしい。話を聞いてほしい。

でもない。まおはここに来るはずもない。誰も助けてもくれない。

”何をどうすればいいのかわからない。自分が壊れる。つらい、お願いだから助けて。もういやだ”

無情にも涙がこぼれてくる。自分がこんなにも弱い人間だという現実が嫌だった。いつも凛々しくして、冷静にしようとしていたのに。情けない姿なんて見られたくなかった。かつこいいいと言ってくれたみほを失望させたくなく頑張ってきたはずだった。

「誰…」

その時だった。誰かの足音が廊下から聞こえてくる。今の自分たちの面倒を見るために実家から来てくれている女中の菊代が帰ってきたのかと思つたまほ。料理もあまり得意ではない自分たちのために折角作ってくれる食事もそんなに通らない日々。一口食べたらずれで終わり。申し訳ない気持ちはあるも、本当にそれぐらいしか喉を通さなかった。

少しだけ開いている扉がゆつくりと、開いていく。あまり人に会いたくもない気分な

だけに菊代に出ていってもらおうとした時だった。入ってきた人物を見て、まほの目が大きく見開かれていく。

「まお…」

まだ自分は夢の世界にでもいるのではないかと思った。ここにいるはずない人間がこうして自分の目の前に立っている。

「まほ」

幻影などではなく、紛れもないまおの姿がそこにあっただのだから。

自身が追い掛け、掴みかかったあの夏の日。

その再現ともいえるも、あの頃とは全く真逆の光景だった。

航跡―3 《かつての仲間たち》

「はあ。久しぶりの陸地だったのに、なんか憂鬱だ…」

「言うな孝雄。クラス一の馬鹿のお前が憂鬱とか言い出したら、いよいよこの世の終わりが来たみたいだぞ…」

学園艦から出ている熊本港行き連絡船にて、戦車道整備班に属している武内祐司と駆流孝雄。全国大会が波乱の中終わり、休みもできたので久しぶりに実家に帰る途中だった。

「この世の終わりの前に、黒森峰が終わるかもな」

いつもならここでツツコミを入れる流れなのだが、それすら忘れるほどに事態を重く受け止めていた孝雄。

「どうなんのかねえ戦車道は。隊長もみほちゃんも姿を見せず、隊は分裂してバラバラ。とても名門校のするこつちやねえだろ」

「ふん。いい気味だ。散々俺たちをこき下ろした罰が下ったんだよ」

高等部に上がり、西住まほが隊長になった途端に冷遇とも言える扱いを受けてきた整備班メンバー。それらに便乗するように西住まほに鼻肩する外部生たちの介入もあり、

余計に面倒な関係になつていた。最も、なぜまほが自分たち整備班に当たるようになったのかは、大方理解はしていた。

「やつぱまおをさ、止めるべきだったのかね。アイツいなくなつて、黒森峰が文字通り黒くなつていったし」

「過ぎたこと言つても仕方ないだろ。そこはアイツの気持ちの問題なんだから。まあ、あの隊長があそこまで激変するとは思わなかつたけどな。それだけまおにぞつこんだつたつてことかね」

まほのあからさまな変貌に最初は戸惑いや怒りが沸き上がるも、以前の対立でまおの名前を出しただけで冷静さを失うほどの狼狽えぶりを見てしまい、今の現状も相まって逆に憐れみの感情を抱いていた面々。というより、見ていてこっちはあまりにも痛々しい姿だったからだ。

「妹がぞつこんつてやばいだろ」

「だからまおの奴も距離置いたんじゃねえのか。まあ結果は逆効果みたいだけどな」

本当の理由は実際はわからないが、まほの異常振りを見て武内はそう推測する。身の上話は簡単ながら知つていたのでまおの苦労振りにはいくらか理解できるが、結局最後は自滅を導いたので同情できる余地はあまりない。昔からそうだがまおはあまり回りに頼ることをしないし、妹たちに優しすぎることも相まって心配な面もあつたりする。

その辺がまおの最大の欠点とも言える面でもあるからだ。

「まあこんな船の上で言っても仕方ないか。今は疲れとって…ん？」

「どした祐司？」

「いやあれ、自衛隊の船だろ」

海上の方にとあるものを発見し指差す祐司。そこには一隻の二門を備え、3520と目立つようにペイントされた灰色の船がタグボートに押されている姿があった。後ろにある飛行甲板には妙なビニールシートが何かを覆い隠していた。

「海上自衛隊の船だな。まおが乗ってたりして」

「まさか、そんな偶然あるわけないだろ」

今頃横須賀にある防衛学校にいるだろうと考える。そもそもそんな都合よくまおがこの場にいることなど奇跡が起きてても信じられなかった。二人の乗る連絡船も、甲板員で作業している乗組員の姿が見えるほどまで近くに来る。

「ん!?おい、裕二!!」

「なんだよ。まおでもいたのか？」

一眠りでもしようとした時、孝雄からふいに服をつままれて顔を上げる。

「あれ…まおじゃね？」

「あ？」

孝雄の見つめる先には、移動中の護衛艦の露天艦橋に“まお”にそっくりの姿を本当に見つけた面々だった。



「まおを見た?!その自衛隊の船にか!!」

格納庫に響き渡るように驚きの声を上げたのは、かつてまおとクラスメイトだった熱血肌の人柄である深田。乗り手である女生徒たちの戦車道が休止状態or夏休み期間と言つても、戦車のメンテナンスはしなければいけないため、整備班の面々は朝つぱらから作業に取り掛かっていた。

「あの顔は間違いなくまおだ。視力2.0を越える俺の目を信じろ!!」

そして現在、同じ整備班である武市と駆流が明朝の連絡船にて、熊本港の近くに停泊していた自衛隊の船。つまりはエリカを送り届けるために停泊している練習艦《くらま》の露天艦橋にまおらしき人物をを目撃したとの情報を持ってきたのだ。もし本当ならば、この黒森峰の学園艦に来るかもしれないと本来なら実家に帰るのを蹴つてまで整備班に伝えるためにとんぼ返りして来たのだ。

「だったら声の一つでも掛けてみればよかつたんじゃないのか?それぐらいの声でるだろ」

「すぐに船の中に入つてたから出来なかつたんだよ。それにあの船が止まつたところは

一般人立入禁止だったしな」

同じ整備班である井本が近くまで確認できたのなら声を掛けられたのではというが、そのまおと思わしき人物は気づいた時には艦橋に消えていったのでできなかったとのこと。ついでに言うならば、護衛艦が接舷した場所も一般人立入禁止であるため確認することも近くに行くことできなかった。

「だったら今すぐその護衛艦に乗り込んで、まおの奴をここに連れてくるぞ!!」

「ちよつと待てつて深田。相手は自衛隊だぞ。下手なこととしてこれ以上問題起こしてどうするんだ」

「問題? ふん、これ以上の問題が起きたつて大したことねえだろ。大体な、アイツがちゃんとした別れ方してればこんな事態にならなかつただろ。だから連れてきてはじめを取らせるんだよ!!」

「はじめなら、俺達がアイツとの別れのときに一発ずつぶん殴つてるだろ」

まおならば何かしら家族との確執もせずにするだろうと信頼してのことだったのだが、あろうことか家出してもう帰ることもないだろうとほざいたことに、曲がったことが嫌いな深田の鉄拳制裁から始まったタコ殴りの件を思い出す井本。甘いとはいえ妹を大事にするまおならば綺麗な別れ形をするだろうと思つていただけに怒りは相当だったらしい。

「大体今更まおを連れてきたところかどうか？特に外部生なんか誰だお前状態だぞ。この状況をどうにかできるのは原因作った隊長の西住まほだろうに」

井本がぶつきら棒に事態収集するべきなのは、あくまでも隊長である西住まほがやるべきだと言う。だがそのまほも、そしてみほも皆の前に出てくることはなくずっと閉じこもったままの状態が続いている。

「もしまおがここに来るなら、それってあの二人に会うためじゃないのか？」
「今のアイツが来る理由なんてそれしかないだろ」

穴吹の言葉に当然と言い切る武内。今になって黒森峰女学園にやってきて何かしら起こしてもすでに手遅れの状態だと先程井本が言ったばかりだからだ。

「ちよつと待ってくれ。まおが本当にくるかどうかなんてわからないだろ。そもそも黒森峰女学園の状況なんて知ってるのか？今のアイツは家族と絶縁状態でそんな情報まで来るとは思えないぞ」

険悪なまほはもとい、西住流師範代である西住しほも連絡などとっているとはとても思えないため、本当に偶然で来ているのではと考える日下部。

「そんなのみほちゃんご連絡でもしたんだろ!!もし偶然とかなら、その護衛艦に向かつて西住まおを出せって言えればいいだけだ!!」

そう言う、持っている工具を適当な場所に置くと出口の方に向かっていく深田。

「お、おい!!本気か!!本気で行くのか!」

「俺は行く!!会えないだの言っても、俺は西住まお引きずってでもな!!」

近くにいた日下部は深田を静止しようとするも、ガタイのいい深田を止めるには少しばかり力不足であり、そのまま構わず出口に向かつていく。

「ああもう!!こうなったら数で勝負だ!!1年も何人か連れて行ってアイツと一緒に行くぞ!!」

「あの熱血馬鹿のせいでもた問題が…」

「少なくとも今の現状よりかは遥かにマシな問題だろ」

バラバラになり、誰も彼もが勝手に言っている状況よりも、たった一人の男をここに連れてくる問題のほうが遥かにマシだと言う井本。結局、集団で行くこととなり手の空いているクラスや後輩たちを引き連れてそのまま連絡船乗り場まで行ってしまおう深田たち。

「なあ繁^{シゲ}。まおが来るって話聞いてたか?」

そして状況を見守っていた高瀬は、まおと一番仲が良かった志波に話を振る。状況を静観していたので、共に同行はしなかったのだ。

「いや、アイツとは高等部に上がってから防衛学校に集中したいって言って連絡をやめていたからな」

まおが転校したあとでも、電話越しには何度か連絡を取り合っていた志波。ルームメイトでもあり、整備長をしていたまおの右腕を務めていただけでもあり、深い事情は知っていた。まおが海上自衛隊に行くとクラスで最初に知っていたのも彼なのだ。

「だけど、もしまおが来て向かう場所なら一つだけだろう」

「一つ?」

「二人は今、西住家の別邸にいる。もしまおが向かうならそこだ」

来るかどうかはわからないが、もし向かうとすれば可能性としてもつとも高いのはまほとみほがいる別邸しかないと思波は告げる。

「行ってみるか? 先回りして…」

「会えるものならな」

高瀬と共に、まおが来る可能性がある西住家の別邸に向かつてみることにした。

慌ただしく動き出した整備班たちを尻目に、一人。

その話を偶然聞いていた者がいた。

「まおさんが…黒森峰に?」

自分の戦車の様子でも見ようと格納庫へと来ていた小梅。物陰から隠れるように整備班の会話を聞いてしまい、呆然としていた。

「まほさんやみほさんのために、来たのかな。エリカさんもないし…」

なぜまおがここに来るかは先程整備班が話していたとおり、まほとみほのために来たのかのしれない。エリカが数日姿を見せないのも相まって不安が募っていた矢先だからだ。

あの全国大会の決勝。Ⅲ号の車長を務めていた小梅。みほを守るために前衛をしていたのだが、雨により地盤が緩んでいた地面を滑り落ち、そのまま濁流の中に入ってしまった。

「…!!」

その時のことを思い出し、思わず自分を掻き抱く。落水した際の衝撃か、水は無情にも車内へと浸水していく。パニックを起こした乗組員たちをなんとか宥めようしたりするも、自身も死の恐怖を感じてしまったその時に、みほが助けに来てくれたのだ。そのおかげもあり、皆が大事に至ることなく無事いられた。

だがその結果、黒森峰女学園はプラウダ高校に敗北してしまい。念願の10連覇という偉業を達成することはできなかった。それによりやり場のない虚しさや怒りは、根本を作ってしまった小梅たちに向けられた。収まらずにその矛先はフラッグ車を担当していたみほにも及んでしまう。そして、始まったのがまほの掲げる“勝利至上主義の戦車道”とみほの掲げていた“仲間と一丸となる戦車道”を主張する2つ派閥に割れてしまい、收拾がつかなくなってしまったのだ。姉妹による分断という最悪な状況ながら

も、当の本人たちはそれに対応ができなくなるほどのショックを受けて、表すことがない。小梅も責められてショックは受けるも、みほに救ってもらったことは間違いはなかったという強い思いのもと耐え続けていた。

だが、気づいたときには、自分以外の隊員たちは戦車道からいなくなっていた。現状に耐えきれなくなり、転科や転校してしまい我関せずをしてしまったのだ。それにみほが深く傷ついたのは言うまでもなかった。なんとか残った自分が支えないと思うも部屋から閉じこもり、そのまま別邸へと向かったみほにして上げられることはなかった。命がけで救ってくれたのに、自分は何もしてあげられないことに悔しい気持ちが一杯だった。

「……………まおさん」

藁にもすがる思いは小梅も同じだった。みほ、そしてまほを助けてもらうために。小梅もまた格納庫をあとにするのだった。

◆ 「……………も、変わってないか」

学園艦の艦内通路を通り、西住家の別邸から最も近い場所にある乗降口を上がるまお。日本最大を誇る学園艦に再び立ったまおは、懐かしむように周囲を見渡す。3年ほど経ったとは言え、周囲の建物はそう変わるようなことはなかったようだ。

練習艦『くらま』は無事に熊本港へと接舷を果たした。乗組員たちは久方ぶりの陸地へと半舷上陸を許可された。その中には無論まおも含まれていたが、先にドラツへを接舷した港に降ろす作業があり、まおもエリカを見届けるつもりでいたので少しばかり上陸が遅れるはずだったが。

『私のことよりもまほさんとみほを…お願いします』

自分などではなく、まほとみほの元に行つてくれと言うエリカ。梅津艦長も引き渡しに際し、まおがいる必要性はないため向かうように告げるエリカとはその場で別れることになり、そのままの足で学園艦行きの連絡船に乗り込んだ。途中、騒がしい声がかかる熊本港行きの連絡船を見つけるも、意識は学園艦の方にあつたので気にはしていなかったが。

「本当に来たんだな…まお」

思わぬ人物がまおの目の前に現れた。それを見たまおは驚きのあまりに声を上げる。

「シゲに高瀬か!!なんでここに!!」

「別邸に向かうなら、この近道だつて教えてくれたのはお前だろまお」

別邸には整備班に何度か呼んでは遊んでいたこともあり、上の甲板を通らずに近道できる艦内通路を知っていた志波と高瀬は、まおが最短で来るならここでは半信半疑ながら待っていたのだ。そしてその予想は見事に命中し、まおと再会することが出来たの

だ。

「お前がここにいてってことは、深田たちニアミスしたんだな」

再会した自分たちに驚いているまおの対応に際し、深田たちと会うことなくやつてきたのだと確信した高瀬。

「まさか、あの騒がしい連絡船に乗ってたのは深田たちだったのか…」

対向する連絡船に乗っていた人物たちが深田たちだと聞き納得してしまうまお。諸々の事情を志波から聞き、まおを連れてくるためにくらまに向かった経緯を知り、またもくらまに迷惑が掛かるだろうと思つたまお。

「…事情はある奴から全て聞いた。俺の起こしたことでお前たちに迷惑をかけてしまつて…」

エリカから事情を聞き、まほから冷遇されていた話も聞いていた。

「ああそのことなら、俺たちはもう気にしてない。隊長のあんな姿見たら、とても怒る気になれない。むしろそれに漬け込んで色々言ってくる取り巻き連中をなんとかしてほしかったがな」

「それとまお。俺達はいくまでも戦車を整備をするのがこの学校で学んでいくことなんだ。試合で勝とうが負けようが、俺達にとつては二の次だんだよ。大切なのは、俺達の整備した戦車がちゃんと動いて、乗ってる女子たちが安全に扱ってくれることさ。それ

が整備って言っていたのはお前じゃないか」

自分たちがやるべきことは戦車の整備を通して知識を得ていく勉強であるだと言う志波と。そしてそれをもっとも理解していたのは当時整備長をしていたまお自身が言った言葉でもあった。回りからボロクソに言われても、それをやり通すことに意味があるのだと。

「それに責任なら、お前に頼りっぱなしだった俺たちにだってあるさ。誰もこうなるなんて予想できるわけないだろ。今のお前がすることは俺たちに謝ることじゃなくて、隊長と副隊長を助けに行くことじゃないのか？」

自分がなぜここに来たことすらも理解している志波に対し、観念するように言う。

「そこまでお見通しか。なら、ことが済んだらお前たちのところにも出向くよ。散々迷惑かけたから、お前たちの前で……」

「よせまお!!」

まおが何かを言おうとするのを遮る高瀬。

「まお。お前はこの学園艦を去るために、自分から出ていったんだ。それを今更来て謝罪とかしたら、全員怒るぞ!!」

迷惑かけたなどとは一つも思っていない。それを今更になつて謝罪とかされても、そちらの方が逆に迷惑に感じる。そんなことをするならば、出ていかければよかったと。

そんなことをされても困ると。

「それになまお。ここにはもう”お前の居場所はない”。前までやってた黒森峰とは大きく変わったんだ」

黒森峰女学園にまおの居場所はどこにもない。そうはつきりと告げる志波。西住まおという存在は残つても、そこに再びまおが入る余地はないと。それは少なからず、整備班として共にやってきた者として決別を意味する言葉でもある。

「お前にはお前の、新しい居場所であつて俺たちを守つてくれる勉強をしてるんだろ？」

そして今のまおの本当の居場所は、自分の夢だと言つていた海上自衛隊だと。踏ん切りがつかないような態度をされるのは自分たちの知つているまおらしくはない。過程がどうであれ、それが自分の進んだ道なのならば、それを突き進むべきだと。それが自分たちの知つているまおなのだ。共にやって来た志波なりの言葉だった。

「…ああ。まだ未熟な身だけだな」

自分が一体何なるうとしていいのか、再認識する。

「ならその前に、自分の妹守つてやれよ。未熟な身でも、それが出来るからここまで来たんだろ？」

「でなきや、ここまで来てない」

「なら俺達の前に現れたい時は、海自の制服で来い!! 胴上げして、そのまま海に突き落と

してやるからな!!」

「わかった。一張羅で来て、驚かしてやる!!」

整備班だったかつてのまおではなく、海上自衛官となった姿で再び再会すると約束するまお。再会の祝に海に落とされるのは溜まったものではないが、それがかつての仲間とのやりとりだったのだから。

(ありがとう…皆)

そうした中、ついに別邸の玄関前に到着した時に志波たちの言葉を思い返し、改めて感謝の念を押すまお。

「…」

ようやくついた別邸は妙に暗い空気が漂っていた。この家の中にまほとみほがいる。自分呼び、閉じこもった二人を連れ出すために。

「これも変わってないか」

万が一のために隠してある合鍵の場所も全く変わっていなかった。玄関にあるみほの大好きなボコの陶器人形の数々。その中で一番のお気に入りボコ人形の中に合鍵を隠している。

『このボコに入れるからちゃんと覚えてね!!』

『ああ、わかったよみほ』

『おいみほ。首がもげてるんだが…』

『それが仕様だもん』

かつてのやりとりを思い出し、微かに笑みを浮かべる。

(まずは、みほのところに行かないと)

二人が険悪になっているのなら、どちらか片方ずつに会わなければいけない。それならば最初に自分に連絡をくれたみほに会うと決めていたまお。みほに至ってはメールでしか別れを告げていないためでもあつた。

「誰もいないのか…」

鍵を使い玄関をゆっくり開ける。中は静まり帰っており、人つ子一人いない状況だつた。だが、台所には二人の食事が用意されていることから、誰かがいるのは確か。もしかしたら、菊代さん等の女中が来て世話をしているかもしれないと思う。そのまま階段を上がっていく。別邸も中々広く、三人の部屋はちゃんと用意されている。一番手前からまほ、まお、みほの順番なので、一番奥の部屋を目指していく。

「…」

まほの部屋を通り過ぎ、必ず行くと心の中で誓いみほの部屋に急いでいく。

「ん、俺の部屋…」

扉が半開きになり、誰かの気配を微かに感じ取る。すでに数年も放置し、ホコリだら

けで誰もいないだろうと思い、まさか泥棒ではと思いふいに扉を開けてしまう。

そして、そこにいた人物にまおは目を見開く。

「まほ……」

「……まお」

目を真っ赤にし、あのTVに映る険しい表情をしていたものとは程遠い。

弱々しくなったまほの表情がそこにあつた。

航跡—4 《再会》

扉を開けた先。そこは確かに見覚えのある懐かしい自分の部屋だった。実家ほどに物は多くはないが、思い出の写真や趣味で集めた本や雑誌などがそのままになっていた。しかし、カーテンは完全に締め切り、部屋の中に誰かいるのかに一瞬だけわからなかった。

「お前……」

カーテンの隙間から光が差込み、ようやくこの部屋にいる人物が確認できた。自分が使っていたベッドに座り込み、ろくに風呂も入っていないのか、ボサボサの髪をし、黒森峰専用の寝間着を着込んでいたまほ。普段見るような凛々しい姿とは余りにも程遠い姿をしている。その姿に絶句し、そのまま部屋へと歩み、嫌な予感と共に扉を完全に閉め切る。

「まほは……まお」

薄ら笑いをし、ベッドからゆつくりと立ち上がりそのままに幽鬼のように近づいていくまほ。

まおがいる。まおが……あの悪夢の続きなんだろうか。だが、ここは先程まで見ていた

真つ暗な世界ではない。光もあり、全てが見覚えのある場所

「本当に…まおなんだな」

「ああ。それよりも、大丈夫か…うっ!!」

まおの言葉を遮るようにそのまま力任せに、まおをベッドに押し倒すまほ。武道の家に生まれた以上は普通の女子よりは護身術は会得しているし、力もそれなりにはある。男一人を力で倒すくらいは持っているのだ。無論、それはまおもまほやみほと一緒にそれなりにやっていたし海自に入隊してからも、武道や運動などはやっている。だが、不意と身内ということもありほぼ無抵抗に近い状態になってしまう。

「お、おい。まほ…痛っ」

そのまま馬乗り状態になり、両手でまおの服を乱雑に掴み激しく掴んだり離したりする。混乱しているのか、時折、まおの皮ごとひねり、小さな悲鳴を上げてしまう。

「はあ…はあ…」

咄嗟に動いてしまったのか息も上手くできずに絶え絶えになっているまほ。次第に落ちていくと、そのまままおに倒れ込み顔を埋める。

「まお…黒森峰が…負けたんだ…」

「…知ってる」

くぐもる声で、まおに訴えかける。黒森峰の敗北。その結果は勿論のこと。まほがこ

ういう事態になってしまったことも。

「勝たなくちやいけなかつたんだ…黒森峰は…西住流は、勝たなければいけなかつたんだ。なのに、負けた…10連覇、しないとっ!!いけなかつたのに!!」

「…」

西住流後継者として、黒森峰戦車道隊長として、絶対に負けるわけにはいかなかった戦い。それを達成しなければ、まほは自分を認めてもらうことができないと思っていた。ふさぎ込むみほもきつと自分を前のように見てくれると。胸の内をまおに悲痛な声とともに叫ぶ。

「…負けた。西住流なのに…私…」

「まほ。お前は…」

何かを伝えようとした瞬間、まほは顔を勢いよく上げる。

「まおっ!!全部お前がいなくなるからだ!!お前のせいで負けたんだ!!」

顔を上げるまほの表情は歪みに歪んでいた。涙を流し、激しい怒りと共にまおを睨みつけるまほ。胸ぐらに力を込めて、激しく攻め立てる。

「ぐっ…」

「みほも、みほも私から離れていった!!私のことを憧れと言っていたはずなのに、エリカも…私から離れていく。皆、皆から…わ、私は悪くないんだ。私は西住流たろうとし

「たんだ!!西住流の教えをやるうとしただけなんだ!!それを壊したんだ!!まお!!お前が私から離れていくからだ!!」

「目が泳ぎ、完全に噛み合わない言葉を並べていく。西住流としてやるうとした。その結果が敗北。そして部隊の壊滅を招き、最悪な状況をもたらした。その原因は敗北事態には全く関係のないまおに責任を押し付けようとした。あの悪夢のような状況とは違い、逃れられないように。」

「……」

「まおは、反論することもなくただ黙って聞いていた。」

「全部お前が悪いんだ!!全部、全部お前が!!お前が私を、置いていくからあ…だから…だから」

「夢の中でも言われたことが混在し、まおに責任がないのはわかってはいる。余りにも自分勝手すぎる発言だとわかっていても、いきなり現れた本人に対して頭の方の理解が追いつかなかった。まるで、まだ夢の中にいるようにもまほには思えた。だがまほは同時に恐怖も感じていた。あの夢の続きのように、自分を否定されるのではないかということに。だが――」

「そう…だっ!!」

「え?」

まあの言葉は——

「…全部、俺が悪い。それでいい。だから…」

肯定だった——

全ては、まおが、自分の行動が起こしてしまったことだからと。

「もう自分を追い詰めるのはやめよう…まほ」

責めるなら自分をずっと責めて良い。だからもう自分を追い詰め続けて苦しむのはやめてくれと。

「あ…ああ…」

その言葉を聞き、まほの中にあつた何かが崩れ去ろうとしていた。まおからゆっくりと後ずさり、壁の方に腰を預けるまほ。震える両手を焦点の合わない目で見つめる。まおもまほから解放されベッドから起き上がる。

「わかってる…わかってるんだ……」

その言葉と共に、まほはまおに抱きつき嗚咽とともに吐き出した。

「私が…私が悪いんだ。全部、私がしでかしたことで、壊してしまった…弱い奴が悪いって言つて。エリカたちにひどいことをしたんだ」

弱者などいらない。強いやつだけが、正しいのだと。強者こそが西住流であるということが完全に独り歩きし、これまで共やってきたはずの仲間すらも切り捨ててしまつ

た。自分を憧れ、付いてきてくれたエリカたちを。

後悔するように懺悔の言葉を口にするまほ。これまでのことが思い起こされるように、自分ができてしまったことを。

「大切に整備してくれる志波たちを、貶して当たり散らしてしまった。私は最低だ……何も関係ないのに、私の勝手に理屈が彼らを蔑ろにしたんだ……整備班も同じ仲間のはずなのに……」

「アイツ等も、きつとまほの気持ちをわかってくれる。落ち着いて謝れば、ちゃんと許してくれるさ」

まおの言葉に嘘はない。整備班も逆に今のまほの状態を心配する声も上がってきている。なんだかんだ言っても、まほとも中等部からの付き合いなのだ。それは今まほが言った言葉にもある通り、同じ戦車道を通してやっていった仲間だと。

「みほに”大嫌い”って……言われたんだ。みほに……言われたんだ!!」

涙を流し、みほに言われた言葉を伝える。優勝を逃し、何が起こったのかもわからず、みほを責め立ててしまったあの場面。その言葉がまほにとって何より苦しめるものだった。

「みほだって本気で言ったわけじゃない。アイツがお前のことを嫌いになるわけないだろう?」

「嘘だ…私はみほに…：…大事な妹なのに、ひどいことをしてしまった。みほを守らないといけないのに…：私は…：私はあ」

たった一人の妹であり、小さい頃から共にいたみほ。絶対に守らなくてはいけないはずの存在。まおがいなくなり、自分がなんとかして上げたい気持ちがあつた。空回りしてしまひ、何もして上げられなかつた。まおのようにいくはずなんてなかつた。

「みほは何も悪いことなんかしてない。してないんだ。でも、でも…助けて上げられなくて…：私はあ」

「知つてる。俺も見た。アイツは…：アイツは凄いやつだよ。俺でもあんなことはできない」

本当ならまほではなく、悔やむべきなのはまおなのだ。有耶無耶にしてしまひ早期に行動に出てがために、まほとみほも引き裂いたのだから。だから、まおはまほを責めなかつた。

「西住流に泥を塗つた…：…皆から言われたんだ。私は一生懸命西住流たろうとしたのに…：…西住流だから…：」

苦悩はそれだけではない。西住流という存在がまほを更に苦しめていることを感じるまお。力をいくら示しても、それは西住流後継者のまほとして当然だと。それがまほにとつては苦痛だつた。どれだけ行くことも自分にはそれがつきまとい、皆がそこばかり

見てしまう。だが、それだけの人たちだけではないのはまおがわかっている。

「誰も私を見てくれないんだ……」

「そんなことはない。お前はしつかりと見たのか？人を怖れるな。お前のことを本気で心配してる奴だっているんだぞ」

エリカは、それこそ命がけで自分のもとに来て、まほとみほを助けてくれと泣きながら伝えた。戦車道の勝敗など関係なく、全てをかなぐり捨てる覚悟で。エリカ以外にも心配している人物は必ずいる。そしてまた来てくれることを。

「うっ……うう……まお。私は、私は……もうわからないんだ。何も……」

まおの言葉を聞くも、あの悪夢の言葉が木霊してしまいごちゃごちゃだった。まおのことをさらに強く抱き締めるまほ。

「なんで……なんで私を置いていったんだ。ずっとそばにいるって、約束したのに……どうして私を置いていくんだ」

「ごめんまほ……」

まほにとつて幼い頃に交わした約束は、絶対のものだった。まおがいないと、何もできない。まおがいたから、これまでやってこれたんだと。それほどまでにまおの存在がまほの中では大きかった。

「私はただ、お前がいてくれればよかったんだ。まおの隣にいたかった。ずっと、ずっと

それで…私は」

「…！」

絞り出すように出てきた言葉に、まおは言葉を噛み締める。

「まほはよくやったよ…だから、今はゆっくり休もう…な」

背中を擦り、今はもうゆっくり休むべきだと言うまお。今のまほは、まおが余りにも突然現れたことで混乱しているのは事実だった。錯乱しているかもしれないまほが言い出し始めたの言葉も、これ以上言わせるわけにはいかなかった。だが、まほは言葉を止めず……

「まお……」

「何だ？」

まおから一旦離れると、虚ろな表情でまおを見ると…

「お願いだ……私を」

抱
い
て
く
れ
」

耳を疑いたくなる言葉。だが、それは確実に聞こえていた。

「まお……」

途端にまほの表情が明らかに変わった。それは、実の“兄”に向けるような顔つきではなかった。まるで……

「まほっ!!」

その表情を見た瞬間、まほをバツと離して肩を掴む。それが一体どういう意味なのかは、わからないまおではない。だが、その言葉が正気の沙汰ではないことにまおはまほを引き剥がし答える。

「っ!!何言い出してんだお前は!!気をしっかり持てよ!!」

「なんだ。いいじゃないか。…それとも、今の私はそんな価値もないのか?」

揺れる瞳で、まおを見据えてほくそ笑むまほ。

「お前ならいい。いや、お前がいいんだ……私はお前のことが——」

「いい加減にしろまほ!!お前は、そんな弱い人間じゃないだろ!!」

その先を絶対に言わせないために、肩を揺らしてまほに訴えかける。絶対にそんな言葉を出してはいけない。

「……………わ、私は——」

揺さぶれると、次第にまほの目に生気が戻ってくる。上手く言葉が出てこず、狼狽えるような仕草をするまほ。自分でも何を言っているのかわかっていないのかもしれないかもしれない。

「お兄……………ちゃん?」

「みほ……」

その時だった。扉が開く音がし、ゆっくりと扉から姿を表したのは、同じく寝間着姿をし、まほと同様にボサボサの髪をしたみほの姿だった。よくよく考えればまおの隣の部屋はみほの部屋なのだ。これだけまほの叫びやまおの声を出せば、気づかないわけなかった。何かアレば、すぐ隣の部屋に行けるようにまおを真ん中にしていたのを咄嗟に思い出す。

「どうして?なんで……………なんで私じゃないの?なんでお姉ちゃんばかり……」

ようやく会えたまおの姿に、本当なら喜ぶの聲が上がるはずなのに、その表情は見る見るうちに涙で溢れていた。

「ひびこよ……」

悲痛な叫びと共に部屋を後にするみほ。恐らく自室の方に向かったのだろう。それを追いかけてようとベッドから立ち上がろうとしたとき。

「ま、まお……」

咄嗟にまほがまおの手を掴んでしまう。みほのことに気づいているのかどうかすらわからないが、また消えしまうのではという恐怖がまおの手を離そうとしなかった。

「ど、どこにも行かないでくれ……まお。もう……」

「つー……ここにいろ。みほと話をするだけだ!!」

「まお……」

まほの手を外し、その場にあとにするまお。そのままの足でみほの部屋の方に走る。

「みほっ!!」

扉を開けてみほの部屋に飛び込むまお。

「来ないでよ!!お兄ちゃんはお姉ちゃんが心配なんですよ!!私なんかほってけば良いんだ!!」

ボコの人形を抱き締め、まおに背くようにベッドに座り込んでいるみほ。昔みほの誕生日にまほが買ってくれたボコられグマのボコ。宝物にすると良い、大切にしているものだ。

「お兄ちゃんいつつもそう!!いつもお姉ちゃんの味方ばかりするもん!!」

まおを睨みつけ、自分が抱いていた思いをまおに爆発させる。まおはいつも、まほに寄り添っている。いつも自分は二の次ばかりであり、まるでまほと意思疎通でもしているような雰囲気嫉妬の気持ち積もっていたのも事実だった。そして今回。自力で兄を見つけ、連絡を入れることまではできた。それが切欠で自分の所に来てくれると信じていたのに、あろうことかまほの所に来ていたことにみほは激しい怒りに駆られていた。

「誰もまほばかり味方なんて」

「してるもん!!だから私なんかよりお姉ちゃんを選んだんでしょ!!」

「それは違う、俺は……」

「もう黙ってよ!!嫌い……」

癩癩を起こし、まおの一切聴き入ろうとしないみほ。

「嫌い!!戦車道も西住流も嫌い!!!私のことなんか見ないお姉ちゃんも、私の気持ちなんかわかってくれないお母さんも、私を助けてもくれないお兄ちゃんなんか大嫌い!!」

そう言って抱き締めているポコをまおに投げつける。そのまままおの顔面に当たると、重力に従って床に落ちていく。まほから誕生日にプレゼントとして貰った大切なポコを。

「みほ!! 気持ちちはわかるが、自暴自棄にそう口走るな。まずは…」

「気持ちちがわかる? お兄ちゃんに何がわかるの!？」

その言葉を聞き、みほは涙を流してまおを睨みつける。

「ならお兄ちゃんわかるの!?! 私やお姉ちゃんがどれだけお母さんや門下生の人たちからの期待されて、辛い思いをしてきたことも、お兄ちゃんわからないよね!?! だってお兄ちゃん西住流も戦車道もやってないもん!! 絶対にわかるわけない!! いつも好き勝手やってるお兄ちゃんなんかにはわからないもん!!」

「!？」

怒りに我を忘れて、普段大人しいはずのみほが叫ぶ。西住流も戦車道も知らないなどと言われてしまい、まおは咄嗟に口から出そうになる言葉を必死に抑える。『俺はその西住流戦車道から存在を全否定されてるんだぞ』と。それを言ってしまうえば、みほやまほが一体どうなってしまうのか。それは絶対に口が裂けても言うわけにはいかなかった。

「みほ…俺のことを嫌いになるならそれでもいい。でも、まほのことまで嫌いにはなるな。今まで一緒にやって来て、そばで支えてきてくれたのはまほじゃないのか?」

「それを変えたのはお兄ちゃんでしょ!! お兄ちゃんが行っちゃうからこうなったんだよ!!」

元はと言えばまおが出ていくようなことをしなければこんなことにはならなかった。始めから自分たちのそばにいてくれれば何も問題はなかったと。

「今更それを俺はどうこう言うつもりはない。いなくなつてと言うなら消える。でもな、だからつてこんなところにも、前に進めないだろ？ みほは辛くても頑張つて来たんじゃないのか？」

「お兄ちゃん……」

みほ、震える目でまおの表情を見る。あの写真とは違う、いつも見せてくれた優しい笑みがそこにあつた。

「それにボコだつてきつと泣いてるぞ」

「……ボコ」

床に落ちるボコの人形を持って、みほに歩み寄っていく。

「みほ。ボコは、どんなことがあつても立ち上がる勇氣を持つてるんだろ。でも、誰かが応援しないとボコは立ち上がれないんじゃないのか？」

「……」

「少なくとも、エリカは本気で心配してる。それこそ、自分がどうなつても構わないからつて言つて俺のところに来たんだ」

「エリカさんが？」

「そうだ。お前のことを心配してる人はいるんだ。応援してくれる人がいたら、ボコはまだ立ち上がるんだろ？」

「……………うん」

ボコはいつも負けてしまいが、それに立ち向かう強い勇気を持っている。その姿にみほはいつも勇気を貰っているような気がしていた。例え負けるとわかっていても、どんなに傷ついても立ち上がる。それがボコ。手に持つボコの人形をみほに差し出す。

「なら、もう一度まほとしっかり話をしよう。すぐ近くにいます」

「無理だよ……………」

だがみほはそれを再び受け取れなかった。座り込み、自分がまほに言ってしまったことを思い出す。

「だってお姉ちゃんに……………大嫌いって、言っちゃったんだよ。お姉ちゃんに……………言っちゃたもん。お姉ちゃんに……………ううう」

「みほ……………お前」

まほがそうだったように、みほもまほに言ってしまったことを激しく後悔していた。どんな辛いときも、一緒にやってきた大好きな姉のまほを。自分は否定してしまったのだから。

「お母さんも、私が西住流として間違ってたって言って……………助けた人も私を無視して出て

いったんだよ。小梅さんもきつとそうだよ」
「……」

しほがそんな馬鹿なことを言うとは思えなかったまお。だが、みほの憔悴しきつた様子を見る限りはそうなのかもしれない。こんな状態になるまで、なぜしほはこの場にいるのかとまおは苛立ちを隠せなかった。みほの方も喋れば喋るほど、悪い考えがみほを支配してしまっている。

「もう泣くなみほ。せつかくの顔が台無しだぞ。話はまた聞くから……」

話を一旦切つて、みほに落ち着いてもらうことのほうがいいと思つたまおはその場に立ち上がる。

「ちよつと待つてろ。下からタオル持つてくるから」

みほも、そしてまほも涙等で顔が濡れているのを見たまおはタオルを取りに行こうと、一旦みほの部屋をあとにしようとするまお。

「あ……」

まおの後ろ姿を見て、みほは急に不安な気持ちが溢れてくる。まおが行つてしまう。自分があんなことを言つたからと。

「やだ……」

「みほ?」

「やだ、やだやだやだ!!やだっ!!やだよ!どこにも行かないでよお!!」

まおの服を握り涙を流しながら、まるで子供のようになつてしまふ。今度は離さないと言わんばかりにまおに縋るように抱きつく。

「お、おいみほ!!」

「謝るから、さつきのは謝るから!!行かないで…お兄ちゃんずっといてよお…うううあっ!!」

「みほ…」

久しく見た見た泣きじやくるみほの声がまおの耳に響いていた。

女中の菊代が二人の面倒のために、戻ってきたのはそれからしばらく経ったあとだった。

番外編 《叶わぬ思い》

いつからだったのだろうか。

私さまおを、兄ではなく違うもので見るようになったのは…

思い出せない。気づいた時、私は妙な胸の高鳴りがあり、気持ちが悪い時期があった。

それは数え切れないほど沢山あり、その度に私は気持ちが悪い思いをしてきた。

中等部の頃。

数人の隊員たちがまおのところに集まって、整備のレクチャーをしている時だ。

「おお、上手い上手い。ここはこう。パッキンを締めるんだ」

「あ、ありがとうございます!!西住整備長!!」

まおが隊員の一人と共にエンジンのメンテナンスをするために、被せるように手を合わせて整備を行っているのを私がたまたま見かけた。

「……………」

その時の私は言葉には言い表せないほどの感情が支配しようとしていた。

また、あの高鳴りだ。気持ち悪い感じがする。

収まれ……収まれ………オサマレ

こんな気持ちで晴れぬまま、私はまおに先程の件の話をした。

「整備が大事だからと言つても、そう隊員たちとベタベタするようなことはするな。隊の士気に関わるから、金輪際は謹んでくれ」

「そんなベタベタしてないだろ。ただ整備のことを質問されたことを返してただけぞ」

違うな。お前は必要以上に隊員に接近しすぎだ。

まおは、良くも悪くも優しい性格をしている。だから、隊員たちが下手に勘違いをしてまおに言い寄っているように私は見えた。

まおの隣は……私の場所なんだ。だから、誰かに……取られたくなかった。

そうだ。アイツは私と約束したんだ。私を見てくれる。ずっとそばにいてくれると。

この思いは、きっと双子として一種の兄弟愛的な何かだろうと思つた。兄妹が一緒にいたいという気持ちは別に悪いことではない。現に私はみほのことが好きだ。小さい頃から一緒に戦車道を共にし、お互いを高めあつてきた仲だ。かつこいいと言つてくれるみほのためにも、変な気分は捨てなければいけない。

だが、みほもいつまでも優しい性格ではダメだ。西住流は強い戦車道を体现する場所なのだ。上に立つものはそれに相応しい振舞いもしなければいけない。

だから、私は心を鬼にして、みほには厳しくしようと思つた。だが――

「まほ。隊長とか立場があるだろうが、下手にみほに強く当たるようなことはやめろよな。みほもまだ中等部に入学したばかりなんだから。それにいきなり副隊長にもなって、アイツも緊張気味なんだからさ」

みほに対し少しばかり私の当たりが強いとまおから言われた時、ムツとしてしまった。

（私は別に当たるようなことはしていない。西住流の後継者としてみほを鍛えようとしただけだ。なのにお前はみほの味方をするのか……なんで）

生まれて始めて、みほに嫉妬してしまった。

だめだ。こんな感情は姉として最低だ。みほは大事な妹なんだ。

私もみほに悪いことをしたと感じ、みほの言う新しい試みをしてみることにした。

《チームによる勝利》……か。確かに戦車道は団体競技だ。チームの結束力なくして勝利することはできない。だが、それは西住流としては邪道な行為。お母様や西住流の上役たちの耳に入れば何を言われるかはわからない。

だが、私はそれに従うことにしてみた。なぜかはわからない。多分、みほのことを信じてみようと思ったのだろう。まおも喜んでいるし。

中等部での戦車道は……不思議と心地よかった。

沢山の仲間とふれあい、色んなことがあった。まおが色んな催しなどをやり、それに

私が関心すると、エリカがツツコミ、みほが笑っていた。

そんな毎日だった。気がつくとき、いつのまにかあの胸の高鳴りがなくなった。きっと、あれは一時の病氣的なものだったのだろう。

中等部は破格の三連覇を達し、西住流とは違う新しい何かが始まろうとしている。高等部が上がれば、恐らく中等部と地続きになるだろう。

そう思っていた。思っていたのに：

まおがいなくなった。

マオガイナクナッタ

その間は、よく覚えていない。

私は怒りと憎しみ、そしてまおに置いていかれた悲しみの板挟みの生活をしていた。

だから、私はまおを全否定した。まおの存在を壊したかった。きっとそうすれば、私は私でいられるのだと。お前がいなくても、私はやれる。ちゃんとやれる。私は西住流の後継者なのだからできると。

でも実際はまおを見返したい気持ちがあったのだろう。

そうしなければ、アイツを振り向かせられないと思つた。

「まお……………」

気づくと私は、まおが使っているベッドで涙を流して眠っていた。

悪夢に魘される。今まで私を形成していたものが崩れ去っていく。みほを助けないと。まおがいけない今、守れるのは自分だけなのに。

でも体が動かない。誰も助けに來ない。誰も私を見てもくれない。きつとこのまま一人なのだろう。いやだ。まお。私を見てくれるって約束したんだ。ずっと一緒に――

「まほ……」

まおが来てくれた。私のもとに再び現れてくれた。なぜ來たのか。なぜここがわかったのか。色んなことが押し寄せるが今の私にはこの言葉しかでなかった。

「全部お前が悪いんだ!!全部、全部お前が!!お前が私を、置いていくからあ……だから……だから」

私はまおに当たり散らした。全部をまおのせいにして、侮蔑してもらいたかった。私を否定してもらいたかった。なのに……

「……全部、俺が悪い。それでいい。だから……もう自分を追い詰めるのはやめよう……まほ」

まおはどこまでも残酷なまでに優しく、どこまでも私を責めようとはしなかった。

その言葉を聞き、何かが壊れていくようなことがした。

(まおなら、きつと何もかも許してくれる)

私は最低にもまおの優しさに漬け込もうとした。

もう頭が何を考えて良いのかわからない。まおに抱きつき、涙が流れながら私は再び胸の高鳴りが始まった。だが今回は何かが違う。高鳴りだけではない。体の奥が妙に熱かった。

わからない。何もかもがわからない。

もうどうでも良くなったてきた。

「お願いだ……私を——抱いてくれ」

私の口から出てきたのだろう。

でも、ずっとまおとそうなりたいと心のどこかで願っていたのかもしれない

何かに溺れたい。何かが終わってほしかった。縫りたい。

まおにめちやくちやにされたかった。

そして——まおをめちやくちやにしたかった。

こんな思いにさせたまおと一緒に堕ちて行きたかった。

そうだ……もう何もかもどうでもいい。まおがココにいる。

マオガメノマエニイルンダ。

私の中に私ではない歪んだ何かが、囁いているような気がした。

「お前ならいい。いや、お前がいいんだ……私はお前のことが——」

まおがいい。他の男なんか絶対に触れられたくもない。
胸の高鳴りと共に、体が更に熱くなるのを――

「いい加減にしろまほ!!お前は、そんな弱い人間じゃないだろ!!」

まおが激しく私を揺さぶる。悲痛な声が私の頭の中に響いた。

「…………わ、私は——」

まおの叫びと共に、私は強い罪悪感と自己嫌悪を苛まれた。

そうだ、私は何を考えているんだ。

こんなのは間違ってる。狂ってる。

アイツは私の双子の兄で、家族なのに……

頭ではわかってるのに。

違う。私が……こんなのは私なんかじゃない。

吐き気がする。気持ち悪い。体が急に寒くなるのを感じた。

でも——

「はあ……はあ」

胸の高鳴りが止まなかった。

だが、その時にこの高鳴りが一体なんなのかなんとなく理解してしまった。

あの時、私がおに何を言おうとしたのかを考えれば。

なんで私がおの隣にいたいのか。なんで誰にもまおを取られたくなつたのか。

まおを独占したい。まおに見えてもらいたい。

きつとこの感情は、”あれ”なのだろう。

人間なら誰もが抱く感情。

好きな人を思うこの気持ち。

だがそれは、始めから叶うはずのない思いだった。

そう。私は…

私は…

私はまおに、恋をしているのだから……

例えそれが、間違っているものだとしても……私は

航跡―5 《手紙》

「…」

リビングにある椅子に座り、ずっと天井の方に顔を向けていたまほ。瞑る瞳の中、今日起きたことを思い出していた。あの夏以来久しく見たまほとみほの弱々しくなってしまう姿。

『お前ならいい。いや、お前がいいんだ……私はお前のことが——』

そしてまほのあの言葉がまほはしきりに響いていた。あの言葉は混乱から出た言葉だったのか。はたまた本心からだったのか。だが、まほが中等部から自分に対して何か違うものを向けているのを薄々は感じていた。それが単に自分を慕っているものかと考えていたが、それが今日の言葉を聞き、確信へと変わってしまった。

「まほ……」

どこまでいこうとも、自分はまほとみほの兄であり、家族だという事実が変わることはない。例えまほが自分にそう言った感情を抱いていたりしたとしても、それはいつか決着をつけなければいけない。それでもなければ、まほのためにはならないと。

「まお様。どうぞ？」

「ありがとうございます。菊代さん」

自分在使用している湯呑にお茶を入れて持ってきてくれたのは、女中の菊代だった。少しばかり買い物のために家を留守にしている間に、まさかまおが戻っていることに驚きを隠せずに持っていた買い物袋を思わず落としてしまうほどだった。

「まお様が来てくださって、お嬢様たちも安心していると思います。本当に……」

まおがここに来た経緯などを簡単に説明し、二人が大変だと言うことで来てくれたことを嬉しく思う菊代。彼女自身も、あまりの変わりように何をどうすればいいのかわからなかったからだ。出来ることと言えば、二人の食事や着替えなど補助するようなことばかりだった。

「でも、俺も突然やって来て余計にあの二人を傷つけたかもしれない」

「そんなことはありません。お嬢様たちはずっと眠っている最中、まお様の名を呼んでおりましたから」

「……そう、ですか」

エリカも言っていたことを一緒にいる菊代も同じように言っていることにまおは声が詰まる。

「まお様も見られない内に……立派になりました。自衛官として頑張っておられるのですね」

仕えるしほの命により、まおに関する情報は一切遮断していたために、まおが具体的に何をやっていたまではわからなかった。唯一の情報がまおが海上自衛隊に行くと言っていただけであったからだ。

「自分はまだ半人前ですし、正式にはまだ任官もしていません。その言葉はもつと俺が成長してから聞かせてください。それに今は俺のことよりまほとみほです」

菊代の言葉を嬉しく思うも、今は自分のことよりかはまほとみほの方を優先させる風に話す。差し出されたお茶を一口飲むと、神妙そうな顔つきで話を続ける。

「あとの祭りなんて言いたくはないですけど、二人は回りの人間どころかお互いのことを怖がって向き合うことが出来てません。ホントは反省し、仲直りできる状態なのに。それが自分の世界に閉じ籠もつて原因だと思えます。それとアイツらは西住流が相応えてるみたいですし」

まほとみほの話を聞く限り、未だに部屋にこもり自分の世界にいるのは回りの人間から何を言われるかという恐怖。そして何よりも姉妹同士の仲違いにより、上手く会話も出来ていないのも相まっていた。本当はお互い許し合う心構えができてくるのに。最も、まおは精神科医でもカウンセラーでもないため全ては聞いた限りの推測でしかない。だが、それは得ているのは間違いない。そしてその根本たる西住流に対しての思いも大きかった。

「……まほお嬢様もみほお嬢様も此度の黒森峰女学園の敗北で西住流の上役たちからも叱責を受けております。西住流は勝つことを尊ぶ流派です。敗北は西住流にとつてはご法度ですから…」

勝利を尊ぶを主とする流派である西住流にとつて、決勝戦で負けようが1回戦で負けようがそれは敗北には変わりはなかった。そしてその後継者でもあり、最も西住流に精通しているはずの隊長、副隊長が敗北させた。これはまさに西住流にとつては汚点と言つても過言ではない事態だった。そしてそれを棒に振つたような行為をしたみほに、それを止めきれなかった姉のまほに叱責を飛ばした。それに歯車をかけるように黒森峰女学園戦車道OG会や関係者などからも厳しい批判を浴びている。並みの人間ですら耐えられないであろう状況に、まだ精神的に脆い二人が耐えられるはずがなかったのだ。

そして、それらがあつたときはいつも二人を励ましていたのがまおだったのだ。その存在がなく、回りが好き勝手に言つてしまつてしまつているのが今の現状の全てだった。

「西住流にとつて”負けは弱い”なんですかね菊代さん。本当に弱いのはその負けを受け入れられないことだと俺は思いますけど」

「……」

これはまおなりの持論になつてしまつてしまつたが、負けは弱いではなく、負けを受け入れそれ

に立ち向かい次に生かしていくことが大切だと。”失敗から学ぶ”という精神は昔からある。負けることが正しいとは言わないまでも、心を鍛えるのはそれではないのかとまおは思う。実際まおはこの西住家で、生まれた瞬間から敗北負け続ける人生を送ってきた。

「みほから言われました『西住流も戦車道もやってないお兄ちゃんには気持ちにはわからない』って。まあ実際その通りだからぐうの音も出ないんですけどね」

「みほお嬢様が、そんなことを」

その発言がまおの持つ最大のコンプレックスでもあり、どれだけ心を傷つける発言なのかは、今の憔悴仕切ったみほにはわからないだろう。だが、まお自身も戦車道も西住流の教えも受けてもいないため、みほの言葉には反論の余地もない。そしてその隠された裏の事情を知ってしまったら、みほも、そして西住流を信じていたまほにどのような事態を招くのかは想像に難しくない。

「菊代さんも知ってるでしょ？俺が西住流でどういう扱いを受けていたのかを」

「それは…」

知らないわけではない。それはまおが生まれた頃から菊代は知っていた。女子のみ生まれて来たという西住流の直系に男子が生まれた事実は西住流の上役たちからは古い仕来りにより災厄をもたらすのではというトンデモない理由で追い出されそうになった過去を持つ。それらを常夫としほが何とか収めて妹のまほやみほと共に生活を

してきた。

だがその裏では、そう言った理由でまおが西住流や妹のまほとみほに恨みを持つてい
るのではという恐怖も少なからずあったことをしほから聞いていた菊代。だが、まおは
そんなこともなくまほとみほのために頑張っていることもあり、その恐怖は無くなつて
はいた。

「でも、少なくともまほとみほのことは大事にしてるんだとは思ってました。西住流の
後継者だからだと……」

自分はともかく、西住流後継者候補であるまほとみほは大切に育てていてのではない
かと思っていた。

「でも今回の件でよくわかりました。もう俺は西住流を一切信用しません。あの二人を
あそこまで追い詰めて、剩えそれを頻りに責め立て追い詰めるような真似をする連中
を。少なくとも、その辺を母さんが上手くやってくれると思っただけ、思い違い
だったみたいですよ」

「まお様……」

所詮は西住流という矜持を保つたための存在だったと思つたまおは、失望の声とともに
菊代に言う。かつては門下生でもありその西住家に仕える菊代も、まおの言葉に反論す
ることは出来なかつた。

「西住流の後継者なんて別のあの二人じゃなくたって他にも沢山いるはずだ。でも俺達の親はあの人だけなんです。それを母さんにわかってもらいたい。ただそれだけなんですよ。あの人には師範代だの家元だのじゃなくて、親をやってももらいたかつたんです俺は」

まあだつて甘えたい欲求はある。というかそれが子供というものはずだ。だが、父親を亡くし、母親も西住流師範代という肩書きを持ち、妹二人は泣いているばかりで、自分に残された道なんて他にはなかった。それが結果的に母がいるのに自分が親代わりになるような事態になってしまったことに。そして、現にこの家にはいないという理解できないことも相まって母に不信感が募らせていた。連れてきてそれで終わりではないだろうと。

「俺はアイツらの”父親”じゃありません。父親代わりをしようとしてきましたけど、俺自身も父親というのがどういふものなのかよくわかっていませんから。まあどの道俺は兄としても失格でしたけどね」

父を早期に亡くし、”父親像”というのがどういふものなのかもわからずにまほとみほに對し父親代わりに頑張ろうと努力はしてきたが、結果的に自分に依存させてしまうようなことになってしまった事を反省するまお。戦車道で辛いはずの二人に優しく促すのがいいだろうと思つたばかりに。もっとも理想の兄なんてのも正直わからないが

まおではあるが。

「そんなことはありません!!まお様はお嬢様たちのために頑張っておられたのは知っています」

「…ありがとうございます。でも、もつと早く聞きたかった気はありますけど…」

それをしてしまったばかりに、まおが誰にも甘えることも頼ることもできない状況になってしまい、二人を心配させまいと弱みすらも見せられなくなってしまうことを菊代は知っていた。ならば、もつと早くに何かしら言ってくれてもついでに言いすぎてしまうまお。菊代も自分たちを昔から見てきたのならと。

「すみません菊代さん。こんなことを菊代さんに言うのは畑違いなのに…」

使用人であり、小さい頃から自分たちの世話もして菊代に愚痴のような形で言ってしまったことを謝罪するまお。菊代自身もしほと共に西住流を学び、門下生の一人でもあるから、まおの発言は癪に障るのではと思ったのだろう。

「い、いえ。まお様のお気持ちを考えずに、私も甘えてしまっていました。お嬢様たちを安心して任せられると」

菊代自身も成長していくまおたちを見てきたつもりでしたが、本人たちの前では常に明るい性格をし、二人のために頑張っていたばかりに、まおに頼るようなことをしてしまった菊代も同罪だと言う。今こうしてまおがここにいなければまほやみほたちにも

何もできなかつたのだから。

「ともかく、まほとみほをあのままには絶対にしません。夏休みはまだあるみたいですから。二人を《美倉島》に、父さんの生まれた島でしばらくいさせたいと思います。どうかその方がいい。これと言って何もない島ですけど。あそこは西住流も戦車道ありませんから……」

これ以上まほとみほを西住流や戦車道が濃すぎる黒森峰女学園にいさせるのはよくないと思つたまお。少なくとも今はそれらを忘れて頭をスッキリさせないといけない。頭の中がごちやごちやになっている今の二人は永遠の前には進めないだろうと。そのため、まおが今現在生活し、父の故郷である美倉島に連れて行こうと案を出す。

「旦那様の……しかし、お嬢様たちは」

菊代が何を言いたいのかわかる。ただでさえ憔悴しているのに、その上で心の傷トラウマと呼べる父の故郷に向かわせるのは危険ではないかと思う菊代。

「わかつています。でも、いつまでも父さんの死を受け入れられないままだと、二人は永遠に俺を頼るようになります。それじゃ何も変わりません」

体は大きくなつてもこの先兄に依存するような生活をするようでは、完全に墮落してしまう。別に今すぐ脱却しろというわけではないが、こうして切つ掛けを作り少しずつ独立していく精神を身に付けなければいけない。残念ながらもこれでもまほやみほ

が大きく成長するとは思ってはいない。それだけに今回の落ち込みようは大きかった。時間が掛かろうとも、二人がまた立ち上がり、戦車道をこれからも続けていくのならと。それに二人には待つてくれる仲間だっている。

「明日の朝には艦に戻らないといけません。念の為に手紙と行き方も書いておきますから、二人が起きてこなかったら渡してください」

「わ、わかりました。しかし、奥様には…」

二人を美倉島に向かわせるにしても、それをしほに伝えないといけない。少なくともそれは一言言わねばならなかった。

「母さんには俺から連絡を入れます。なんでここにいないのか謎ではありましたが…」
そう言うと、しほに連絡を入れるために電話が置いてある方に向かっていくまお。どうしてもしほには聞かなければならないこともあり、直接自分がした方がいいと思ったのだろう。

「それと…菊代さん。俺は負けることが良いとは思ってません」

向かう途中で、一旦足を止めたまおが突然言い出す。

「？」

先程までは、勝敗が重要ではないと言っていたまおの発言に疑問を浮かべる。

「俺が今いる場所では、敗北は日本が終わることでもありますから」

「!!」

国民の生命と財産、領土。そして日本という国を守る自衛隊にいる者として、敗北はこの国の負けを意味すること。国土防衛を担う者にとつてそれは絶対にあつてはならないことなのだから。そして四方を海に囲まれた日本にとつて最初に来る脅威は海からであり、それを最前線で防衛するのがまおがいる。海上自衛隊”なのだ。まほやみほ、そしてまおがこれまで多く会つてきた人々を守るために入隊した組織。

” 例えそれが自分を否定した連中であらうとも”

「まお様……」

この瞬間だけ、まおの表情が見たこともないほどに冷徹に見えていた。

まるで、しほやまほのように鋭い目つきを。

改めて、まおが向かった場所は自分たちとは違う場所なのだと思ひ知らされた菊代だった。

何を思つてまおがこんなことを言い出したのかは菊代に知る由もない。



「ん……」

みほが目を覚ましたときには、すでに朝の九時を回っていた。カーテンから朝日が差し込み、ずっと暗闇にいたみほには少しばかり眩しかった。ゆつくりと起き上がり、心

做しか少し気が軽く感じていた。久しくぐっすり眠ったようであり、寝起きは悪くはなかった。安心して眠ることが出来ていた。

「お兄ちゃん……どこ？」

そうだ。まおが来てくれたのだ。自分の傍にいてくれた兄が。そしてすぐにまおがないことに気づいたみほは目に涙を貯めてしまう。折角戻ってきてくれた、自分の話を聞いてくれると言ってくれた兄がいなくなっていた。昨日、自分がまおにまで当たり散らしてしまったことを思い出したみほは途端に心細くなってしまう。

「お兄ちゃん!!」

「あ、み、みほ……」

飛び起きたみほはすぐに部屋から出ると、廊下にはすでにまほが立っていた。ぶつかりそうになるのをなんとか留まる。

「あ……お、おはよう。お姉ちゃん」

「あ、ああ。おはよう……みほ」

直接的には目を合わせられず、お互い顔を背けながら挨拶を交わしてしまう。でも、こうして挨拶を交わしたのが何日ぶりではないかと思つた。どうやら、まほも今起きたようであり、部屋を出たのもみほと同じ理由だった。二人はすぐに一階のリビングに移動した。

「おはよう御座います。まほお嬢様、みほお嬢様。朝食の用意が来ていますが、どうなさいますか？」

自分たちの朝食の準備をしていた菊代がいた。朝食のことを言われるも、どうしてもまおのことが気がかりですぐに菊代に駆け寄るみほ。

「あ、あの菊代さん。お兄ちゃんいませんでしたか？」

「まお様は今朝方、自衛隊の方に戻られました。どうしても戻らないと言って」

「まおが……」

「そんな……お兄ちゃん」

菊代の言葉を聞き、また自分たちを置いてしまったのではないかと思い、顔を落としてしまう。そんな二人に菊代が一通の手紙を差し出す。

「お二人にまお様からのお手紙があります」

「手紙？まおから……」

まほが菊代の手紙を受け取り、まおが書いた手紙に目を通す二人。宛先には二人の名前がしっかり記され、まおがいつも書いている見慣れた字が並んでいる。

まほとみほへ

本当なら面と向かつて言わないといけないのに、手紙で伝わるようになってごめんな。二人が目覚めるまで一緒にいてやりたかったけど、俺のほうも、俺を送り出してくれた人たちのために戻らないといけない。

昨日色々とまほとみほの話を聞いて、俺がしてしまったことを反省してる。二人は何も悪くはない。って言い出しても、もう終わらないからそれは直接会って話そう。

二人に手紙を書いたのは、もう一度ゆつくりと話がしたいと思っただからだ。そこで、俺の提案なんだが、二人には美倉島という島に来て欲しい。

父さんが生まれた島でもあり、父さんの実家の海江田家がある。

場所は別紙にある地図に書いてあるから、安心しろ。切符も買ってる。

海と山ぐらいでこれと言って何も無い島だけど、俺にとっては魅力的な島だ。

だからまほとみほも、ここを来て欲しい。ここなら安心して話が出来るはずだ。

ばあちゃんも二人が来てくれるのを楽しみに待ってる。

でも、それにはまほとみほ二人で一緒に来て欲しい。お互い手を取り合っただけ。それぐ

らいは今の二人には十分できるはずだと思ってる。前のように、色んな場所に行ったときみたいにな。

俺はその島で二人を待つてるから。そしたら、今度こそゆっくり話をしよう。

来るときは気をつけてな。

まおより

「お兄ちゃん……」

まおの手紙を見て、泣きそうになるみほだが必死に堪える。まおはそこで自分たちが来ることを信じて待つてくれている。まおが来てくれると信じた自分たちと同じように。

「行く…か。みほ」

「……うん」

まほの言葉に、ゆっくり頷くみほ。

今度こそ動かなければいけない。

兄がそこで待っているのならば。

そして、もう一度まほとみほがお互いを見つめ直すためにも。

父が生まれた、もう一つの家ともいえる「海江田家」のある始まりの島《美倉島》へと。

航跡―6 《電話越しの再会》

「はあ……」

西住流一門が集まる会合がようやく終わり、疲れたように溜息をつく。疲れる理由など上げたらきりが無いが、本日行われたのは西住流の後継者についての指名問題だった。なぜそんなことを話し合うのか。理由は簡単だ。此度の黒森峰女学園の敗北の件について、最有力であるまほ、そして次席であるみほを指名することに対し懐疑的になつてゐることだった。

西住流は一子相伝ではあるのだが、此度のまほ、そしてみほが起こしてしまつた失態が目に残るものだったからだ。そして、それは次期家元に就く予定のしほにまで及んでいた。分家筋の人間たちが我先にと自分の娘たちを推薦してきたのだ。無論、その中にはしほと共に黒森峰女学園で戦車道を学んできた者たちもいる。人間誰しも優秀な人間を妬む感情を持ち、これを期に真に相応しい西住流の後継者を指名するべきではないかと言ひ出す始末。

(ここ)に来て後継者から降ろされることになつてしまつたら、それこそこれまでやつて来たあの子たちの努力全てが無駄になつてしまう。それだけは……)

西住流一門からの指示により、遊び盛りなはずの幼少期から西住流の教えをまほとみほにしてきた。それはひとえに後継者として期待があったからこそ行ってきたこと。それをここに来て、降ろされるようなことになってしまえば、全ての努力が無駄になってしまふからだ。心を鬼にして、泣きそうになつてゐるまほとみほを鍛え上げてきたことが。それだけは絶対に阻止しなければ、まほとみほの全てが否定されることになる。

だが、事態は深刻だった。やはり黒森峰女学園の10連覇を達成出来なかつた事が尾を引き、OG会や西住流を支えているスポンサーからの失望などが大きかつた。そしてその黒森峰戦車道チームを立て直しをするべきまほとみほが未だに表に出てこず、引き籠もつてゐる事態に西住流一門から懐疑的になつてゐたのだ。敗北の責任。そしてそれは親でもあり二人の師範代を務めていたしほに対しても批判の矢は刺さつた。

『師範代として教育があまりにもお粗末だったのではないのか。あれほどまでに脆い西住流後継者など見たことがない』

「つ……」

その時のしほは奥歯を噛み締め、出てくる言葉を飲み込んだ。元からしつかりと成長してから西住流を教えるはずを、早めるように指示し、あまつさえ二人を頻りに責め立てたのはあなたたちではないのかと。あまりの言葉に全員をシウトウルムティイガーで打ち出してやろうかと思うほどの怒りだった。今更そんなことを言い出すので

はないと。だが、それは現に事実なだけに、しほは言い返すことができなかった。自分もまたそれを否定することができずに言われるがままにやっていったのだから。

「しほさん。やはりまお坊っちゃんに戻るように伝えた方がいいんじゃないのかい？」

そんな思いの中、会合の帰り道に仲の良い分家筋の一人から言われた言葉を思い出す。まおとまほが生まれた時に、擁護してくれた人達でもある。彼らもまおが良い兄としてまほやみほに優しく接しているのを知っていたので、今こそ彼を呼び戻す機会ではないかと。

だが、しほはその要請を断った。まおがしでかしたことの重大性を盾にして言い放った。

「あの子は西住流に生まれた者として、多くの人の期待を裏切ったんです。それに、あの時私と夫の無理なお願いを支援して来てくれたあなたたちの恩義を無下にしたこと、私は許すわけにはいかないんです」

などと色々理由をつけて話してはいるが、本音を言ってしまうばまおには帰ってきてもらいたかった。今のこの状況をまおに何とかしてもらいたい。なんとも情けない母親だと思った。西住流から否定されたまおを、西住流のために動いてもらおうなどとしている自分に笑いが出そうだった。西住流としての西住しほなのか子供たちの母親である西住しほという立場がわからなくなっていた。

そして何より、突発的とはいえ『出ていけ』とまおを追い出した手前、連絡をする勇気を持ってなかった。更にいえば、今の無様とも言える有り様をまおに見せるわけにはいかなかった。『まほとみほをお願いします』と出ていく間際に言われた最後のお願ひとも言えることをしほが出来ていないのをまおに知られたくなかったことが大きかったのだ。

そんな自分の頑固な性格がサイクルし、事態が好転することはなかった。

「その件なら私の方で何とかします。まほとみほを再起させ、必ず西住流として相応しい姿に戻してみせますから」

年甲斐もなく、意気地になったしほはそれだけを言い残して家へと帰路についた。

再起など、どうすればいいのかわからないのに。何を言っているのだと自分に言い聞かせてやりたかった。回りの目を恐れ、引き籠もる二人をなんとか別邸まで連れて行くも、その後は菊代に全て任せて、自分は西住流として二人の立場を守るために奔走することをしていた。だが、それをしたとしても本人たちが立ち上がらなければ何も意味がなかった。そもそも順序が逆だった。まずは二人のケアをするべきなのに。そしてそれをいつもまおに任せていたばかりに今の自分には何をして上げればいいのか迷走している。

「常夫さん、どうすればいいの……」

自室に着くなり、机に座り込むしほ。ふと目に入った写真立てを手に取る。まだまお達が小さい頃に家族で撮った集合写真だった。この頃はまおとまほは喧嘩ばかりしており、カメラ目線で撮るはずなのにお互い向かい合うようににらみ合い、そんな二人を見て何を勘違いしたのか面白可笑しくまおに抱きついているみほ。そして子供たちを見てため息をつくような表情のしほと、苦笑いをしている常夫の姿が映っていた。この頃は本当に毎日が忙しかったが、充実して楽しい日々だった。

だが今はどうだ。支えて欲しかった常夫は亡くなり、それらを払拭するべき躍りになってくれていたまおが出ていき、そして今度はまほとみほが精神的に疲弊してしまい再起が望めない状況へと変わり果ててしまった。自分が思い描いていた家族像とは一体何だったのか。

こんな家族がバラバラになるようなことだったのか。そんな状況の重さに目頭に涙が溜まってしまう。

「ん。電話……」

その時、机に置いていた携帯から着信音が響く。手に取る携帯の画面には西住別邸（黒森峰）と映っていた。連絡先は大方菊代だろうと判断したしほは、まほとみほに何かあったのかと思い、出るなり確認をとった。

「まほとみほに何かあったのかしら菊代」

だが、相手は菊代ではなく、予想だにしない人物だった。

『二人が心配なら、どうして傍にいてあげないんだ。母さん』

聞き覚えのある声に一瞬思考が停止してしまった。

「ま、まお!？」

電話越しから聞こえて来た息子の声に驚くしほ。余りにも不意打ちもと言える相手に飛び上がるように椅子から立ち上がってしまう。

「あ、あなた。今、別邸にいるの?」

声思わず震えてしまい、別邸からの電話番号なのに何を思ったのか確認の問いをしてしまう。

『ああ。まほとみほが大変なことになってるって聞いて学園艦に来たんだ』

「つ!!」

それを聞き、しほは冷や汗が出てしまう。まおに知られてしまった。一番知られてはいけない人物に。今のまほとみほの現状を知り、まおに何を言われるのかと思いき身動きしてしまふ。

『事情は菊代さんから大方聞いているから、率直に母さんに伝える。二人を美倉島に行ってもらうことにした』

「な!?!まお。あなたまほとみほが常夫さんのことでそう言った場所を嫌うのを知って

誘ったの!？」

まおの提案の内容を聞き、驚愕するしほ。まほとみほが常夫のことで、海に関わる場所を忌避しているのを知っている。それを今の傷心状態の二人を連れていけばどうなるのかわかって言っているのかと。しほ自身も美倉島には行ったことがあるから尚更理解してしまう。あの島は海という場所にあまりに近すぎるということ、そして常夫の思い出が多く残っていることを。

『知ってる。だがここについても何の好転もしないだろ。一生出てこないぞまほとみほは。俺はそれだけは絶対にさせるわけにいかないんだ』

「あ、あの二人は、まおのように強くはないのよ!!」

反論するように、事実を言ってしまったしほ。わかってしまった、まほとみほのメンタルの弱さを。自分が見ていたのは表面上の強さだけだったというのを今回の件で痛いほど理解してしまった。そしてその二人に比例するように、まおは芯がしっかりと、精神的に打たれ強さを持っている。その自分とまほとみほに当てはめるべきではないと。

『…それを知っているなら、尚更あの二人は島に来たほうが良い。それにそんなに心配なら母さんも来ればいいだろ』

「それは。できないわ…わ、私には西住流師範としてまほとみほの後始末をしなければ

いけないの。そうしなければあの二人の西住流としての今後の立場が危うくなるのよ。その程度のことばまお。あなたには理解できるでしょ」

西住流の人間としてまおに理解を求めようとするしほ。だが、それはまおに対しては火に油を注ぐような言葉だった。

『西住流の立場？今のまほとみほの現状を見て、まだそんなこと言ってるのか？二人が言ってたぞ。西住流として頑張ったのに何の労いもなくただ泥を塗った恥知らずだつて。今までの人生を費やしてきたはずの西住流からだぞ。西住流はあの二人を大切にしているんじゃないのか』

怒ることがあまりないまおから強い怒気を含む言葉が帰ってきた。

『母さんには悪いが。俺は西住流という流派がどうも信用できない。教えを守り後世に伝えようとするのが伝統というなら、今生きる人間潰してどうする。だから俺は遅かれ早かれ西住流に未来はないって言ってるんだ』

「まお!!西住流にはあなたを味方してくれる人だっているのよ!!それを無下にするような発言はやめなさい!!」

『ならあの二人を味方してくれるように言ってくれよ。俺じゃなくあの二人を。それに母さんも、頼むから二人に耳を傾けてくれ。まほもみほも、母さんに失望された、期待を裏切ったって泣いてるんだぞ』

「ま、まほとみほが……」

それはそうだろう。母の期待にも答えたい一心で頑張ってきたのに、返した言葉が西住流として恥、間違っていたなどという言葉だった。それが二人を傷つけてしまい、今のようなことになっていくかもしれない。

『お願いだ母さん。子供の俺に親を叱るような真似なんてさせないでくれ』

「ま、まお……」

それを言われてしまい、しほは顔を落としてします。子供を促し、育てなくてはいいはずなのに、その子供から叱られるような親なんて失格もいいところだ。特にまおから言われるのは心に響いてしまう。

『俺は母さん一人が悪いなんて言わない。勝手に出て行ってあの二人がああなったのは俺の責任だ。俺がもつとしっかり考えて動いていけばこうはならなかったかもしれない。でも、今動いて行動を起こさないと、まほとみほは一生あのままになる。それこそ西住流の後継者とか言ってる場合じゃないだろ。あの二人がまだこれからも戦車道を続けるのならな』

「……」

自分の中に情けない気持ち溢れてくる。こんな状況でも、まおはまだ二人のことを諦めずに、憎いであろう西住流のことをまおなりに擁護はしようとしている。そしてま

ほとみほがまた戦車道をすることに希望を見出し。

『母さん。島に行くかの判断はまほとみほに託した。でも俺はあの二人が来ることを信じる。だから母さんも信じて来て欲しい。最後は母さんが言ってくれないとダメだ。俺も呉基地に着いたらすぐに向かう……母さんに伝えたかったのはそれだけだ』

その言葉共に、電話は切れた。数年ぶりになるまおとの会話が終わりを告げ、そのまま糸が切れたように椅子に座る。

「まほと……みほ………」

大切な娘に自分がしてしまったことを改めて後悔し涙が止まらなかった。二人にとつて何よりもショックだったのは母親からの失望だったのだと。それをまおから教えられ、母親として如何にダメだったのかを思い知らされた。

「………」

改めて携帯に手をとるしほ。電話帳を検索し、ある相手の番号に電話をかける。

ずっと忙しく出向くことも、連絡を取ることもしなかった相手。今更連絡をして何を言われるのかが怖い気持ちがある。だが、今家族がその島に向かおうとしているのなら、自分が親としての務めを果たさなければいけない。まおが作ってくれたこの機会を逃せば、もう二度とないかもしれないチャンス。

「………もしもし、西住しほです。はい、無沙汰しております。お義母さま」

航跡—7 《みらい》

「着いたぞ、みほ」

「あ、うん……」

電車に揺られること30分くらい経過しただろうか。車内アナウンスが聞こえ、目的の駅である呉駅に到着した。まだ夏真っ盛りであり、熱い気候である九州生まれのまほとみほだが、中々に答える暑さだ。菊代から渡された麦わら帽子を被り、制服やパンツアージャケツトばかりだった日々とは違い、今は久しぶりに着る私服。しっかりと髪も整え、まおに会ったことにより幾分顔色も優れていた。ひと目見ればその姿はどこにでもいる普通の姉妹にしか見えなかった。

ただ、その仲は未だにぎこちないままだが。

「あとは、港から出てる定期船に乗れば着くようだな」

手に持つまおが書いたメモ書きと地図を見てまほが確認する。呉港から出る定期船に乗れば、美倉島へと辿り着くことができる。

まおからの手紙を受け、父の故郷である美倉島を目指して学園艦を後にしたまほとみほ。隊の立て直しだとかが気にはなつたが、素直にまおの言う通りに美倉島に向かうこ

とにした。回りの目を幾人か気にしていた二人ではあったが、思いの外スムーズに広島まで来ることができた。だがその道中は特に会話をするようなことは出来なかった二人。これまでのことが尾を引き、こんなに近くに上手く会話が出来ないのだ。

「…みほ。何か飲みたいものはないか？買ってくるぞ」

呉駅を出たまほとみほが港まで歩く途中、まほが突然飲み物のリクエストをしてきた。やはり太陽の日差しは強く喉が乾いてきたので、まほなりに気を利かせてくれたのだ。

「え…じゃ、じゃあお茶が、いいかな」

「お茶だな。ちよつと待てる。すぐに買ってくる」

要望を聞いてすぐに駆け出していったまほ。言っただけがいいが、近くに自販機が見当たらなかったのも、先程あったコンビニの方に向かって行つた。一人残つたみほは近くにあつたベンチの方に向かうなりちよこんと座る。

「……………めんねお姉ちゃん」

まほなりに自分を気遣おうとしていることに何もできずに後悔してしまふみほ。せつかくまおが機会を与えてくれたのに、ここに来ても引つ込み思案な性格が出てしまふ。まほももう以前の冷たかつたまほではない。まおが来てくれたあの日。隣の部屋

から聞こえていた声をみほは聞いていた。まほの苦しみを。まほは自分が言った言葉で深く傷つき、悲しんでいる。だがまほはそれでもみほを救おうと動こうとしていた。なら、今度は自分がまほに謝って仲直りしないといけない。今は戦車道も西住流も関係もない。本当にただの姉妹が協力して遠出をしているだけだ。

「キミ一人？」

「ふえ？」

突然声を掛けられ、顔を上げるみほ。そこには地元の人間なのだろうか、如何にもと言った若い男が2人立っていた。

「高校生くらいかな。よかつたら俺達と一緒にどう？」

「これからドライブに行くから。ね！」

「い、いえ…私、人を待っていますから。け、結構です」

いわゆるナンパの類に人見知りなみほは凝縮してしまう。ナンパなどされたこともなく、目の前にいる若い男たちに恐怖を覚えてしまう。

「そんなこと言わずにさ。ちよつとだけでもいいじゃん」

「や、やめてください!!」

男の一人がみほの手を持ち立たせようとし、嫌がるみほ。咄嗟に悲鳴を出そうにも怖くて声がそれ以上出てこなかった。

「なんだお前たちは!!みほから離れる!!」

その時だった。まほが慌てたように戻ってきてくれた。

「お姉ちゃん!!」

まほの姿を見たみほはすぐに駆け出し、まほの後ろの方に向かい肩を掴む。まほもみほを守るために若い男たちを睨みつける。覇気があり、戦車道するように鋭い目つきをしている。だが、今は戦車道ではなく、みほを守るために男たちに怒りを向けている。

「キミのお姉さん? 妹ちゃんは可愛い上に、お姉さんはめっちゃ美人じゃんか」

「俺たちめっちゃラッキーって奴じゃん」

だが、男たちにとっては上玉が一つ増えた程度にしか思っておらず、まほの睨みも無視して再び近づく。

「お姉さんも妹さんと一緒に来ない? いいデートスポットもあるしさ」

そう言つてまほの肩に馴れ馴れしく軽く手を負いた男。ざわざわと気持ちの悪い感触がし、まほはすぐに怒りを露わにする。

「っ!!? 気安く触れるな!!」

体を触らたことに憤慨したまほは男の手を払いのける。

「つてえな! このアマ! っちが下手に出てれば調子に乗りやがって!!」

まほの対応が気に食わなかったのか男は態度を豹変させ、手を振り上げた。そのまま

振り下ろし、力で抑え込もうとした時。振り上げた手が誰かに掴まれてしまう。

「女性に手を上げて恥ずかしいと思わないのかお前たちは」

「なっ?! 誰だおっさん!! この、離せよ!!」

掴んだのは大柄の男性だった。しかし、その出で立ちには明らかに一般人ではない。白い正帽を被り金と黒を基調とした階級章を両肩部分にしている白い半袖の制服をした海上自衛官

だ。その後ろには同じ制服をした人物が2名いる。

「このっ!! ってえなこの野郎」

無理やり引き剥がすも、男性の力が思ったより強く腕を擦る。

「なんだなんだ! 自衛隊は国民様に手を上げんのか! 俺たちの金で食ってるくせによ!!」

もう一人の男が挑発するように、先頭にいる海上自衛官に叫ぶ。

「先に手を上げていたのは君たちだろ。それをただ止めようとしただけだ」

「なんだそりや。ふん、大層な兵器持つてるくせして、人殺しもろくにできない税金泥棒が偉そうに威張んな!!」

自衛隊を侮蔑するともとれる発言を平気で口にする若い男。

「!!」

”人殺し”という言葉聞いたみほは一瞬ビクツとしてしまう。

「何？」

「よせ康平。一々相手にするな」

男の言動を聞き、後ろにいた自衛官の一人が反論しようとするも、隣にいた自衛官が諫める。そして先頭に立ってそれを聞いて先程の自衛官が少しばかり強い口調で男たちに告げる。

「確かに我々は君たちの税金によって生活し、必要な武器弾薬を買っている。それは一重にこの国を脅かされた時に君たちの盾となり、この国を守るためにある。国民の安全を守り、国家の領土、主義主張を守り、平和の安定を守るためにな。それを脅かそうとする輩がいるのなら、容赦はしない。それは無論、無抵抗な人を虐げる輩もな。そしてお前たちが目の前にいる彼女たちに手を上げて危害を加えようとしているのなら黙って見過ごすことはできない。それでもまだやるといふなら俺が相手になつてやる」

目を強張らせ、次は本気だという脅しにも似た言葉を聞き、男性のただならぬ雰囲気
に冷や汗を流して、後ずさる。

「ちつ、シラケるぜ。この税金泥棒が」

「あゝああ、偉そうにしやがって。年中憲法違反が」

本当に憲法なんて意味を知って言っているのか不明だが、捨て台詞だけ吐いてそのま

ま姿を消していった二人。

「つたく、昔の俺なら速攻シバいてるぜ」

「暴走族だったのはもう昔の話だろ。何年前の話をしてるんだ」

「もう終わったことだ。それより…」

去つていった連中よりも、絡まれていた彼女たちが気になるようだ。それに気づいたまほはすぐに対応する。

「あの、ありがとうございます。助けて頂いて」

「あ、ありがとうございます」

麦わら帽子を脱ぎまほが前に出て助けてくれたことに感謝の言葉を述べる。後ろにいたみほも続くように頭を下げる。

「無事で何よりだ。街にはああいう輩もいるから充分に気をつけたほうがいい」

「はい。本当にありがとうございます。呉港まではすぐそこですから気を付けます」

「礼を言われることはしていない。目の前で困っている人がいれば助けるのは当然だ」

「あ…」

男性自衛官の言葉を聞き、自分が起こしたことを思い出したみほ。それは少しばかり自分の中にあつた暗い影が和らいだ気がした。

「じゃあ妹さんとゆつくり楽しんでな」

「あ、待つてください!!」

「何か?」

別れの言葉言い、この場をあとにしようとした三人を呼び止めてしまうみほ。急に呼ばれて振り返るも、みほの方は咄嗟に出てしまい顔が赤くなりながらぎこちなく質問する。

「えっと、あの…その、お、お名前。なんて言うんですか? た、助けてもらって…あの…」
「みほ?」

何を言おうとしているのかイマイチ理解できないまほだが、まおと同じ海上自衛隊の人であったため興味はあった。呼び止められた自衛官たちも、みほに答えるためにそれぞれ自己紹介を始める。

「私は角松洋介。まあご覧の通り一介の海上自衛官だ。そしてこつちが」

「自己紹介くらい自分でできるよ洋介。自分は菊池雅之。同じく自衛官で、防大の同期で友人でもある」

「俺は尾栗康平。俺も同じで二人とは防大からの友人だ。そして護衛艦《みらい》の乗組員でもある。ちなみに俺は航海長で、こつちの菊池が副長兼砲雷長。そしてこの角松洋介は我らの《みらい》の艦長を務めてるんだ」

「お前が全部紹介するのか」

「いいじゃねえか洋介。お前が言わなかったんだから」

それぞれ名前を名乗った自衛官三人。実はゆきなみ型護衛艦3番艦である《みらい》のトップの人たちだったのだ。前艦長だった梅津三郎一等海佐に変わり、今年から艦長に就任したと同時に昇進した角松洋介一等海佐。角松の昇進と共に副長の任についた菊池雅之二等海佐。航海長と担当は変わらずだが、同じく昇進を果たした尾栗康平二等海佐。同期の間柄でもあり、こう言った場では階級を越えて名前で呼び合うほどの仲だ。

「艦長さん…なんですか」

「まあまだ艦長として未熟者だが、その任に就いてる」

そんな偉いひとたちだとは夢にも思わず、ただただ驚いたみほとまほ。だが、すぐみほは一番聞きたいことを角松たちに聞いた。慌てすぎて自分たちの名前を名乗るを忘れて。

「あの…それでその、に、西住まおってという人を知ってますか?」

無論それは兄のことだった。海上自衛隊なら知っているのではと思ひ聞いたのだ。

「西住…まお?その人は海上自衛隊にいる人なのかい?」

「は、はい。多分、まだ特別防衛学校の生徒だとは思ってますけど…」

恐る恐る聞いたみほの言葉に少し考える海自組の三人。だが、記憶を巡っても西住ま

おという人間は思い浮かばないし、何より若い連中が集まる特別防衛学校とはあまり接点がないからだ。大学から入れる幹部候補生学校なら顔は利くかもしれないが。だが、まおという印象に残る名前だったこともあり、とある人物のことを覚えていた角松。そう、あの大湊基地で梅津一佐と共に来た一人の若い幹部候補生のことを。

「西住まおと同一人物かはわからないが、”海江田まお”なら知っている。特別防衛学校の幹部候補生で今は《くらま》で航海長補佐をしている」

「か、海江田：まお？」

予想外の名前に姉妹仲良くハモってしまう。海江田というのは父方の姓でもある。恐らく本人なのだろうとは思っても、ここに来てまおが”西住”ではなく父方の姓である”海江田”を名乗っているのを初めて知るまほとみほ。

（それで電話してもお兄ちゃんはいないって言われたんだ）

特別防衛学校に連絡を入れた時に西住まおという人物がいないのだと言われたことに合点がいくみほ。本当に西住まおなどいないから当然といえば当然だった。まおは西住家を勘当させたと母が言っていたため、海江田姓に変えたのだろう。家族の繋がりの一つである姓が違うことに悲観的になってしまったまほとみほ。

「海江田？ ああ、大湊で来た海江田海将補のお孫さんの」

「お前のいとこの小暮くんと一緒に来ていた彼か」

「さつきも会ったが、あの小僧っ子も立派になってやがったな。流石に俺と同じ名前だけはあるぜ」

「それ関係あるのか？」

（小暮って航平くんのことなのかな…まさかね）

小暮という名前を聞き、中等部に入るまで一緒に遊んでいたまおの同級生の男の子のことを思い出すみほ。本当にその人物なのだとは夢にも思つてなかつたみほだった。

「ところでその海江田まおというのは君たちの親戚か何かかい？」

気になった菊池がまほに話を振つてみた。

「私達の兄です。そのまおという人は」

「兄？じゃあ君たちも海江田海将補のお孫さんなのか？」

「え、ええ。そう…なんででしょうか？」

海江田海将補と言われても、誰のことか理解できていなかったまほ。父方のことを殆ど知らずに育ち、まおが出ていってからもそれどころでは状態だったので初耳だったのだ。そして何より、今の今まで自分たちは西住家の娘という看板を背負つて生きてきただけに、海江田四郎の孫という単語に妙な違和感を覚えていた。

「そう言えば、君の顔つきによく似ていたよ。海江田くんは」

「え、私…ですか？」

菊池がまほの方を向き、まおと顔つきが似ていたことを指摘した。それに対しまほは少し懐疑的になってしまふ。自分とまおは確かに双子ではあるが、顔つきはそれぞれ母と父に似ていると認識していたからだ。

「まあ何かの縁だ。港までなら一緒に行くことができるが、君たちはどうする？ お兄さんのこと、知っている限りなら話せるが」

「おいおい洋介。俺たちがこの子たちナンパしてどうするんだ？ そんなところカミさんにも見られたらどうなるか……」

先程の若い男たちのように、今度は自分たちが二人をナンパしてるような状況に呆れるように言う康平。

「疚しい気持ちがあるわけないだろ。だから確認を取ってるだけだ。最も俺たちのような連中と目立つから迷惑かもしれないけどな」

「あの、私は構いません。だから、まお……兄のお話を聞かせてくれませんか？」

制服姿の自衛官は妙に目立つ気もあり、あのように自衛隊を侮蔑する輩も少なからずいる。角松はやめたほうがいいと思うも、以外にもまほが賛成の声を上げたのだ。言わずもがな、女子校生二人に海自幹部三人という奇妙な一行は呉港まで一緒に行くことになった。

「やれやれ、まさか江田島向かう途中で女の子と行くことになるなんてな」

「それよりもあの海江田海将補のお孫さんに会えるほうが驚きだ」

前を歩いていく角松たちを見て、二人は率直な感想を述べていた。

「…優しそうだね。あの自衛官さんたち」

「そうだな。まおも、ああ言う人達と交流してるんだろうな」

いつも自分たちと一緒にいたまお。ほぼ戦車道を通しての仲間がいたため、自分たちの知らないまおを知る人たちに少し寂しさを感じてしまう。まおはもう、新たな場所での自分の道を歩み始めているのだ。その気持ちに未だについていけないのもある。

そしてみほにはどうしても気になることがあった。先程言ったあの若い男の言葉が頭に響いていたのだ。

「でも、あの人達も、日本とか危なくなったら…戦うんだよね」

正直、漠然としないことだった。自分たちが使っている戦車も昔はそう言ったことをするために使っていた兵器だ。だが、時代とともにいつしか武道として人を鍛え上げる道具になった。それが戦車道というもの。最も今のみほにはそれらが西住流含めて懐疑的ではあるが。

「お兄ちゃんも、戦争とかになったら…人を、殺すのかな」

「みほ……」

そんなこと今まで思ったこともなかった。あまりにも非現実すぎることにイマイチ

頭に思い浮かばない。だがそれは、自衛隊に入るものが決して避けては通ることはできない事実。有事が起きれば、日本という国家を守るために、敵を斃さなければいけないのだから。人殺しをしたくて入る人はいないのは理解できるも、いざ自分の家族がいると思うと複雑になってしまう。

まあも、あの優しい兄も、そういうことをしてしまふのかと考えてしまい、みほは薄っすらと涙を貯めてしまう。

新たな出会い、みほも、そしてまほにとって新たな不安がもう一つ生まれてしまった瞬間であった。

番外編 《出向命令》

広島県呉市。旧帝國海軍から続く、歴史ある軍港の一つであり、世界最大である戦艦《大和》の誕生した場所としても有名である。そしてここには海上自衛隊呉基地が設置されており、日本に4つある護衛隊群の最後の1つである第4護衛隊群が配備されており、その他には第1潜水隊群司令部等様々な部隊の顔ぶれが揃う基地でもある。更にこの基地には練習艦隊司令部も併設されており、現在航海演習も第1クルールの終盤である第1練習隊が寄港していた。

その基地内にて、練習艦隊司令部が設置されている建物の前だとある人物が出てくるのを待っていた航平。

「やっと終わったのかよ。待ちくたびれたぞ」

「航平か。わざわざ待っていてくれたのか？悪いな」

玄関口から現れたのは、夏服用の制服を着用し。正帽を被っていたまおだった。現在まおは司令部にて此度の民間機を護衛艦に着艦させた件について査問会に事情を説明するために隊司令及び梅津艦長共々出席しており、それが先程ようやく終わったのだ。まだ幹部候補生のはずのまおが査問会に呼ばれるという事と、緊急着艦してきた人物が

まおに会うためにやったという前代未聞の事態により、またしても《海江田まお》という名前が良い意味でも悪い意味でも有名になってしまった。

「司令たちは？」

「艦隊司令のところはまだいる。報告やら積もる話でもあるんだろ」

そう言う二人は《くらま》に戻るために、艦艇が並ぶ棧橋付近を歩いていく。

（うーん。いきなり聞いて良いもんだろうか。もし処分とか合つてまおが落ち込んでたらあれだし。まほちゃんやみほちゃんに会う前にテンション下がつたらやばいしな）

歩く最中に査問会の方はどうだったのかなことをどう切り出そうか考えていた航平。長かっただけに、もしかしたら重い処分が出たのではと心配になっていたのだ。これから妹たちもう一度再会するというのに、本人が意気消沈してしまったら意味がないからだ。このまま触れないほうがいいかと思つた時。

「またこの艦を見ることができるなんてな」

「ん？ああ、みらいか。確かにびつくりだよな」

まおが停泊している一隻の護衛艦の前で足を止める。182と大きくマーキングされたイージス護衛艦《みらい》。艦艇の中で一般公募でつけられた艦名であり、専守防衛を防衛思想とする自衛隊には珍しくトマホークを搭載していることから度々話題に上げられる数奇な艦でもあるのだ。

「そう言えば角松艦長たちなら、江田島の幹部候補生学校に行くらしいぞ。なんでも候補生たちの前で教壇に立つとかで」

「なんで知ってるんだ？」

「さつきおじさん、じゃなくて尾栗二佐が言ってたんだ。たまたま通つてな」

みらいの航海長を務めている尾栗康平二等海佐は航平のいとこであり、同じ名前も相まって仲良くしていた記憶があった。海上自衛隊に入ることになったのも彼のこともあつてなのだ。

「梅津艦長も言つてたな。夜は戻つてきてみらいの乗組員たちで集まつて食事するらしい」

《くらま》乗組員には《みらい》から異動して来たものが多数いる。大湊では一度《みらい》に行つてゐるが、その時は《くらま》がすぐに出向したため、あまり時間がなかったため会える時間も少なかった。だが呉基地では両艦ともにしばらくは呉基地に係留されるため、そういった催し物をやるらしい。

「ところで、どうだったんだ査問会。何か処分とか出たのか？」

再び歩き始めたときに、どうも気になつていた査問会の結果を聞いてきた航平。かなり長い時間開かれていただけに、相当何かを話し合つたのではないかと思つていたので。まさか重い処分でも下されたのではないかと。

「特に処分はない。事情はどうあれ、民間機を護衛艦に着艦させたのは、状況的に見ても緊急避難的措置として見てるから、咎めることはしないってさ。検証資料としてもいいデータが採れたらしいも含めてな」

「終わりよければ全てよしって事か。でもまあ良かった良かった。隊司令も艦長もお前も別になんもなくて。これで無事に9月から第2クールも航海演習できるな」

処分がないのならそれは良い話なのだが、逆になぜそこまで長い時間質問会が開かれたのか咄嗟に気になった航平。するとまおの口から驚愕の言葉が出る。

「いや、俺は9月から”海上保安庁”に出向になったからいないぞ」

「はあ!?海上保安庁!?な、なんで!!お前処分なかったんだろ!?!」

思わず歩みを止めて、まおが言い出したことに驚愕した航平。なぜまおが海上保安庁に行くのか理解できなかった。

「ほとぼりが冷めるまでの緊急避難的をやつだつてさ。どうやら一個人でそこまでの影響力があることが少し問題になったらしい」

海江田まおという一人のために、大勢の人間逸見エリカの行動を含め、《くらま》に対し黒森峰女学園戦車道の整備士が大勢詰め掛けた事案が行動を起こしている事実には海上自衛隊上層部も驚いており、若い内からそんなに目立ちすぎのは少々危険だと判断し、噂が下手に広まる前にほとぼりが冷めるまでまおには別の場所に行ってもらおう意味

も含まれている。

「だから海上保安庁に行くことになったってことなのか？」

「そういうことだ。査問会で話が長くなったのはそれが原因だ」

「じゃ、じゃあこれからはまおは巡視船に乗るってことなのか？」

「いや、俺が行くのは特警隊だ」

「と、特警隊？」

「Special Security Team
特殊 警 備 隊。略してSST。お前も知ってるだろ？海上保安庁が誇る特殊

部隊のことは」

《特殊警備隊》とはシージャックや海上テロ事件。不審船などに対する臨検などを様々な任務を主とする海上保安庁の特殊部隊だ。

「いや、それは知ってる。だけどなんでそこにお前が行くんだよ」

「自分で志願した。実は選択肢に色んな部署があったんだが、俺はそこに行くことにしたんだ」

「なんで特警隊だ。お前船乗り目指してたんじゃないのか？」

護衛艦勤務…というより元々は潜水艦勤務を目標としていたのに、なぜ急に肉体労働路線に転換したのか気になった航平。

「前に俺が書いた論文が上の方に目が入ったらしくてな。念の為に選択肢に加えてくれ

たらしい。もつとも俺が行くとか言うとは思ってなかったらしいけどな」

「確か護衛艦に臨検隊を置けとか、学園艦を減らせとか、特殊部隊作れとかその他諸々を書いたあれか」

まおが一年時の最後に提出した論文のことを思い出す。どうやら、それらが防衛学校を飛び越えて防衛省にまで話が行ったらしく、ならば自分で経験してみてはという鶴の一声がかかり選択肢に入れてくれたらしい。だが、まおが潜水艦勤務を前から希望しているのは知っていたため、それを選ぶとは誰も思っていなかったとのこと。なので、話之余計に長くなり査問会の終了が遅れてしまったのだ。本当に行くのかという議題で。

「ならまお。お前一人で海上保安庁に行くわけないよな」

「一人で行くわけ無いだろ。全国から数十名が集まって行くんだ。そこに俺の席を開けてくれたらしい。って言っても俺はまだ候補生だから他より早めに切り上げるし、ただポツンといるだけだろうがな」

「要は体験実習的なことって訳か」

「そういうこと。そこまでは多くは期待してない。でも、そういう切っ掛けをする手伝いでもできればいいと思っただけだ。ちよつとずつ変化することに立ち会えるのはな」

正式な自衛官ではないため。恐らくそこまで多くのごとに携われるとは思ってはな
いが、特警隊に行けるとは夢にも思っていなかったので願ったり叶ったりする。自分の

思っていることが少しずつ現実化することに。

「ただ行くときは誓約書やら何やら大量の書類にサインしないとイケないらしい。守秘義務とか何やらな。一応特殊部隊だからな」

「それはそうだろ。ああ、でもまおがまた帰ってくる頃にはモリモリのマッチョマンで来るかもしれないってことか」

「そんなガタイで帰るわけないだろ!!」

「そこまでゴツくはなりたくなかったまおは、ちよつと鍛え方に気をつけるべきなのか気になってしまう。」

「まあそういうことだから、9月からの第2クルルの航海演習の前半はいない。その間はずつと神戸の第五管区の本部に通うことになるから。その間は神戸暮らしだな。まあ陸地になるからまほたちに会いやすくなつたから俺はいいと思うけど」

「航海中は如何せん連絡などが全て遅くなることもあり、今後のまほたちのことを含めればちようど良かったと前向きに考えていた。これから美倉島に行くであろうまほたちにもいい知らせだと思った。」

「俺もそのほうがいいと思う……つてお前、早く美倉島に行かなくて良いのか!?!二人とも行つてるかもしれないだろ!!」

「……」
「ここでようやくまおの大事な用事を思い出す航平。まおはさつさと美倉島に行つて、

妹のまほとみほを迎え入れなくてはいけないことを聞いていた。

「すぐに行きたいに決まつてるだろ。でもまだ夏季休暇届も演習報告書も提出してないから行けない。査問会で時間が取られ過ぎたんだ。提出とかにも時間が掛かるから急いで夕方方は越えるな」

査問会も元々午前中だったが、予定がズレて午後からになり、更には出向の件で話が長くなったのもあって、美倉島に行く時間が大幅に遅れてしまったのだ。

「先に来ないことを祈る。待つてるって約束したからな」

「祈るなら『お兄ちゃんいない』とか言つて泣き出さないことを祈ったほうがいいんじゃないのか？」

「約束破つたら……な」

まほとみほよりも先に美倉島で待つはずだったが、自分の不始末等でまたも約束を破るような結果になりそうで、思わずため息が出てしまう。

「L C A Cにでも乗せて行つてもらうかな。ちょうどおおすみがいるし」
停泊中の輸送艦おおすみを見て、ボソツと言うまお。

「いや無理だろ」

もちろん無理な話である。

美倉島には少し遅れることが確定したまおだった。

護衛艦の係留する向こうの海に、まほとみほが乗っている連絡船が航行しているとは夢にも思わずに。

(ていうか連絡しろよ)

それが一番手っ取り早いのだが。

航跡―8 《美倉島へ》

呉港にある施設の休憩所で、乗船予定の連絡船が来るのを待っていたまほとみほ。そして先程自分たちを助けてくれた角松、菊池、尾栗の3名は対面になるように施設にあるベンチに腰をかけていた。

「なるほど、そう言った経緯でお父さんの故郷に行くことになったのか」

「はい。もつとも全ては自分の不甲斐なさが招いた結果なんです……」

船の時間までは少し時間があるため、約束どおりまほに關することを聞いていたまほとみほ。だが、先にこちらの自己紹介をしておかねばならなかったため、簡単な紹介とここまで来た経緯を説明した。戦車道の名家であり、名門である西住流の生まれであること。10連覇のために暴走してしまい、黒森峰女学園を優勝に導くことができず、戦車道チームを崩壊させてしまい、のうのうと兄を頼つて父の故郷に向かっていること、まほの自己嫌悪ぶりな発言が次々と出てきた。

最も角松たちは戦車道にそこまで詳しくなく、黒森峰女学園が敗北云々なども知らなかったし、西住流についても聞いたことがなかった。別段興味がなかったと言えどそれだけなのだが。だがそのこともあり、まほとみほを特別色眼鏡で見るとはな

かった。と言つてもこの三人は有名であろうが関係なく接するのだが。逆にまほとみほの方がいま目の前にいる自衛隊のお偉方に緊張しているほどだ。

「そこまで気負う必要はない。キミは充分に若いんだから、今はまだ学ぶべきことをしっかりと学んで、そこから自分がどう生かしていくかが大切なことだ。全ての責任が自分にあるということ事態は捨てたほうが良い」

「しかしそれが上に立つ者ではないのでしょうか。常に前に立ち、強い意思と共に皆の模範たらんとすることは。そしてその全ての責任を負う覚悟なくして人を導くことなど……」

角松の話の聞き、まほなりにこれまでの隊長として西住流としての経験を語る。いつも常々教えられてきた強い意思と力こそが上に立つべき者であり、それが皆を引っ張つていく者の姿なのだ。

「常に強い人間か。確かにそれは上に立つ者として必要なスキルなのかもしれない。だが、それが全て正しいとは限らない。そもそも強さとは色々ある。力が強い者。意思の強い者。信念の強い者。心が強い者。数え切れないほどの強い人間がいる。でも、それに見合うほどの思いやる心が大事だ。強さだけを求める人間が破滅していくのは歴史が証明している。共に闘つてくれる仲間を思いやり、信じられなければ人は自ずとついては来ない。そのような関係では、信用はあれど人の信頼を無くすことになる。それ

は上に立つ者ならば絶対に失ってはならないものだ。責任云々の前に、本当にキミが責任を取るにたりうる仲間達ならばな」

かつての上官であり、尊敬している《みらい》の前艦長だった梅津三郎一等海佐。彼もまた上に立つ人間ではあるが、まほの言うような強い人間とはまた違った印象を抱く。温和であり昼行灯などと揶揄されるも『国にとつて軍隊なんてあるかないか分からんくらいが丁度いい。ただ誰も見ていなくても…いかなる時も行灯の火は消してはならない』と以前みらいにて梅津一佐なりの強さと決意を聞いたことがあつた角松。部下の命を第一とし、専守防衛を貫く。それが梅津一佐という人間の強さだと。

「それは…そうかもしれません」

彼もまた、護衛艦という船を動かす人間であり、大勢の乗組員を預かる艦長を務めている。いざ戦闘となれば、敵味方の被害も考慮し相当な責任を覚悟し行わなければならぬのだ。そもそも年上かつ、恐らく自分よりも遥かに責任に対して強い角松には釈迦に説法すぎたのかもしれない。ことごとく言い負かされて、少しばかり消沈してしまうまほ。思えば自分の回っていたものは自分ではなく西住流の西住まほしか見てくれなかつた。本当はそれがいやなのはまほ自身が一番わかっているはず。

「まあこれはあくまでも俺の持論だがな。君たちはまだ若い。まだまだ多くの人達と出会いや別れを経験する。そこから学んでいけばいい。人生なんてこれからなんだ」

少しばかり顔を俯くまほに角松は助言を言う。まほの言うことも一理はある。ようはもう少しだけ視野を広げて物事を見るべきだと。角松の言葉はまるで、子供を促す父親のようなものだった。もしここに亡くなった父、常夫がいたならば同じような言葉で自分たちに助言してくれたのかもしれない。

「そうだけ。今はまだ自分のことがどうなるかなんてわかるわけじゃねえ。俺なんて君たちと同じ年くらい頃なんか博多でバイクを乗り回して馬鹿やツてたもんだ。それが今じゃ、一介の自衛官になつてる。人生なんてどう転ぶかわからないもんさ」

かつては暴走族に入り、旭日旗降つて走っていた時に本気でこの旗を守りたいと考え、自衛官になつた尾栗。人生なんて、どう転ぶのはわからない。色んな出会いや経験が大事だと角松に続くように言う。

「君たちのお兄さんも、色々考えて海自に来たんだろう。色んな考えで自衛隊に入る人間はいるが、きつと君たちを守りたい気持ちで入つたと思うよ。それだけ君たちを大事にしているならね」

話を聞き、海江田まおという人間を自分なり分析する菊池。話したことなどほんの数分ではないが、悪い印象は抱いていなかった。ひと目見れば好青年という感じであり、まほとみほの話の話を聞けば、とても妹思いなのだろうというのはわかる。だからこそ、二人を守るために海自に入っているではと思つたのだ。

「でも私。兄がどんどん遠い存在になりそうで怖いんです。ずっと居てくれたから……」
「みほ……」

尾栗と菊池の話の聞き、わかる気持ちはあつたみほ。だが、どうしても心の奥ではまおに対し納得できないのが大きかった。確かにまおを強く慕っているのは自覚している。だからこそ、まおが海自に入り、自分の知らない人物になりそうで嫌だった。そして何より、父や祖父たちが亡くなった海にまおがいることがどうしても怖い気持ちがあつた。それは無論、まほも同じだった。祖父である海江田四郎も海で亡くなったとみほから聞き、悪寒が走っていたのだ。

「君たちがお兄さんのことを強く慕っているのは聞いてよくわかる。お父さんの件も含めれば彼に対する心配もな」

まほとみほが、まおに対し一番心配していることを角松は察する。そしてまおを強く慕っているのも感じていた。自分とて同じ心配を家族がしているのは知っている。いつ何時に有事が起こり、その瞬間にも命を落とすとは限らない。残された家族のことを思えば辛く悲しいことだと。それに加え、彼女たちの父親は海で亡くなっているのだ。そして祖父である海江田四郎もロシア原潜との衝突事故により帰らぬ人になっている。立て続けに海での不幸が続けば、まおのことを心配するのは当然といえは当然だ。

「俺にもカミさんと息子が一人いる。こんな仕事もしているから、いつ何時俺たちがこ

の国を守り、戦わないといけない日があるとも限らない。やはり死と隣り合わせなのは間違いないんだ。心配してくれる家族がいるのも事実だが、例えそうだとしても俺には守らなければならぬ大事な家族がいることに変わりはない。命を掛けてなんて大層なこととは言わないが、覚悟くらいは持つているつもりだ。それに俺たち自衛官は毎日死なないために必死に訓練を行っている。死ぬために自衛官をやっているやつは一人も居ない」

「……」

角松の話真剣に聞いていたまほとみほ。若者たちの自主独立性を高める学園艦での学生生活が多く、こういうことを真剣に語る大人にはなかなかあったことがなかった。二人は自然と角松の話しに聞き入っていたのだ。

「すまないなこちらの話ばかりで。さつき菊池が言ったように、お兄さんもまた君たちを守りたい気持ちがあるのは間違いないと俺は思う」

「そう…なんででしょうか……」

以前、父の夢を継ぐためにとこの話をチラツと聞いていたのを覚えていたまほは懐疑的になってしまった。本当は自分たちに呆れ果てて出ていったのではというのが少なからずあるからだ。自分たちの元に来てくれ、そんなことはないかとわかっていても、悪い思考に傾倒しがちなのでそればかり考えてしまうまほ。

「お兄さんに聞いてみるといい。折角また会えるんだ。こういう職種柄、なかなか家族に会えることは少ないから、聞けることはしつかり聞いて、一杯話すんだ。そのために行くんだらう？」

「は、はい」

「そうですね…そのためにここまで来ましたから…」

「なら、それまでは充分気をつけてな。君たちの乗る船が到着したようだ」

角松が立ち上がると、二人の乗る美倉島經由の連絡船が到着したのを告げる。

「あの、貴重なお話を聞けて色々ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

まほとみほは立ち上がると、これまでの件を含めて感謝の言葉を述べ頭を下げた。短いなながらも、二人にとつては本当に貴重な話だったからだ。

「礼には及ばない。俺たちもあまりお兄さんのことは話せなかつたし、ほとんど自分たちの話ばかりだったからな」

「いえ、とても貴重なお話でしたから。勉強になりました」

「そうか。なら、これでお別れだな。こちらでも君たちと話せてよかったよ」

その言葉を最後にまほとみほは、連絡船に乗るために棧橋の方へと向かつていった。

「さて、俺たちもそろそろ来る頃だから向かうか」

「そうだな。確か反対の棧橋だったな」

尾栗たちも江田島に向かう連絡船が到着する棧橋に向かうことにした。ちようど振り向いた矢先に帽子を被り、サングラスをかけた少女たちとすれ違う。

「ちよつといいか君たち」

突然角松が今通りすぎた二人の少女を止めた。声を掛けられた瞬間に体がビクツとなり、ゆつくりと顔を向けた。

「な、なんですか？ 私たち早く船に乗らないといけないんですが」

「もう出ちやいますから……」

サングラスに帽子を深く被り、如何にも怪しいといった雰囲気の二人。

「なぜあの二人をつけているんだ？」

「べ、別に着けてなんかいませんよ!! な、何の言いがかりですか!？」

「ちよ、ちよつとエリカさん!! そんな慌てるように言ったら怪しまれるじゃないですか!」

「う、うるさいわね! 小梅が何も言わないからでしょ!」

サングラスと帽子を深く被った二人の少女。銀髪と赤みがかつた癖毛が特徴。先程の話したまほとみほと同じ黒森峰女子園の生徒であり、同じ戦車道を嗜む仲間の逸見エリカと赤星小梅だったのだ。あれからどうしてもまほとみほのことが気になり、様子見

がてら別邸に向かおうとしていた時に、二人が別邸から出ていくのを見かけ、同じく心配していた小梅と共にこうしてここまで付いてきてしまっていたのだ。迷惑とわかりながらも、二人のことが心配になり。角松が気づいたのは、先程まほとみほがナンパされている時だった。恐らく自分が出なければ彼女たちが加勢して追い返そうとしているのだと。

ちなみにエリカなのだが2学期が始まると同時に1ヶ月の停学処分が出ており、来年の春までは飛行禁止処分が下されている。その程度で済んだのはこれ以上黒森峰学園の評価を下げるわけにはいかないという学校側の思惑と口止めを含めてのことだが。なので今のところはまだ自由の身である。

「あまりこそこそと人をつけるのは関心しないが、君たちは彼女たちの知り合いか何かかな？」

「な!!えつと、私は彼女たちの……あの……」

付けていたのを咎められ、それが事実であるため、何を言えばいいか冷や汗を流すエリカ。いつも強気な彼女ではあるが、海上自衛隊には散々世話になっており、目の前の人物がああ梅津艦長と知り合いと相まって言葉に詰まってしまったのだ。迷惑を掛けたのに、エリカ一人のためにと体験航海までさせてくれたのだから。

「まあ、あまり怪しまれると本当に連行されるから気をつけるんだぞ」

「は、はあ……」

何か言われると思っても、角松も彼女たちの正体に薄々察し、それ以上は何言わずにその場をあとにした。不思議と思いつつも、エリカと小梅は美倉島へと向かう連絡船の方に向かっていった。

「やれやれ。海江田の一族は本当に話題が欠かさないのかねえ。あの子たちの話しを聞いてたら、なんだか俺も海江田に会いたくなってきたぜ」

「なら、くらまにでも足を運んで会ってみるか？ 恐らくまだいると思うけど」

ここ最近、急激に話題になり始めた海江田という言葉に、笑みを浮かべる尾栗。時代が変わろうともこの一族は大きな存在感を出している。

「同じ海の上にいるんだ。必ず会えるさ。もしかしたら、いつか部下になるかもしれないしな」

その言葉が現実になるかは、まだわからないまでも、海江田まおには期待の気持ちはあつた角松たちだった。



無事に連絡船へと乗ることが出来たまほとみほ。呉港をゆつくりと出港し、巨大な造船所や海上自衛隊呉基地の横を航行していく。

「ああ!! 自衛隊の船だ!!」

小さな子どもが両親と共に、呉基地に停泊している護衛艦の数々を指差しているのを見ていたみほ。

「あのお船に乗れるんだよね!!」

「ああ、チケツトもあるから大乗だ。ちゃんと動くところにも乗れるんだぞ」

「やったあ!!」

親子の仲むつまじい姿を見ていたみほ。その姿に高校生になった今のみほでも羨ましく見ていた。かつての自分たちもああいう仕草をしていたのだからと。

「護衛艦…か。あれに角松さんたちやまおが乗っているんだな」

正直今まで生活の中で戦車にしか興味を示さなかったまほも、先程の角松との話を聞いていたので、護衛艦等に無意識に興味が出ていた。栈橋には、多種多様な護衛艦が勢揃いしている。巨大な飛行甲板を有した空母のような艦に不思議な四角い形を前後に付けた艦。その後方には真っ黒な色をし、船体の半分以上が海に浸かっている潜水艦。

(あ。あの船……)

みほが一隻の護衛艦に目が止まった。主砲を2門背負い、広めの飛行甲板と独特なシールエツトなので記憶に残っていた。艦番号も3520と記載されていることから、まおが乗艦している練習艦《くらま》だとわかったみほ。まおは間違いなく、自分たちの近くににいるのだと実感した。

「……」

その時だった。風が吹き、潮の匂いがしたのを。みほはこの匂いが嫌だった。思い出したくもない、父との別れのことを。物言わぬ遺体と対面した日を。本当なら連絡船の内部にいたかったが、人が多く風の通る吹きさらしのデッキに座るしかなかった。無意識の中、顔を俯かせ握りしめる手が小刻みに震えてしまう。

「大丈夫だ。みほには、私が付いてる……」

その時だった。まほがすぐにみほの手を包み込むかのように手を握ってくれた。今は自分がみほを守るのだと。今度こそ必ずに。

「お姉ちゃん……!!」

握ってくれたまほの手に安心するみほ。だが、すぐにみほはまほの手もまた小刻みに震えているのがわかった。まほだって、みほと同じく海という場所が父を死に追いやってたとしてトラウマになっているのは知っている。昔は家族皆で海水浴とか普通に行っていたのに、今では潮を感じながら海を眺めることには躊躇いがあった。だが同じ兄妹なのに、まおだけはそこを嫌うことはなく、海という場所に希望を見出しているのを聞いたことがあった。当時の二人はそういうまおには理解できず、嫌いだったことを思い出す。そんなところではなく、自分たちに目を向けてほしかったと。今更ながら、とんでもない思い違いだったと恥ずかしさがあった。

「お兄ちゃんと一杯話さないといけないね」

「そうだな。今なら沢山話ができる気がする。お父様の生まれた島で、きつとな」

失った時間を取り戻すためにも。正直、どんな話になるのかもわからない。また感情が爆発してしまいそんな普段が拭いきれないが、やはり話をしなければ始まらない。離れ離れになっていた姉妹の距離は間違いなく近づいていた。

そしてまほも、まおに対する己の気持ちに決着を付けなければならぬ。

「むう。隊長たち、なんだかべつたりくつついてるわね」

「エリカさん。あんまり押さないでください。バレちゃいますよ」

エリカと小梅という思わぬ珍客を連れて行きながら、船は真っ直ぐに美倉島へと航行していく。

そして…

自然と海が溢れる豊かな島。曾祖父である海江田巖を始め、祖父、そして父が育った場所。自分たちのもう一つの実家とも言える場所がある島《美倉島》。

その島に降り立ったまほとみほ。だが……

「お兄ちゃんは何？」

到着した美倉島には、兄まおの姿はどこにもなかった。

航跡—9 《海江田家》

漁港とも併設した美倉島港。島の主要生産物はほぼ漁業でもあるため港には漁船等が停泊していた。少子高齢化の影響もあり、島の人口は確実に減少傾向にあれど、漁港にはそれなりに人がいることから活気はまだ失つてはいないようだ。

「……」が……

連絡船から下船し、美倉島港に降り立ったまほとみほ。生憎と日差しはまだ強く、麦わら帽子はまだ必須であり、渡してくれた菊代さんには感謝しなければいけないと改めて思う二人。連絡船からは数名程下船し、各々が目的の場所へと向かっていく中、まほとみほはこの場で待っていてくれていると思っていた人物を探していた。

「お兄ちゃん……どこにいるのかな」

「今更なんだが、まおの連絡先も知らないし、私達が行くこと伝えてなかったな」

「……そうだったね。行くことばかり考えてたもんね」

確かにそうだ。自分たちはまおの手紙と地図通りにここまでやってきた。だが、色々ごたごたしていたとは言え、まおに今から行くとも伝えていないし、まおの連絡手段も知らなかった。普段ならばこう言った連絡等は戦車道等では必ず抜かり無くやるは

ずなのに、今回ばかりはお互いどこか抜けてしまっており、ただ来ることだけに意識が集中していたのだ。行くことを伝えていなければまおにもいつ行つたかもわからないが、せめてまおも連絡先くらいは書いてもらっていたかった。二人からしてみれば、何も伝えずにまおが来るタイミングをわかつて待つていてくれたら嬉しいなという思いは少しあつたりするが、流石にそこまではまおも読めないだろう。

「どうしようお姉ちゃん。お父さんの家の場所わからないよ」

「だ、大丈夫みほ。多分、海江田という名前はそうあるものでもないだろうし、島の人にも聞いていけばいいさ」

俯くみほに心配させまいと、妙案を出すまほ。確かにここはそこまで大きくはない島。海江田家はどこですか的なことでも言えば答えてくれるかもしれないと思い、近くにある有人の休憩所に行こうとした矢先に。

「まほ、みほ」

誰かに呼び止められた。二人の進もうとした先に、一人の日傘を差した女性がいたのだ。自分たちの名前を知る人物は今この島にはたった一人しかいないのを知っていた二人は近寄つて行く。

「も、もしかして……」

「お祖母様……ですか？」

日傘を掛けた初老の女性に向かって、恐る恐る聞いたまほ。

「はい。お久しぶりですね。会えるのを楽しみにしていましたよ。まほ、みほ」

日傘をさつと上げて、二人に優しい笑みを浮かべる女性。

(綺麗…)

とても祖母とは思えないほど若々しく綺麗であり、品のある雰囲気を出している女性にみほが思わず心の中で呟く。正直なところ、みほもそしてまほも父方の祖母の顔は覚えていない。だが、その優しい表情が父である常夫に良く似ていたことからすぐに祖母なのだと思感する。紛れまもなく二人の父親である常夫の母であり、祖父である海江田四郎の妻である人物なのだ。

「まあ畏まるのは仕方ないわね。二人とはほんの小さい頃に会っただけだったから…」

本当は常夫の葬儀の際にいたのだが、当時の二人は常夫の死のショックが大きく、その時の記憶は殆どなかった。祖母もそのことを知っているのです、ここでは敢えてそれを告げることはしなかった。

「あ、あの…お祖母ちゃん」

「はい。どうしましたみほ？」

まだ目の前にいる人物に対し、そういう風に呼ぶことに躊躇いが出てしまうみほ。そんなみほに優しく返してくれる祖母の表情を見て、自然と安心感が芽生え始めたみほは

続けた。

「お兄ちゃんは、来てないの？」

「まあなら。まだ遅れると連絡があつたわ。二人の方にも何回か連絡を入れたけど、繋がらないとも言つてたわね」

「え？」

「まあから……!!」

祖母から言われて、まあから連絡があつたと知りまほが急いでポケットに入れてあるスマホを取り出す。

「あ、マナーモードにしたままだった」

みほも鞆から出したスマホを確認すると、着信履歴が何回かあつたのを確認した。どうやら二人共新幹線に乗る際にマナーモードをサイレントにしていたらしく、今の今まで気が付かなかつたようだ。普段からスマホを見るような習慣もないかつ、久しぶりの新幹線との移動もあつてマナーモードを変えてしまつていたようだ。

「この番号……」

そして、着信履歴に残る番号を見たみほだが、まったく知らない番号からだったのに気づく。

「多分呉基地からの電話番号ね。まおは携帯を持っていないから連絡先はいつも公衆電

話か基地内の電話だったから」

「呉基地。お兄ちゃん、そこにいたんだ」

連絡船から見ていた護衛艦が並んでいた場所。そこそが海上自衛隊呉基地であり、あの角松たちの乗艦する《みらい》やまおが乗艦している《くらま》が係留しているのを思い出すみほ。あの時感じたすぐ近くにまおがいると思っていたのは間違いなかったのだ。

「でもお祖母様。どうして私達は来るのがわかったのですか？連絡するのを忘れていたのに……」

まほには気になることがあった。まおから連絡も取れておらず、自分たちからもこれと言つて行くことを告げていないのにどうして来ることがわかったのかを。

「実はある人があなた達が学園艦から出たという連絡を受けたの。それで、まほとみほが来るくらいを見計らつて待つてたのよ。この島には連絡船はそう来ることはないから」

（ある人つて菊代さんかな…）

（菊代さんだろうな。お母様には行くことを告げていないし……）

祖母の言うところある人物というのは二人をお見送りした菊代なのではと推測した二人。母であるしほには、行くことを伝えていなかった。失望されたことが頭の中にあり何を

言われるのか怖く、黙って行ってしまったのだ。

「さあさあ。いつまでもここに立っていたらダメよ。今日は一段と暑いらしいから家の方に移動しましょうか。まおも今日には戻れると行ってたから待っていないといけないのでいいでしょうし」

「お兄ちゃんが…」

「まお…」

まおが来ると聞いた二人は表情が明るくなる。角松たちから言われた言葉もあり、まおとはいろいろと話がしたかった。いなくなつたこれまでの時間が少しでも取り戻せるようにと。そして、まおの言葉が聞きたいという思いがあつた。

「でもその前に。お祖父さんのお墓参りに行きましょう。せつかく可愛い孫が来てくれたんですもの」

「お祖父ちゃんの……」

「お墓参りですか」

盆は過ぎているとは言え、今はまだそういう時期だ。祖父である海江田四郎ロシア原潜との衝突事故の搜索等は当時の米海軍が主導で行われており、潜水艦《やまなみ》の圧潰状況から死亡したと米海軍により判断されている。そのため遺体が見つからないわけではないので実際には遺骨はない。ちなみに父の常夫の遺骨は西住家の墓に納

骨されているや曾祖父である海江田巖を含む先祖たちの眠る墓へと向かうことになった。

そして……

「ちよ、ちよつと小梅!!二人とも行っちゃうじやないの!？」

「ご、ごめんなさいエリカさん!でも、もう我慢できなくて……!？」

まほとみほにバレないようにこつそりと降りていたエリカと小梅。だが、運悪く小梅が船酔いをしてしまい、口元を抑えてそのまま休憩所のトイレまで駆け込んでいつてしまう。その間にもまほたちは祖母に連れられて、どんどん遠くに行ってしまう。

「は、早く出すもの出しなさいよ!!」

エリカの無情な叫びが小梅のいるトイレの前で黙礼する。

数分後、小梅とエリカが戻る頃にはすでにまほたちの姿はなく、港に取り残されたしまった二人。

「どうすんのよ。何処に行ったのよ……隊長たちは!？」

「と、泊まれるところあるんですか……?」

◆ 島は小さいが、二人にとっては全く知らない島に取り残されてしまうのだった。

島はやはり自然一杯に溢れていた。風も涼しく、被っている帽子が飛んでいきそうな

くらい吹いている。海江田家の墓地がある寺までの間に色んなものがまほとみほの目に映っていた。まおが書いていたとおり、ここには見渡す限り山と海ぐらいいしかない。だが、こう山があり、森が生い茂る場所が実家のある場所によく似ていたので二人には心地よかった。よく三人で川などに行ったりして、魚やザリガニなどを沢山採っていたことを。

「あら……」

寺に到着し、それなりにある階段を登っていく三人。境内の中に入るとすぐ近くに墓石が並ぶ場所が見えた。海江田家の墓は一番手前にあるため場所はわかりやすい位置にある。だが、すでに先客がいるのを祖母が発見する。その人物は祖母もよく知る人物なので、不審がらずに近づいていく。

「深町さん。今年も来てくれたんですね」

「ああ奥さん。ご無沙汰してます」

スーツ姿の大柄の男性が海江田家の墓地の前に立っていた深町と呼ばれた男性。中々に厳ついと言った強面の表情をしている。男性の方も三人に気づき、一番前にいる祖母に挨拶をする。

「おや、後ろの二人は……まさか」

祖母の後ろにいるまほとみほに気づくと、すぐに誰なのかを理解する男性。それに気

づき、一步横に立つと二人に目の前にいる男性が何者かを紹介する。

「まほ、みほ。こちらは深町洋さん。お祖父さんのご友人で、同じ海上自衛隊に所属する自衛官。そして、潜水艦《たつなみ》の艦長をしている方よ」

「まあもつとも今は、練習艦に鞍替えになりましたがね」

海江田家の墓前の前にいた男性は海上自衛隊所属であり練習潜水艦《たつなみ》の艦長を務め、防大の同期であり良いライバル関係にあった深町 洋だった。所属している練習隊が呉基地にあるために、毎年こうして海江田家の墓前に来ているのだ。

「お祖父様のこと？それに海上自衛隊……」

角松たちにつき、再び海上自衛隊の関係者に会えたことに驚くまほ。それに今度は潜水艦の艦長と来ただけに偶然にしては、良く会うと感じたようだ。

「そうか。お前たちがあの……西住まおの妹たちなんだな」

まほとみほを紹介された深町は、驚きと共に2人を見つめる。名前ばかり聞いていたが、ここでまさか本人たちに会えると思っていなかった。常夫のことも深町は知っている。なんとなく雰囲気似ているみほ。そしてまほの顔を見て、すぐにまおの双子の妹なのだと確信していた。

「あ、あの……」

少しばかり強面の深町に見つめられて、狼狽えながら話しかけるみほ。角松よりも

ずっと年上であり、あの祖父の同期と言われて少しばかりおどおどとしてしまっても勇気を出して聞く。

「兄のこと知ってるんですね。それに西住まつて…」

角松たちは兄のことを海江田まつという名前のみで知っていたのに対し、深町は西住まつと言ったのだ。それはつまり、まつのことを深く知っているのではと思つてのことだった。

「ふっ…お前さん達の祖父さんには大変世話になつた間柄だ。いや、世話してやつたほうになるか。それから兄貴のことも何度も会つてるから、二人のことは聞いていた。ここへ来たのも兄貴の紹介か？」

祖父のことを含め、まつのことを簡単にだが説明をする深町。

「は、はい。兄から来るように言われて…」

「それで、この島で会うようになってます」

深町からの質問に対しそう答えるまほとみほ。

「そうか。ならせつかくの家族の団らんを邪魔するわけにはいかないな。奥さん、仏壇はまたお暇がある時に伺いますよ」

「そうですか？せつかくいらしたのなら…」

「大丈夫ですよ。海江田海将補殿にも挨拶は今度させてもらいます。しばらくは呉にい

ますんで」

海上自衛隊の立役者と言われる海江田巖への挨拶も含めて手を合わせたかったが、せつかくの孫たちの団らんには無粋だと思い、ここは帰ることを決めた深町。

「お嬢さんたち。兄貴はなかなか頑固なやつだが、お前さん達のことを大切に思っているのは本当だ。だから言いたいことはちゃんとつといたほうがいいぞ。でないといつは、どんどん先に進んじまうからな」

その足でまほとみほの方に近寄ると、まおに對することを告げる深町。まほとみほを助けられるのがまおならば、先へどんどん進んでいこうとするのを止められるのもまほとみほにもできるはずだと。

「お兄ちゃんが……」

「まお……」

深町の言葉に對し、何かを思ったのかしばらく深町の方を見つめていた。

「ほんじや奥さん。お元気で」

「はい。深町さんのほうもお気をつけて」

海江田夫人との挨拶を終えて、深町は墓地をあとにしていく。思わぬ人物たちとの出会いに、深町は大きな期待が胸に膨らんでいた。

「小僧。次に会う時は、一回りも二回りも大きな奴になつてなけりやあ俺の船に乗るな

んで出来ねえぞ。そんな時は海に放り投げてでも目え覚まさせてやる」

あの二人はまおが守らなければならぬ大切な妹たち。ほんの僅かだが、あの逸見工リカが危険を冒してでも、くらまに着艦してまおに助けを求めていた理由がなんとなく理解する。あの二人は、確かにまおがいなければ立ち上がれないのだろうと、深町の考えはそう告げている。そしてその前進とも言える一歩をあの二人は歩もうとしている。それを導くべきなのは確かにまおが必要だと。ずっと目を背けてきたまおがここでどう変われるのか、心の中で期待が膨らんでいた深町。いずれ本当に自分の乗艦するたつなみに乗りたいのなら、すつきりして大きな男になれという意味を含め。

「つたく海江田も罪なやつだな。あんなべつびん女房や孫もつてるのに、一度も目に掛けられねえんだからな」

振り向きざまに、容姿端麗であるまほとみほを見て呟く深町。もし海江田四郎がこの場にいたのなら、茶化してあのすまし顔が崩れるところが見てみたいと思わず考えてしまう深町。

(まあ俺はお前が死んだなんて考えてねえがな)

もつとも深町自身は今でも海江田四郎が死んだという事実が信じられないでいた。海江田家の墓前に来ているのも、そういったことを信じないという意味合いで毎年来ている。自分の目でしか信じない深町にとって、米軍のみで確認されている報告に疑念が

あったのだ。今もどこかで生きているのだと深町は信じて疑わなかった。海江田四郎という人物を誰よりも見て来ており、海上自衛隊においての操艦技術は超一流という評価もしている。そんな海江田がロシア原潜に乗艦する《やまなみ》をぶつけるなどというヘマはしないと。深町が潜水艦乗りとしてモットーとしている《信ずるべきものは、自分の目と耳。そして勤》。

深町の勤は《海江田は生きている》と出ているのだから。



墓地をあとにし、海江田家に向かっていた三人。

（お兄ちゃん……近くににいるのに、こんなに遠く感じる。なんか、嫌だな……）

（あの時会ったまおは、変わらない感じがしていたが……置いていかれるのは……）

思わぬ人物との遭遇に、心のなかで色々と考え込んでいたまほとみほ。色んな話を聞き、まおという存在がどんどん遠くなるような感覚がしていやだった。黒森峰で再会した際は、こちら側がとても話せる状態ではなく、ほぼ罵倒に近い形で終わってしまった。ようやく落ち着いてこれから会えるというのに、何をどう話すべきなのか迷っていたのだ。

再び町中に戻り、歩いていた道中。

「あ……」

二人がある物を発見し、足を止めた。そこは「美倉写真館」という名前の建物。入り口の隣にある硝子ケースの中。そこにはおそらく今まで撮影してきた沢山の飾られている写真が貼られていた。その中にたった一枚だけ知っている者の写真があるのを見つけたのだ。

「お兄ちゃん……」

「まお」

写真に映っていたのはまおだった。呉港であつた角松たちが被っていた正帽とよく似た同じような物を被り、黒い制服を着用している姿。だが、その表情はどこか懐かしい感じがしていた。

「それはまおが防衛学校に入る直前に撮つた写真ね。証明写真がいるとか言つて、ここ
の店主の人に撮つてもらつたのよ」

見つめる写真について二人に説明する祖母。入学に合わせ、証明写真等があると言つてこの島唯一である写真館で撮影してもらつたのだ。話を聞くと、写真代はタダでしてくれたらしく、なんでもその写真館の女店主と祖父である海江田四郎が中学校の同級生ということもあり特別に料金を弾んでくれたのだ。

「そっか。お兄ちゃんが行つた時のだから……」

顔色に懐かしさを感じたのは、それがまおが出て行ってまだ間もない頃に撮影したものだ。だからだと推測したまほ。まおが自分たちを置いていったあの頃。自分たちのことなんて顧みないと疑っていたあの嫌な時代のことを思い出し俯くまほ。

「家に着いたら、まおが使っている部屋があるから見てみたら良いわ。まだ帰ってこないでしようから」

まほの様子を見ていた祖母が、まおが使っていた部屋を見てみてはと二人に提案する。

「まおの部屋ですか？」

「ええ。見れば色々わかるかもしれないから」

祖母の言葉に首を傾げる二人だが、まおの部屋には自ずと興味が出ていた。家でも別邸でも何度も見ているが、あれからのまおがどういう感じなのか気になったのだ。仮にも個人の部屋なのだが兄妹なのだからプライバシーなんて関係ないと思った二人だった。

「そうそう。それから家にはあなたたちをずっと待つてる人がいるわ。まずはその人に挨拶をしておきなさいね」

「え？」

「私達を？」

いきなり祖母から、自分たちを待っている人物がいると言われて驚く二人。言い方からして、おそらく敢えて言うのを遅らせていたのだろう。一体誰が自分たちを待っているのかと。もしかしたら、ここに着てまおがいましたなんてオチなのではと一瞬思ってしまう。確かにまおはサプライズ的なことは何度かしてきていたので、あるかもと頭を過ぎつたのだ。

「つきましたよ二人共」

そうこうしているうちに海江田家に到着した。海江田家は丘の上に立つ古風な日本建築の家であり、家の裏の方には畑と共に海が一望できる場所もある。中々に立派な家でもあり、大人数が来ても問題ないくらいなのではないかと思える。

「お、お邪魔します」

「お邪魔します」

「はい。ようこそ海江田家へ」

父方の実家であり入るのにたどたどしい姿で入るものではないが、やはり緊張はあった。なんせこの家で曾祖父、祖父、父、そしてまおが生活していた家なのだ。色んな思い出が詰まった場所でもあり、不思議と二人は懐かしいような感じがしていた。それはそうだろう。みほが生まれたばかりの頃にまおを含めこの家に来たことがあるのだから。

そのまま靴を脱いで、畳敷きのある客間を通り抜けて居間の方へ向かっていく。そして襖を開けた瞬間。まほとみほが固まった。

「え!？」

居間の用意されている座布団に直立不動で座っている人物に二人は息を飲んだ。なぜ、ここにいるのかと。その人物には行くことを伝えていなかったはずだからだ。

「お、お母様……」

「お母さん……」

海江田家で待っていた人物。二人が密かに思っていたまおではなかった。その人物は、二人が良く知る……いや、この世でたった一人しかいない最もよく知る人物。

「まほ、みほ……無事に着いたのね」

西住流師範代共に次期家元であり、自分たちのたった一人の母である西住しほだった。

航跡——10 《家族》

「お母様……」

「お母さん……」

8畳と広々とした居間の中。大きめちやぶ台の前に座り、いつも着ているスーツ姿ではなく、久々に見る色合い的に地味過ぎないロングスカートに薄手のガーディガンと私服姿をしていた母であるしほ。対面するように正座し、姿勢を崩さぬようにしていた。

「まほ、みほ。無事に……着いたようね」

入ってきたまほとみほの方にゆっくりと顔を向ける。久しく見ない母の姿とはいえ、その表情は変わらぬほど堅く、見るものを畏怖させる雰囲気であったが、どこか疲れを感じさせる表情をしているようにも見える。

「ど、どうしてお母さんがここに……」

まさかのしほの登場に、目が泳ぎ体が震えてしまうみほ。叱責を受けて以来一番会いたくなかった人物だったために、実の母なのに怯えた様子で話しかけてしまう。

「あなたたちがこの島に付く一つ前の船で来たのよ。それと私にまほとみほが来る時間帯を教えてくれたのもあなたたちのお母さんが連絡を入れてくれたの」

「お、お母様が…連絡を」

みほの質問に答えるように後ろにいる祖母が説明する。自分より一足早くにこの島に入り、それどころか到着する時間帯まで把握していたことに驚くまほ。連絡を入れていなかっただけに、この島に来ることすら知らなかったと思っていただけに、二重の意味で驚いていたのだ。まほもしほに何を言われるのが気になってしまい、みほと同じように目を合わせられなかった。

「あなたたちに話があつてここに…」

しほが話しかけようと立ち上がった時に、みほは祖母の方に振り返るなり慌てたように話しかける。

「あ、あのお祖母ちゃん。お兄ちゃんの部屋つてどこなの!？」

「え?まおの部屋ならその廊下の突きあたりのところだけど…」

「っ!!」

「み—」

それを聞いた瞬間、みほは居間から…嫌、しほから逃げるようにその場駆け出してしまふ。みほが逃げるように行つてしまふのをみたしほは思わず手を伸ばしてみほの名前を呼ぶも、それを聞き入れることはなく離れてしまふ。

「みほっ……すみません!!」

みほの後を追うように一旦二人に頭を下げてあとを追いかけていくまほ。もつともまほ自身もあまりこの場にいたくなかったのかもしれない。せつかく父の実家で落ち着けると思っていたばかりに、勝手なことをしてまた母から怒られるという恐怖から体が動いてしまった。

「……しほさん。もう一度二人を——」

「いいのですお義母様。避けられて当然のことを私はしたのですから……」

改めて対面した娘二人に避けられたことにしほは顔を落としてしまう。祖母に二人を連れて来ようかと案を出されるも、しほがそれを断る返答をする。無理に連れてきたところであるの二人は面と向き合えないかもしれない。別邸に連れて行くだけ連れて行って、その後は菊代に丸投げ状態で自分は西住流としての立場を守ることしかしておらず、家族としての対話などまるでなかったのだから。

「本当に情けない限りです。お義父様の墓前にも何も報告できず、せつかく常夫さんのご実家まで来たのに娘たちからは嫌われているのですから。古く続く家系にいる常夫さんを婿入りさせて頂いたのに妻としても、母としても失格ですな」

己のこれまでのことを嘆き、まるでまほやみほのように自己嫌悪の言葉を漏らすしほ。子は親に似るといふが、本質的に似ているのは親子なのだろう。

「お義母様にも合わせる顔が無く、今のいままで連絡もしないでいきなり押しかけて

……剩え西住家の問題を持ち込んでしまい本当に申し訳ありません」

海江田家という家系にいたった一人の長男である常夫を西住家に婿入りさせたのに、最後は西住流や戦車道のために欧州へ向かう途中で亡くなるという結果になってしまった。その後ろめたさもあり、常夫の葬儀以来まともに連絡を取ることもできずに、今度は娘たちの……西住家の問題をこんな場所にまで持ち込んでしまったことを謝罪するしほ。

「しほさん。西住流にしる戦車道にしる、そしてあなたの夫となったことは全て常夫が決めたことです。あなたと一緒にになりたいとこの島で言ってきたのは常夫としほさんでしょ？」

まだ高校を卒業し、大学生となった常夫としほが美倉島を訪れて来た時のことを思い出す。黒森峰女学園で知り合い、そのまま相思相愛の仲にまで行き、学生結婚をすることでこの島で報告をしてきた。それ聞いた彼女は、それが二人が決めたことならば夫婦として進みなさいと一言だけ言つて二人を歓迎した。

「それに私もあの子達の祖母で、家族、なんです。西住家とか海江田家とかは関係ありません。可愛い孫やしほさん。あなたたちが困っているのならなんとかしてあげたいのが家族です。遠慮することなんかありませんよ……それに、私にとつてあなたのことは娘のように思っていますから。四郎さんもきつと同じことを言うと思います」

そう言つて、壁に掛けてある海江田四郎の写真を見ながら告げる。家族の問題に家柄は関係ない。困っているのならそれをなんとかするのが家族なのだと言ふ祖母の言葉に瞳に涙を貯めるしほ。

「ありがとうございます……ごいいます」

「それにまおがもうすぐ帰つてきます。そうすれば話し合える機会は来ますよ。久しぶりに家族が揃うんですから……」

「はい……」

最後の最後までまおに頼るような形になつてしまひ情けない風に思うしほ。だが祖母の言う通り、この場を設けてくれたまおのこともあるため、自分も母としてまほとみほ。そしてまおに対しても向き合わなければいけない。この場所は戦車道も西住流も何も関係のない場所。夫であり、父である常夫の思い出が残る大切な場所なのだから。彼もきつとこの様子を見てくれるかもしれない。

「しほさん。何か美味しいものでも作りましょうか。孫たちにここで採れた美味しい魚を食べさせたいですから」

「そうですね……お手伝いさせていただきます」

家族に料理を振舞うなど、まおたちがまだ小さい頃以来からしていなかつた。まほとみほの稽古を付け始めてからはずっと菊代にお願いをしてきていた。腕は鈍つてはい

ないとは思うも、子供たちに少しでも喜んでもらえるものならばそれをしよう。

◆ 「みほっ!!」

居間から離れていったみほを追いかけていったまほ。まほの部屋であろう前で立ち尽くしていたみほを見つけて近寄っていく。

「お姉ちゃん……ごめんね。私、お母さんに何言われるか怖くて……せつかくお祖母ちゃんに会ったのに……」

目に涙を貯めてまほに謝るみほ。理由は聞かなくても自分でも分かる。やはりいきなり母が目の前に現れてしまい、体が勝手に動いてしまったようだ。

「お母様に会わせる顔がないのは私も同じだよみほ。ここには黙って来たんだ。これ以上失望されれば家にはいられないかもしれない」

「そんなことは……だってお姉ちゃん西住流の後継者なんだよ」

「逃げ出したような私なんかを西住流の上役たちが許すはずはない。きつと後継者候補から外されてるはずだ。もしかしたらそれを伝えにお母様が来たのかもしれないしな」

弱腰な発言を繰り返し、悪いことを口にしてしまうまほ。

「私も同じだよ。私も逃げたようなもんだもん……お母さんにきつと嫌われた。でない」と、忙しいお母さんがここまで来るわけないし」

みほも続くようにネガティブな発言をしてしまう。みほもまほと同じ西住流の後継者の一人でもあるのだ。上役たちから期待は大きかったが、それ以上に答えることに疎んでいる自分もいた。戦車道は本当は好きだ。本当なら西住流とか関係なく自由にやりたい思いもあつたりはする。まほと一緒にまたやつてみたいと。

「お兄ちゃんの部屋で待とうお姉ちゃん。なんだが…嫌な感じになつて」

「……そうだな」

これ以上話せば良くないことばかり言いそうで、とりあえずまおの部屋で休むことにした二人。遠慮なしに他所の家の部屋に入るなど絶対にはしないが、この二人にとつてはまおのプライベートはあんまり関係ないために当たり前のように襖を開ける。

「これがお兄ちゃんの部屋……」

現在のまおが使用している部屋に入った二人。そこは本家の部屋とも黒森峰女学園にある別邸とは部屋の雰囲気が全然違つていた。一言で言うならば質素と言つた感じだった。ベッドではなく畳敷きであるために、布団が綺麗に畳まれていた。他にあるものとすれば座椅子用机とそれに付随する座布団。あとは年代物のレコーダーと本棚が置かれている程度だった。まおの実家の部屋はだいたいまおが懸賞品で当てた物で埋め尽くされていた。まおは昔からそう言つたくじ運はかなり良く、祭りや雑誌の応募等でよく当たつていたりしたため、ゲーム機や大きめのテレビ等が置いてあつた。まほと

みほは決まってまおの部屋に集まって色々そこで遊んだりしていたのだ。それに壁には家族写真や小中の頃の写真も貼られており、当時のまほとみほはその部屋が好きだった。テレビや映画を見たり、ゲームをしたり、本を読んだりと、時間の合間を見つけては兄妹三人でいたのを。

(まるで私の部屋みたいだな…)

まほは自分の部屋の雰囲気によく似てしていると直感で思った。まほの自室もベッドと自分の洋服ダンスに戦車道に関する書籍を置いておくための本棚に、大会等でもらった賞状やトロフィーを保管するためのケース。そして勉強用の机と椅子くらいしか置いていなかった。必要なもの以外はおかない主義であるまほらしい部屋だとみほから言われた記憶があった。

「難しい本ばかり……」

ふとみほが本棚の方に目をやる。一般的なカラーボックスタイプの本棚ではあるがそこにはかなりの本が収まっていた。実家のまおの部屋にも本棚があるが、殆どが戦車に関する本や機械整備に必要な参考書。あとはまおが持っている漫画本くらいしかなかった。だがここにあるものはそう言ったものではなく、タイトルを見れば『日本の領海』『空母保有論の問題点について』『防衛に関する考察』『海洋国家としての立場』『原子力潜水艦の可能性』『海上自衛隊という組織について』『防衛白書』『逼迫する尖閣諸島』

及び波留間群島問題』『航海手法の手引き』などと言ったタイトルがズラリと並べられており、それ以外にも色んな参考書や小説などが置かれているが、おそらくどれも自衛隊等に関する本なのだろう。最も半分以上は元からこの家にあるものをあとからまおが買い足したものののだが。

「……本当に、お兄ちゃんが住んでる部屋なのかな」

まるで兄ではない他人が住んでいるような部屋にそう思ったみほは眩く。まおらしいくない部屋。どこの家でも壁には写真が沢山貼られていたのに、ここには貼られているものはせいぜい日本地図くらいしかなかった。家族に関するものなどは一切ないように見えるも、まほが机の上にあるものを見つけた。

「あれ……」

机に飾られている写真立てを見たまほ。それに気づいたみほも写真を見る。写真には幼い頃に撮った家族写真が収められており、よく見れば後ろにも何枚か写真が入っている。まおはやはり家族を捨てたわけではないと思う。繋がりというものを断ち切ったわけではない。

「……早く来ないのかな。お兄ちゃん」

畳んである布団の上に座り込むみほ。まおが帰ってくるまでしばらくこの部屋にいることにしたまほとみほだった。

◆ 「予想以上に遅れたな……」

呉港から出ている連絡船に乗り、美倉島に降り立ったまお。時刻はすでに6時過ぎだが、日はまだ充分に明るかった。呉基地の際の外出中は制服を着用することになったため、査問会から同様の格好で棧橋を歩いていった。

「おお海江田のボン。帰ってたんか」

「こんにちはおじいさん。たった今帰ってきました」

「まあまあホント立派になってから。海軍さんの格好が似合ってるよ」

漁船からまおの姿を見つけた年配の男性漁師が話しかける。後ろにはその妻であるう女性もまおの姿を見て、まるで孫が帰ってきたかのように喜んでいった。

「ははは、ありがとうございませうおばあさん（本当は軍ではないんですけどね）」

女性の言葉に素直に受け取り、挨拶を交わすまお。島の住人から比べればまおはまだ新参者ではあるのだが、島の中でも昔から有名だった海江田家の孫であり、元からの人柄もあって島の住人とは早い段階で仲が良い方だ。もともとから機械整備も得意なこともあり、漁船などの修理を片手間にやっていたりもしているために、漁業の人たちとの関わりも多かった。

「ほら、今日は一杯とれたからおすそ分け。お祖母ちゃんと一緒に食べなさい」

「真鯛じゃないですか。いいんですかこんな大きなのを」

漁船から上がってくるなり大きな真鯛の入った網を女性からもらうまお。先程取れたものなのか、まだピクピクと動いており新鮮そのものだった。『遠慮しなさんな』と言ってくれた女性に素直にお礼を述べたまお。そのまま網を持って、海江田家の方へ向かっていく。しれ違う人達に会う度に挨拶を交わしていくも、私服ならあまり目立たないのだがやはりこの制服の格好は普通に目立つのだろう。

「え？」

そんな時だった。何の前触れもなく、島唯一の写真館である『美倉写真館』の前で右往左往している人影を見つける。その人物たちが振り向いた瞬間にまおは驚きを隠せなかった。

「見たことある……エリカに赤星じゃないか!？」

言うまでもなくまほとみほを心配してここまで着いてきていたエリカと小梅だったのだ。叫ぶように呼ばれた二人はビクツとしてまおの方を振り向く。

「ま、まおさん……」

「ほ、本当にまおさんだ」

まおの登場になぜか安堵の表情を浮かべる二人。誰も知らない島でたつた二人残されてしまい、追いかけていたまほとみほを見失ってしまったのだ。まほとみほの場

所を聞こうか聞くまいかを迷ってしまい、この辺をずっと歩き回っていたのだ。と言っても、この島の人間がまほとみほを知っているのかどうか迷ってしまい聞きづらかったのだが、このままだと夜になってしまふと思ひ目の前にあつた美倉写真館で聞こうとしていたのだ。そんな時に、現れてくれたまおの安堵していたのだ。

「エリカ。それに久しぶりだな…赤星」

「あ、はい。お、お久しぶりです。えつとおかげさまで……」

二人に近づき軽く挨拶を交わす。エリカは前に会つたが、小梅と会うのは中等部以来であり、思わぬ人物との鉢合わせにまおの方も呆氣にとられる。

「あの、まおさんに色々言いたかつたことあつたんですけど…安心して忘れちゃいました」

まほやみほの件もあり、色々と言句等など言つてやるつもりだつたのだが、見知つた顔に会つた衝撃で忘れてしまつた小梅。それほど心細かつたのだろう。

「え？ああ、そうなのか…でも、なんで二人が。この島の場所を教えたのはまほとみほだけのはずなんだが…」

「ふ、二人が心配で付いてきたのよ。それで……途中で」

「わからなくなつて途方に迷つてたんです。そこにちょうどまおさんが来てくれて安心しました」

「はあ、なんとというか二人は相変わらずみたいだな」

みほだけでなく、まほとも学年を越えて仲が良かったエリカと小梅。中等部時代は良く遊んでいたのを思い出す。もつともエリカは別に仲良くはしていないと否定はしているが、内心は憧れのまほと一緒に居られるのが嬉しいと思っていたりする。

「まおさんは……変わりましたね。写真で見るとよりその、立派だと思います。でも二人を置いていったのは感心しませんから」

「そうだな……感心できることじゃないな」

小梅からの手厳しい言葉を素直に受け取るまお。本当は色々と言いたいのだろうが、先も申したとおりとりあえず唯一の頼りであるまおが来てくれたので安心仕切っていることもあり、言葉もそれ以上出てこなかった。

「ふん。似合わないわよそんな格好」

小梅の言葉に正反対の言葉を述べるエリカ。相変わらずまおに対して棘のある言い方ではあるが、本人にして見れば昔からそうだったので別段気にはしていない。逆にエリカらしいと言えるので安心していたのだ。ようやく戻ってきた感じという風に。

「ところで二人は泊まるところとかないんじゃないのか？」

「う……はい。ありません。本当に急で来たようなものですから」

「……悪かったわね。無計画で来て」

まおに言われてバツの悪い顔をする二人。泊まるどころか、こんな遠い場所に来るとは予想していなかっただけに、簡易的な着替え程度しか持ってきていなかった。そして残念なことにはこの島には泊まれる施設が一つもない。前に民宿はあったのだがそこもすでに閉めているため、本土くらいにしかな泊できる場所がなかった。

「まあ家は広いから二人くらい増えても泊めることくらいはできるよ。まほとみほもここにいろしな」

「え、いいんですか？その勝手に来てしまったのに」

「二人を心配して来たんだろ？別に悪いことじゃない。むしろあの二人は喜ぶよ、赤星とエリカが来てくれて」

その言葉を聞き、少し顔色を良くしたエリカと小梅。あの決勝戦以来まともに会話もすることができず、小梅に至っては助けってくれたお礼をみほにはまだ言ってもいなかった。すでに他の乗員たちは皆出ていってしまい、唯一残った自分がみほのために残らなければいけない。まおもみほがそのことで傷ついているのを知っていたので、小梅がここでみほと仲が回復すればいいと思った。すれ違いだらけの状況から脱却をするために。

「でも、家に来るのはちよつとだけ待ってくれ。一回家族で話し合うことがあると思うから……」

だが、その前に母であるしほを交えて家族で話し合いと言う名の再会をしなければいけない。それに今ここにエリカと小梅が来てしまったら、逆に今のまほとみほがパニツクを起こしてしまうと思つたのもある。ただでさえ、二人にキツく当たつていたまほが心配だからだ。

「ちようどここの前だし。ちよつとここで待つてろ」

「あ、まおさん」

「つて、ここ写真館よ……」

当たり前のように写真館の中に入つていったまおに驚く小梅とエリカ。

「すみません!!悦子おばさんいますか!!」

写真館の中に入るなり、この店の店主の名前を呼ぶまお。しばらくすると、奥の方から一人の女性が出てきた。

「まおくん……まおくんじゃない!!久しぶりね!!今帰つて来たの?」

写真館の店主をしている女性が出てくるなりまおがいることに驚いていた。女性の名は清水悦子といい、祖父である海江田四郎と中学校の同級生している人物でもある。海江田四郎の孫ということもあり、色々と可愛がつてくれている人であり、まおが海自に入隊する際に写真をタダで撮影してくれたりもした。

「はい。今週はずっと休みの予定です。それでおばさんにちよつとお願いがあつて」

「お願い?」

「急なお願いで申し訳ないんですけど。あの二人をしばらく預かってもらえませんか?あとで必ず迎えに来ますので」

そう言つてまおは扉の外にいるエリカと小梅の方を向いて悦子に預かってくれないかとお願ひをする。

「え、ええ。それは構わないけど。あの子たちは?見ない顔だけ…」

写真館の外にいるエリカと小梅を見て島の人間ではないと思つた悦子。長い間島に住んでいるのもあり、大体の島にいる人の顔を把握している。

「俺の友達です。本当は家に今すぐ連れていきたいんですけど、あの二人を連れて行く」と多分パニクるのがいるんで…」

「パニクる?今日は誰か来てるの?」

「……妹が来てるんです。それに母も一緒に…」

妹というのを聞き、以前まおが言つていた双子の妹やひとつ下にいる妹のことを思い出す。いつかこの島に連れてくる事ができたらと言つているも、出て行つた手前それは叶わないだろうと。

「そうなの……妹さんが。なら、しっかりと歓迎しないとね。せつかく来てくれたんだから」

「はい。おばさんのところにも必ず来ますから」

ひとまず一時的にエリカと小梅を美倉写真館に託し、家族の待つ海江田家へと向かっていったまお。

「……母さん」

それから少し歩いていき、海江田家に到着したまお。祖母からすでに母が来ていることを聞いていたので、玄関をすぐに上がるなり真つ先に母を探しに向かった。居間にいないのを確認し、台所の方から声がするのが聞こえてくる。暖簾をくぐり、久方ぶりに見た母、そして料理をしている姿を見たまおは、おもむろに挨拶をする。

「久しぶり……母さん」

「まお……」

まおの声に反応し、切っている包丁の手を止めるしほ。久方ぶりに見る息子の姿に声を詰まらせてしまう。いつも見慣れていた黒森峰の制服でもなければ、整備する際につきも着ている作業服の恰好ではない。半袖の純白制服を身にまとい、両肩には防衛学校特進科の証明である漆黒の学年章と胸に同様に特進科を示す徽章が付いている。被っていたであろう金色の錨と環を配した制帽も手に持っており、傍から見れば海上自衛隊の一員であるというのが目でわかる。身長も別れてからそれなりに伸びたまおの今の姿にしほも何か感じさせるものがあつた。

「大きく…なったわね」

久しく会った息子に対し、ありきたりではあるがそういう言葉が自然と出たきた。自分の手から離れ、西住流として手塩にかけて鍛え上げてきた娘たちと比較するようなことではないが、姿だけ見ればまおの方が遥かに立派なのではないかと思ってしまう。

「母さんは、少し痩せたんじゃないか？」

母の言葉に返すようにまおが答える。確かにまおの言う通り、あの頃に比べれば心労とも含め痩せたというより、やつれてしまったという方が合っているかもしれない。あれから2年半とはいえ、長い間会っていないのはお互い様だ。

「祖母ちゃんは？」

「裏の畑で野菜を取りに行ってるわ」

勝手口の方を向いて、祖母の行き先を告げるしほ。海江田家の裏には昔から続く広い畑があり、その先には海を一望できる高台がある。

「そう…まほとみほには会ったの？二人の靴があつたから来てると思うけど」

「あの子たちから事情を聞いてるなら、二人に会わず顔があると思ってるのまお。私にはそんな資格ないもの」

まおから目を逸らすように話すしほ。まほやみほから大方の事情を知っているのなら、如何に自分が親として愚かなことをしてきたのかを。西住流ばかりに拘り親として

の役目を務めることもできずに、その結果があゝの二人を本当に壊してしまふ寸前まで追い詰めてしまった。そのこともあり、まおと正面切つて話をすることもできなくなつていたしほ。

「ならなんでここに來たんだ母さん。まさか俺が來いと言つたから來たわけじゃないだろ?」

「それは……」

黒森峰、そして西住流が現在混迷する状況下で師範代、次期家元であるはずのしほがこの時に離れるのは西住流としては有り得ない話。逃げ出した同然で西住家や黒森峰から離れたまほとみほに断固たる意志で断罪しなければいけない。

と、少し前のしほならばそうしていたかもしれない。何も気づくこともなく、西住流として染まりきつたしほならば、娘だからと甘やかすことなく、自ら立ち上がれない者に構う必要はないなどと、無視すればいいだけの話だが、しほにはそれが出来なかつた。しほは自分自身で娘たちに対する過ちに気付きここまで來たのだ。確かにまおに電話越しで言われたこともあるかもしれないが、ここまで來ることを決めたのはしほ自身なのだから。

「でも……まほとみほは私から離れていったわ。ここで会つた時、私を見て震えていたのよみほは。きつとまた叱責でもされると思つたのでしよう。これまで西住流の後継

者として、甘さを捨てさせるために只々叱りつけるようなことをしてきたのだから。避
けられて当然よ。今の今まで……いえ、常夫さんがこの世を去ってから、親の役目をあ
なた一人に押し付けて勝手気ままにやっていたもの。当然の報いね」

だが結局。ここまで来たがはいが、再会したまほとみほは逃げるように自分のもと
から離れていった。目の前にいる母親ではなく、兄が使っていた部屋の方を選んで。そ
れが今まで自分がしてきたことの行いがそうしてしまったのだから、報いなのだろうと
自虐的にまおに言うしほ。

「……まだ間に合う。母さんもこれで諦めたわけじゃないだろ？今もこうして俺達のた
めに料理まで作ってくれてるんだ。その気持ちだけでも嬉しいはずさ。久しぶりに母
さんの手料理が食べられるんだから」

「まお……」

「家を飛び出して今の今まで好き勝手やってきた俺にも責任はある。母さんたちの橋渡
し役くらいはできるよ」

そう伝えるとまおは二人がいるであろう自室の方に向かうために台所をあとにしよ
うとする。

「まお。あなたとも、あとでゆっくり話がしたいの」

向き合わなければならないのはまほとみほだけではない。目の前にいるまおも同じ

ことなのだ。そも家を出て行った理由であろう、西住流に否定され続けている思っているまおの誤解を解く必要がある。そして出来ることならば、また戻つて来て欲しいという願いもあつた。あの時とは違う。お互いが落ち着いて話ができる内に。

「……わかつた」

しほの問いに答えたまおは一旦顔を向け、短い返答とともに自室の方に向かつていった。

部屋に向かう途中、座敷に入ったまお。自室はこの座敷を超えた先にあるため、どうしても取らなければならない部屋でもある。

「……」

座敷に入り、真つ先に目が入つたのは壁に掛けてある遺影に映る先祖たちの前に立ち尽くすまお。曾祖父であり旧帝國海軍に属し、終戦後は海上自衛隊創設に尽力した『海上自衛隊の立役者』と言われる“海江田巖”。その息子であり『海自始まつて以来の英才』と呼ばれた“海江田四郎”。

「父さん……」

そして父であり、まお自身の道を切り開いてくれた“海江田常夫”。まほとみほがこれを見たかどうかかわからないが、額縁にいる常夫の表情は生前と変わらぬように微笑んでいる。まおが憧れを抱くとした皆がこの島で生活し、各々が進むべき道へと歩んで

いった。

まおも今現在、同じようにその道を進んでいる。だが、まおには父たちとは違うことがある。

「遅くなつて悪かつた。まほ、みほ」

それは兄妹がいることだ。双子の妹であるまほ。ひとつ下の妹であるみほ。もう一つの家ともいえる海江田家で再会した兄妹三人。自室に入るなり、遅れたことを詫びつつ、美倉島に来てくれたことを喜んだ。二人ならここまで来てくれると信じていたからだ。

「まお……」

「お、お兄ちゃん……」

だがまおの気持ちとは裏腹に待つていてくれたまほとみほは、部屋に入ってきたまおの姿を見て複雑な表情をしてしまう。ようやく会えたことが嬉しいはずなのに、この部屋の雰囲気から連想するまおの姿が自分たちが知っている人物と同一人物と思えなかつたからだ。今日は色んな出会いや出来事があつたからか、二人の気持ちが少し違う方へと向いていた。たかだか制服を着ているだけのはずなのに。

「まほ……」

部屋に入つてきた際に、最初に目があつたのはまほだつた。というのも、やはりあの

時自身を異性として好意を抱いていたのが気になっていたのはまおも同じである。まほの方も『まお』と小声で言うのと視線を落としてしまい、こちらまおに対する印象が地続きしている状態だった。

「無事に着いたみたいで良かった。手紙だけで連絡先もろくに書いてなかったから」

「まあ、色々あったが無事にみほと着けた。お母様が来てるのは予想外だったかな……」

「母さんか……まほもみほも。色々有ったかもしれないが、せめてなんで来たのかくらい聞いてもよかつたんじゃないのか？」

性急には話を進めずに、しほが来ていることを話すまお。

「私達を叱責にでも来たんじゃないかと……それで思わずここに来たんだ」

「そんなことを言うためにここまで来るわけなのは、お前だつてわかるだろう？」

「それは……」

叱責するためにこんなところまで来るわけないだろうと言うまおに、言葉がつまるまほ。まほの反応といい、先程のしほと全く同じ反応しているあたり、よく似ていると言われるのには外野が見れば納得いくことだろう。

まおに言われるまでもなく、普段のまほならば言いたいことがあるのなら電話なり色んな手段で伝えることはできる。それをわざわざ自分たちにも何も言わずに先回りをして待つてくれていたのだ。まおの言う通り、自分たちのためにここに来たのだろうか

想像に難しいことではない。あの忙しく厳格な母がここまで来てくれたのを。

「みほも、母さんは二人に大事な話があるってここまで来たんだ。叱責とかそんなのじゃないよ」

布団に座っておるみほの目線に合わせるようにしやがみ込むまお。みほもまほと同じように、母に対し誤解があると思つたのだ。だが、みほから全く違う反応をされてしまう。

「……お兄ちゃん。いつ家に帰ってくるの?」

「え?」

いきなりのみほの質問に呆気になるまお。震える手でまおの袖を掴み、瞳に涙を溜めてみほはまおにそう告げる。

「お兄ちゃん、また帰ってくるよね。せっかく会えたんだからこのまま一緒に帰ろうよ」
「みほ……」

「お母さんが来てくれたのって、お兄ちゃんを許すために来たんだよ。でないとお母さんが来るわけないもん。お兄ちゃん、勘当されたんだよね? だったら許してもらおうように言おうよ。私もお姉ちゃんもいるから皆で謝ろう? 昔みたいに、三人で言えばお母さんだつてわかつてくれるよ」

まおの手を握つて、今にも流れ落ちそうな涙を耐えて懇願するように言うみほ。よう

やく会えたまおに対し、今日だけで体験した色んな感情が入り混じってしまう。母が来たのもきつとまおを勘当を撤回してまた皆で生活をしようと言いに来たのだと自己解釈して、目の前にいるまおにそれを告げたのだ。

「みほ。お前……」

「お姉ちゃんも、お兄ちゃんが帰ってきてくれたら嬉しいよね？また一緒に生活できれば、頑張れるから……」

「……私は」

みほの悲痛な表情を見て、まほも思わずその話に釣られそうになる。確かに母であるしほもここいて、兄妹三人がで揃っているのだ。まおの勘当を許してもらって、また西住家に戻ってきてもらうように言えばまたまお交えて生活ができる。まおから未だに抜けきれないまほもそう思わず考えてしまう。

「みほ。俺には、やりたいことがあるんだ。ろくに話もできずに行つたことは悪かつたと思つてる。あの時言えなかつたこともあるから。それも入れて今日は——」

「お父さんの夢ならもうなつたからいいよね。だから……もう行かないでよ。このままだとお兄ちゃん……」

まおが昔言つていた父の夢でもあつた海上自衛隊にはもう入つたから良いだろうと言い出すみほ。正式にはまだ自衛官ではないにしろ、今のみほにとっては護衛艦にも乗

れて、その一端を味わうことができたのならもう充分だろうと。

「俺はまだ何もやり遂げてない。それはまだこれからなんだ。今わかってくれとはいない。だから——」

「勝手に決めないでよ!?!どうしてわかってくれないのお兄ちゃん!?!……なんで!!」

「み——!!」

そう言った瞬間にみほが急に立ち上がったかと思うと、まおが手に持っている制帽を奪い取つてしまう。そのままその場を離れるように部屋から飛び出していったのだ。

「待てみほ!!」

「みほ!!」

飛び出していったみほをまおとまほが追いかける。家のことをまだよく知らないみほはとにかく外に出られる場所を探し、縁側から裏の方に靴も履かずに駆けていく。家を飛び出し、そのまま畑の方に向かうみほ。

「みほ?」

畑をすり抜けるように走るみほを祖母が目撃する。その後をまおとまほもやってくるなりみほの後を追いかけていくのも見え、何が起きたのかと心配する。

「あうっ!?!」

畑を抜けてすぐに草に足を取られてそのまま倒れ込んでしまうみほ。幸い草も生い

茂り、土も柔らかくないので、怪我等は見られない。どの道この先は海へ続く道であり、崖地でもあるためみほが行ける場所は限られていた。目の前には一面の海が広がっており、夏場とは思えないほど涼しい潮風が吹き抜けているのを肌で感じるができる。

「みほ!!」

みほが倒れているのを見つけるなり、すぐに駆け寄るもみほはそれを拒絶するように叫ぶ。

「やあだツ!!こんなものお兄ちゃんにはいらぬもん!!」

握りしめる制帽を渡すまいと胸に抱きしめるみほ。こんな行為をしたところで何の意味もないことがわからないわけではない。だが、きつと兄を夢中にさせている一端がこの帽子でもあるならそれを渡したくなかった。

勝手に決めて、勝手に出て行って、自分たちに何も言わずに行動するまお。そんなことをするような兄ではなかったはずだ。その兄を徐々に変えていってしまう存在海上自衛隊なことを否定しないといけない。

でなければ……

「このまま行ったらお兄ちゃん……壊れちゃうよ。やだよ私……お兄ちゃんはお兄ちゃんのままがいいもん!!」

進むのを止めることを知らないまおに対し、みほの不安は大きかった。そんな恰好な

なんてしなくてもいい。ただ優しくていつも自分を助けてくれた兄のままでいて欲しい。だが、これから先に何が待ち受けているのかわからない。本当に兄が人を殺すようなことをしてしまえば人の心を失ってしまうのではないか。そして心が最後は壊れてしまい、優しかったまおがいなくなってしまう。

その事実が今のみほには耐えがたいことだったのだから。

航跡——11 《もうひとつの名前》

「俺は…俺だ。みほ。そんな変わることなんて…」

へたり込み、涙を流すみほの隣に歩いていくまお。そのまましゃがみ込んでみほと視線を合わせるまお。肩に手を置き、みほの言葉を否定する。みほも兄の言葉に対して胸に抱きしめる制帽を更に強く握りしめながら、まおの方に目を合わせる。そこにいるのは確かに自分がよく知っている兄の表情だ。だが、あの写真に写る表情が頭に浮かび、目を背けながら続ける。

「…お兄ちゃん変わったよ。その服着てる時のお兄ちゃん、怖い顔してたもん。まるであの頃のお姉ちゃんみたいな顔してた。冷たくて…怖い」

「…みほ」

その言葉にすぐ後ろで聞いていたまほ。あの頃とは、まおのいなかった頃の自分。他人との関わりを拒絶し、ただ勝利のみに固執していた。言われてみれば確かにあの時のまほは笑うこともなく、ただ無表情を貫き、激情に駆られて怒りの表情をするばかりだった。妹であるはずのみほにもそんな顔してしまっただけに、己がしてしまったことを痛感してしまう。

（あの人たちもまおが私に似ているって言うていたが……まおは私なんかとは違うはずだ）

だが、みほがまおに対して自分と同じ表情というのが理解できなかった。少なくともまおは自分のような表情はしていないはずだからだ。

「みほ。さつきも言ったが、別に俺は変わってない。その…表情とか怖くなったのは、へらへらしていられるような場所じゃない。俺が今いるのは自衛隊なんだ。自衛隊が何をしような場所かは、みほにだってわかるだろ？」

「関係ないよッ!!お兄ちゃんがそこにいる必要なんてないもん!!」

抑えきれない感情がみほの表情を歪ませる。まおの言いたいことがわかるからこそ、みほは否定しないといけなかった。

「何かあったのか？」

みほが急にそんなことを言い出したことに疑問に思ったまおはみほに問う。少なくとも別邸で会った際はそのようなことは聞かれなかったし、ここに来る前に何かあったのではないかと思っただからだ。

「……ここに来る時に、角松さんって人たちに会ったの。ちよつと前に男の人に絡まれた時に助けてくれて。海上自衛隊の人だって言うてた」

「角松って…それに絡まれたって…!」

絡まれたというのを聞き、まほの方に顔を向ける。同時に、みほの走り去る様子を見た母と祖母が少し放れた場所にいる姿があるのを見つける。あれだけ騒げばここに来るのは当然だろう。

「少し私が目を離してしまった時にな。その時に角松さんという自衛官が助けしてくれたんだ。確か『みらい』という船の艦長をしていると言っていた」

「角松一佐が……たちって事は、一緒にいた自衛官は菊池さんと尾栗さんという人じゃなかったか？」

「あ、ああ。その二人も一緒にいた」

まほの話聞き、ナンパされそうになったのを助けてくれたのが護衛艦『みらい』の艦長である角松洋介と部下であり友人でもある菊池雅行と尾栗康平だと理解したまほ。もしかしたら江田島に向かう際に運よくみほたちと出会ったのだろう。妹たちを助けてくれたことをお礼を言わなければいけないと思うまおだが、今はみほのことが気になる。

「その角松さんたちと何か話をしたのか？」

「話したよ……話して、お兄ちゃんのこと少しでもわかろうと思った。でもわからない……わからないよお」

その言葉と共にみほは溜まっていた涙が溢れ出てくる。色んな人の話しを聞いて必

死になってまおのことを理解しようとするも、みほにはそこまでの理解を得るまでの答えが出せなかった。

「お父さんの夢ならもういいから、もうちゃんとなつたなら帰ってきてよ……一緒にいて。お兄ちゃん、ずっとそばにいるって約束したのに。なんでいてくれないの？お兄ちゃんがいないとダメなんだよ」

「みほ……」

嗚咽とともに体を震えさせるみほ。それを見ていたまほは、みほもまた自分と同じようにまおとの約束をしたことに驚くも、どこか納得してしまう。自分とみほは姉妹なのだ。どこか似たような思考になるのもわかる。

「お兄ちゃん知ってる？私もお姉ちゃんも……きつとお母さんだつて。お兄ちゃんを中心に回ってたんだよ。いつも家族の中にはお兄ちゃんがいてくれて……どんなに辛いことがあつてもお兄ちゃんはいつも笑ってくれた。私はそれが嬉しかったんだよ」

「……」

目の前で静かに聞いていたまおに、みほが初めて自分が募らせていた思いを告げた。

思い起こせば父が亡くなってからは、西住家はまおを中心に回っていた。いや、それ以前からも家族での外出や催しなどは必ずまおが動いて皆が一緒になってやっていた。どんな辛い時や悲しい時もいつも傍にまおがいて、それがみほにはかけがえない存在

だった。

「出ていってから、お母さんもお姉ちゃんも、チームの皆もどんどん変わって……だから……だから、お兄ちゃんがいなくなつて不安だった……怖かった!!お兄ちゃんまで知らない人に変わつていくんじゃないかって!!」

「……みほ」

まおがいなくなつてからのことを思い返すように言うみほ。激変した西住家。人が変わったように冷徹になつてしまつた姉のまほ。以前より厳しく家族らしい会話などしなくなつた母であるしほ。西住流の掲げる勝利至上主義が蔓延し、戦車道チーム全体がまるで勝利に執着する獣のようになった。だからこそ、まおにまでそんな人が変わるようなことはしてほしくなかつた。

「……ねえお兄ちゃん。さつき自衛隊が何をやる場所かつて言つたよね?ならお兄ちゃん、もし悪い人たちが来たらどうするの?」

「……みほ」

みほの言いたいことが何かようやく理解したまお。最初に防衛学校に入校した際に最初に教わつたこと。自分たちの最大の責務のことを。

「私……私!!お兄ちゃんにそんなことしてほしくない!!お兄ちゃんが死ぬのも!!人を……殺すのも!!やだよ……こんなこと考えたくもない。考えたくもないのに……私、耐え

られないよお」

まおに縋りついて溜まっていた思いを爆発させたみほ。どんな理由を付けても、自分の家族がそう言ったことに関わることなんてしてほしくない。父のことで、とりわけ“死”に過剰に敏感になっていくみほは是が非でもまおに止めてほしかつた。昔みたいと一緒にいて、これからも家族の中でいて欲しい。

「みほ、お前……」

すぐ近くで聞いていたまほは、みほの言いたいことを痛感していた。今日あつたあの男たちや角松艦長たちの話しを聞き、薄々ではあるがまほ自身も同じ思いはあつた。原因を作ってしまったのは自分にもあることは理解するも、やはりまおの存在が大きかつたのも一因がある。

「まほは……どうなんだ」

みほの言葉を聞き、まほの方に顔を向けるまお。

「わ、私は……私もまおには、いて……欲しい」

目を反らしつつ、右手で左腕をギュツと握りしめるまほ。

無論まほだって、まおにはそのようなことはできることならしてはほしくない。西住流門下生の中に陸上自衛隊の者もいることは知っているし、母であるしほも講師として陸上自衛隊に指南している。

だが実際にみほの言うようなことまで考えたことなど一度もなかった。西住流や黒森峰戦車道などに頭が一杯だったと言えばそれだけでしかないが、こうして色んな人達の話の聞き、家族として考える中で初めてまほはそう言ったことに對して真摯に考えるようになった。祖父海江田四郎の墓前で言っていた深町艦長の言葉。まおはこの先も進み続けるという言葉の意味。それがおそろくみほの言っていることに繋がっているのではと。

「でも……」

それはあくまでも自分とみほの意思でしかないからだ。まだまおから何も言っただけではない。今日言っただけではないか。まおとちゃんと話し、自分の想いと向き合わなければいけない。

「みほ……俺だって、みほのことが心配だ。みほだけじゃない。まほも母さんも。戦車道やってる皆も、整備班の奴らだってそうだ。ああやって砲弾飛び交う中で身を晒して、戦車ぶつ倒れた時も、俺はいつも心配だった。怪我はしてないか、怖くはなかったかって。ひやひやしてたんだぞ？」

涙を流し自身に抱きつくみほの肩に手を置いて優しく離して、みほと顔を合わせる。そして、まおが感じていたことをみほとまほ、そして母であるしほに語りかけるように言葉を述べていく。まおもまた、戦車道という武道の中に生きていくみほたちを心配していた。戦車道を行う選手からして見れば、当たり前のようになっているかもしれない

が、いくら安全性を謳う武道とは言え、キューポラから身を飛び出し、砲弾、ましてや銃弾などが飛び交う中に晒している姿を見れば身内からすればひやひやものだ。そしてその安全性が絶対ではないということを整備士をしていたまおは知っていた。

「あの決勝戦で戦車が崖から落水した時、みほは川に飛び込んだら？乗つてた赤星たちを助けるために……」

「うん……」

あの運命の決勝戦。大雨にも関わらずに戦車道の試合は決行され、起きてしまった最悪の出来事。落水した戦車のすぐ後方にいたみほは無我夢中で飛び込み、小梅たちを救助することができた。

「でも、間違つてたつて……西住流として間違つてたつて……皆が私にッ」

だが、結果的にフラッグ車を放棄したことにより黒森峰女学園は敗北してしまい、みほ、そしてまほは敗北の責任を受けることになってしまった。西住流だけではなく、同じ戦車道を履修している生徒からも責められてしまい、母であるしほから叱責も含め、みほの心を深く傷つけることになっていく。別に称賛されたいわけでもなかったわけではない。目の前で誰かが傷つき、死んでいくようなことはもう見たくなかっただけなのに。

「ッ——！」

それを聞いたしほは奥歯を噛み締めてしまう。自分の不甲斐ない言葉のせいで、みほは深く傷ついてしまい、こんなことにまでなってしまうている。あの時、せめてあの時だけでも自分がみほに叱責ではなく、優しく促してでもしていればと。悔やんでも悔やみきれなかった。

「あの状況下で人を助けに行けるなんて早々出来ることじゃない。そこに西住流だとか、優勝だとか関係ないんだ。人が人を助けるなんてとっても良いことじゃないか」

西住流としての威厳でも、常勝校として立場は関係ない。みほの行動によつて救われた命があるんだと語りかけるまお。

「俺は、みほが助けにいったことを間違つてたとは思わない。みほは人として正しいことをやったんだ」

「お、お兄ちゃん……ううう……」

まおの言葉を聞いて、みほの瞳から涙が溢れ出してしまう。まおなら絶対にわかつてくれると、心の奥底で思っていたことが間違つていなかったとわかり、胸から湧き上がる感情が抑えきれない。正直、その言葉をみほはずっと待つていたのかもしれない。助けたことは間違つていなかったというのを。

「でもみほ。できることなら、もうあんなことはしないでくれ。みほが飛び込んだ時、俺は心臓が止まりそうだったんだ。お前まで流されるんじゃないかって」

まおは、みほの行動を称賛はするも、それにより自分が如何に危険なことをしたのかと言うことも告げた。確かにみほの行動は間違つてはない。だが一歩間違えばみほも一緒に流され死んでいた可能性だつて十分ある。艦内用TVで見た時、思わず叫んでしまったように見ていられるような状況ではなかった。

「それに母さんもまほだつてお前が飛び込んだのを見て心配になつたはずだ。父さんのことで心配になつてるのはお前だけじゃない。俺も同じだ。みほにそんな危険なことはしてほしくない」

「お母さんが?でも…」

母が心配しているのは自分ではなく西住流としての評価なのではないかと今でも思っているみほは顔を俯かせる。兄は知らないはずだ。自分は直にそのことで母から叱責されたのだと。自分にとつての味方は、やっぱり自分をわかつてくれたまおだけではないかと。

「お前のことを心配してくれる人はいるよ」

「お兄ちゃんだつて…お兄ちゃんだつて心配だもん!!だから私は…」

一緒に戻つてきて欲しいと言いたかつた。自分のことを心配してくれるのなら、まおのことを心配しているのを理解してほしかつた。

「角松さんたちはこんなことは言つてなかつたか?自衛官は死なないために毎日訓練し

てる。死ぬために入る人なんていない」

「……言ってた」

角松艦長が言っていたことと同じことを言っているまお。

「そんなことを思うくらいなら俺は自衛隊には入ってない。俺は、お前やまほ、母さんに祖母ちゃん。あの黒森峰にいる人達だつてそうだ。その人達を守りたいって思ったからだ。国家や国民だとか大きなことじゃない。俺にとって大切な人たちを守るように、毎日勉強してるんだ」

「だったら、私も……守ってよお」

そんな抽象的な言葉ではなく、近くにいて守ってほしいと思うまほ。

「俺はいつもみほの、そしてまほの”近く”にいるよ。それにさつきも言っただろ？お前は色んな人達から守られてる。今日だつて、まほと一緒に来たんだろ？まほはただ傍にいただけなのか？」

「……」

まおに言われて、まほと行動を思い出していく。学園艦から出てから、会話こそは少なかったが、まほは常にみほのそばにいてくれた。あの時だつて、自分を守るために庇つてもくれていた。あんな酷い言葉を言い放ってしまったのに、まほは絶対に自分を見捨てようとしなかった。あの連絡船の時に握ってくれた手は震えながらも暖かつ

た。

「お前は絶対に一人じゃない。色んな人がお前のことを心配してるんだ。もちろん、それはまほだつてそうだ」

「まお…」

まほの方を向いて、みほだけではなく、一人ぼっちと呟いてたまほにも同様の言葉がかかる。孤独を嫌うまほにもわかつてほしかった。皆が皆心配しているというのは樂觀的なのは事実。だが少なくとも、整備班や中等部からの同期、そして何よりこの二人ともつとも関わりの深かったエリカと小梅がこの島にまで来ているのだ。二人は心を閉ざし、まおばかり見ようとしているが、それは大きな間違いだと。

「お母さんも…そうなのかな」

「その思いは、直接母さんから聞いてみるんだ。さつきも言っただろ？母さんがなんでここまで来たのかを。ちゃんと話してな。それに俺たちのために料理まで作ってくれてるんだぞ？」

「お母さんが…!?!」

「お母様が料理を…」

母が料理をしている。それも自分たちのために作ってくれているという話しを聞き、驚きを隠せなかった二人。いつも忙しくて、料理などしている暇などなく女中の菊代が

料理など振る舞っていたからだ。母の手料理なんて、一体いつ以来なのだろうと思う。「だから、何も心配なんてしなくていい。母さんはお前たちを怒るためになんか来てないから」

まおの言葉を聞き、静かに頷くまほとみほだった。

そして、タイミングを合わせるように祖母がまほとみほに声をかけて家の方に戻っていった。お互い消化不良かもしれないが、みほの言いたいことは理解することはできない。逆に向こうはまだ半分は納得してないといったようではあるものの、まだ時間はあるし、これからゆっくりと話していければいい。

「帽子は持っていかれたままだな」

結局自分の制帽はまだみほが持ったまま行ってしまった。というより取られたことも途中から忘れていたので、備品の紛失は自衛官にとつては命取りであるため迂闊だったと思ってしまう。また後でみほに言って返して貰わなければいけない。返してくれるかわからないのだが…

「まお」

まお以外誰もいなくなった丘に母であるしほが現れる。

「母さん…何も隠れなくても」

先程までいたのに、祖母が二人を連れて行つてるときにはいつのまにか姿が消えてい

たからだ。

「…タイムミングがあると思ったのよ。大丈夫、このあとすぐにあの子たちに会うから」
「そっか……ごめん母さん。俺が色々先走って言って」

本当ならば、しほから言うべきであろう言葉を色々言ってしまったことを謝るまお。あんなに潰されてしまいそうなみほの表情を見てしまい、思わず言葉が出ってしまったのだ。

「俺も母さんみたいに強面で怒ることができればよかったかも」

「なら私も、まおのように優しくして上げればよかったわね。あの二人にとって、まおが如何に必要なのか痛いほどわかったわ」

「…俺はただあの二人に甘すぎる言葉しか言えなかった。それがあのまほとみほを守ることなんだって思ってた。母さんも見ててわかったんじゃないか？あの二人、俺にちよつとベツタリって思わないか。普通にいる兄妹に比べれば」

隣に立つしほに目を向けて、まほとみほの少し違う雰囲気伝える。言われてみれば、まほとみほは昔からかなりまおと近いような距離を保っていた。中学になつてもまおと風呂に一緒に入ろうとするのを何度か窘めたこともあった。挙げ句の果に一緒になつて寝るようなこともあり、思春期を迎える少女にしては嫌がるのを逆に積極的に近づこうとしていた。

「父さんが亡くなって、俺は何度も二人の傍から離れなかった。その時のアイツ等、ホントこの世の終わりのような顔してたから。このまま消えてなくなるくらいにな……」

父が死んだ時はまほもみほも大分荒れに荒れ、最後は意気消沈したようになっていた。まほに至っては錯乱間際に『まおが死ねばよかった』などと口走ってしまうほど。実の妹からそんな言葉を聞いたのは、思い出せば相当自身に答える言葉だった。それでもまおはまほの気持ちを少しでも理解しようと接してきた。まほがまた気力を取り戻せるならばと。

「でもまほは……」

だが、まほの気持ちは誤った方向へと向かってしまった。いつしか自分のことを“兄”と家族ではなく“男”という異性として恋愛感情を抱いてしまうということにも。しあの時、まほに流されるまま受け入れるようなことをしたら、取り返しのつかないことになっていたと思う。

「まおっ」

言葉に詰まったまおを不思議に思ったしほは顔を向ける。これだけは絶対に誰にも知られてはいけないと思い、すぐに話しを続ける。

「ああいや。ともかく、あのまま俺が高等部まで行ってたらどうなってたんだろうって思っつて。多分一生あの二人には母さんみたいに厳しい言葉なんて言えないし、もしかし

たら俺自身もあの二人のためとか言い訳して、ただ優しくしてただけかもしれない。だから俺は家を出た……それが一番いいことなんだろうって」

高等部に一緒に上がっても、まほとみほが自分にべったりくつつくようなことがエスカレートするのではないかという不安があった。それに自分は二人になんと言って厳しく言えばいいのかなんてわからない。いつも強くあろうとするまほ、そしてみほ。気の弱い部分を見てきただけに、少しでもそれを和らげることができればと思ってきた。何より、まおもまほとみほに母のように厳格になりきれないと思う。ただずるずると変わらずに高等部を過ごし、こう言ったことも母に言うこともなかったのだから。

「あなたは私ができていないことを懸命にやっていたわ。本当ならあなたのこともこうしてお互いに話すことももっと早くにできていればよかったもの」

ここまですまおの後ろ向きな言葉を聞いたことがなかったしほは、不器用ながらもまおを立てようとした。謝罪なんて必要はない。家庭の行いを全てを押し付けて、自分一人西住流ばかりに力を注いでいたのを。まお、そしてまほとみほに家族らしいサービスなど何もして上げられなかった。

「でも実際。俺はあの二人をわかっているようでわかってなかった。母さんに電話する前に、みほに言われたんだ。」お兄ちゃんは西住流も戦車道もやってないでしょ!!好き勝手やってるお兄ちゃんには絶対わからない”って……あの時はみほも大分錯乱してた

けど、きつと俺に対して思ってたことだと思う」

「みほが…そんなことを」

大人しいみほがそのような言葉を出したとは信じられないしほ。そして、それがまおに對してどれだけ屈辱的な台詞なのかを察したしほは、驚きを隠せなかった。

「あ、あなたはみほになんて言ったの…」

「俺のことなんかいくらでも嫌いになってもいい。でも、母さんやまほのことは嫌いになるなって言ったな。まあ怒ろうにも、実際本当のことなんだから返す言葉もないよ。俺は西住流にとっては目障りな存在なのは間違いないだろうから…」

「それは違うわまお!!あなたは知らないでしょうけど、分家にはあなたのことを——」

まおが言っていることは間違っていると告げようとするしほ。少なくともまお本人を認めている分家の人間は存在するのだと。

「味方になってる人間がいるってこと?」

「ま、まおツ——あなたまさか…」

先にまおに言われてしまったことに驚愕するしほ。まさかまおは知っていたのかと、知ってて今の言葉を吐いたのかと。

「……ごめん母さん。今のはちよつと発破をかけた。本当にそんなことあるのかって」

「まお……」

「俺が生まれた時、養子に出さないために動いてくれたことや、黒森峰女学園で色々やってたことを黙認してくれていたことも、全部知ってる。でも知ってるだけで、直接母さんから聞いたことがなかったから……」

「……そうね。このことはもつと早くにあなたに話しをするべきだったわ。みほに言われて、あなたも本当は怒りたい一心だったんじゃないの」

「俺は、西住流という流派が重宝しているまほとみほを守ってくれるのならそれでいいと思つた。でも実際はどうだ。なんであんなだけ頑張つた二人があんなになるまで言うんだ。俺には正直、西住流という流派がどれだけ重要なのかよくわからない。あんなことになつてまでやるのが西住流戦車道なのか……」

西住流の教えも受けていない、戦車道もやっていない。ただ後方で戦車道の専属整備士としてやってきたまおにとつては、理解しがたいことだった。子供の頃は無我夢中に戦車を乗り回していた頃。本当に楽しそうにやっていたのに、いざ戦車道をするときはどうだったか。まるで機械のように無表情でたんたん作業のようにやっていた。なぜそんなことになつてまでやるのか、当時のまおには本当に理解が追いつかなかった。

だからこそ——

「昔はさ。俺も“女”に生まれればって何回か思つた。そうすればまほやみほの……：……戦車道や西住流がどんなにキツイものなのかもわかるんじゃないかって……。そうす

れば、アイツ等とこう肩並べて一緒に戦うことが出来たんだろうなあってな。

海を見渡しつつ、呟くように言うまお。ただ男というだけでここまで隔てるほどの壁ができてしまい、まほとみほの気持ちを真に理解しきれなかった。自分が男である”西住まお”ではなく——

「もし、俺が西住”まお”じゃなくて、西住^X”^Xって名前で生まれてたら変わってたかな」
「まお……あなた。どうしてそれを」

まおの口から告げられたとある名前を聞き、驚くしほ。久しく聞いた名。なぜそれをまおが知っているのか、その名前を知っているのはこの世にいない常夫を除いてもう自分しか知らないはずだからだ。まおに名付けるはずだったもう一つの名前を。

「この家に命名紙があったんだ。それを見つけて、全部理解した。なんで俺がまおで、まほとみほって名前にしたのかを。俺がもつとそれを早くにわかってれば——」

”もつと違う未来があったのかもしれないと”。その先は口には出さなかった。たればの話はもうしない。今あることを見つめないといけないからだ。

「母さん。まほとみほのこと頼んだ。俺はちよつと迎えにいかないといけない場所があるんだ」

「む、迎えて……誰か来ているの?」

「サプライズってやつだよ。あの二人を本気で心配してくれてるのが来てるんだ」

それは言うまでもなく、エリカと小梅のことだ。この二人は本当にまほとみほを戦友として、そして大切な友人として、心配してこの島にまで来ているのだ。周りには味方となってくれる人は必ずいるのだと。

「まお。あなたは、常夫さんの言う夢を実現したの？」

去り際にしほはまおが言っていた夢のことを質問をした。みほの言っていた通りならば、まおはすでに海上自衛隊に入るといふ夢には到達している。だからこそ、みほはもうなつたから帰ってきてくれと言ったのだらうが。

「父さんが作ってくれた道筋は本のスタートラインだけだ。それを今度は俺自身が切り開いていかないといけない。それが父さんが俺にくれた道筋だから」

まおにとつてはそれはあくまでも始まりに過ぎない。自分に何かあつたら家族を守る男になれと言われた父の言葉のもと、色々考え、そして間違えながらも、突き進んで来た自分の信じた道。その答えはいますぐ見つかるようなものではないだらう。

「まおはもう……自分の道ができたのね」

もう色々言つても、今のまおはすでに自分なりに答えを出そうとしている最中なのだらう。あの日言つた『父の夢を継ぐ』という言葉から、その先にある道へと。

「なんの舗装もされていない凸凹道だけだな。やりたいことはこう色々あるけど、俺の夢はあるよ。海江田海将補祖父ちやんと同じ、サブマリナー潜水艦乗りにね」

綺麗な道なんて、端から用意などされてなどいないのだから。

右往左往しながらも、まおは進んでいくしかない。

だがその歩む道は少なくとも、一端まほとみほに歩調を合わせていけないといけなかった。

おそらくそれが、まおの新たな道筋になり、もしかしたらまほとみほが通るであろうものになるかもしれないというのを、今のまおはまだ理解はしていなかった——

番外編 《信じる思い》

「ねえおばあちゃん…」

「どうしたのみほ？」

「おばあちゃんは、心配じゃないの？おじいちゃんやお父さんまで亡くなってるのに……」

家に入り込んだみほは、祖母にまおのことを聞いた。自分たちは父と祖父であるように、祖母は夫と息子を海で亡くしているのだ。自分たちがこんなに苦しんでいるのなら、祖母も同じ気持ちのはずだろうと。

「私は今でも、まおが海の…海上自衛隊の仕事に付こうとしているのは反対です」

足を止め、二人の方に向きあった祖母はそう告げた。てつきり賛成ではないかと思っていたまほは内心驚いた。

「なら…なら、おばあちゃんも止めてよ」

「みほ…」

祖母に歩み寄り、自分と同じ気持ちならばまおと一緒に止めて欲しいと懇願するみほ。それを見た祖母はみほの肩を優しく掴み、あることをみほに告げる。

「私はまおと約束をしました。任官するまでの4年の間に、ただ海上自衛隊に自分の家族にも目もくれないような傍若無人の人間になるのなら、自衛隊入隊を辞めると。それが私はまおの入隊同意書に署名した約束です。それはきつとあなたたちのお父さんやおじいさんの望むようなことではないと」

海上自衛官になるべく防衛校に入学する際に交わした約束をまほとみほに言う。まおがまほやみほを置いて家を飛び出し、この美倉島へと来た時からずっと言い続けていること。

” 必ず家族と向き合う覚悟を持ってと”

どんな理由があれど、家族を置いていくような真似は決してするべきではない。そのようなことは父である常夫は望んではいないはずだ。それを蔑ろするような人間になるのなら、任官するするべきではないと。それが防衛学校に入校する際に交わした約束だった。無論、祖母だつて義理の父である海江田巖を始め立て続けに海で不幸にあつた夫である四郎や息子である常夫のことを考えれば、孫であるまおに海に仕事に就くようなことは辞めてほしかった。ましてや海上自衛官の道へと。それが運命の如く、まるで導かれるように。

「でも、反対したい気持ちとは裏腹にまおの気持ちを尊重したい思いもあつたわ」

「お兄ちゃんのお気持ち？」

「ええ。まおも、まおなりの理由があつて海上自衛官になろうとしていたはず。それをただ否定することだけがまおにとって良いことばかりじゃない。難しいけど、まおを応援したい気持ちもあるわ」

確かにまおを止めたい気持ちがあると同時に、まおの進みたい目標があるのならそれを応援したいという気持ちがあるのは事実だ。海江田四郎に憧れ、父の夢だった自衛官になろうとすることを。

「だから、まおと約束を交わしたのですか？」

「そうしないと、まおは聞かないでしょうからね」

まほの言葉に続くように祖母はそう述べる。

「でも……」

祖母の話の聞き、どこかで納得ができないみほは俯き、手に持っている制帽を抱きしめる。まおを応援したい。その気持ちはみほにだつてある。いつも自分やまほを応援してくれていたのだ。

だが、今回のことだけはそれはできなかった。みほの最大の望みはまおとまた一緒に暮らせるようになること。それが自身のわがままだとしても、まおが父たちと同じように海で死ぬのではないかという気持ちがあまりにも強かつたのだ。

「みほ……今持っているその帽子は生半可な気持ちで被るようなものじゃないの。まお

も、それなりに覚悟して、今まで生活しているわ」

「無理だよ。私、おばあちゃんみたいに強くないもん。学校でも戦車道でも、ツライことから逃げてばかりで。お兄ちゃんやお姉ちゃんにまで当たり散らして…」

祖母のように夫や息子を亡くしてまでも、強く生きてまおを信じようとする姿勢にみほは真似できないと言う。いやなことから逃げ出してばかりで、来てくれたまおや何とか守ろうとしてくれたまほにまで当たり散らしてしまい、あまつさえまおに甘えようとしている。

「みほ…」

みほの自己嫌悪な発言を聞いたまほ。こんなときに何をどう声をかけてやればいいのかわからなかった。みほはあ言ってくれたが、あのときのまほは自分のことで一杯だったばかりに、何もしてあげることできなかった。こんなことを何度も何度も考える自分がいやになるも、それが事実だというのを消すことはできなかった。

「時間はまだあるから。ちゃんとまおとゆっくり話して、返して上げなさい」
「うん…」



「ちよつと、どういうことなのよそれは!!」

「エ、エリカさん!!」

星が満点に広がる星空の下で、怒声にも似たエリカの声が木霊する。一時的に美倉写真館でお世話になっていたエリカと小梅。しばらくしたのちに、まおが迎えに来てくられ、三人とも歩いて海江田家に向かっている道中で、とあることをまおが二人に告げたところがエリカが激しく憤慨しまおを攻め立てていたのだ。今にも掴みかからんとするエリカを小梅が宥めるように肩をとる。

「なんで黒森峰に”戻ってこない”のよ!!隊長とみほがどういいう状態かわかってるの!?!」

「わかっている。でも今アイツらに必要なのは、休息と落ち着ける場所だ。黒森峰に戻るのほそれから…」

「そういう意味じゃないわ!!なんで”アンタ”は戻ってこないのよ!!」

まおが二人のことに対して説明するも、エリカが聞きたいのはそれではなく、まおが黒森峰に戻ってこないことに反応していたのだ。てつきり、エリカはまおが黒森峰女学園に戻ってきてくれるものと思っていたからだ。

「俺には、俺のやりたいことがある。それにこれからは二人には定期的に会えるようになるんだ。前のように音沙汰なしなんてしない。エリカの行動を無駄には…」

「そういうことじゃ…ないのよッ…」

まおの言いたいことがわからないわけではないエリカ。まおがこの場にいるのも、ま

ほとみほのためにしていることだ。すでに黒森峰女子学園とは関係が終わっているまおが戻ってきたところでどうにかなる問題ではない。

「エリカ……？」

先程とは打って変わり、急に思いつめたような表情になるエリカに少し顔を顰めるまお。一方エリカは、まおが黒森峰には戻っては来ないということを聞かされて、複雑な思いが渦巻いていた。

（なんでよ。なんで……帰ってこないのよ。黒森峰を勝手に出ていったくせに……そんな海自にそこにいることが重要だっていうの!? 私は……私はアンタに戻ってきて欲しくて……ッ!?)

「エ、エリカさん？」

「大丈夫かエリカ」

複雑な渦中の中、最後に出てきた思いが出てきた瞬間、エリカは思わずたじろいでしまふ。それを見ていた小梅とまおは心配そうに声をかけるも、エリカは顔を俯かせて周りには見せようとはしなかった。

「……ッ」

今自分は何を考えていたのだ？ 自分の目的はまほとみほ、そして黒森峰の戦車道を立て直すために勝手に出ていったまおを“利用”してやろうと思ったから行動を起こし

たはずだ。なのに今のはまるでまおが帰ってくるのが本懐のように思ってしまった。それを考えた途端から心臓がバクバクとなり、顔が熱くなるのを感じる。

「あの、エリカさん大丈夫ですか？顔が赤いですよ」

「な、なんでもないわよ…隊長たちのいるところまで早く行かないといけないんでしょ！？」

「あ、ああ…」

顔をバツと上げて、そのままおの横を通り過ぎるなり先を急ぐのだろうと急かす。急に態度が変わったエリカに軽く困惑するも、どこかしら懐かしい感じがしたまお。まだエリカと初めて会って間もない頃も、こうやって態度がころころ変わっているのを見ていたのを思い出す。

「フツ」

そう考えると、思い出し笑いでも言うのか少しばかり笑みを浮かべてしまう。

「な、何笑ってんのよ!!」

その態度を逃さなかったエリカはまおの方を振り向き、狂犬の如く噛み付くように反応する。

「いや、ちよつと昔のこと思い出してな。エリカのそう言った反応がな」

「な、何よ。昔のことなんかとづくに忘れたわよ。特にあなたとの関係なんて…」

「あははは。相変わらず手厳しいな」

「ふん……」

忘れたとは言っても、かつては記憶の片隅に追いやった思い出も今では鮮明に思い出してしまう。それがあの決勝戦からどうも思い出してしまっていた。

今思えば、なぜ自分はあるところまでのことをしてまおに会いたかったのか。

本当に黒森峰やまほとみほのために行動を起こしたことだったのか？

本当は……

（違うわ。私はただ、黒森峰のために……た、隊長とみほのために……）

その先の言葉が思いつかない。

「自分は、なぜここまで西住まおに“縫ろう”としているのか、今のエリカには理解できなかつた。